

平成 25 年度
博士(芸術)学位論文

江戸時代解剖図の展開
— 『解体新書』 から 『重訂解体新書』 まで —
論文編

九州産業大学大学院芸術研究科造形表現専攻博士後期課程

木森圭一郎

目次

凡例

第1部 序論

1章 江戸時代解剖図と先行研究の概要

- 1節 江戸時代解剖図の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 2節 先行研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 2章 江戸時代解剖図前史－『和蘭全軀内外分合図』と『蔵志』－
 - 1節 内景図と『和蘭全軀内外分合図』・・・・・・・・・・ 17
 - 2節 日本初の実測解剖図『蔵志』・・・・・・・・・・ 23

第2部 江戸時代解剖図の展開

- 序論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

1章 『解体新書』付図

- 1節 杉田玄白の来歴と『解体新書』刊行まで・・・・・・・・ 32
- 2節 『解体新書』の概要と挿図の表現
 - 1項 『解体新書』の概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
 - 2項 絵師小田野直武・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
 - 3項 扉絵にみる直武の洋風画技術・・・・・・・・・・ 50
 - 4項 『解体新書』付図の表現1－原図との比較から－ 54
 - 5項 『解体新書』付図の表現2－『105図の人体解剖学』引用図について－ 64
- 3節 1章総論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72

2章 『平次郎臓図』

- 1節 小石元俊の来歴－『平次郎臓図』刊行まで－ 73
- 2節 『平次郎臓図』の概要と表現
 - 1項 『平次郎臓図』の概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
 - 2項 『平次郎臓図』の表現－『解体新書』と円山派の影響から－ 77
- 3節 2章総論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

3章 『施薬院解男体臓図』

- 1節 『施薬院解男体臓図』概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
- 2節 『施薬院解男体臓図』の参考解剖図の検討と比較 88
- 3節 3章総論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105

4 章 『医範提綱内象銅版図』	
1 節 『医範提綱』概要－著者宇田川玄真と百科事典『ショメール』－	106
2 節 『医範提綱内象銅版図』と銅版画家亜欧堂田善	
1 項 亜欧堂田善の腐食銅版画技法習得経路	109
2 項 『医範提綱内象銅版図』の表現 1－原図との比較から－	111
3 項 『医範提綱内象銅版図』の表現 2－亜欧堂田善による複合解剖図像－	113
3 節 4 章総論	118
5 章 『解剖存真図』	
1 節 南小柿寧一の来歴と『解剖存真図』の概要	119
2 節 『解剖存真図』の表現－参考解剖図の検討と比較から－	123
3 節 5 章総論	184
6 章 『玉函把而翁湮解剖図』	
1 節 『玉函把而翁湮解剖図』の概要と表現	185
2 節 6 章総論	189
7 章 『重訂解体新書銅版全図』	
1 節 『重訂解体新書銅版全図』の概要と著者大槻玄沢について	
1 項 『重訂解体新書銅版全図』の概要	190
2 項 大槻玄沢の来歴－『重訂解体新書』訳稿開始まで－	191
2 節 『重訂解体新書銅版全図』の表現	
1 項 松平体制における洋風画技術者の成熟	197
2 項 『重訂解体新書銅版全図』引用された解剖図	198
3 項 『重訂解体新書銅版全図』の表現－原図との比較から－	206
3 節 7 章総論	213
8 章 2 部総論	214
3 部 筆者の絵画制作との関連	
1 章 美術造形との出会いと西洋古典美術への傾倒	216
2 章 中国武術の身体観からの着想	217
3 章 希薄になる中国武術的身体感覚と補填要素の検討	219
4 章 薄れた運動感覚の補填要素の探求－「内景図」からの着想	221
5 章 「内景図」から『解体新書』へ	223
6 章 江戸時代の解剖図からの着想	224
7 章 3 部総論	231
主要人物 全名・生没年引用書一覧	233

凡例

- ・「造形」と述べた場合には「modeling」ではなく、単に「かたち造る」行為を指す。
- ・「図像」と述べた場合には、単に「図として表された像」のことを指す。
- ・「図示法」と述べた場合には、「図示の方法」を指す。
- ・「蘭語」と述べた場合には、「江戸時代のオランダ語」を指す。単に「オランダ語」といった場合には今日のオランダ語を指す。～学も同様。
- ・主要人物の生没年は、日本人に関しては各項目の引用書から転載し、それらに記載の無い人物は『講談社 日本人名大辞典』から引用した。ヨーロッパの人物の生没年に関してはその多くを坂井建雄著『人体観の歴史』から引用したが、必要に応じて各章ごとの引用文献に従った。(詳細は「主要人物 全名・生没年引用書一覧」参照)
- ・生没年の表記は「氏名(西暦生年・和暦生年～西暦没年・和暦没年)」にて統一し、引用文献の記述も特別な場合を除き同様に変更した。
- ・ヨーロッパの医師の全名とアルファベット表記については、その多くを坂井建雄著『人体観の歴史』から引用したが、必要に応じて坂井とは別の訳文を使用した。
例：『Anatomia Humani Corporis, Centum&Quinque Tabulis』
坂井建雄訳→『人体解剖学 105 図』
中原泉訳→『105 図の人体解剖学』
- ・本論は江戸時代の解剖図の展開を論述することが目的であるから、各学問領域の史的考証は各引用文献・先行研究の論に従った。2つ以上の引用文献で大きく主張が異なる場合は、両者の主張を併記することとする。
- ・研究対象とした解剖図の多くがデジタル化された資料であるほか、模本である。よってそこから絵師の筆跡を探ることは誤謬をくだしやすいものであり、本論では基本的に解剖図の「造形」手法や、「図示法」や「図像」的な比較に留める。
- ・『解体新書』の原本『Ontleedkundige Tafelen』は直訳すれば『解剖学表』であるが、本論では書誌学的説明以外は『ターヘル・アナトミア』と記載する。

- ・各解剖書名後に記載した図版の番号は、原本に記載されたものではなく筆者基準により付した。本論内での図の番号は「前から何番目にあたるか」を示したものであり、必ずしも原本の表記とは一致しない。(例1) またそのページの中に複数の解剖図が表記され、かつ個々に論及した場合は、図版の番号の後にー(ハイフン)を挟み番号を付した。(例2)
例1:「ヨハン・アダム・クルムス『ターヘル・アナトミア』図12」であれば、『ターヘル・アナトミア』の前から12番目の挿図」となる。
例2:「小石元俊『平次郎臓図』図18-3」であれば、『平次郎臓図』の前から18番目の図中の、3つ目の図」となる。
- ・『解体新書』附図「再示三図手背図」、「再示二図手掌図」、「筋篇再示二図足背図」、「筋篇再示三九図足底図」の4図は、図版編ではそれぞれ順に、筋篇図2、3、4、5と表記した。
- ・『解剖存真図』図83 胞衣と臍帯の連属以降の図は、小川鼎三『解剖存真図 解説』p7の記述により、刊行後の文政5年に「蕞蘭堂主人」により付け加えたものであるから、本論では扱わず、図版編にも記載しなかった。

第 1 部 序論

1 部 序論

1 章 江戸時代解剖図と先行研究の概要

1 節 江戸時代解剖図の概要

本論はこれまで医学史・洋学史の視点から見られることが多かった、日本の18世紀中期から19世紀初頭の江戸時代に編纂された解剖図について、美術史、絵画史の視点、また造形的観点に立って解剖図の画家達の解剖図作成の経緯とその表現内容について調査研究した論考である。

江戸時代に編纂された解剖図は数多く存在するが、本論では日本の翻訳解剖書の嚆矢となった『解体新書』刊行から、その改訂・増補版である『重訂解体新書』刊行までに刊行された解剖書の解剖図を研究対象とした。ヨーロッパの医学が日本で普及する契機となった『解体新書』は、医学史的にも重要であり、多くの専攻研究が存在し史学的な比較が容易であった。また『解体新書』はその約50年後に、その改訂・増補版『重訂解体新書』が刊行されている。それらの解剖図は原典が同じであるにも関わらず、解剖図表現上の差異が顕著である。このように史学的な研究が充実しており、旧版と改訂版の表現上の変化が顕著な『解体新書』は、同系統の先行研究の少ない本論考では研究対象として適当であると判断した。

医学史の先行研究を調査検討し、最終的に本論の研究対象となったのは7冊の日本の解剖書と、それらの附図制作の参考にされた12冊のヨーロッパの解剖書の挿図である。

日本の解剖書は『解体新書(附図)』、『平次郎臓図(模本)』、『施薬院解男体臓図(模本)』、『医範提綱内象銅版図』、『解剖存真図(模本)』、『把爾翁湮解剖図譜』、『重訂解体新書銅板全図』の各挿図である。これらの解剖書は『解体新書』刊行から、その改訂版である『重訂解体新書』刊行までの解剖書のなかから、著名でかつ絵師の来歴が明らかなものを選出した。またそれらの解剖書執筆の際に参考にされたと考えられている解剖書のうち筆者が閲覧することができた解剖書は11冊であり、その内訳は『解剖学表(Ontleedkundige Tafelen・片桐一雄訳・通称ターヘル・アトミア)』、『改新解剖学(Anatomia reformata、坂井建雄訳)』、『新訂解剖学(Anatomia reformata、クレインス・フレデリック訳)』、『人体構造誌(Historia de la composicion del cuerpo humane)』、『105図の人体解剖学(Anatomia Humani Corporis, Centum & Quinque Tabulis)』、『人体解剖学(Corporis humani anatomie)』、『外科用人体解剖学(Heelkonstige ontleding van 's menschen lighaam)』、『新筋図表(Myog-raphia Nova クレインス・フレデリック訳)』、『解剖図譜および産科実地の説明と要約(Set of anatomical tables, with explanations, and an abridgment, of the practice of midwifery)』、『エウスタキウス解剖学解題(Tabulae anatomicae clarissimi viri Bartholomaei Eustachii quas è tenebris tandem vindicatas)』、『デヘンテル解剖書(Operaciones chirurgicae novum humen exhibentes obstericantibus)』である。

これら研究対象となった解剖書の書誌情報を以下に列挙する。日本の解剖書はそれぞれに1~7のアラビア数字を、ヨーロッパの解剖書にはA~0のアルファベットを配した。

日本の解剖書には上から順に、刊行年または執筆終了年、著者・訳者、本の体裁、参照した本の所蔵先、実見かPDF等のデジタル化資料のみの閲覧かを列挙した。

ヨーロッパの解剖書には上から順に、筆者閲覧の解剖書の刊行年、著者・訳者、実見したものに関しては参照した本の所蔵先を、デジタル資料のみの閲覧の場合はURLやそれらの原本の所蔵先を出来る限りを明記した。

日本の解剖書

1 『解体新書(附図)』

- ・安永3年(1774)刊
- ・杉田玄白編著・前野良沢翻訳・小田野直武筆
- ・和版本、木版画、
- ・①九州大学附属図書館伊都図書館版
- ②中村学園大学図書館ホームページ貝原益軒アーカイブ版
http://www.nakamura-u.ac.jp/~library/lib_data/data02a.html
- ・①実見
- ②PDF版

2 『平次郎臓図(へいじろうぞうず・別称『人体解剖図巻』)』

- ・天明3年(1783)成稿
- ・小石元俊著、吉村蘭州筆
- ・巻本、紙本著色
- ・山形県蔵版
- ・デジタルカメラ画像

3 『平次郎臓図(へいじろうぞうず・模本)』

- ・天明3年(1783)に成稿の模本
- ・小石元俊著、吉村蘭州筆
- ・巻本、紙本著色
- ・江戸博物館所蔵版
- ・マイクロ版

- 4 『施薬院解男体臓図(せやくいん かいなんたいぞうず・模本)』
- ・寛政 11 年(1799)成稿の模本、模写年不明
 - ・三雲勸善著、吉村孝敬・吉村蘭州・木下応受筆
 - ・和本、紙本著色
 - ・早稲田大学図書館蔵古典籍総合データベース版
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya03/ya03_00618/
 - ・PDF 版
- 5 『医範提綱内象銅版図(いはんていこうないしょうどうはんず)』
- ・文化 5 年(1808)刊
 - ・宇田川玄真翻訳・編著、亜欧堂田善筆
 - ・和版本、腐食銅版画
 - ・石川県立図書館蔵デジタル化資料版
<http://www.library.pref.ishikawa.jp/toshokan/dglib/naizou/index.html>
 - ・デジタル化資料版
- 6 『解剖存真図(かいぼうぞんしんず・模本)』 乾、坤巻
- ・文政 2 年(1819)成稿の天保 13 年(1842)の模本
 - ・南小柿寧一著・筆
 - ・巻本、著色
 - ・東北大学総合学術公式 HP 上のデジタル化資料版
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/brain/exhibition/anatomy.htm>
 - ・デジタル化資料版
- 7 『玉函把爾翁湮解剖図譜(よはん ぱるへいん かいぼうずふ)』
- ・文政 5 年(1822)刊
 - ・斎藤方策、中環翻訳・編著、中伊三郎筆
 - ・和版本、腐食銅版画
 - ・早稲田大学図書館蔵古典籍総合データベース版
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya03/ya03_00618/
 - ・PDF 版

8 『重訂解体新書銅版全図(じゅうていかいたいしんしょ どうはんぜんず)』

- ・ 文政9年(1826)刊
 - ・ 大槻玄沢翻訳編著、南小柿寧一筆、中伊三郎銅版面翻刻
 - ・ 和版本、腐食銅版面
 - ・ 国立国会図書館デジタル化資料版
- <http://dl.ndl.go.jp/>
- ・ デジタル化資料版

ヨーロッパの解剖書

- A、 『解剖学表 (Ontleedkundige Tafelen・片桐一雄訳)』
- ・ 1731 年刊行版の 1978 年の再販版
 - ・ ヨハン・アダム・クムス (Johan Adam Kulmus) 著、ヘラルツ・ステイクテン (Gerard Dicten) 蘭訳
 - ・ 九州大学附属図書館伊都中央図書館蔵
 - ・ 実見
 - ・ 通称 『ターヘル・アナトミア』
- B、 『改新解剖学 (Anatomia reformata・坂井建雄訳)』
- ・ 1684 年版、ラテン語
 - ・ トマス・バルトリン (Bartholin Thomas) 著
 - ・ Internet Archive Medical Heritage Library
<https://archive.org>
 - ・ PDF 版
 - ・ 通称 『トニミュス解体書』
- C、 『新訂解剖学 (Anatomia reformata・クレインス・フレデリック訳)』
- ・ ①1687 年版
 - ・ ②1695 年版
 - ・ ③1696 年版
 - ・ ステファン・ブランカールト著 (Steven または Stephen Blankaart)
 - ・ ①1687 年版 Internet Archive Medical Heritage Library
<https://archive.org>
 - ・ ②1695 年版 Google ブックス <http://books.google.com>
 - ・ ③1696 年版クレインス・フレデリック著「江戸時代における機械論的身体観の受容」
 - ・ ①PDF 版
 - ・ ②デジタル化資料版
 - ・ ③図版
 - ・ 通称 『ブランカール解体書』

- D、『人体構造誌(Historia de la composicion del cuerpo humane・坂井建雄訳)』
- ・1647年版、オランダ語
 - ・ファン・ワルエルダ・デ・アダムスコ(Juan Valverde de Amusco または Hamusco)著
 - ・中村学園大学図書館貝原益軒アーカイブ版
<http://www.nakamura-u.ac.jp/~library>
 - ・原本は九州大学附属図書館所蔵
 - ・PDF版
- E、『105 図の人体解剖学(Anatomia Humani Corporis, Centum&Quinque Tabulis・中原泉訳)』
- ・ゴウアルト・ビッドロー(Godefridi Bidloo)著
 - ・G. Bidloo 著／中原泉訳著『ビッドロー解剖アトラス』
 - ・図版
- F、『人体解剖学(Corporis humani anatomie・クレインス・フレデリック訳)』
- ・1693年版、ラテン語
 - ・フリッポ・フェルハイエン(Verheyen Philippe)
 - ・Internet Archive Medical Heritage Library
<https://archive.org>
 - ・PDF版
 - ・通称『ヘルヘイン解体書』
- G、『外科用人体解剖学(Heelkonstige ontleeding van's menschen lighaam・クレインス・フレデリック訳)』
- ・1718年版
 - ・ジャン・パルフアン(Palfijn Jan)
 - ・早稲田大学図書館古典籍総合データベース
<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>
 - ・PDF版
 - ・通称『パルフヘイン解体書』

- H、 『新筋図表(Myog-raphia Nova・クレインス・フレデリック訳)』
- ・ 1697 年版の再版版
 - ・ ショーン・ブラウン(John Browne) 著
 - ・ Google ブックス
<http://books.google.com>
 - ・ 原本はカリフォルニア大学蔵
 - ・ PDF 版
- I、 『解剖図譜および産科実地の説明と要約(Set of anatomical tables, with explanations, and an abridgment, of the practice of midwifery・坂井建雄訳)』
- ・ 1754 年版
 - ・ ウィリアム・スミー(William Smellie) 著
 - ・ University of Virginia Library 「Virgo」
<http://search.lib.virginia.edu/catalog>
 - ・ デジタル化資料版
 - ・ 通称 『スメルリ解体書』
- J、 『エウスタキウス解剖学解題(Tabulae anatomicae clarissimi viri Bartholomaei Eustachii quas è tenebris tandem vindicatas・坂井建雄訳)』
- ・ 1714 年版
 - ・ ヘルバル・ジークフリート・アルビヌス(Albinus Bernard Siegfried) 編著
 - ・ Google ブックス
<http://books.google.com>
 - ・ 原本はミシガン大学蔵
 - ・ PDF 版
 - ・ 通称 『エウスタキウス解剖書』
- O、 『Operationes chirurgicae novum humen exhibentes obstericantibus』
- ・ 1734 年版
 - ・ ヘントリック・ファン・デ・ヘンター(Deventer Hendrik van) 著
 - ・ Google ブックス
<http://books.google.com>
 - ・ 原本はリヨン市立図書館
 - ・ PDF 版、 デジタル化資料版
 - ・ 通称 『デヘンテル解体書』

1の『解体新書』の挿図は、記録にのこる範囲では日本では最も古いヨーロッパ風の解剖図像を採用した解剖書である。『解体新書』以前にもいくつかヨーロッパの解剖書をもとに「抄訳」の解剖書が挿図付きでいくつか刊行されているが、それらの挿図は幕府の禁忌にふれることを恐れてか、日本風の図像に改変されることが多かった。このような状況の中、『解体新書』の挿図は田沼時代の自由な気風を追い風に、ほとんどヨーロッパ解剖書の原因そのままに模倣され描かれた。本文を編纂したのは若狭国小浜藩医杉田玄白(すぎた げんぱく 享保18年・1733～文化14年・1817)、翻訳の中心となったのは豊前国中津藩医前野良沢(まえの りょうたく 享保8年・1723～享和3年・1803)、付図を描いたのは、平賀源内(ひらが げんない 享保13年・1728～安永8年・1780)から洋風画の手ほどきを受け、藩主佐竹曙山(さたけ しょざん 寛延元年・1748～天明5年・1785)の命で江戸に上ってきていた秋田藩士小田野直武(おだの なおたけ 寛延2年・1750～安永9年・1780)である。直武は簡単な陰影法や遠近法を源内から学んだほか、源内所蔵の洋書の挿図を写しとることで、ヨーロッパ風の図像を学んだ。直武は帰郷後、江戸で写し取ったヨーロッパの腐食銅版画挿図の模図を粉本的にモチーフとして用いたほか、江戸で得たヨーロッパの絵画技法応用した作風の画を描いた。それらは今日では「秋田蘭画」と呼ばれ、直武は藩主や同郷の画人を巻き込み、洋風画の一派を牽引することとなる。

小田野直武は『解体新書』編纂当時の、限定された条件を加味すれば、その附図を原因に良く似せて描いた。ただ『解体新書』刊行当時の江戸ではまだ腐食銅版画が実用化されておらず(司馬江漢が腐食銅版画を「創製」するのは天明3年・1783)、直武の画は木版画によって翻刻されることとなったため、直武は木版画に翻刻されることを想定し原因からのいくつかの改変もおこなっている。この改変については後述する。

2、3の『平次郎臓図(へいじろうぞうず)』は、漢方医学古医学の師である京都の医師小石元俊(こいし げんしゅん 寛保3年・1743～文化5年・1808)が著したものである。筆者が研究対象とした江戸蘭方医系に属する解剖図がすべてモノクロの和版本であったことに対し、本書は肉筆彩色の巻本である。また『解体新書』の挿図がヨーロッパの図像的に整理された解剖図を、複製することを目的にしたものであったことに対し、本図巻は『解体新書(附図)』の図像を参考にしつつも、実際の解剖の経過を記録した記録画としての側面が強い。図を描いたのは吉村蘭州(よしむら らんしゅう 元文4年・1739～文化13年・1816)という円山派の画法を学んだ絵師である。円山派の写生的な画法を応用した解剖図は、ヨーロッパの解剖図と比較したとき、図像の洗練さや客観性は劣るが、江戸時代の医師らが血肉屍体と向き合ったありのままのビジュアルイメージを迫真的に伝えている。

4の『施薬院解男体臓図(せやくいんかいだんたいぞうず)』は京都の三雲環善(みくも かんぜん 宝暦12年・1762～文化2年・1805)が編纂した解剖書であり、2、3の著者小石元俊が解剖の際の総監督としてかかわった。本書の解剖図も『平次郎臓図』と同様

に記録画的側面が大きい彩色解剖図である。2、3と異なるのは『施薬院解男体臓図』が和本としてまとめられている点と、橋本宗吉によるアルファベットでオランダ語の臓器名が記入されている点である。

解剖写生をおこなったのは吉村蘭洲、その息子の吉村孝敬(よしむら こうけい明和6・1769～天保7年・1836)、また円山応挙の次男である木下応受(きのした おうじゅ安永6年・1777～文化12・1815)が解剖の場に同席して描いたとされる。ヨーロッパの解剖書には無い内容の解剖図も多く挿入され、古医方派の解剖医が実際に見た臓器を今日に伝える。

5の『医範提綱内象銅版図(いはんていこう ないしょうどうはんず)』は、記録に残るものでは本邦初の腐食銅版画挿図を採用した解剖書である。

本文を執筆したのは津山藩医宇田川玄真(うだがわ げんしん明和6年・1770～天保5年・1835)、挿図を描き銅版画に翻刻したのは老中松平定信の御用絵師亜欧堂田善(あおうどう でんぜん寛延元年・1748～文政8年・1825)である。当時の腐食銅版の第一人者と目される司馬江漢は健在であったが、政治的な事情のほか、江漢を凌駕する田善の細密な画法を信用してか、後続の亜欧堂田善が担当することとなった。小田野直武と異なり、田善は専門の御用絵師でありその自負を反映してか、この『医範提綱内象銅版図』の解剖図は臨模や敷き写しがほとんどされておらず、田善がいくつかのヨーロッパの解剖図を組み合わせて新たに作図したものが中心である。

6の『解剖存真図(かいぼうぞんしんず)』を著し、また図も描いたのは、淀藩(山城国、稲葉藩)江戸勤めの藩医、南小柿寧一(みながき やすかず 天明5年・1785～文政8年・1825)である。寧一は幕府の奥医師であり、江戸の蘭学者の中心的人物の1人であった桂川甫周(かつらがわ ほしゅう 宝暦元年・1751～文化6年・1809)に師事した江戸系蘭方医学者であった。しかし江戸蘭方医学系解剖書によくみられる版本+モノクロ版画解剖図という形式は採用せず、かわりに小石流の解剖図巻に影響を受けた肉筆彩色図卷子という形式で編纂されている。これは『解剖存真図』を編纂する目的が、小石流の解剖図巻の足りない部分を補うことにあったことにあると考えられる。本書の体裁は小石流の解剖図に倣い卷子であったが、解剖図は円山派の絵師の描いた図像の影響を受けたものや、ヨーロッパの解剖書からの引用したもの、また寧一自身が行った解剖の写生結果を反映したものなどと多様であり、小石流漢方医と江戸蘭方医の医学交友の集大成と言えるものである。

7の『玉函把爾翁湮解剖図(よはん ぱるへいんかいぼうず)』は、前出の小石元俊らの協力、江戸の芝蘭堂(杉田玄白の高弟大槻玄沢の医塾)に派遣された橋本宗吉(はしもと そうきち宝暦13年・1763～天保7年・1836)が、そこで学んだ蘭語学でジャン・パルファンの『外科用人体解剖学』翻訳しその草稿としたものを、やはり小石流の門弟であり江戸の蘭方医学も学んだ小石元瑞(こいし げんずい 天明4年・1784～嘉永2年・1849)、斎藤方策(さいとう ほうさく 明和8年・1771～嘉永2年・1849)、中環(な

か たまき・名を天游・天明3年・1783～天保6年・1835)らが共同出資し編纂したものである。挿図は環の従弟である中伊三郎(なか いさぶろう生年不詳～万延元年・1860)が描き腐食銅版画に翻刻した。少なくともこの解剖図に限れば、小石流の漢方医学と江戸の蘭方医学の両方を学んだ編者らが蘭方医学へ大きく傾倒していたことが図にあらわれている。その主な点は、小石流の解剖図には無く、江戸の解剖図ではよくみられる、腐食銅版画図を採用や、原図からの明らかな臨模・敷き写しといったものである。このような特徴は、編者らが小石流から離反したということではなく、彼らの貪欲かつ実際の学究の姿勢を表したものである。

8の『重訂解体新書銅版全図(じゅうてい又はちょうてい かいたいしんしょ どうはんぜんず)』は、杉田玄白の高弟 大槻玄沢(おおつき げんたく宝暦7年・1757～文政10年・1827)が師命により編纂した、『解体新書』の改訂版である『重訂解体新書』の図版編である。図は7の南小柿寧一が下図を画き、3『把爾翁湮解剖図譜』の絵師中伊三郎が翻刻した。

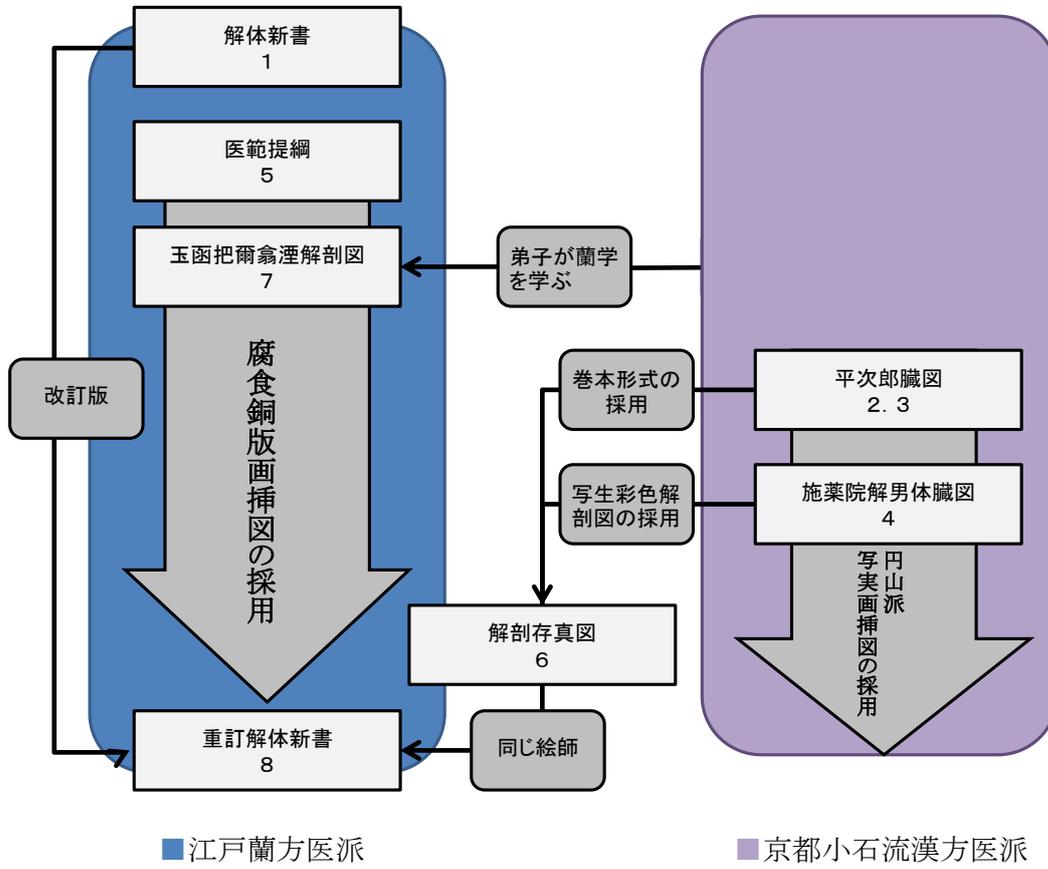
『解剖存真図』の図像が、小石流医学と江戸蘭方医学の交流の集大成という位置づけとすれば、この『重訂解体新書銅板全図』は江戸蘭方医学の解剖図の集大成といえる。本図は翻訳解剖書の図版編であるから、その挿図もヨーロッパの解剖書から引用されている。これまでの江戸蘭方医系翻訳解剖書に引用された、ヨーロッパの解剖書11冊のうち9冊が『重訂解体新書銅板全図』への引用がなされている。

このようなことから考えると、この『重訂解体新書銅板全図』解剖図は、京都小石流漢方医の解剖図のような実見による解剖事実を伝えることは重視せず、ヨーロッパの解剖書の図像を手本に、当時では最新のヨーロッパの絵画技術を駆使し、客観的な医用の解剖図として洗練された、ヨーロッパの解剖図像を正確に普及させることが狙いであったと推察できる。

江戸の蘭方医たちは自分自身が洋書の翻訳者となり、絵師たちにヨーロッパの絵画技法や腐食銅版画技術を紹介した。その影響は医派を超えて解剖図に表れ、特に江戸の蘭方医と関わりの深かった、小石流漢方医の編纂した解剖書の挿図には、ヨーロッパの図示法を参考にした解剖図も少なくない。

ヨーロッパの解剖図を再現する目的で成立した、江戸の蘭方医と絵師の協力関係は、結果的に幕末の画学局、明治の洋画家たちの動きに先んじて、西洋の絵画技法を江戸時代の絵師に伝えることとなった。江戸の解剖図ヨーロッパのビジュアルイメージを江戸の知識人にもたらすこととなったのである。

研究対象解剖書の相関関係



1 部 序論

1 章 江戸時代解剖図と先行研究の概要

2 節 先行研究について

本論の執筆にあたっては、医学史、美術史の両面からの様々な先行研究を参考にした。筆者が参考にした各解剖書名の邦訳は坂井建雄『人体観の歴史』（岩波書店、2008年）を基準に、酒井シヅの後述する多くの著作やクレインス・フレデリックの『機械論的身体観の受容』（臨川書店、2006年）や、磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史—上巻』（ゆまに文庫、2004年）『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史—下巻』（ゆまに文庫、2005年）を参考に引用した。

第1部2章1節「内景図と『和蘭全軀内外分合図』」では全体の日本の医史学的な概観を坂井建夫『人体観の歴史』や片桐一男『杉田玄白』（吉川弘文館、1986年）の他、安土桃山時代のキリスト教医学の状況は服部敏良『室町安土桃山時代医学史の研究』（吉川弘文館、1972年）から概要を抜き出し抜粋した。

明堂図等の日本の伝統医学の内景図についての記述は、はりきゅうミュージアム編『はりきゅうミュージアム Vol.1 銅人形明堂図篇』（森ノ宮医療学園出版部、2001年）から、『和蘭全軀内外分合図』の概要については、原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』（思想閣出版、1995年）を参考に記述した。

第2節「日本初の実測解剖図『蔵志』」は主に片桐一男『杉田玄白』を参考に記述している。

第2部1章1節「杉田玄白の来歴と『解体新書』刊行まで」は片桐一男『杉田玄白』を中心に引用し、『解体新書』の翻訳の中心となった前野良沢のオランダ語周時時期については杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅱ』（早稲田大学出版部、1997年）の記述も異説として紹介した。

第2節1項『『解体新書』概説』でも継続して片桐一男『杉田玄白』の内容を中心に、『解体新書』本文の内容については、酒井シヅ訳著『解体新書 全現代語翻訳』（講談社、1998年）を、参考解剖図については酒井シヅ『解体新書 全現代語翻訳』や坂井建夫『人体観の歴史』、ヒロコ・ジョンソン『直武『解体新書』—「…予をしてこれが図を写さしむ」』（鹿児島美術財団年報16別冊、1998年）を参考にした。

第2項「絵師小田野直武」では成瀬不二雄『江戸時代洋風絵画史：桃山から幕末まで』（中央公論美術出版、2002年）を中心に、美術史の領域では武埴林太郎『画集・秋田蘭画』（秋田魁新報社、1989年）や山本文志『秋田蘭画・小田野直武をとりまくイメージ(1)』、磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史—上巻』、『ライッセの大絵画本と近世日本洋風画家』（雄山閣、1983年）、菅野陽『日本銅版画の研究、近世』（美術出版社、1974年）を参考に、史学的な領域は芳賀徹『平賀源内』（朝日新聞出版、2004年）、城福勇『平賀源内の研究』（創元社、1976年）、『平賀源内（新装版）』（吉川弘文館、1989年）を参考に記述している。

第3項「扉絵にみる直武の洋風画技術」では中原泉の小論『立証!解体新書の扉の元絵』(日本歯科医史学会会誌、1993年)や著書『ビドロ解剖学アトラス』(南江堂、1995年)の医史学における記述を中心に、美術史的な領域を磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史—上巻』や『ライレッセの大絵画本と近世日本洋風画家』で補足した。

第4項『解体新書』付図の造形性—原図との比較から—は前出の先行研究を踏まえ、解剖図の造形性について記述した。

第5項「ビドロ著ライレッセ画『105図の人体解剖学』引用図の造形性」では史学的には洋学史研究会『大槻玄沢の研究』(思文閣出版、1991年)を中心に、医史学領域では中原泉『ビドロ解剖学アトラス』を、また医史学、美術史の両面の参考にしたのは『日本洋学史の研究8』(創元社、1987年)内の菅野陽による小論『画家ヘラルト・ドゥ・ライレッセと解剖学者ビドロとカウパー』を参考にした。

第2章1節「小石元俊の来歴と『平次郎臓図』刊行まで」では医史学的な記述は山本四郎著『小石元俊(新装版)』(吉川弘文館1989年)を中心に引用した。

第2節1項『平次郎臓図』概説も山本四郎著『小石元俊(新装版)』の記述を中心に、吉村蘭州の来歴等の美術史的記述については源豊宗監修・佐々木丞平編『京都画壇の一九世紀 第2巻 文化・文政期』(思文閣出版、1994年)から引用した。

第2項『平次郎臓図』の造形性—『解体新書』と円山派の影響から—も医史学的な記述の多くを山本四郎著『小石元俊』から引用し、それらの記述をもとに造形上の比較を行った。

第4章1節『施薬院解男体臓図』概説も山本四郎著『小石元俊』の記述を中心に吉村考敬の来歴等一部美術史的記述を源豊宗監修・佐々木丞平編『京都画壇の一九世紀 第2巻 文化・文政期』から引用した。

第2節『施薬院解男体臓図』の参考解剖図の検討と比較については医学領域の記述は山本四郎著『小石元俊』を中心に、クレインス・フレデリック『江戸時代における機械論的身体観の受容』からも引用しつつ、絵師らの解説に1部源豊宗監修・佐々木丞平編『京都画壇の一九世紀 第2巻 文化・文政期』から引用している。それら先行研究をもとに、筆者が解剖図の造形上の特徴を詳述した。

第5章1節『医範提綱』概説では『医範提綱内象銅板図』の挿図を制作した絵師が、腐食銅版画の大家亜欧堂田善であったこともあり、美術史的に詳しい先行研究がなされていた。筆者は汎史学的な内容であるクレインス・フレデリック『江戸時代における機械論的身体観の受容』を中心に、美術史の先行研究として磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史—上巻』の記述や成瀬不二雄『江戸時代洋風画史: 桃山から幕末まで』、『化学医学資料研究 115号』(野間化学医学研究資料館、1983年)内の菅野陽の小論『亜欧堂田善模刻の「内象銅板図」とその原図』といった先行研究を適時引用しながら詳述した。

第2節1項「亜欧堂田善の腐食銅版画技法習得経路」では菅野陽の著書『日本銅版画

の研究、近世』、『江戸の銅版画(新訂版)』(臨川書店、2003年)、小論『垂欧堂田善模刻の「内象銅板図」とその原図』の記述を中心に、磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史—上・下巻』の記述も適時引用しつつ、医学用語等はクレインス・フレデリック『江戸時代における機械論的身体観の受容』から引用した。

第2項「『医範提綱内象銅板図』の造形性1—原図との比較から—」では、これまで参考にしてきた先行研究を際学的に考慮に入れながらも、筆者が参考にした先行研究では最も学際的な検討がなされたクレインス・フレデリック『江戸時代における機械論的身体観の受容』の内容が大きな比重を占めることとなった。特にフレデリックによる、図版入りの解説は筆者の研究の大きな助けとなった。それらの先行研究をもとに、筆者なりに各図像を再度比較検討した。

第6章1節「南小柿寧一の来歴と『解剖存真図』の概説」では、『解剖存真図』の複製本(講談社、1975年)に付録した小川鼎三『解剖存真図 解説』の内容を中心に記述した。『解剖存真図』の著者・絵師である南小柿寧一が解剖図作成の際に参考にした各解剖図の概説は、これまで参考にした医史学の先行研究を適時参照し引用した。ローレンツ・ヘイスター著『外科指針』については片桐一男『杉田玄白』から、ウィリアム・スメリー著『解剖図譜および産科実地の説明と要約』については、坂井建雄『人体観の歴史』から、ベルナルド・ジークフリード・アルビヌス著『エウスタキウス解剖学解題』は坂井建雄『人体観の歴史』や洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』から引用した。

第2節「『解剖存真図』の造形性2—参考解剖図の検討と比較から—」においても医史学的な解説は、小川鼎三『解剖存真図 解説』を中心に引用し、筆者は解剖図の美術性・造形性について比較検討を行った。

第7章1節「『玉函把而翁湮解剖図』の概説と造形性」では医史学的な記述は山本四郎『小石元俊』を中心に、杉本つとむ著『江戸近代 蘭語学の成立とその展開』も適時参照した。また造形上の問題は菅野陽著『日本銅版画の研究、近世』を参照・引用しつつ筆者の見解を、美術的・造形的観点から論述した。

第8章1節1項「『重訂解体新書銅版全図』の概説」と第2項「大槻玄沢の来歴—『重訂解体新書』訳稿開始まで—」では洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』からの引用が最も多く、山本四郎『小石元俊』からも一部引用している。

第8章1項『松平体制における洋風画技術者の成熟』は、これまでの先行研究を参考に論述してきた内容をもとに、筆者の見解を美術的・造形的観点から論述した。

第2項「『重訂解体新書銅版全図』引用された解剖図」では、継続して洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』を中心に、各解剖図の邦訳をや概説を坂井建雄『人体観の歴史』やクレインス・フレデリック『江戸時代における機械論的身体観の受容』から引用し、筆者自身の検討結果を論述した。この項で明らかとなった『重訂解体新書銅版全図』への『医範提綱内象銅板図』の挿図の引用は、筆者が参照したどの先行研究でも明言されていないものであり、本研究の成果のひとつとなった。

第3項「『重訂解体新書銅板全図』の図像の造形性—原図との比較から—」でも医学領域の記述は洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』から引用している。筆者は医史学的な先行研究をもとに解剖図の造形的な比較検討を行った。

1 部 序論

2 章 江戸時代解剖図前史—『和蘭全軀内外分合図』と『蔵志』—

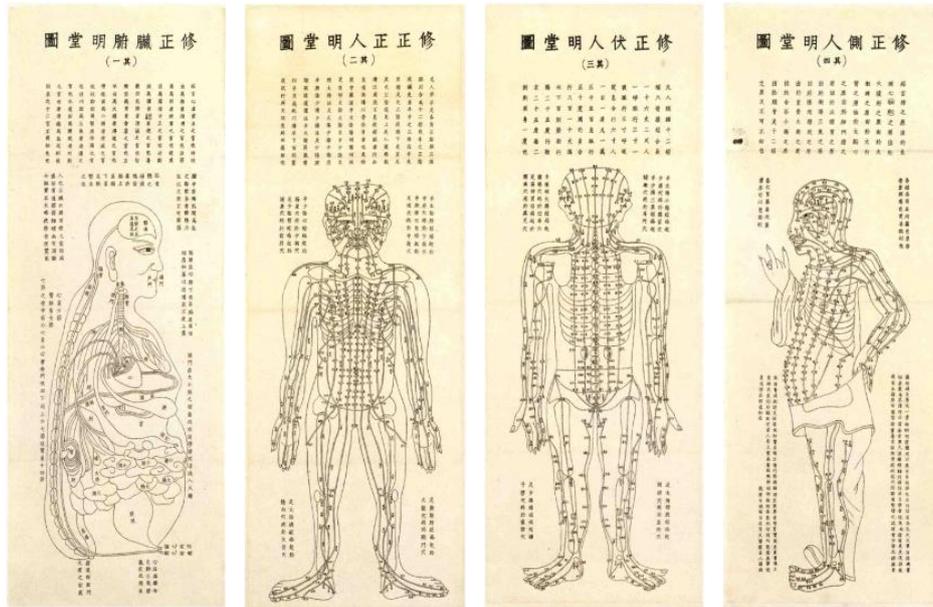
1 節 内景図と『和蘭全軀内外分合図』

本論は『解体新書』から『重訂解体新書』までの江戸時代の解剖書挿図を概観し、それらの解剖図の展開を美術的観点から論述していくことを目的としているが、第1部ではまず『解体新書』以前の解剖図を概説したい。なぜならば現代の我々は人体を視覚的に把握するときには、ヨーロッパ的な人体観が基準になっている。そのため江戸時代の絵師たちが受けたヨーロッパの人体図像からの衝撃や、それを模倣し再現するための工夫や苦心を、単に時系列的に並べ比較するだけでは、想像することができないからである。

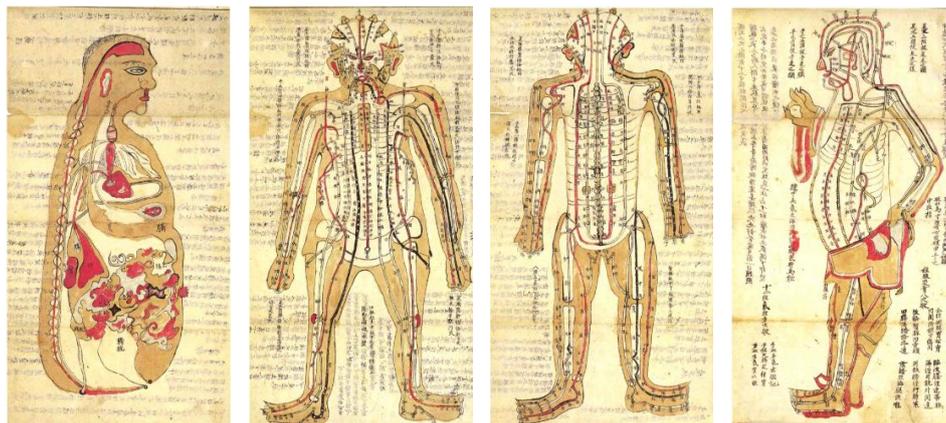
日本の医療は、明治8年(1875)に医師の資格試験が西洋医学に限定されるまで、およそ1500年は中華系の医学がその主軸をになっていた。(片桐一男『杉田玄白』p23)この点は古くは書や画や様々な技芸が同様に中華思想を背骨にし、近代にいたる過程で西洋化していったという、美術の状況と同じくしている。古代中国の医学は遅くとも奈良時代には、仏教文化興隆のなみにのって古代の中国や朝鮮半島から伝わっている。伝存最古の医書『医心方』が平安時代の天元元年(982)に編纂された。この『医心方』は中国大陸では失われた『諸病源候論』の原文の一部を現代につたえるものでもであった。鎌倉時代になると隋唐系の医学は影をひそめ、陰陽五行説にもとづいた宋の医学が台頭する。またこのころに僧医の活動がさかんになり、僧医梶原性善(かじわら しょうぜん 文永2年・1265～延元2年・1337)は宋医学の長所と自己の経験を体系的にまとめた『頓医抄』を和文で著した(片桐一男『杉田玄白』p29)。

このような漢方系伝統医学には直接的かつ写生的に人の内臓を図示した、「解剖図」は一般的に存在しないものと考えられており、陰陽五行思想と経絡思想が結びついた思想的で記号的な「内景図」や「明堂図」と呼ばれる人の内部を示した図が存在した。それらに図示された「五臓」の中には今日でいう臓腑を指す言葉、心や腎、肝、胆等の語が当てられているが、その機能や形態の理解は今日のものとは観念的にも、物理的にも異にしている。

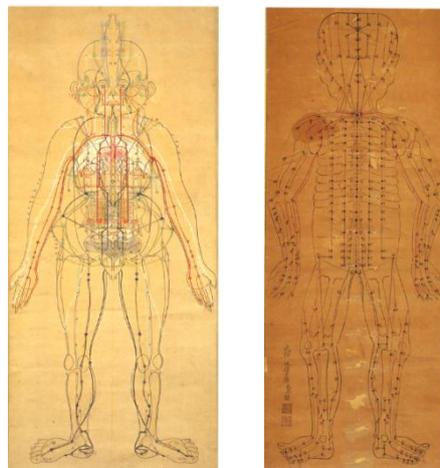
このような「内景図」は、中国大陸から渡来した原画を、医師や画工が写しとり各医家に伝えたと考えられるが、いくつかのバリエーションが存在するので筆者が把握している範囲で紹介したい。まずモノクロで無彩色の簡素なもの(図A群)、それらの着色版(図B群)、経絡の流れを示すことを重視し、まるでモルワイデ図法で示したように地図的に内景を表したもの(図C群)、鮮やかな色彩と均整のとれた静的な構図のほか、支持体を掛け軸に限定し美術性を重視したもの(図D群)、同様に美術性を重視しつつも図像の躍動感を重視したもの(図E群)など筆者が実見したものだけでも、おおまかにわけて5種のバリエーションが存在する。



図A群

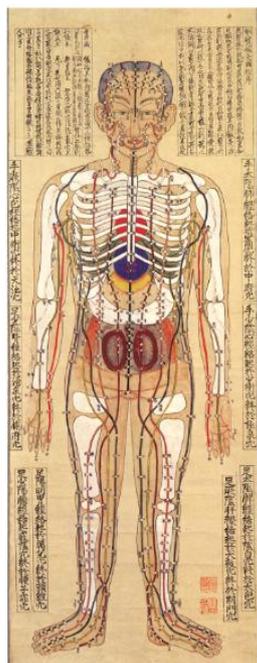


図B群

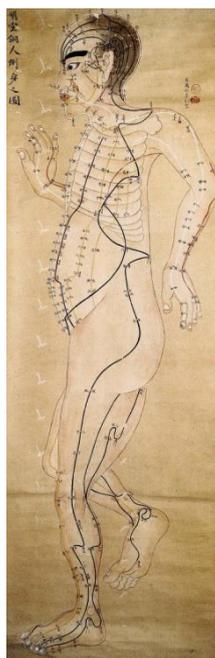


C群

『はりきゅうミュージアム Vol.1 銅人形明堂図篇』より引用



D群



E群

『はりきゅうミュージアム Vol.1 銅人形明堂図篇』より引用

古くは漢方医学にも解剖をおこなった記録は存在したとされ、坂井建雄『人体観の歴史』p235には「梶原性全(1266～1337)による『頓医抄』(嘉元2年・1304)には、人体の内景の初めての図解が収められている。宋の時代に行われた人体解剖をもとに描いた中国の『欧希範五臓図』に言及しているので、これをもとに描かれたと考えられている」と述べられている。しかしながら、漢方医学は直接人体を開かずに諸臓器や人のバイオリズムに働きかける手技に長けたこともあり、「内景図」ではおおよその位置を示すにとどまり、体表を開き視覚的に臓器各部位や形態を把握することは重要視されなかったようである。(坂井建雄『人体観の歴史』p235)

このように古代中国の医学を背景に形成されていった日本の医学は、その後室町から安土・桃山時代明にかけても、明に留学した医家により、大陸の医方・医書・医薬が継続して流入している。それに加えて戦陣の技術として実際的な経験医術が盛んになり、医薬、内科系の医師だけでなく、金創医(こんそうい)という外科術を修めた者がその手腕を戦場で磨いた。しかし今日の方法論から推察すれば当然存在するものと考えられる、金創医の技術伝達の為に必要とされたはずの写生的な解剖書の例を筆者は知らない。

またこの時代には、スペイン人の種子島への漂着を契機に、イエズス会を中心としたヨーロッパの文物の流入がはじまる。キリスト教という新しい思想を、異文化の日本人に普及させるためにイエズス会士は様々な働きかけを行った。その拠点となったのが日本各地に存在したセミナリオ(南蛮寺)である。この施設内には礼拝堂だけでなく聖画を描き聖書を印刷する工房も備えており、西洋美術体系による美術作品をはじめ日本人の手によって生産した。医療施設としても、イエズス会の外部組織であるミゼルコルディア(慈悲)の組が、ホスピタルを日本各地に建造している。

天正15年(1587)に豊臣秀吉が島津義久を降して九州征伐を成し遂げたころから、キリスト教イエズス会員への禁教政策がはじまる。キリスト教とともに発展していったスペイン・ポルトガル系の医師は多くが追放か処刑される。そののち関ヶ原の戦いで天下を手中にした徳川家康は、当初はキリスト教に比較的寛容であったが、次第に禁教へと傾斜していった。慶長19年(1614)には禁教令が出され、全国の宣教師や修道士に対して、外国人や日本人を問わず、すべて長崎に行き船で国外に退去せよとの命令が出された。長崎にあったキリシタンの諸会堂は豊後のサンチャゴ病院などと共に破却されたが、ミゼルコルディアの組は難を免れた。しかし元和6年(1620)、ミゼルコルディアの組も破却され長崎の南蛮医学系の救療施設はすべて姿を消した。こうして完成された鎖国体制は明治の開国までつづく。日本の出島等の限られた場所と、オランダ商館員や明の商人などの一部の外来の人々との外交の結果、医学をふくめた諸外国からの文化的な刺激を一般の人々が享受する機会は激減することとなる。(服部敏良『室町安土桃山時代医学史の研究』p361～429)

このような過程をへて日本は江戸時代を迎えるが、この当時の日本の医学の主流はこれまでと同様に、漢方医学であった。当然人の内腑をあらわす図も前出の「内景図」や

「明堂図」のバリエーションの範囲に収まるものであった。

しかしその後の元禄のころの革新的な医家には、『傷寒論』のような中国古代の医学のほう在实际にそくしているからそれを学ぶべきであるとして、その方法論をもとに臨床的研究をおこない新しい体系をつくりあげていく者も表れた。これを「古方派」または「古医方」といった。序文でのべた京都の小石元俊らが学んだ医派のはじまりはこのころである。(片桐一雄『杉田玄白』 p 31)

古方派は始め名古屋玄医(なごや げんい寛永 5 年・1628～元禄 9 年・1696)が唱え、後藤昆山(ごとう こんざん万治 2 年・1659～享保 18 年・1733)がそれを発展させて一気留滞説を唱えた。時期的には儒学における古学派の発展と連動している(片桐一男『杉田玄白』 p 31)。この古方派漢方医の活躍は解剖図にもおおきな変化をもたらすこととなるが、この点については項を改めて論ずる。

元禄前後の解剖図の変化に関わるもうひとつの動きとして、本木良意(もとき りょうい寛永 5 年・1628～元禄 10 年・1697)による、オランダの解剖医学書、レメリン(Johann Remmelin)の『小宇宙鑑(Pinax Microcosmographicus)』の第 2 版 Justus Gratianus 著『Ontleding des Menschelyke Lichaems(1667, Amsterdam 版)』の抄訳書『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』の編纂があげられる。(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』 p83)

本木良意は初め名を庄太夫、諱を栄久(しげひさ)といい、長崎出島のオランダ通詞であり、この後代々続く本木家の初代となる。当時の日本ではまだ人体各部に相当する邦訳語すら存在しない状況であったから、良意がどれほど優秀な人物であっても、単独での訳業は困難なものである。酒井によると、良意が訳業をまがりなりにも成し遂げることができたのは、オランダ人医師テン・ライネ(Willen ten Rhijne・1647～1704)の協力によるものが大きいとされる。(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』 p84、92)

天和 2 年(1682)か元年(1681)に一応の完成をみた訳述書『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』 p86、90)は、解剖図と解説の 2 部に分かれていた(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』 p90)。本書では当時の伝統医学にはなかった概念「神経」が粗雑ながらも紹介され、また大腸・小腸が記載されている点は特筆できるものであるとされる(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』)。このような本木良意の偉業を今日に伝えたのは、その価値をみとめた人々によっていくつかの写本がつけられたからである。現存する当時の写本は 4 点であるが、かつてはもっと多くの写本が存在していたとみられ、それらの写本数種を照合して手を加え、明和 9 年(1772)に京都で『和蘭全軀内外分合図』と題して出版されることとなった。いくつかある写本のうち、原本の姿をもっとも今日につたえるものは福岡藩医原三信の写本であるといわれる(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』 p 84)。

原三信(?~1711)は、黒田長政の時代から藩医をつとめ、代々三信を襲名する原家の第六代で、名を元弘といった。彼は貞享年間、藩命で長崎に遊学し、出島のオランダ人から外科を学ぶ(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』)が、原三信は、この外科免許状をうけとった翌年、ヨーロッパの解剖書ヨハン・レメリン(Johann Remmelin1583~1632)が著した『小宇宙観(Pinax microcosmographicus)』の解剖図と説明書の写しを完成させた。

ドイツ人レメリンの解剖書は、1613年に初版が出て以来、ラテン語・ドイツ語・フランス語・オランダ語・英語と各国語で100年以上も版を重ね、普及した書物である。神と肉体の関係について説いた素人向けの解剖書といわれ、聖書の引用句も多いが、レメリンの原書に散見する聖句は、写本では完全に無視されている。これは『和蘭全軀内外分合図』のような訳述書にかかわらず、鎖国下における日本では舶来書の十字架図像が削り取られるなど、このような処置は往々にしてなされていたことであった(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』)。

原書のレメリン著『小宇宙鑑』は先行研究(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』)によってその内容を知ることができる。それらによると『小宇宙鑑』は人体の構造や表皮から内臓の位置の3次元的把握を、素人向けにわかりやすくするためか、仕掛け付きの本になっている。銅版印刷された人体各部や臓器、また筋肉や表皮を各パーツに分け、重ね貼りにしている。それらをピンセット等で1枚ずつめくっていくと、体の表面から深層部までが順にあらわれる仕組みである。翻訳の底本とされる蘭訳本(1667年刊)では、それぞれの紙片が120枚もあるという(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』)。原三信の写本は原書と同様の仕掛けを再現しているが、図示された男女の顔が原書はヨーロッパ人の風貌であることに対し、三信のものは大和絵風の日本人の男女に描きかえられている。原三信は当然ながら専門の画工ではなかったため、精密さでは原書に遠く及ばないが、未知の学問への好奇心や探究心が、根気のいる作業を支えたのであろう。原三信の名は現在まで襲名され続け、博多の原三信病院を中心に、現在まで脈々と医家の名を伝えている(原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』)。

このように体制にとりこまれ形骸化しつつあった日本の伝統医学に、古医方と紅毛医学という2つの新しい潮流がうまれた。それらの影響は医学的な領域にとどまらず、解剖図の表現方法にも大きな影響を与えることとなる。

1 部 序論

2 章 江戸解剖図前史—『和蘭全軀内外分合図』と『蔵志』—

2 節 日本初の実測解剖図『蔵志』

古方医は日本伝来当時の漢方医学にはあった人体への解剖学的知見を、実証的方法で復興させようとした。時にはオランダの解剖書を参考にしながら人体の構造究明の欲求を強めたのである。

享保元年(1716)八代将軍徳川吉宗(とくがわ よしむね貞享元年・1684～寛延4年・1751)の治世で享保の改革がおこなわれた。これによりヨーロッパの文物の流入が融和されることとなる。吉宗自身も、江戸に参府したオランダ商館長ヨアン・アウエルに『ヨンストン禽獣譜』『ドドニウス本草書』を示し質疑を行った他、ベトナムから象を輸入したりとヨーロッパに関わらず外来の文物に大きな関心を示していた。交流の中でより詳しいオランダ語の理解の必要性を感じたのか、近い人物にオランダ語の習得を命じている。そのとき命を受けた人物のなかで著名な人物として、青木昆陽(あおき こんよう名を敦書、字を厚甫、昆陽は通称、文蔵とも。元禄11年・1698～明和6年・1769)と野呂元丈(のろ げんじょう元禄6年・1694～宝暦11年・1761)が挙げられる。元丈は江戸参府の長崎通詞の協力を得て、『ヨンストン禽獣譜』から『阿蘭陀禽獣虫魚図和解』を、『ドドネウス本草書』から『阿蘭陀本草和解』を抄訳した。昆陽はオランダ語の語学的な研究を行い、『和蘭文訳』『和蘭文学略考』などを記す。しかし元丈と昆陽のオランダ語研究は一般的な広がりを持つには至らなかった。その後ヨーロッパ文物の流入緩和は、その後の9代将軍 徳川家重の治世において老中田沼意次により活発に行われる。このときポルトガルにかわりオランダ経由で、ヨーロッパの文物が流入するようになり、すでに約100年の時が経過していた。

江戸幕府が開かれたころと比較し、医学図に表れる人体像はどの程度変化していたのであろうか。実際のところ、この時期はまだ図像的に大きな変化はない。しかし、オランダの文化が江戸や長崎から伝播し、また外来文化に対する禁忌の意識も薄れるにつれ、医学に関わらず実用的なヨーロッパの書物はある程度の知識人ならば、特権階級でなくても手にする機会は増えていたようだ。前述した古医方の医師のなかで熱心なものは人体に近いといわれるカワウソの解剖や、あるいは刑場等に野ざらしにされた人の白骨によって骨格の構造を研究した。享保17年(1732)には京都の眼科医 根来東叔は、火あぶりに処せられ1ヶ月あまり放置された遺骨を用い人骨の構造を観察写生し、説明文を付して9年後の享保元年(1741)に『人骨連骨真形図』を出版した。原本は失われているが、千葉大学医学部の亥鼻文庫には、文化14・1817年大坂で作成された写本が存在する。
(<http://wolfgangmichel.web.fc2.com/publ/books/49/49.htm>)

またこれと類似したものではりきゅうミュージアムの「人身連骨真形図」がある。こちらにも図様や先達の研究により、原本の模写図であることが推察されている。（『はりきゅうミュージアム Vol.1 銅人形明堂図篇』）



「人身連骨真形図」『はりきゅうミュージアム Vol.1 銅人形明堂図篇』より引用

このように古方派の医師は実際に人体の骨格を観察し、動物の内臓を開き観察するなかで五臓六腑説といった漢方医学の学説に疑問を深めていった。そんななかついに古方医のなかから、公に人体解剖の許可をとり人の内部を確認する者が表れる。それが京都の古方医山脇東洋(やまわき とうよう 宝永2年・1706～宝暦12年・1762)である。

東洋は後年の号で、はじめは移山と号し、名は尚徳徳、字は玄飛、子飛といった。古医方の大家後藤昆山(万治2年・1659～享保7年・1722)の門人であった東洋はのちに宮中の侍医で法印に叙せられ、養寿院の号を賜ることとなる。東洋は師の教えでカワウソを解剖していたが、その結果オランダの医学書に示されている人間の内腑と、伝統的に内腑を示した図「内景図」との記述の差異に興味をもっていた。宝暦4年(1754)に京都所司代の若狭藩主酒井讃岐守忠用(さかい さぬきのかみ ただもち)に、刑屍の提供を山脇東洋の門弟の小浜藩医の伊藤友信、小杉玄適、そして同僚の原松庵らがもとめた(片桐一男『杉田玄白』p27)。これは許可され、記録に残るもので初の医用の解剖(腑分け)となった。解剖の方法は簡素なものであり、役所前に箆をしき、屍体をおいて胸部・腹部・下腹部とひらいていくといったものであった。また執刀したのは東洋ではなかったので、執刀者にあわせ内腑を観るのみであった。その内容を同席させた弟子の浅沼佐盈(あさぬま すけみつ)に描かせ、本文を東洋がしたためまとめられたのが、日本人による初めての実測解剖書『蔵志(ぞうし)』である。宝暦9年(1759)に成った本書は2冊構成であるが、全82葉中、解剖に関するものは6葉附図6枚のみである。

山脇東洋は『蔵志』において、医学は実地にもとづいていなくてはならないと主張し、「蛮書」のほうがより事実にあっていることをのべた。東洋のいう「蛮書」はドイツ人ヨハン・ヴェスリング(Johann Vesling, 1598-1649)の解剖書『syntagma anatomicum』であったことが知られており、『解体新書』の参考蘭書としてあげられた『ヘスリンキース解体書』である(片桐一男『杉田玄白』p34)。

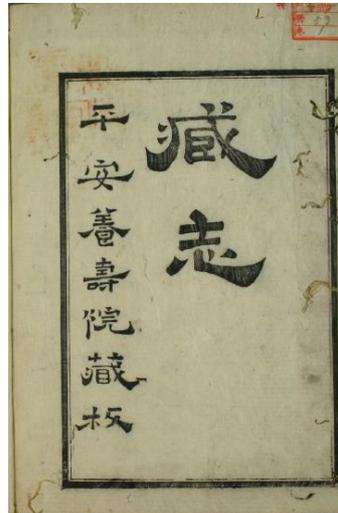
『藏志(ぞうし)』

早稲田大学図書館蔵

古典籍総合データベース PDF 版より引用



『藏志』



標題

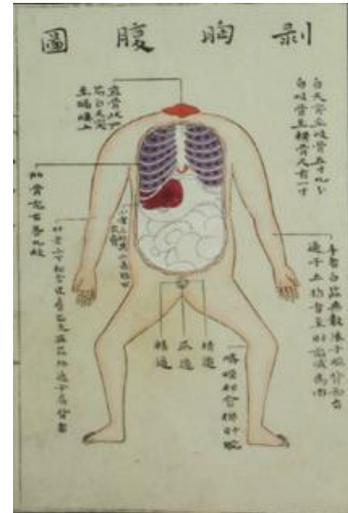


図 1

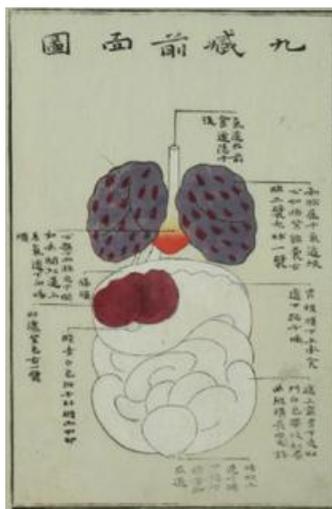


図 2

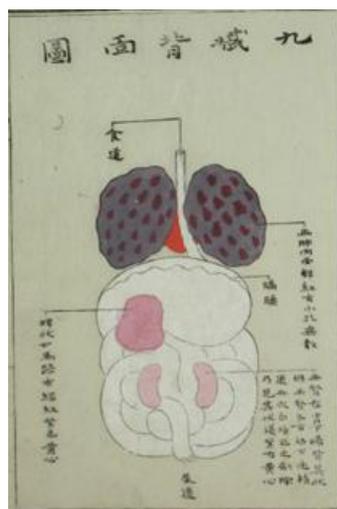


図 3

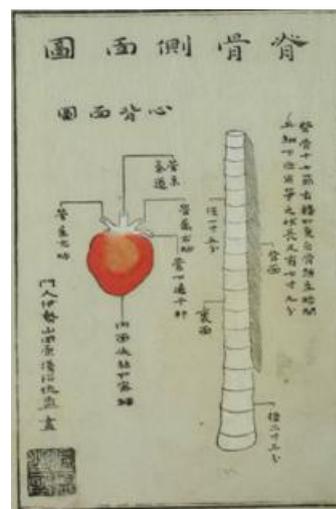
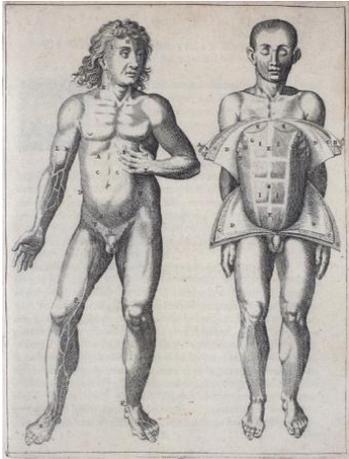


図 4

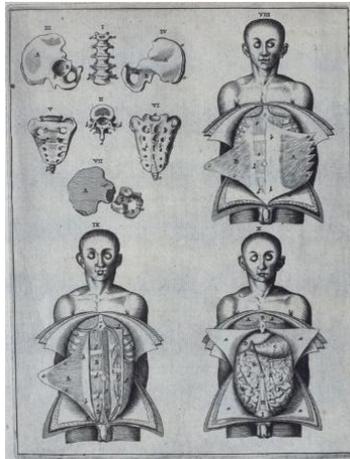
『ヘスリンキウス解体書(syntagma anatomicum)』挿図

九州大学医学図書館ホームページ古医書画像総合データベースより引用

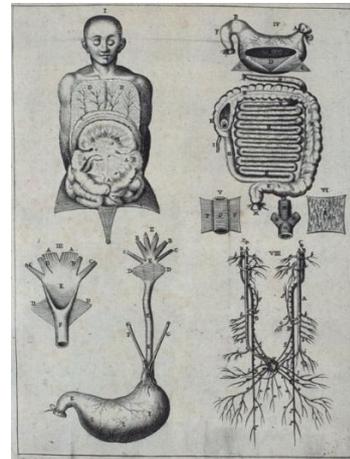
https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/hp_db_f/igaku/index_jp.html



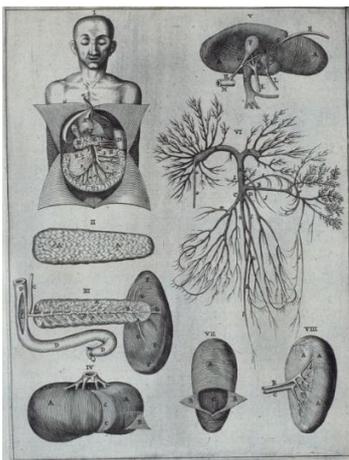
1



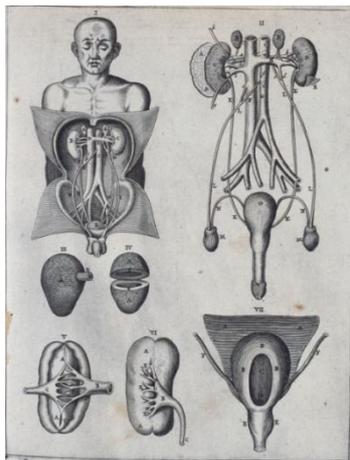
2



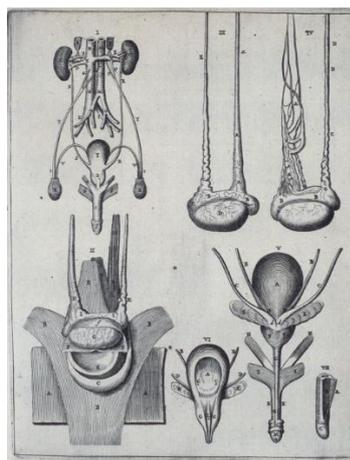
3



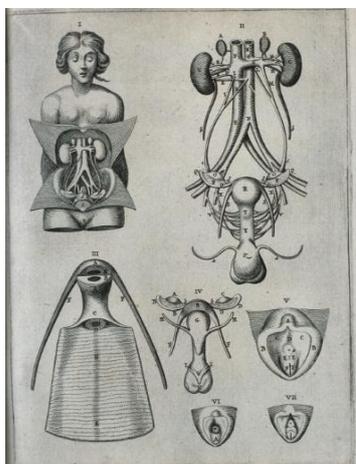
4



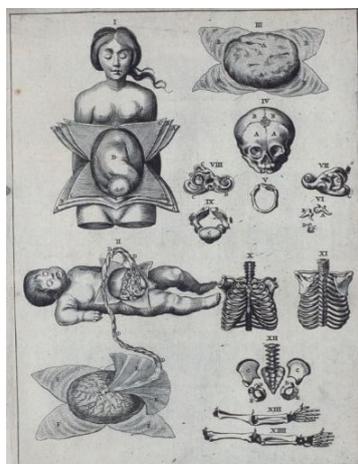
5



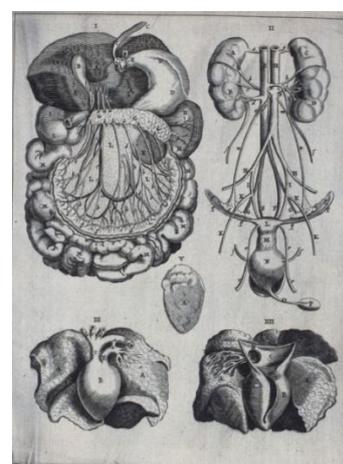
6



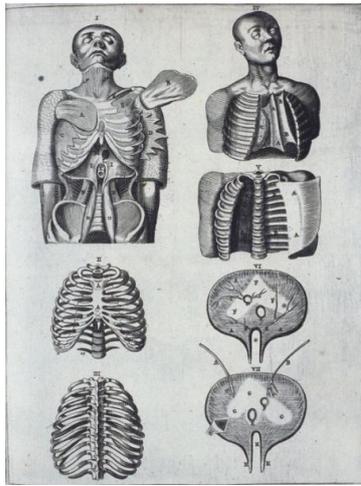
7



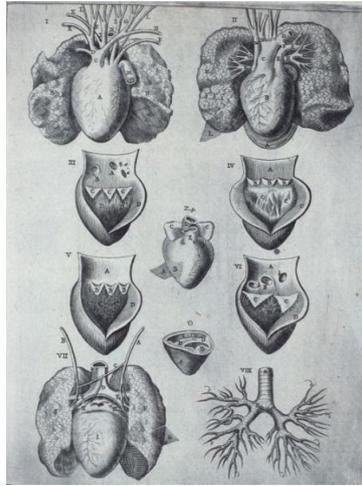
8



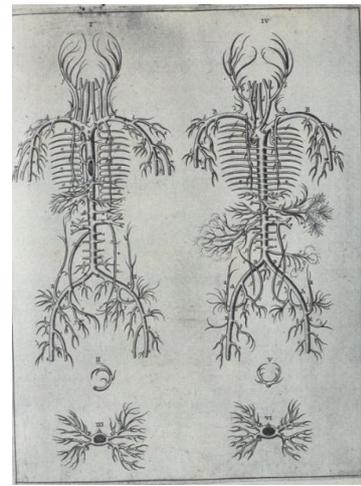
9



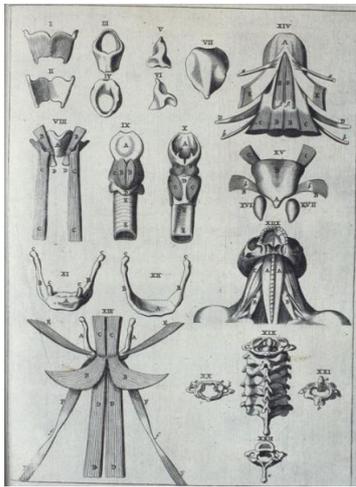
10



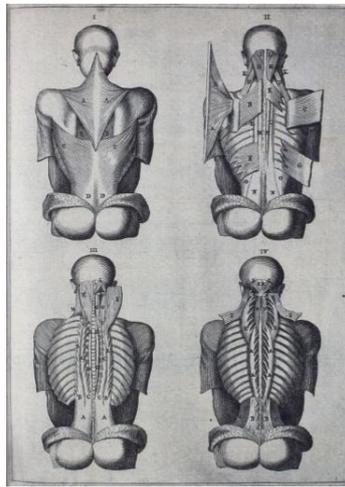
11



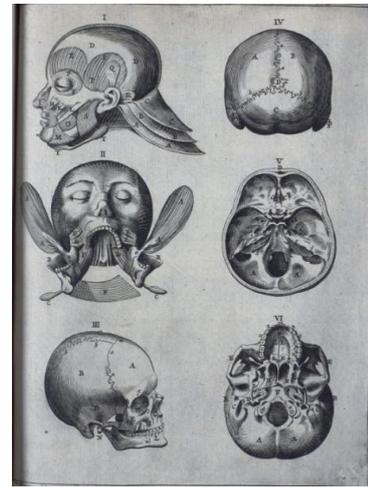
12



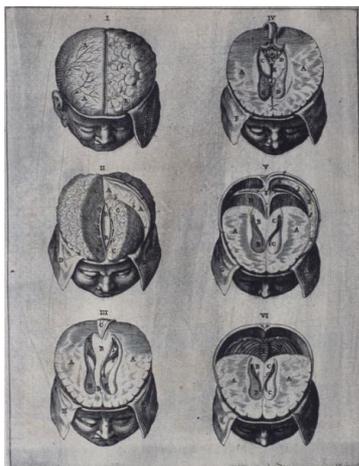
13



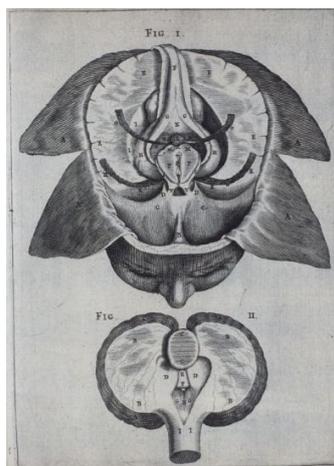
14



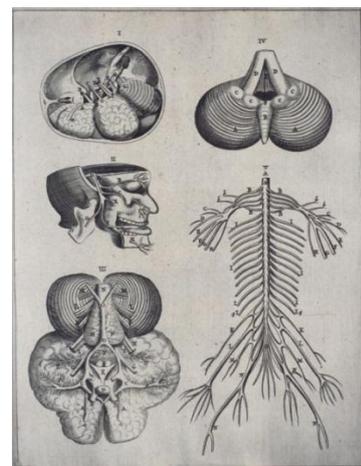
15



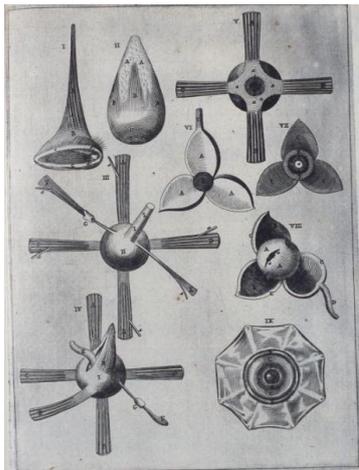
16



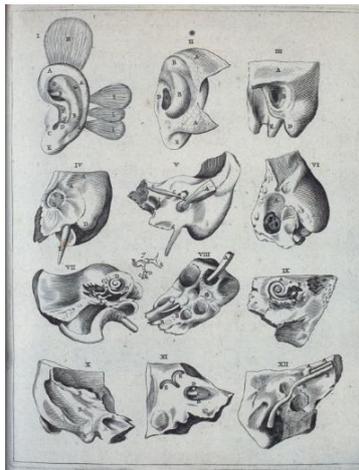
17



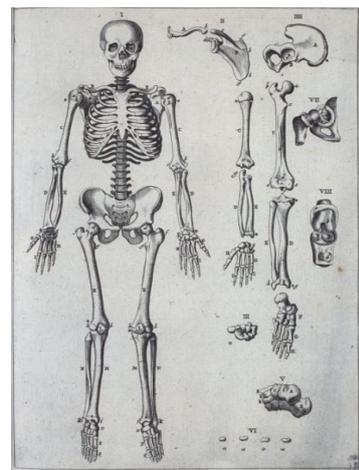
18



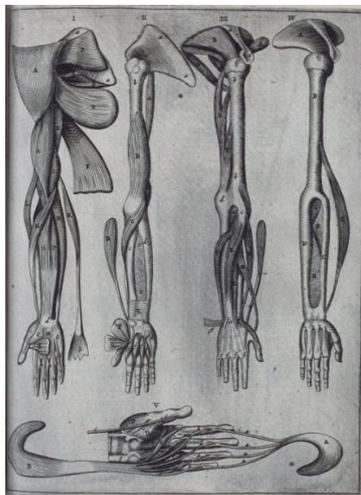
19



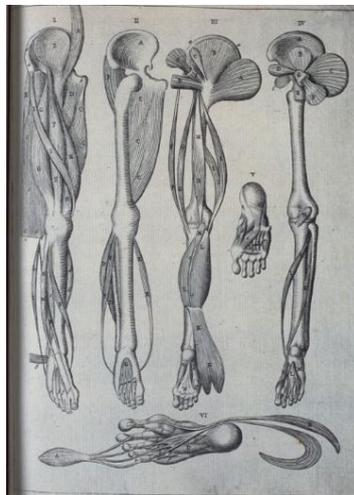
20



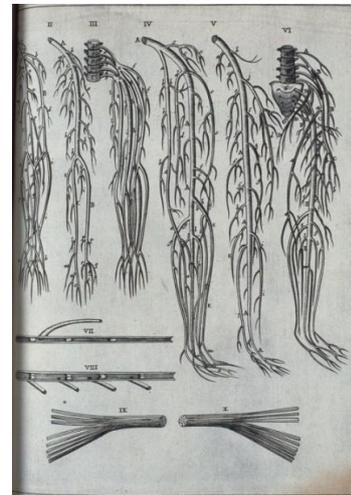
21



22



23



24

この『蔵志』の図を描いた人物は専門の画工ではない東洋の弟子であるから、解剖の現場に立ち会っても、解屍体を写生的に描き写し取ることはできなかった。しかし写生的な「解剖図」としてではなく、『蔵志』という医学書の本文の補足的な図であると考えれば、要件を満たした内容であると思える。前出の図1では四肢の特徴や表皮の色から、それが首の無い人であり、図中の訳注や本文の内容から、人体中央の図像が、人の内部を表したものであることは分かる。また図2、3でも各臓器が繋がっているものであることや、おおよその臓器の位置関係、さらに図4では心臓が果実のような形で、背骨は複数の節がある構造であることが、図像や訳注から分かる。非常に抽象的であり、これによって今日のような外科治療が行えるものではないが、公許による初の解剖の報告書の添付図としては十分なものであるといえる。

つまり、山脇東洋は『蔵志』の解剖図をあくまで本文の補足的なものとしかたえていなかったのである。この『蔵志』は、東洋自身が己の目で人の内腑を見て、ヨーロッパと中国の医説の違いを確認し、その結果を周囲の弟子や医家に文字情報として伝えることができれば良かったのである。この点は、『ヘスリンキース解体書』の挿図という参考図が存在していたにも関わらず、その成果が図像的にほとんど反映されていないことから推察できる。

こののち『解体新書』刊行までにいくつかの実地にもとづく解剖書が刊行されたが、図像的にはこの章で紹介した『和蘭全軀内外分合図』や『蔵志』と大同小異であり、解剖書と美術が深くかかわるのは『解体新書』の登場を待たなければならない。

第2部 江戸時代解剖図の展開

第2部江戸時代解剖図の展開

序論

1部で論述したように、『解体新書』以前にも解剖書は存在していた。それらは大きく分けて2例あり、1例目はヨーロッパの解剖図を参考に描かれたもの。2例目が実際の観臓の結果をもとに描かれたものである。

ヨーロッパの解剖図を参考に描かれたものの一例として紹介した、本木良意の『小宇宙観』の抄訳本は原本が散逸してしまっており、本論では原三信の模本『和蘭全軀内外分合図』の挿図から、当時の解剖図表現を検討した。本木良意の時代は西洋の文物に対する規制の厳しい時期であったために、原図のヨーロッパ風の顔を日本風にするなど改変が、なされている。実際に腑分け・観臓を経験していない医師がまとめたものとしては秀逸なものであるといえる。この模本が編纂されたのは、『蔵志』の刊行以後、本木良意の訳業が再発見されるかたちで刊行された。この『蔵志』や『和蘭全軀内外分合図』の相次いで刊行は日本の解剖書が編纂されるための機が熟したことを象徴したものであったともいえる。

実際の腑分け・観臓の結果を著し図示した『蔵志』は、文章による記述に重きが置かれ、挿入された内臓を示した解剖図は大凡の位置関係を図示するにとどまった。

そもそも『蔵志』は本邦初の公許による解剖結果を題材に山脇東洋の医学論を著したものである。解剖図はあくまで副次的なものに過ぎない。

『蔵志』では、解剖を体験していない人々にその状況を伝える手段は、あくまで文章によって成されるものであり、そのためヨーロッパの解剖図や『解体新書』以後の解剖図と比較すると、3次元の視覚イメージを2次元に描き、またそれを客観的に伝えるという描画の際の目的意識が欠如している。それが『蔵志』と『解体新書』以降の解剖図の最も大きな違いである。

『解体新書』以降の江戸時代の解剖図制作に際し、さまざまなアプローチで技術革新がなされていく。江戸の蘭方医家による解剖書の挿図には、腐食銅版画やヨーロッパの絵画技法が採用され、山脇東洋に連なる京都の古方医は円山派の写実技法が用いられた。

「3次元の視覚イメージを2次元に描き客観的に伝える」という、源を同じくする目的からはじまった解剖図の制作であるが、これら各医派の絵画技法の選択が異なったことは、解剖図像に大きく反映し一つの絵画史を形作っている。

第2部江戸時代解剖図の展開

1章『解体新書』付図

1節杉田玄白の来歴と『解体新書』刊行まで



『解体新書』序・図

『解体新書』は安永3年(1774)に本文4巻4冊に附図1冊で刊行された。これまで日本では幕府の禁忌にふれることを恐れ、原図に忠実に描かれることのなかったヨーロッパ風の解剖図像をはじめて採用し、その後の江戸時代の解剖図に大きな影響を与えた。

編著者は杉田玄白(すぎた げんぱく 享保18年・1733～文化14年・1817)であるが、このほかにも発起人であり翻訳の中心人物であった前野良沢(まえの りょうたく 享保8年・1723～享和3年・1803)、編纂の契機となった骨ヶ原の解屍から関わった中川淳庵(なかがわ じゅんあん 元文8年・1739～天明6年・1786)を中心に、幕府の奥医師の家系である桂川の3代目桂川甫三(かつらがわ ほさん 享保13年・1728～天明3年・1783)、4代目桂川甫周(かつらがわ ほしゅう、諱を国端・くにあきら、宝暦元年・1751～文化6年・1809)や多くの蘭学者、医学者が関わり編纂された。杉田玄白はこの編纂チームを晩年の回顧録『蘭学事始』にて社中と呼びならわされている。

杉田玄白は、享保18年(1733)に江戸の牛込矢来(現 新宿区矢来町)の小浜藩主酒井讃岐守忠用の下屋敷にうまれる。諱を翼(たすく)、字を子鳳、号は鸚齋(いさい)といい、晩年に九幸翁(きゅうこうおう)という別号も用いた。(片桐一男『杉田玄白』 p3)杉田家は玄白をふくめ3代続く医家であり、初代杉田甫仙は西玄甫という南蛮(スペイン・ポルトガル)・紅毛(オランダ)流の医学を修めた長崎通詞に師事し教えをうけており、2代目伯元(父の名を襲名しているが、混乱をさけるためここでは幼名の伯元で統一する。)も初代から厳格な教育をうけた。(片桐一男『杉田玄白』 p2-7) その子 玄白も17、8歳のころには、父の紹介で奥医師西玄哲(天和元年・1681～宝暦10年・1760)に師事し蘭方医学を指導される。(片桐一男『杉田玄白』 p19) 宝暦2年(1752) 玄白21

歳のころには小浜藩医となり上屋敷に勤め、翌宝暦3年(1753)には酒井讃岐守忠用に召し抱えられる。(片桐一男『杉田玄白』 p 26)この宝暦2年に山脇東洋とその門弟による初の公許による腑分けがおこなわれたのはすでにのべたが、この日本医学史における重大事件は東洋の弟子であり、玄白の同僚であった小杉玄適により玄白の耳にも届くこととなる。すでに師の玄哲により蘭方医学の一端を目の当たりにしていた玄白は、東洋らを非常に羨んだという。(片桐一男『杉田玄白』 p 28)

遡る宝暦7年(1757)には江戸日本橋に開業し町医者となる。このころには近くに居住していた江戸の奇才平賀源内(ひらが げんない享保13年・1728～安永9年・1780)や、この後『解体新書』編纂グループの一員となる中川順庵の姿もみうけられ、玄白と江戸蘭学者の交流がはじまっていた(片桐一男『杉田玄白』 p 39～46)。玄白は特に平賀源内の才を評価し、『蘭学事始(片桐訳)』には「生まれ得て理にさとく、敏才にして時の人気にかなひし生まれなりき」と、その時代の寵児たる才能を絶賛している。『解体新書』の挿図を描いた小田野直武も平賀源内の弟子であり、この時期から続く蘭学者の交友が、後の偉業に通じていくのである。

このように日本橋に開業して以降、藩医としての勤めにくわえ、開業医としての診療に多忙ながらも、余暇を見出しては平賀源内やその周辺の蘭学者仲間と交友し、自身の医術の飛躍を模索していたのである。

玄白の人生の転機となったのは、先にのべた宝暦9年の山脇東洋による『蔵志』の刊行である。これにより玄白の内にあった伝統的な五臓六腑説に対する懐疑心は払拭できないものとなった。その後明和2年(1765)には小浜藩の奥医師に昇格し、順調に医師としての経歴を高めていった玄白は、翌年のオランダ商館長とそれに随行した通詞らの一行が江戸へ参府した際に、前野良沢、中川淳庵、平賀源内らと長崎屋を訪問し、通詞の西善三郎(にし ぜんざぶろう不明～明和5年・1768)と懇談する機会を得る。しかし善三郎からオランダ語学習の困難さをさとされ、玄白は失意とともに一度オランダ語習得を断念した。この対話以降も頑固に蘭語修得を目指した前野良沢とは対照的である。良沢はこののち長崎留学を成し遂げ、『解体新書』編纂の原動力となるのである。(片桐一雄『杉田玄白』 p 55-58)玄白は『蘭学事始』において述懐しているように「性急」な気質であったようで、自身の医業に即実利、即実用の学問をもとめていたのであり、対する前野良沢が蘭語学の習熟を人生の命題としたことと比較するとその学究の姿勢は異なる。このような実学的気質は江戸蘭学者の多くが持っていたものであるが、特別な環境でしか修得が難しく、習得までに多くの時間を必要とする語学の壁にはばまれ、志し半ばで挫折する者も少なくなかった。玄白が『解体新書』の編纂、ヨーロッパ医学の究理、といった大望のおおくを成し遂げられたのは前野良沢の語学面の協力が欠かせないものであった。この玄白の体験からくる反省は杉田流の門下生にも強く継承され、医学だけでなく蘭語学にも通じた江戸の俊才を多く排出する結果となった。

明和6年(1769)の父の死に際し家督と侍医の職を継ぎ、新大橋の中屋敷に務めることとなる。この年に江戸にあがった吉雄耕牛(よしお こうぎゅう諱を永章、享保9年・1724～寛政12年・1800)に入門を願いでて認可され、時間的な制約から蘭語学は学ぶことができなかったものの耕牛が持参していた「ヘーステル」の『シュルゼイン』を借覧・写図したことが知られる。この「ヘーステル」は17世紀後半から18世紀半ばに活動したドイツの外科医ローレンツ・ハイステル(ハイスターとも。Lorenz Heister, 1683～1758)であり『シュルゼイン』はハイステルの著書『外科学(Chirurgie)』のオランダ語版『外科指針(Heelkundige Onderwyzingijn 1755)(片桐)』である。(片桐一雄『杉田玄白』p62～68 筆者が見ることができたのは『外科指針』の1776年版・PDF資料)この『外科指針』は後に玄白に医学を前野良沢には蘭語学を学んだ、両者の高弟大槻玄沢が20年の月日をかけ文政8年(1825)に『瘍医新書』として『外科学』の一部を翻訳している。(片桐一雄『杉田玄白』p210)

この『外科指針』の挿図は玄白の心をとらえた。当時の玄白は『解体新書』の原本となる解剖書、ヨハン・アダム・クルムス(1689～1745)著ヘラズヌス・ディクテン蘭訳の『解剖学表(蘭: Ontleedkundige Tafelen 通称ターヘル・アナトミア)』を中川淳庵により示される前ではあったが、平賀源内の薬品会関連や桂川家との関わりによって、すでにオランダの舶載書銅版画挿図はみていたことであろう。そのなかにはドドネウス書といった博物百科事典以外にも、医学書もあったのではないか。しかし貴重な洋書である、桂川邸などでは話のついでに眺める程度であったものと推察される。このような当時のオランダ医学書を、ゆっくり時間をかけ熟覧しその図を写しとる機会をあたえられたことは玄白にとって得難い体験であり後の『解体新書』翻訳に通じるもう一つの転機であったのであろう。それは『解体新書』刊行後にまず手をつけたのがこの『外科指針』の翻訳であったことからもうかがえる。(片桐一雄『杉田玄白』p208～210)

すでにのべたように明和3年(1766)に玄白はオランダ語の修得を断念している。しかし桂川家を中心とした江戸蘭学サロンでの関わりの中かで、オランダ医学が自身の医学を飛躍させる重要な要素になることも実感していたのではないか。そこで玄白が苦肉の策としておこなったのがこの『外科指針』の図の書写であったものと思われる。しかしながら本図は、ニードルで銅板に描画し、それによってできた溝の浅深を酸の腐食作用によって調整し、製版用インクをもって印刷された「腐食銅版画」による挿図であり、当時の日本では一般的な画法を修めたものであっても、この洋風の挿図を再現するのは至難であるから、このときおそらく墨汁と毛筆によって写し取ったと考えられる解剖図は、けして玄白が満足できるものではなかったものと思われる。しかしこの体験が、『解体新書』の附図制作に際し、市井の画工や当時の一般的な画法を学んだ絵師ではなく、盟友平賀源内より洋風画の手ほどきをうけた、秋田藩士小田野直武を抜擢する遠因するものとなったのであろう。

明和8年(1771)に、杉田玄白は『解体新書』の翻訳原本となる、ヨーロッパの解剖書『ターヘル・アナトミア』を手にする事となる。その状況が杉田玄白の晩年の回顧録『蘭学事始』にくわしく記述されているので、片桐一男の訳を以下に転載する。

「明和八年辛卯(かのとう)の春のことだったかと覚えているが、淳庵がかの宿舎へ行ったところ『ターヘル・アナトミア』と『カスパリユス・アナトミア』という「身体内景説(人体解剖の図解書)」を2冊取り出してきて、

「希望する人があれば、ゆずりましょう」

というものがいるとあって、持ち帰って、わたしに見せてくれた。

わたしは、もとより一字も読むことはできなかったけれども、内臓、骨格の具合など、これまで見たり聞いたりしてきたところとは大いに異なっていて、これこそきっと実地にたしかめて図説したものにちがいないとわかって、なんとなく、どうしても欲しいと思った。そのうえ、わが家も、もともと、オランダ流の外科と称してきたことがあるので、せめてこうした書物を本箱に備えておきたいと思った。

しかし、そのころは、わが家貧しく、とてもこの本を買い求める力はなかったので、藩の家老の岡新左衛門という人のところへ持って行き、

「しかじかの次第であるので、この蘭書を買いたいのであるが」

と打ち明け、

「しかしながら、資力がたりなく、なんともしようがない」

と話した。

すると、新左衛門はこれを聞いて、

「それは求めておいて役立つものであるか。役立つものであれば、代価はお上より出してくださるよう、取り計らってやろう」

とってくれた。そのとき、わたしは、

「これは必ずこうという目当てがいまあるわけではないけれども、ぜひともお役に立つものにして、お目にかけます」

と答えた。

かたわらに倉小左衛門(のちに青野と改めた)という人がいて、

「それは是非とも買い求めてあげてください。杉田氏は、これをむだにする人ではありません」

と、口ぞえをしてくれた。

これによって、とても心易く願いがかなって、希望どおり購入することができた。これが、わたしが蘭書を手に入れた最初のことである。」

このように、玄白はオランダ語が読めなかったものの、その精密かつ美しい図版の解剖図に驚き、藩に要請し許可されなんとかこれを手元に置くことができたのであった。

(片桐一雄『杉田玄白』 p 76～82)

そして奇しくもその同じ年に『解体新書』編纂の契機となる、骨ヶ原(小塚原とも)の腑分けがおこなわれた。この17年前には公許のもと腑分けがおこなわれ、すでに医師による腑分けもおこなわれて久しい。玄白も常々腑分けを実見し、また現在は手元にあるオランダの解剖書との差異を確認したいと考えていたところに、幕府の役人から小塚原の腑分けの知らせをうけたのである。この吉報をまず同じ藩の中川淳庵に知らせ、面識はあるが日ごろあまり関わりがなかった、中津藩医前野良沢にも「思いあって」手紙にて声をかけた。

翌日にはうまく落ち合い小塚原へ向かう3人であったが、偶然にも前野良沢の手には『ターヘル・アナトミア』が携えられていた。驚き、意気投合した一同が小塚原で見た人の内腑は、伝統医学の内景図よりも、『ターヘル・アナトミア』解剖図に酷似しており、オランダ解剖書の銅版図の精妙さに感嘆した。ここに至ると気になるのは本文の内容である。刑場からの帰り道すがらかれらは決意し、前野良沢を主宰とした『解体新書』編纂社中を結社した。(片桐一雄『杉田玄白』 p 83～90)

こうして『解体新書』編纂がはじまったが、その道のりはかつて西善三郎に注進されたように熾烈を極めた。その当時の様相を玄白は「まこと橈舵なき船の大海に乗り出せしが如く、茫洋として寄るべきかたなく、ただあきれにあきれて居りいたるまでなり」と回想している。(『蘭学事始』)蘭語学に不自由であった玄白のことそれは当然であるが、対して翻訳の主軸をになった前野良沢は、語学的にある程度の見通しがあって翻訳をはじめていたと思われる。杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅱ』 p185に記載された、良沢の蘭語学修得時期を以下に列挙する。

延享3年(1746)～宝暦13年(1763)の間 青木昆陽の門に入る

宝暦11年(1761)吉雄耕牛参府、良沢は主君(豊前国中津藩主 奥平昌鹿)の病気を縁にして耕牛と交友をもつ。

宝暦12年(1762)西善三郎参府。良沢蘭語学の啓発をうける。

宝暦13年(1763)長崎遊学(第一回目)良沢41歳

明和3年(1766)西善三郎参府。良沢、江戸蘭学者らと面談。44歳(青木昆陽に入門1)

明和6年(1769)吉雄耕牛参府。良沢、面談。47歳 (青木昆陽に入門2)

明和7年(1770)良沢、長崎遊学(2回目)48歳。

明和8年(1771)『蘭訳荃』を記述。49歳。このころから解体新書の翻訳に着手

以上ように推察されておりこの記述は片桐一男『杉田玄白』の記述と以下の点がことなっている

1 青木昆陽に弟子入りした時期

片桐説 明言せず

杉本説 延享3年(1746)～宝暦13年(1763)の間

2 長崎遊学の時期、回数

片桐説 明和6年(1768)のみ(1回)

杉本説 宝暦13年(1763)、明和7年(1769)(2回)

このように研究者によって『解体新書』編纂開始時の良沢の蘭語学と専門的に関わった期間の見解がわかれてはいるが、少なくとも前野良沢が著した『蘭訳荃』の記述からアルファベットの各文字の名称と字体や簡単な文法には通じていたことは明らかである。そして良沢は長崎の遊学のおりに吉雄耕牛と親しくし、その前後には『ターヘル・アナトミア』を入手していたものと考えられており、遅くとも明和6、7年(1768、1769)の長崎遊学では吉雄耕牛から簡単な医用単語の解説がなされていたものと思われる。蘭語学には非常に慎重かつ堅実な態度をしめす良沢である。一時の感情の高まりから訳述作業にはいったとは考えにくく、実際は櫓と舵を手に翻訳の大海へ漕ぎ出したのであろう。

玄白は『解体新書』刊行を急いだとされる。このとき玄白は38歳であり、人生50年といわれた当時であってけして若くはなく、また生来体が丈夫な方ではなかった玄白は志半ばで倒れるのを恐れたのである。そのような玄白が周囲の多くの蘭学仲間の死をみとり、84歳まで生きたのは皮肉ではあるが。

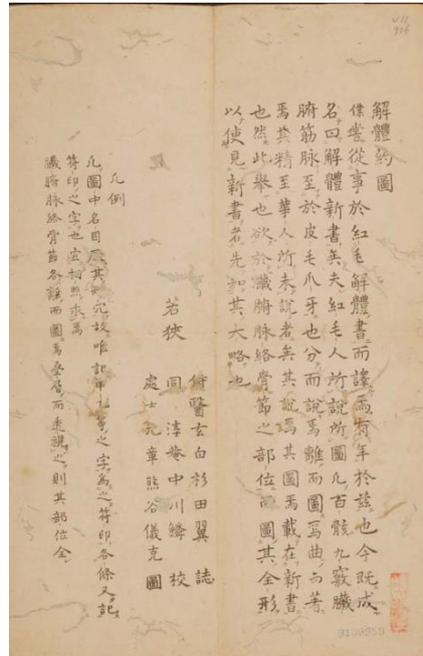
翻訳事業は玄白らが本業の医師としての多忙な日々を送る中、月に6、7回の会合の場がもたれたとされる。(片桐一雄『杉田玄白』p118)会合は酒井侯江戸中屋敷の中に用意された玄白の官舎「天真楼塾」においておこなわれている。川が三叉にわかれたところに屋敷があったために、門人や近しいものからは「三叉塾」と通称され親しまれたようである(片桐一雄『杉田玄白』p226～227)。社中の人間や社員が特に信用し推薦したものにしか明かされなかった会合では、蘭学者、蘭方医が意見を交わし、吟味し、翻訳がおこなわれていた。会合で訳読できたところを、玄白はその日の記憶の鮮明なうちに整理、記録する。そしてまた次の会合では同様のことを積み重ねる。開始当初は1つの単語を訳読するのにも四苦八苦していた社中は、それから1年余りも過ぎるころには1日に10行、またはそれ以上の翻訳がそれほどの苦勞なく訳せるようになったと『蘭学事始』にはある。(片桐一雄『杉田玄白』p124～128、206)

安永2年の正月には、おおよその訳稿が成った『解体新書』の予告として『解体約図』が刊行される。玄白は「当時流行っていた引札(チラシ広告)にならった」と『蘭学事始』

で語るが、多くの研究者の見解では幕府の禁忌に触れる可能性があり、また漢方医からの反発も予想された本の出版にあたって、万全を計ったのであろうと考えられている。(片桐一雄『杉田玄白』 p 131~134) 解体約図は計5枚からなり、それぞれが分割された1枚の紙である。それらを5枚1組にして封皮をかけた状態で世に出された。



『解体約図』封皮



『解体約図』1枚目

東京大学附属図書館ホームページ

「土肥慶蔵の医学関係資料とその時代—鶚軒文庫」電子展示より引用

<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2004/tenji/index-i.html>

	侍医	玄白	杉田翼	誌
若狭	同	淳庵	中川麟	校
	处士	元章	熊谷儀克	図

上記のように『解体約図』の1枚目をみると、関係者のなかに、前野良沢の名がないことに気づく。これは良沢が長崎遊学の際に太宰府天満宮を参拝し「それがし、和蘭の術に従事するに、いやしくも真理をおしひらき、活法をぬき出さずして、猥り(みだり)に聞達の餌となす所あれば、神明これを殛(つみ)せよ(『杉田玄白』 p 183)」と蘭学に殉じる誓いを良沢はたてており、自身の名をみだらに記されるのを嫌った為であるとおもわれる。また本図の絵師には処士(仕官していない者)の熊谷儀克という人物を起用したことが分かるが、『解体新書』では秋田藩士の洋風画家小田野直武が図を画いている。

続く「凡例」には各図の見方が指示されている。すなわち「図3枚を重ねて透視すれば、部位の関係が完全に理解できるようになっている(片桐一雄『杉田玄白』 p136)」のだ。当時の書物やチラシがどのようなものであったか、筆者はこころえていないがこれは非常に心憎い演出である。まさに蘭書の細密な挿図によって「心開かれる」体験をした玄白ならではのアイデアであるといえる。(片桐一雄『杉田玄白』 p135～136)

『解体約図』挿図

東京大学附属図書館ホームページ

「土肥慶蔵の医学関係資料とその時代—鶚軒文庫」電子展示より引用

<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2004/tenji/index-i.html>

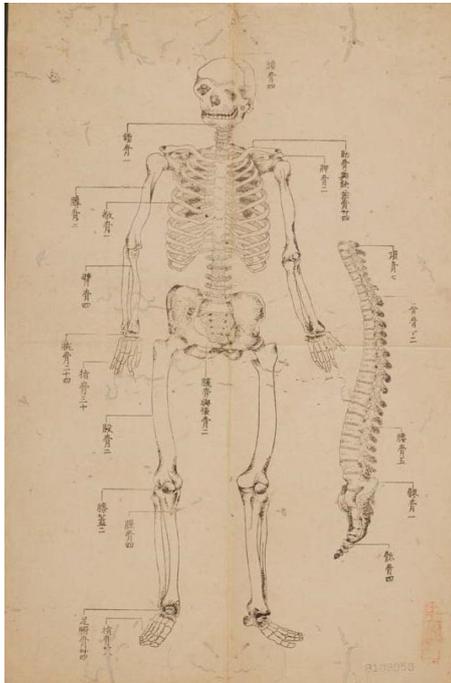


図 1

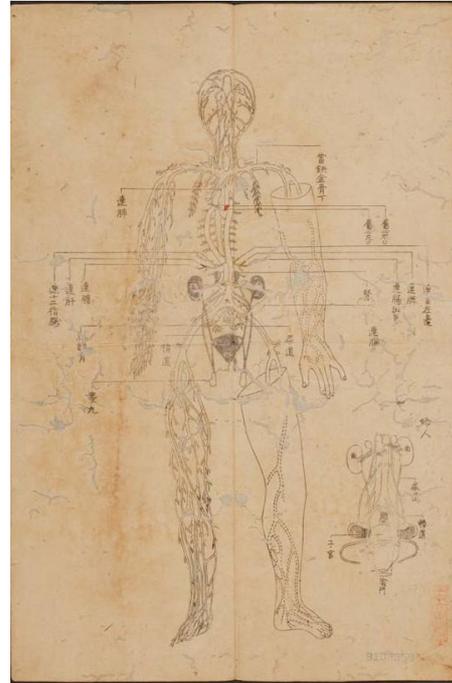


図 2

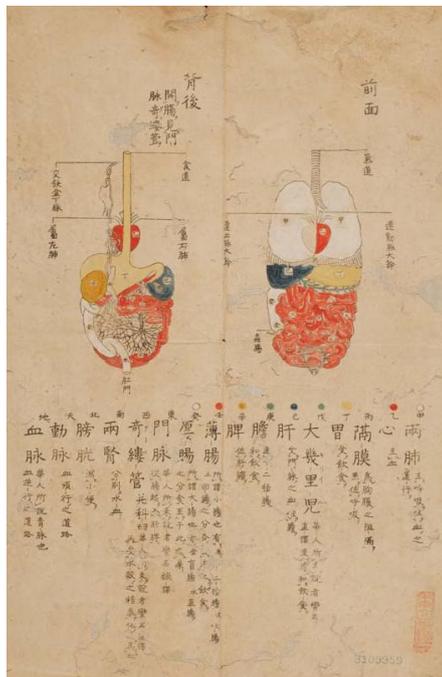


図 3

『解体約図』の刊行と前後して、陸奥国一関の医師建部清庵（たてべ せいあん・正徳2年・1712～天明2年・1782）との交友が、弟子の衣関甫軒（きぬどめ ほけん）を介した手紙の往復がおこなわれるようになる。



「建部清庵肖像」部分 北郷元喬筆 早稲田大学図書館 安永7年

この手紙は清庵のオランダ医学に対する長年の疑問を4ヶ条にして質問したもので、その回答を大都会江戸の学者に求め、弟子を明和7年(1770)に江戸に送り出したのである。建部清庵は若いころに奥医師の桂川家に弟子入りを願い出たがことわれ、故郷で医師を生業としながら、オランダ流医学をうたう医師たちへの疑問をつのらせていたのだ。蘭方医杉田玄白の名は『解体約図』出版までは一部の蘭学者や医師にしか知られておらず、また『解体新書』の編纂は閉ざされた社中でおこなわれていたので、弟子の衣関甫軒は師の手紙を託すに値する蘭方医を求め、故郷から何度も江戸と一関を往復することになってしまった。玄白には安永2年(1773)1月に会い、清庵の問いの返答をもらった甫軒は、同年の4月には清庵の返信を江戸へ、また今回は少し遅れて同年10月に玄白は返信をしている。これらの往復書簡はそれから20年後の寛政7年(1795)に『和蘭医事問答』としてまとめられることとなる。(片桐一雄『杉田玄白』p142～163、393～400)

『解体約図』刊行後の玄白は一応の訳が成った『解体新書』の稿本に添削をくわえ、安永2年3月に前野良沢とともに長崎屋をたずねる。前野良沢と杉田玄白のヨーロッパ語学と医学の師、大通詞吉雄耕牛に『解体新書』の序文を願い出るためであった。こころよく快諾した耕牛は『解体新書』序をしたためている。そしてそののち同5月に玄白は妻をめとる。慎重な玄白が心配した和蘭医学の評判は、流行りもの好きな江戸の人々の心をとらえたとあり、それまで仕官しているとはいえ、けして裕福ではなかった玄白の医家一門は経済的にも落ち着き蘭方医としての名を高めていくことになる。

安永3年(1774)に杉田玄白は、(おそらく盟友平賀源内の紹介で)源内の洋風画の弟子

であり、『解体新書』の絵師となる秋田藩士小田野直武(おだの なおたけ寛延2年・1750～安永9年・1780)に『解体新書』の挿図制作を依頼する。直武はこの年のはじめに江戸にでてきたばかりで藩命は「銅山方産物取立役」であるという。しかしそれは建前であり源内から和蘭の画やオランダ本草の知識をえる為に主君より江戸に派遣されたのであった。江戸に出てきた直武は生来の細密な筆致を武器に、急速にオランダ銅版画の特徴をつかみ洋風画の画法を習得していった。その画は玄白をうならせ『解体新書』附図の絵師という大抜擢につながったのだ。このように医師である玄白が本文だけでなく附図にも注力したのは、やはり玄白自身がオランダの銅版画図によって蘭学の道を開かれた体験があつてのことである。玄白は異文化のオランダ医学を普及させていくにあつた附図の重要性を、身をもって体験していたのである。

こうして完成された『解体新書』であるが、刊行のまえに大奥に献上されたことは桂川家の項ですでにのべたが、玄白は大奥の外の貴人にも精力的に『解体新書』を紹介し公の理解をもとめた。江戸では「大小老中方」へ、おそらくは老中首座田沼意次の配下の千賀道隆の推薦で1部ずつ献上された。また従弟の吉村辰碩(しんせき)の助けをかり、京都の九条、内前(うちさき)、広橋家といった公家にも刊行後にそれぞれ献上している。(片桐一雄『杉田玄白』 p 194～198)

第2部江戸時代解剖図の展開

1章『解体新書』付図

2節『解体新書』の概要と挿図の表現

1項『解体新書』の概要

安永3年(1774)、ついに『解体新書』は公刊された。本書は和本、木版であり、付図1冊と4巻4冊の本文からなる。

筆者が実見したものは九州大学医学図書館が所蔵しているものであり、細部は中村学園図書ホームページ貝原益軒アーカイブのPDF画像を参考にした。九州大学版は虫食いや印刷のかすれのほか書き込みが多く、実物は見づらい印象であったが、中村学園図書館が九州大学版を元にデジタル資料化したPDF版は、黒い線のみを抜き取るように加工されており、描線の原因との比較を行いやすく重宝した。

「付図」には自序(原書『ターヘル・アナトミア』の「自序」の杉田玄白による翻訳)と凡例、そして小田野直武が解体図を描くにいたった経緯のほか杉田玄白による解説とつづき、最後に解剖図が記載されている。本文「巻の一」は、総論、形態・名称、からだの要素、骨格・関節総論、骨格・関節各論からなる。「巻の二」は、頭、口、脳・神経、眼、耳、鼻、舌編からなる。「巻の三」は、胸・隔膜、肺、心臓、動脈、静脈、門脈、腹、腸・胃、腸間膜・乳糜管、膀胱編からなる。「巻の四」は、脾臓、肝臓・胆嚢、腎臓・膀胱、生殖器、妊娠、筋肉・体裁・出版・発表の年月、他に及ぼした影響などについて解説されている。(酒井シヅ『解体新書 全現代語訳』、片桐一男『杉田玄白』)

翻訳の中心となったヨーロッパの解剖書は、ヨハン・アダム・クルムス(Johan Adam Kulmus 1689~1745)が著した解剖書『解剖図表(Anatomische Tabellen)』をヘラルズス・ディクテンによりオランダ語訳された『解剖学表(Ontleedkundige Tafelen 通称ターヘル・アナトミア)』であり、本文の構成や図の順序などもこれにならっている。しかし『解体新書』の文中にはこのほかにも多くのヨーロッパの医学書が参考にされたことが「凡例」に明記されている。

「凡例」にはヨーロッパの学説を引用した医書についても記述があるが、本論では割愛する。「凡例」に記載された解剖図を引用したヨーロッパの解剖書は、トマス・バルトリン(Bartholin Thomas 1616~1680)『トンミュス解体書(『改新解剖学・Anatomia reformata』坂井建夫訳)、ステファン・ブランカールト(StevenまたはStephen Blankaart 1650~1702)『ブランカール解体書(新訂解剖学・Anatomia reformata・クレインス・フレデリック訳)、カスパル・バルトリン(Bartholin Caspar 1585~1629)『カスパル解体書(おそらく『人体解剖学教程・Institutiones anatomicae』坂井建雄訳)、ヴォルヒャー・コイター(Coiter Volcher 1534~1576)の『コイテル解体書(おそらく『人体外部と内部の主要部分の表・Externarum et internarum principalium humani corporis partium tabulae』坂井建雄訳)』の4冊が紹介されている。またこのほかにも、杉田玄白らが『解体新書』文中に明示しなかったものの、これまでの先行研究で挿図への引用

が明らかになっている解剖書として、ファン・ワルエルダ・デ・アダムスコアダムスコ (ファン・デ・ヴァルヴェルデとも Juan Valverde de Amusco または Hamusco 1520～1588) 『人体構造誌(Historia de la composicion del cuerpo humane)』と、ゴヴァルト・ビドロー(Godefridi Bidloo 1649～1713) 『105 図の人体解剖学(Anatomia Humani Corporis, Centum&Quinque Tabulis)』の 2 冊がある。このような医史的な先行研究により、少なくとも 6 冊のヨーロッパの解剖書が『解体新書』の挿図制作の参考にされたと考えられている。

第2部江戸時代解剖図の展開

1章『解体新書』付図

2節『解体新書』の概要と挿図の表現

2項 絵師小田野直武

これまでもたびたび触れてきたように『解体新書』付図の図を描いたのは、秋田藩士である小田野直武(安永2年・1750～安永9年・1780)である。直武は秋田藩角館(かくのだて)の町に、小田野直賢の第4子として生まれ、幼名を長治、通称を武助、字を子有と言ひ、羽陽、玉泉、玉川、麓蛙亭、蘭慶堂などの号を用いている(成瀬不二雄『江戸時代洋風画史』p79)。

安永2年(1773)に直武は、地元の角館で洋風画の師となる平賀源内と出会う。その邂逅を伝える伝承では、秋田に鉦山師としておとずれた源内が、角館の宿にあった屏風絵を見て、この絵の作者に会いたいと依頼し、その作者であった直武と対話ののち、意気投合し陰影法をさずけたとされる(平福百穂『日本洋画曙光』p9)。しかし、この伝承は近年の研究において伝承の域を出ないことはおおよそ明らかとなっている(山本文志「秋田蘭画・小田野直武をとりまくイメージ・1」『秋田美術』No. 39 p22～27)が、この後小田野直武が江戸において、平賀源内から洋風画のいろはを伝授されたことや、秋田県にのこる『大山六左衛門・太田伊太夫記連書』(武埜林太郎『画集・秋田蘭画』「秋田蘭画関係資料」)の記述から考えて、源内が安永2年の7月ごろに鉦山師として秋田をおとずれ、11月に秋田を立つまでのあいだに藩主佐竹曙山と接近し、それが小田野直武の江戸派遣につながったことは間違いない。直武や曙山が平賀源内との邂逅以前に親しんだ、狩野派や浮世絵、また新興の南蘋派のいずれとも異なるその画法・画論は、新奇なものや画を好んだ曙山と直武両者の心をつかんだのであろう。

源内が伝えた西洋画法が比例論、遠近法、油彩顔料など、ヨーロッパの絵画技法の中でも、どのようなものであったのか直接示唆する文献資料はのこされていないが、小田野直武の晩年における「秋田蘭画」時代の作品を見る限り、伝承にあるような陰影法や遠近法の問題がふくまれていた可能性が高い。江戸洋風画にみられる簡易な陰影法や遠近法は直武や曙山のように、ある程度画に通じた者が描画の際、狩野派粉本等の日本に元々存在する図像を参考にせずに、後述する『大絵画本』のようなヨーロッパの画法書や舶載蘭書の挿図を参考にしつつ、対象を観察すれば理解できるものである。それはヨーロッパの絵画法のなかでも、単純かつ素朴な部類であるからだ。長崎遊学中ヨーロッパの芸術作品をその目で見て、その啓蒙の光にふれた源内ならば、きっと彼らに熱を込めて西洋画論を講じたことであろう。

当時太平の時代にあつて武士に求められたものは、その本分である武術以上に貴人としての様々な教養であつた。その中に画や書があつたが、特に秋田藩は直武の主曙山の祖父、義命(よしかた)の代から絵心のある藩士を御用絵師に入門(山本文志「秋田蘭画・小田野直武をとりまくイメージ・1」『秋田美術』No. 39 p33)させるなど、芸術に理解

ある家風であったことが知られる。直武の絵師としての資質は彼の天性だけによらず、そのすぐれた「文化奨励的藩風(山本丈志)」のなかで培われていったのである。

直武は8, 9歳ごろには筆をとり画に親しんでいた様であり、「釈迦如来図」や「摩利支天像」を描いたと言われている(成瀬不二雄『江戸時代洋風画史』 p 80)が、それらは現存していない。成瀬によると、現在みることができる最も初期の作品は「神農像図」であり、画面左下には「十二歳画 ■ 之」という書き入れがあるとされる。直武の款記はないが伝来から推察して直武の描いたものであろうと考えられている。(成瀬不二雄『江戸時代洋風画史』 p 80)



小田野直武筆「神農像図」成瀬不二雄『江戸時代洋風画史』より引用

「神農像図」は狩野派の道積人物の粉本を「臨模」したものとされ(成瀬不二雄『江戸時代洋風画史』 p 80)、すでにこの時点で御用画派である狩野派の絵師に指導を受けていることがわかる。当時の幕府御用画派の狩野派は地方にもおおきく勢力をひろげており、秋田藩では久保田狩野派と呼ばれる系譜が、佐竹氏の御用絵師をつとめていた。(成瀬不二雄『江戸時代洋風画史』 p 85) また山本丈志『秋田蘭画・小田野直武をとりまくイメージ(1)』 p 33 によれば、安永2年(1773)ごろには渡辺洞昌、渡辺元昌、菅原洞旭(どうきょく)、武田円碩の4人の御用絵師の存在が確認されている。



小田野直武筆「大威徳明王像絵額」秋田市指定有形文化財

仙北市ホームページ

広報せんぼく No. 40(平成 21 年 1 月号 23 p・PDF 版)より引用

http://www.city.semboku.akita.jp/government/kouhou/2009/01/documents/koho0901_23.pdf

もうひとつ初期の直武の画業でよく知られているものに、秋田市指定有形文化財「大威徳明王像絵額」がある。成瀬不二雄『江戸時代洋風画史』p80 によれば、表書きの画面右下に「願主弥勒院皎寛寄進」と、左下には「小田野氏源直武謹拝書・蘭慶堂(朱文方形書印)」とあり、裏書には「明和二年三月日華園上村」「大威徳山忿怒王」と記述され、ており「したがって本図は明和二年(1765)直武 17 歳の画で、角館弥勒院の住職皎寛が大威徳山の本尊としてこの画を依頼していることがわかる。」のである。成瀬が述べるように、この時期の直武はすでに地元の寺の住職から仏画の依頼を受けるほどに、画に通じた武士としての評判が広まっていたことがわかる。

それから 8 年後 25 歳の直武は江戸にあった。主の命により「銅山方産物取立役」としての江戸入りであった。しかしこれは建前の役職であり、直武は洋風画をふくめたオ

ランダの文物を源内より学ぶために江戸に来たのである。

それから数カ月間、源内所有のオランダ書から銅版画の挿図を写し取るなどして、洋風の画の風格を学ぶ直武のもとに『解体新書』の挿図の依頼が入る。直武のこのときの心境は、自身による『解体新書』付図の跋文から伺い知ることができる。

「我友人杉田玄白所・訳之解体新書成矣。令三予写之図焉。夫紅毛画也。至矣哉。

如余不佞

者非所敢所企及。雖然又云不可図。怨及朋友。嗚呼与買怨于同胞、寧流臭於千載耶。

四方君子幸恕之。」

「私の友人杉田玄白が訳したところの『解体新書』が出来上がった。自分にこの本の図を写してくれという。

それはまさに紅毛の画(洋画)で見事なものである。自分のように才能が無い者があえて背伸びしてやってもとても追いつけるものではない。そうはいっても画くことが出来ないとせば、友人が大いに困るだろう。

ああ、友人を困らせるよりは、むしろ悪臭(恥)を永遠に流すことにしよう。世の君子、このことを許してくれれば幸いである。(成瀬訳)」

このように突然受けた大役の責任におののきながらも、直武はおよそ3カ月程度の短期間でヨーロッパの解剖図を写しとったのである。

この時期の源内と直武の生活がわかる文献資料として先行研究に多用されているのが、鳥海玄柳(号を考文・宝暦9年・1759～天保8年・1837・成瀬)の回顧録『翁左備』である。『翁左備』そのものは現在失われているが、玄柳と親しかった荘内藩士池田玄斎が、その主要箇所を抜粋し写し取った、『翁左備抜書・全』(一卷 酒田市立光丘図書館蔵)が遺されている。玄柳の若い時の見聞を晩年になってから書き留めたものであることから、細部には誤りも多いとされるが、親しく源内に接していた人物でなければ、記述出来ない様な目撃者の記録として価値の高い(成瀬不二雄『江戸時代洋風画史：桃山時代から幕末まで』、芳賀徹『平賀源内』p380)ものとして、秋田蘭画研究論文では引用されることが多い。それによると江戸に戻った後の源内は4人程度の職人をかかえ、西洋本草学の知識を生かしながら、金唐革という彩色金箔置革細工を、本や諸道具、胴乱、衝立の縁などに施し利を得ていたとある。また直武についても「秋田より帰りに、藩中の二男なる小田野武助と云ふ人同居に連れ来り、画人として紅毛画上手ニて、浮画(浮世絵)、眼鏡の絵(眼鏡絵)、紅毛本草の画抜粹に、都て蘭画の書く人多くなりたるは、此人始め也(芳賀徹『平賀源内』p381)」と記述があり、江戸にあがった小田野直武は、源内の抱える職人数人と生活を共にしながら、「紅毛の画」を修めていったものと推察される。源内の画の指導は「紅毛本草の画抜粹」に留まらず、浮世絵や眼鏡絵など、当時の江戸のトレンドを押さえたものであったようだ。「紅毛本草の画」とはオランダ書

の銅版画挿図であったようで、直武の「抜書」の成果は佐竹曙山の『写生帖』のなかに見ることができる。



『写生帖』

秋田市立千秋美術館ホームページ 収蔵作品データベースより引用

<http://www.city.akita.akita.jp/cgi-bin/senshu-art-search/list.cgi>

「写生帖」には源内所蔵のレンベルト・ドドエンス (Rembert Dodoens 1517～1585) 通称ドドネウス著『紅毛本草』や、ヘラルト・ドゥ・ライレッセ (Gerard de Lairesse 1640～1711) 著『大絵画本』の挿図をうつつとり引用したと思われる図像が相当数おりこまれ、それらについては成瀬不二雄『江戸時代洋風画史：桃山時代から幕末まで』や、菅野陽『日本銅版画の研究，近世』、また磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史—上巻』に詳細に記述されている。また「画図理解・丹青部」には5種の西洋顔料が紹介されており、それについて「小田野直武始テ彩品の要用ナルコトヲ得テ予ニ伝・之」と曙山によって直武の名もあげられている。また『翁左備・全』には「浮画書き司馬江漢も初め武助に習いて名高く一家をなしぬ」という記述もある。

司馬江漢(しば こうかん 延享4年・1747～文政元年・1818)は明和の終わりには、「鈴木春信か、宗紫石か、唐橋世済(磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史—上巻』 p 366)」を介し平賀源内と出会ったとされているから、ヨーロッパ絵画の初歩的な理論を指導したのは、実技的なものは安永3年以降に小田野直武に任せられたようである。とはいえ江戸に出て洋風画をたしなんだばかりの直武が本格的な指導を出来たはずもなく、江漢の希望に合わせて源内所蔵蘭書の図像を紹介したり、貴重な蘭書を汚さずに模写する手順をおしえたり、またそのなかでの研究成果の共有など、同門の先輩としてのアドバイスや情報の共有が中心であったと考えられる。

このような日常を江戸の源内工房ですごしていたと推察される直武にとっては、この『解体新書』の附図の作成はうってつけの仕事であったのである。

第2部江戸時代解剖図の展開

1章『解体新書』付図

2節『解体新書』の概要と挿図の表現

3項 扉絵にみる直武の洋風画技術

解剖図について論述するまえに『解体新書』の扉絵となった図像についてふれたい。本文の翻訳原書となったのはよく知られるように、ヨハン・アダム・クルムス著『ターヘル・アナトミア』であるが、『解体新書』の扉絵はなぜか『ターヘル・アナトミア』から引用されていない。図版編1-1-1が『解体新書』の扉絵であるが、これはファン・ワルエルダ・デ・アダムスコ著『人体構造誌』の扉絵が原図となっている。(図版編1-1-2)

杉田玄白らがどのような理由から本の顔と言うべき扉絵を変更した理由が明らかとなる文献的資料は、筆者が参考にした医学史的な先行研究でも判然としなかった。しかし図像がどのように描かれたのかは断片的にはあるが明らかになっている。

日本歯科大学学長であり医の博物館館長の中原泉による1993年の小論「立証!解体新書の扉の元絵」には、『人体構造誌』の1556年以降にみられる図像との共通点が多いことや、人物像のみが原図と同じ大きさであることから、小田野直武が人物像のみをなんらかの方法で透写し描き、そのほかのモチーフは透写せずに似せて描いたものであると分析されている。この中原の指摘からわかる小田野直武の技能は、1つは1点透視図法の概念的な理解である。もうひとつは原図そのまま写し取るだけでなく紙面に合わせて図の構成の変更をしたことである。前者の1点透視図法は江戸の浮世絵や眼鏡絵にも用いられており、江戸の市井でも簡易なものは普及していたものと考えられる。ここではそれらの江戸の状況に加え、平賀源内が所蔵していた画法書、『大絵画本(Het groot schilderboek)』を教材に直武は習得したものと推察したい。



ハラルト・ト・ウ・ライッセ著『大絵画本(Het groot schilderboek)』

国立国会図書館ホームページ 電子展示「江戸時代の日蘭交流」より引用

<http://www.ndl.go.jp/nichiran/data/T/181/index.html>

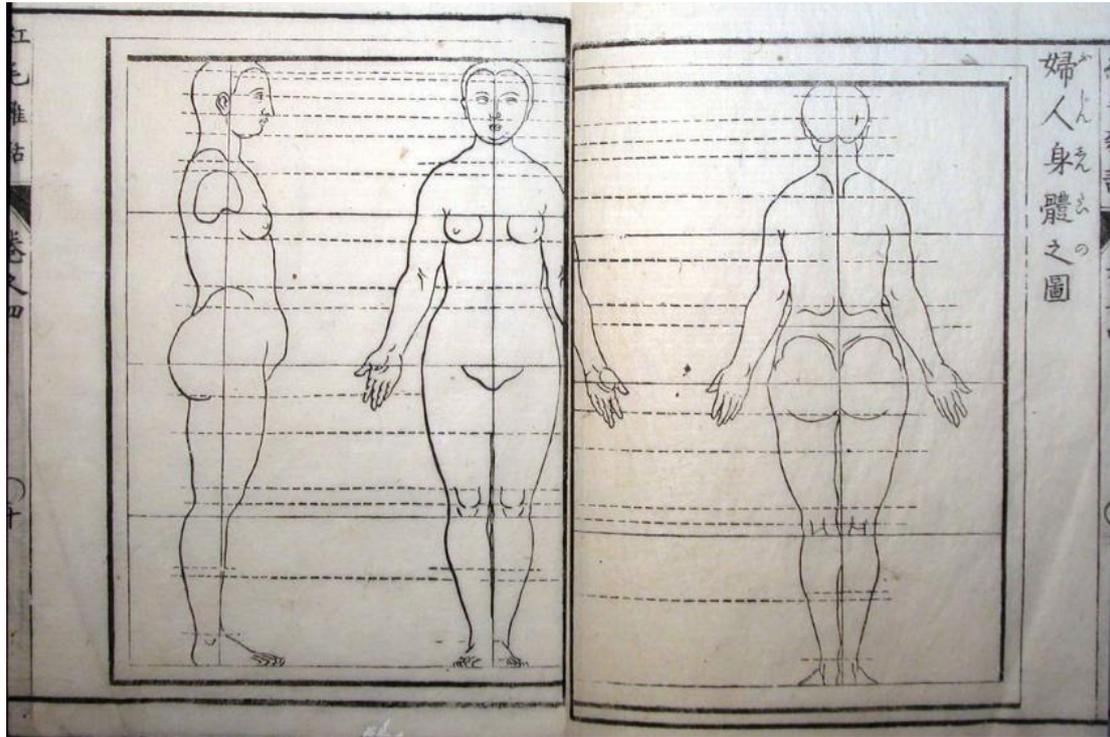
大絵画本の著者はオランダのプッサンと称された画家ヘラルド・ドゥ・ライレッセ (Gerard de Lairese 1640～1711) が著した「リーパの『イコノロギア』に啓発されつつ、絵画における寓意と象徴の問題に光をあてた芸術の知的体系書(磯崎康彦『ライレッセの大絵画本と近世日本洋風画家』p77)」である本書を、源内や直武が文法的に理解していたとは考えられてはおらず、『大絵画本』の図とそれに付された注釈を、これを入力した長崎で関わったオランダ通詞や蘭語学者に訳してもらい、おおよそその内容を理解するにとどまったと考えられている。『解体新書』編纂以前の江戸で『大絵画本』の本文を読み込み、ライレッセの芸術をおおよそにせよ体系的に理解した可能性があるのは、講明社の一員であり、大奥の侍医であり、江戸の蘭学者の筆頭であった桂川甫周と、その森島中良こと桂川甫斎(宝暦6年・1756～文化7年・1810)くらいではないか。兄の甫周は洋風の風景画を残したほか、学問的視野も広く、専門的な単語もおおよそ理解したであろうし、弟の森島中良は著書『紅毛雑話』にて『大絵画本』の図を引用している。そこに付された洋風画論は「紅毛の画たるや、至れり尽くせり、凡此道を学ぶ者、初に男女の骨節を精うし、夫より赤裸の人物を書習ひ、其上にて衣服を穿たる所を描くに至る、下に出す画法は、シキルデルブックに載る 12 図を模写して構図を模写して好事の人の看に呈す。シキルデルは画、ブックは書のことなり。」とあり、秋田の佐竹曙山が『画法綱領』において、西洋画の要訣を単に「画の用たるや似たるをたつとふ」とした洋画法の理解よりも核心を突いたものとなっている。



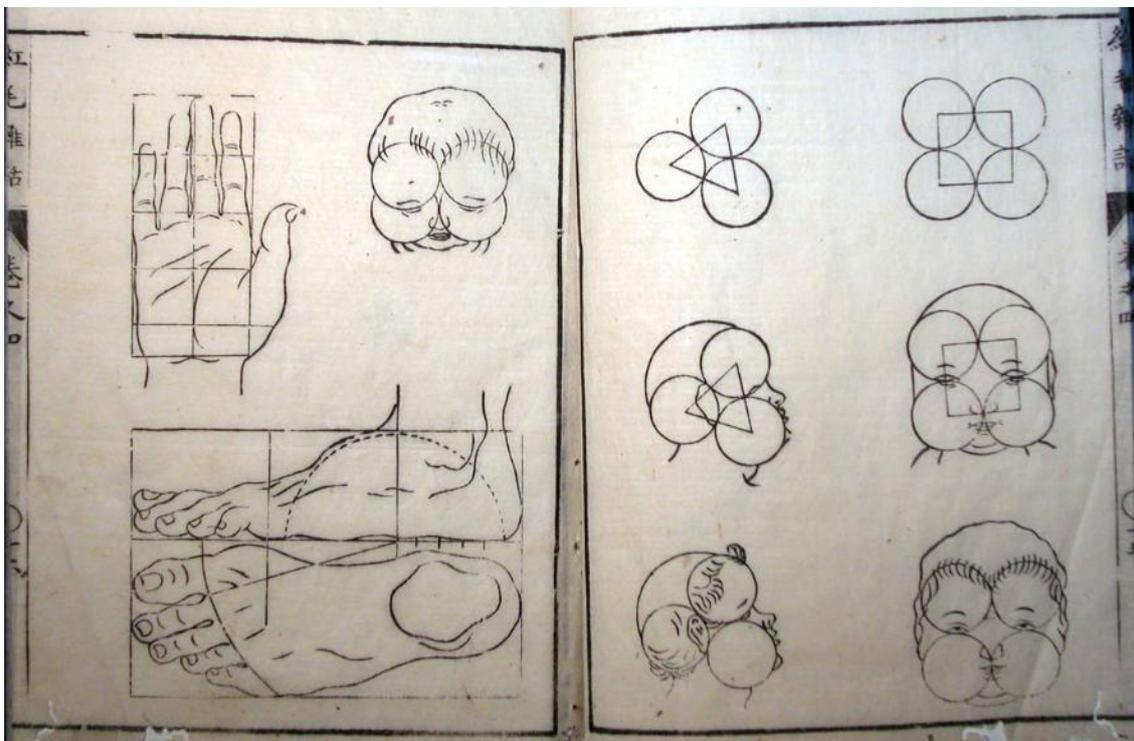
「西洋風景画」桂川甫周画

早稲田大学図書館ホームページ 古典籍総合データベースより引用

http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_j0041/index.html



森島中良著『紅毛雜話』婦人身體之圖

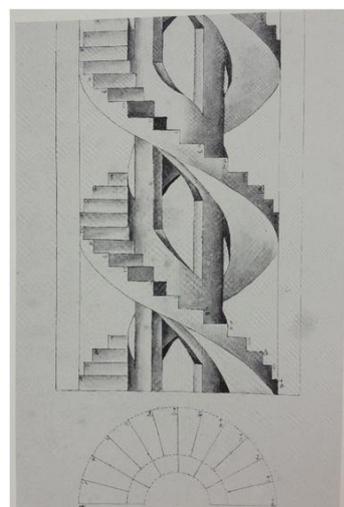
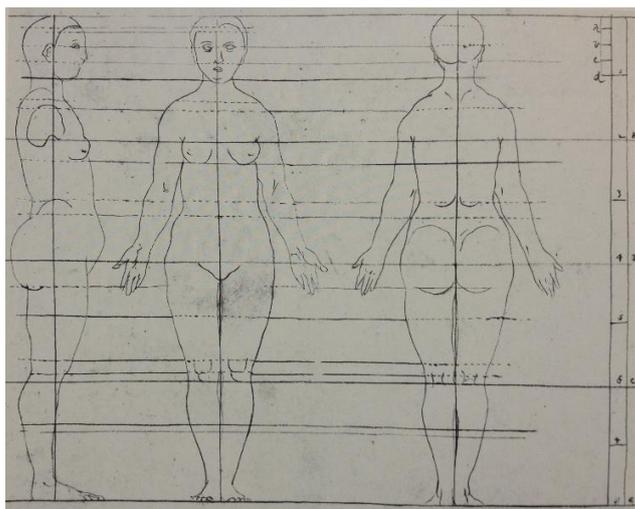


森島中良著『紅毛雜話』同異本之式

九州大学デジタルアーカイブより引用

<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/komozatu/>

このように『解体新書』の編纂以前に『大絵画本』の内容を文法的に理解できたものは蘭学者の中でも極めて一部の知識人であり、初期の洋風画家などは蘭学者に訳してもらったものを間接的に伝え聞くのがせいぜいであったと思われる。とはいえ『大絵画本』の挿図は本文を読めずともその意味をおおよそ理解できるものが多く、小田野直武は文法的には理解しなかったにせよ、示唆されたものを図から掬い取り自分のものとしていった。その直武の研究の一部は直武を江戸に派遣した藩主佐竹曙山の「写生帳」にみることができる。



佐竹曙山『写生帳』秋田千秋美術館

成瀬不二雄『江戸洋風画史』より引用

小田野直武は蘭語学の不自由からヨーロッパの画法を文法的に学ぶことはできなかったが、和蘭工芸家としての道を歩みはじめていた平賀源内の工房で、浮世絵や眼鏡絵など当時の江戸のトレンドを押さえつつ、ヨーロッパの銅版画図を写し、それらの経験から一点透視図法に習熟していったものと推察される。

第2部江戸時代解剖図の展開

1章『解体新書』付図

2節『解体新書』の概要と挿図の表現

4項『解体新書』付図の表現 1—原図との比較から—

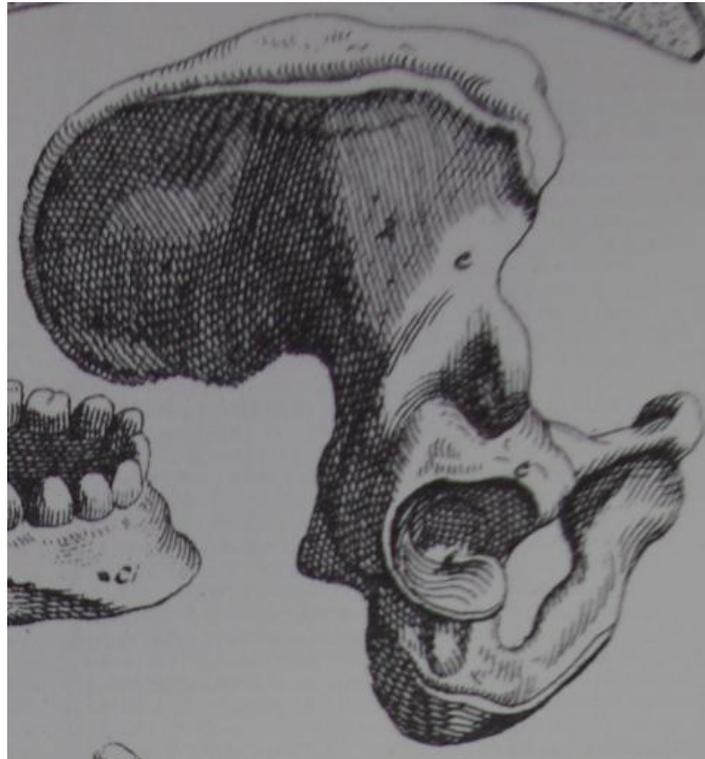
本書の図録篇1項には『解体新書』附図中の全図と、筆者が手に入るかぎりの原書の図を掲載した。これらを比較検討した結果、『解体新書』附図の図像の特徴は大きく分類すれば4系統に分けられる。それらを以下に列挙する。

- 1、木版への翻刻を想定した原図からの変更。
- 2、人物像の皮膚への陰影の排除。
- 3、2以外の骨格図や内腑の図は原図に追従する。
- 4、必要に応じての原図への加筆、減筆。

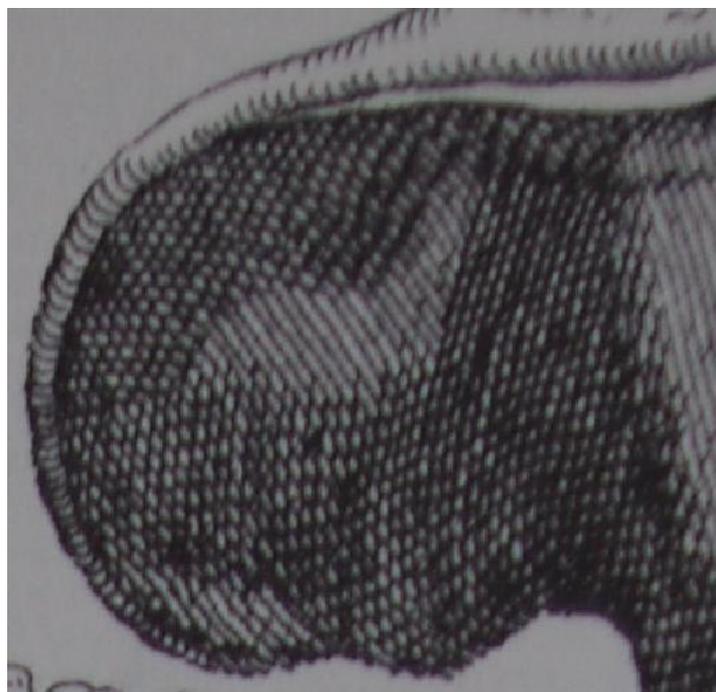
『解体新書 附図』制作において絵師小田野直武が参考にしたヨーロッパの解剖書は、これまで本論でおりにふれてのべてきたように、現在判明しているもので6冊ある。まず『解体新書』の本文の翻訳原書となった『解剖学表(Ontleedkundige Tafelen・片桐一雄訳)』通称『ターヘル・アナトミア』の他、トマス・バルトリン『新訂解剖学(Anatomia reformata・クレインス・フレデリック訳)』、ステファン・ブランカールト『改新解剖学(Anatomia reformata・坂井建雄訳)』、カスパー・バルトリン『カスパー解体書(筆者未見)』、ヴォルヒャー・コイターのラテン語による『コイテル解体書(筆者未見)』、ファン・ワルエルダ・デ・アダムスコ『人体構造誌(Historia de la composicion del cuerpo humane・坂井建雄訳)』、ゴヴァルト・ビドロー『105図の人体解剖学(Anatomia Humani Corporis, Centum&Quinque Tabulis・中原泉訳)』がそれにあたる。

これらは筆者未見の2冊を除くすべての解剖図が腐食銅版画による挿図であるが、直武が挿図を作成した当時の江戸には、腐食銅版画技術は木版画による印刷技術しか存在しなかった。江戸の木版画技術は、その表現力においてヨーロッパの腐食銅版画に劣るものではないと筆者は考えるが、技法の違いにより再現の困難な表現も当然存在する。特に銅版画に用いられた、ニードルやビュランによる細く鋭く絡み合った銅版画の線は、浮世絵等に使用されたの板目木版画では、版の目の強度が低い為に量産に向かず、再現が難しい。この線の交差により立体感と陰影を表現する技法を、今日では一般的に「クロスハッチング」というが、直武は木版画によって原図の画風に迫るため、線の交差を用いずに原図に近づける工夫に取り組んだ。

クロスハッチングによる立体表現



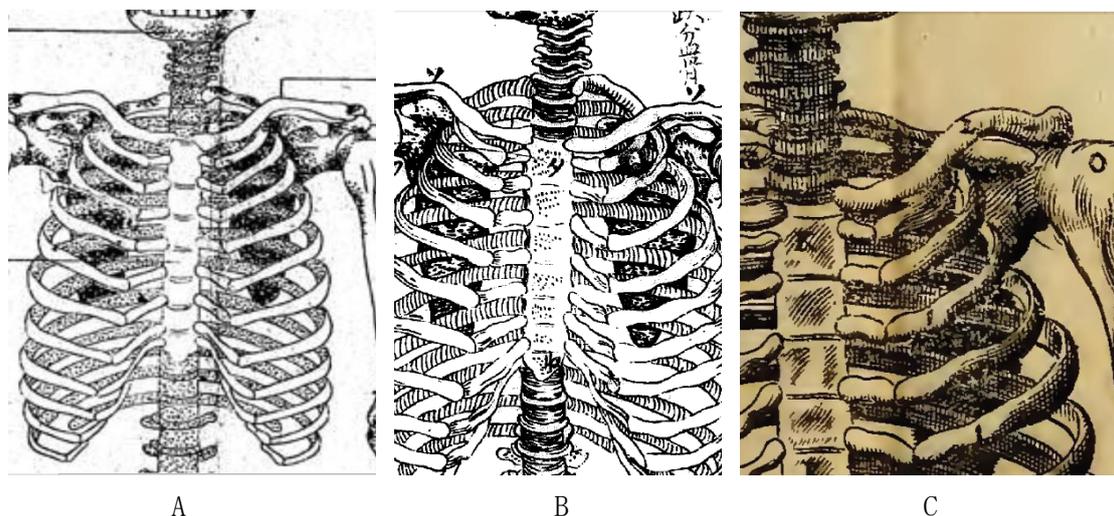
『ターヘル・アナトミア』 図4 部分



『ターヘル・アナトミア』 図4 細部

杉田玄白は「オランダの医学に倣う」ことを信条とした蘭方医であり、挿図の制作においても同様の方針を貫いたことが伺える。しかし『解体新書』の刊行を急いだことから洋風画技術の発展を待てず、苦肉の策として「木版への翻刻を想定した原図からの変更」を直武に指示している。江戸時代ではじめて腐食銅版画が製版されたのが 年であり、解剖図にはじめて採用されるのが『解体新書』の刊行から 34 年後であるから懸命な判断であったのだろう。

直武はいくつかの描法を併用することで、ヨーロッパの銅版画挿図の画風に接近したが、そのなかでも第 1 にあげられるのが、線を交差させずに線の集合によって陰影表現を行ったことである。当時の江戸では色の濃淡や点の集合で距離感を出す技法はめずらしくなかったが、線の集合によって物体の凹凸や前後の距離感を表現した例はなく、直武の発想は当時の江戸では非常に独創的であったといえる。この点は『解体新書』が刊行される 1 年前に刊行された、『解体新書』の内容見本である『解体約図』の挿図と『解体新書 附図』のそれを比較すると明瞭である。

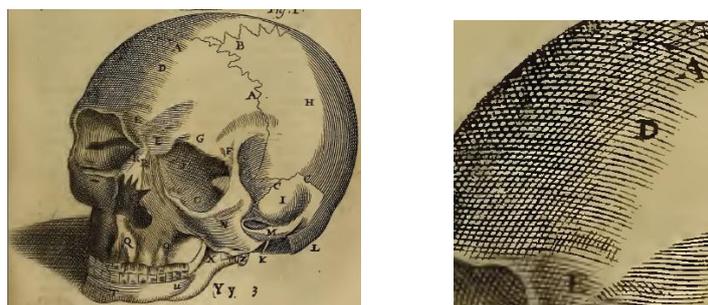
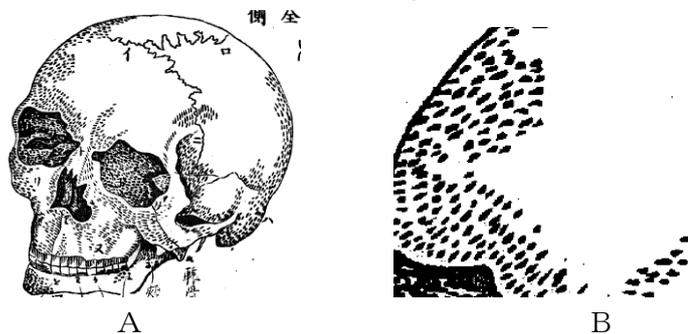


- A、『解体約図』図 1 部分
- B、『解体新書 附図』支體全骨図部分
- C、『改新解剖学』図 116 部分

上の A、B、C 図は『解体約図』の第 1 図と『解体新書 附図』の支體全骨図、そして支體全骨図の元図であるトマス・バルトリンの『改新解剖学』図 116 の部分をそれぞれ抜き出したものである。熊谷儀克が描いた『解体約図』図 1 の元図は不明であるが、おそらく『解体新書』編纂チームのいずれかが所有していたヨーロッパの解剖書から模倣したものであろう。『解体約図』の挿図は肋骨の奥の影を細かな点描で描き、そのまた奥の肩甲骨の影をより密度の高い点で描いた。このような技法は江戸の浮世絵や日本にも古くからある水墨画に散見され、熊谷儀克が当時の一般的な画法に通じそれを修めていた人物であることがわかる。小田野直武の『解体新書 附図』の挿図は儀克とは

異なり、肋骨の奥の影を縦の線で、そのまた奥の肩甲骨の影を点で描いている。どちらもヨーロッパの腐食銅版画の近・中・遠といった距離感を持てる技術をもって元図に似せる努力をしているが、「どちらが原図に近いか」という観点で2図を比較したときには、やはり直武の描いた挿図に軍配があがる。儀克が日本にすでに存在する技法の応用であったことに対し、直武はより原図に近い技法を開発し写しとる努力がみられる。儀克の挿図は絵画としてはその幽鬼のような雰囲気がある味のある良作であるが、原図の客観的な「図」としての風格を損ねてしまった。逆に直武はおそらくは『解体新書』編纂チームの要望もあり、その挿図を原図に倣い近づける努力を怠らなかったこともあり、図としての風格を損なわず、かつその繊細な描線によって線の集合によって物体の距離感を表現する技術を、ヨーロッパ舶載銅板図から着想し開発したのである。

また直武は儀克と同様に日本の在来画法にも通じており、儀克のような点の集合による陰影表現も原図の再現が技術的に不可能であった場合には、柔軟にそれらを応用している。『解体新書 附図』骨節篇頭全骨側面図(下図A・B)はその好例であり、原図(下図C・D)がクロスハッチングと腐食の浅深により陰影が表現が施され、量感と奥行きが表現されていることに対し、頭全骨側面図の陰影は一部をのぞきほとんど全てが点の集合である。その結果、残念ながら原図のもつ実在感や量感は損なわれてしまったが、陰影を似せることで奥行きだけは近づけることができている。



- A、『解体新書』骨節篇頭全骨側面図
- B、『解体新書』骨節篇頭全骨側面図 部分
- C、『改新解剖学』図 116
- D、『改新解剖学』図 116 部分

このように直武や編纂チームは『解体新書』の挿図作成にあたって、杉田玄白の信条に従い原書に倣い近づける努力を惜しまなかったが、挿図全体を概観したときにいくつか原図からの大きな変更を行っていることがわかる。そのひとつが前出の特徴の2「人物像の皮膚への陰影の排除」である。

図版編1-2-1の形態名目篇の向図・背図、またその原図にあたる1-2-2『ターヘル・アナトミア』の図2はそれがよくわかるものであり、原図から人体の皮膚の部分の陰影のみが排除されている。逆に同図の頭部の毛髪には簡単な陰影がほどこされていることから、意図的にそれがなされたことは明白である。その結果、背中には刀の切り傷のような模様が入ってしまい違和感が生じている。この「皮膚の陰影の排除」は形態名目篇図に限ったものではなく、1-8-1「皮毛篇図」の顔面部、1-9-1「唇口篇図」舌の首像、1-10-1「神経篇図1」の上部顔面像、1-12-1「眼目篇図」の上部、中央の顔面部、1-15-1「舌篇」下の顔面部、1-16-1「隔膜篇図」下の男女像の顔面、1-19-1「動脈、血脈篇図」左腕、左脚部、1-20-1「門脈篇図」男性像、1-21-1「腹篇図」男女像、1-22-1「腸胃篇図」の男性像の顔面と肩、1-26-1「腎膀胱篇図」左下の男性像、1-27-1「陰器篇図」の男女の像、1-28-1「妊娠篇図」の乳児、1-29-1「筋篇図1」の各人物像と首像といったように『解体新書 附図』全体でおこなわれている。例外は1-13-1「耳篇図」左上部の耳、1-14-1「鼻篇図」の左、上部の鼻のみである。また巻末の4図、図版編の1-30-1「筋篇図2」、1-31-1「筋篇図3」、1-32-1「筋篇図4」、1-33-1「筋篇図5」は別枠として後述する。

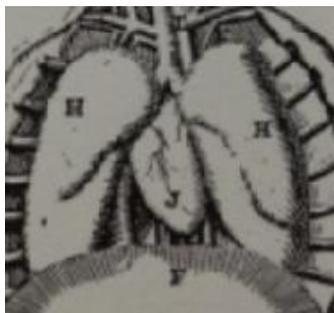
この外の内腑や骨格の図は前出の項目3にあるように原図に追従したが、項目4に挙げたように「必要に応じての原図への加筆、減筆」もおこなっている。これまで述べてきたように編纂社中の意向として、原書に倣う、準じるという姿勢があることは間違いないが、『解体新書 附図』では1であげたように「木版への翻刻を想定した原図からの変更」がなされている。またこれまで日本の医学者のなかでも一般的でなかった、ヨーロッパの解剖図像であるから、単にそのままうつしとるだけでは視覚的に分かりづらく、編纂社中のいずれかの人物が解剖図としての不足を感じたのであろう。そのような場合、直武は原図からの加筆や減筆をおこなっている。それが顕著な解剖図を以下に列挙した。

- A、隔膜篇開胸見其内図、示縦横二膜図の加筆
- B、肺篇肺全形図の加筆
- C、肝膽篇開瞻分膜図の減筆

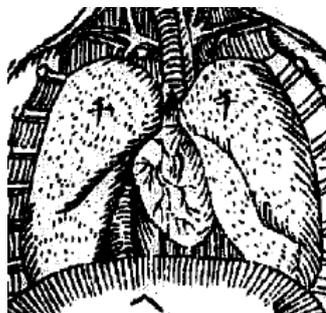
まずAについてであるが隔膜篇開胸見其内図、示縦横二膜図の肺臓の部分に点描し加筆している。これはBの肺全形図と関連させるねらいがあったものとおもわれる。現代では肺の形状は専門の医師にかかわらず、インターネットや書籍でその全形を容易に知ることができるが、当時の江戸では医師であっても肺の正確な形状や位置を知る者は少なく、2図に分けた場合混乱を呼ぶ可能性があった。そこで直武ら編纂社中は「原書に

倣う」という原則をくつがえし特例的に加筆したものと推察される。Cの「肝膽篇図」中央「開瞻分膜図」では逆に原図にあるハッチングを無くしている。ここに関してはその理由が推察しづらいが、「開瞻分膜図」の上部にハイライトが入りうまく臓器の厚みを表現しているあたり、単に直武らが描画し忘れたとは考えづらいから、『ターヘル・アナトミア』以外の解剖書を見ていた社中のいずれかから特別に指示があったものと考えられる。

A、隔膜篇開胸見其内図、示縦横二膜図の加筆



「ターヘル・アナトミア」13 図部分



『解体新書 附図』開胸見其内図

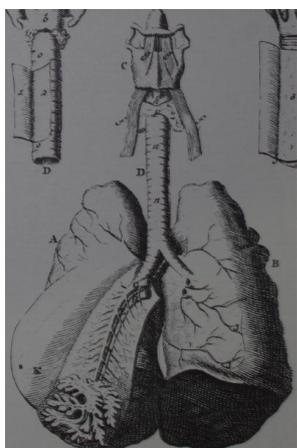


「ターヘル・アナトミア」13 図部分

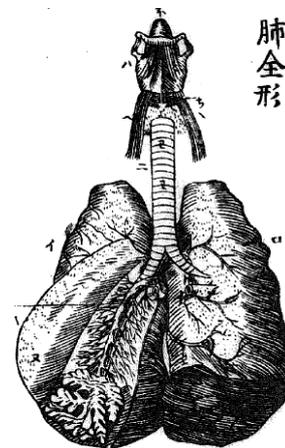


『解体新書 附図』示縦横二膜図

B、肺篇肺全形図の加筆

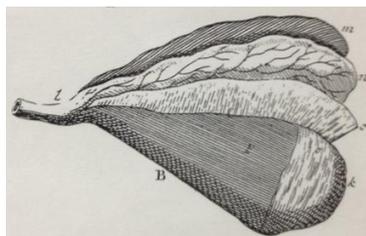


『ターヘル・アナトミア』14 図

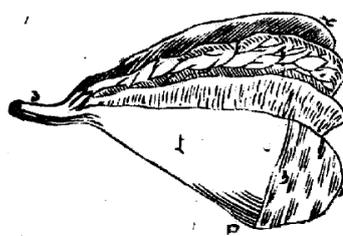


『解体新書 附図』肺全形図

C、肝膽篇開瞻分膜図」の減筆



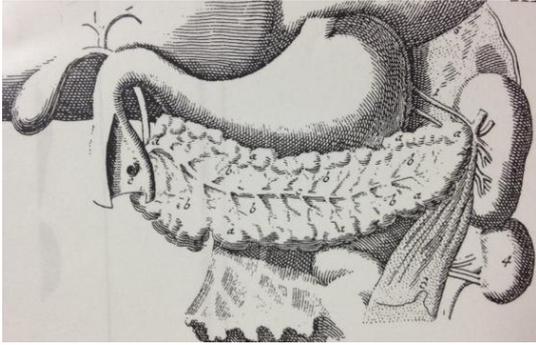
『ターヘル・アナトミア』24 図



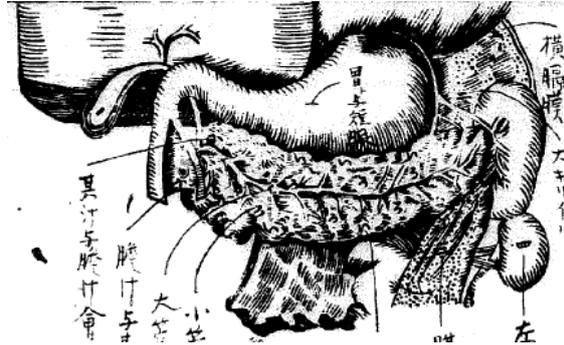
『解体新書 附図』開瞻分膜

また一見加筆しているかにみえる、言い換えれば原図と印象の異なる「大機里爾、脾篇図」の「示大機里爾属諸部與膽管連入十二指腸図」、「脾剥膜見血道図」であるが、以外にその描法は原図に追従している。

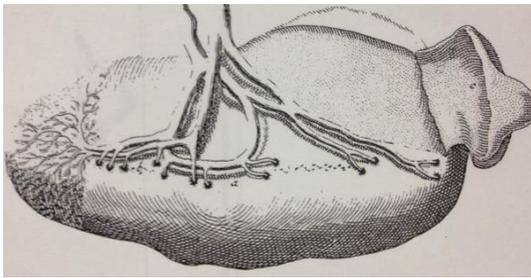
「示大機里爾属諸部與膽管連入十二指腸図」の原図は『ターヘル・アナトミア』の図22であるが、クロスハッチングではなかった本図は直武が得意とした細密な線であれば、再現が比較的容易であると判断したのか、原図の臓器表面に細かくはいる線を、毛筆で丹念に臨模した。しかしその結果は、原図が臓器に強く光をあてたかのように明るい印象を受けることに対し、「示大機里爾属諸部與膽管連入十二指腸図」では濁った印象を与えてしまっている。これは直武や社中が原図の描法を優先するあまりにおきた不備であるといえる。同様のことが「脾剥膜見血道図」にもみられ、原図の『ターヘル・アナトミア』23図では鮮烈な光の階調を損なうことなく臓器の凹凸を、微細な点や線描で表現していることに対し、それから引用した「脾剥膜見血道図」では左端と右端が原図と比較すると黒ずんでしまっている。しかし下部の陰影も図から除外してしまっていることから、社中が意図的して目立たせた可能性も否定できない。しかしそれであれば、この図は「脾剥膜見血道」つまり脾臓の膜を剥ぎ血道を見せた図であるから、血脈に視線がいくような工夫が必要となるが、『解体新書 附図』の手法では逆に視線が分散してしまうため、この改変はやはり不手際であったといえる。



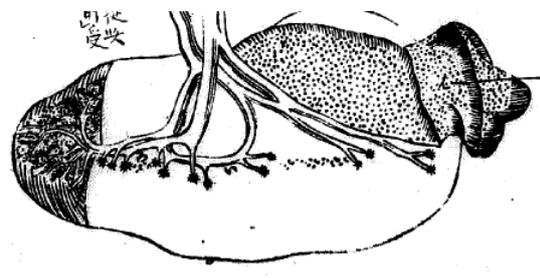
A



B



C



D

A 『ターヘル・アナトミア』 22 図部分

B 『解体新書 附図』 大機里爾・脾篇示大機里爾属諸部與膽管連入十二指腸図

C 『ターヘル・アナトミア』 23 図部分

D 『解体新書 附図』 大機里爾・脾篇脾剥膜見血道図 部分

いくつかの項目に分け『解体新書 附図』の図像的特徴と、そこから『解体新書』編纂チームが絵師である小田野直武にどのような指示をしたのかを読み取ってきた。そこからわかることは、直武がその得意とする細密な線画によって、原図のアウトラインを臨模と敷き写しを併用し巧みに写し取ったこと。また陰影法を用いて模倣するだけでなく、時には原図からの多少の改変もおこなったことである。しかし物体の陰影の階調(グラデーション)や、画面全体の陰影の調和については意識が低いこと、また原図と光源の位置が異なることが多い。このようなことから、直武は自由な創作ができるほどヨーロッパの絵画技法に通じておらず、その技術は陰影法のうちでも光と影の問題に限った初歩的なものであったようであることが推察できる。その結果、現代の私たちの目で原図と比較したときに『解体新書』の挿図は、総合的に雑な印象を見るものに与えてしまう。しかしそれはあくまで原図と比較した場合であり、ヨーロッパの画風にならった画図が版本として刊行されること自体が異例であった当時では、直武の技量は十分に及第点であったといえる。

この項の最後に『解体新書 付図』の全編を通して異彩を放つ、巻末の筋篇の4図「筋篇再示三図手背図(図版編 1-30-1)」、「筋篇再示二図手掌図(図版編 1-31-1)」、「筋篇再示二図足背図(図版編 1-32-1)」、「筋篇再示三九図足**躑**(底)図(図版編 1-33-1)」について触れたい。

第2部江戸時代解剖図の展開

1章『解体新書』付図

2節『解体新書』の概要と挿図の表現

5項『解体新書』付図の表現 2- 『105図の人体解剖学』引用図について

『解体新書』の巻末の4図、図版編1-30-1、1-31-1、1-32-1、1-33-1はすでに多くの医史的先行研究で述べられたように、オランダの外科医ゴヴァルト・ビドロローが著した『105図の人体解剖学』という解剖書の挿図がその原書である。(図版編1-30-2、1-31-2、1-32-2、1-33-2) その繊細かつ美しい挿図を描いたのは、奇しくも直武ら江戸の蘭学者や洋風画家に親しまれた『大絵画本』の著者であり画家のヘラルト・ドゥ・ライレッセである。原図となった『105図の人体解剖学』は、その出版から13年後にイギリスの医師ウィリアム・カウパーによって剽窃されている(中原泉『ビドロロー解剖学アトラス』p9、菅野陽『画科ヘラルト・ドゥ・ライレッセと解剖学者ビドロローとカウパー』p105)。

このカウパーの剽窃本は研究者によって微妙にその内容についての評価が異なっており、菅野の論では「まったく全く新たに英語の本文に置き換え、版画についてもっと正確な説明を加えた。(中原泉『ビドロロー解剖学アトラス』p9p)」となるが、中原の論によれば「内容的にはBidlooの説明不足を補正し、図版の若干の誤りを訂正したにとどまる(菅野陽『画科ヘラルト・ドゥ・ライレッセと解剖学者ビドロローとカウパー』p105)」となる。この遠いヨーロッパの剽窃問題は『解体新書 附図』巻末5図の参考にされた原書が、ビドロローとカウパーのどちらが著したものなのか未だ不鮮明である一因となっている。(菅野陽『画科ヘラルト・ドゥ・ライレッセと解剖学者ビドロローとカウパー』p68)

この後『解体新書』の改訂版である『重訂解体新書』が刊行されるが、その挿図(図版編8-41-1)「胎子(児)篇胞衣及臍帯図」は同じライレッセ画の銅板図からの引用である。こちらは革烏百盧・机伊力乙鹿(コウペル・クイリイル)つまり、ウィリアム・カウパーの『114図の人体解剖学』からの引用であると『重訂解体新書』巻之十「名義解」32丁表に明示されている。(洋学史研究会『大槻玄沢の研究』p151~152)またこの『カウパー解剖書』については御書物奉行の近藤重蔵(諱を守重、号は正斎・昇天真人・明和8年・1771~文政12年・1829)が著した『好書故事』にも記述があることが知られる。『好書故事』に記録された『カウパー解剖書』は、本論でも頻出する桂川4代甫周の孫にあたる6代甫賢(国寧)が所有していたものである。この本は「解剖図2冊」からなり、原書名は「アナトミア、コルポリウム、ヒュマノリウム」、著者は「ギユイツイルモコウペル」で、「キュリイルモジュンダス」が蘭訳して、1739年にライデンの「ヨハンアルノルドランケラツク」から出版されたものであるという。また甫賢は『ターヘル・アナトミア』の「脚注」からカウパーの存在を知ったこともこの本の記述からわかる。

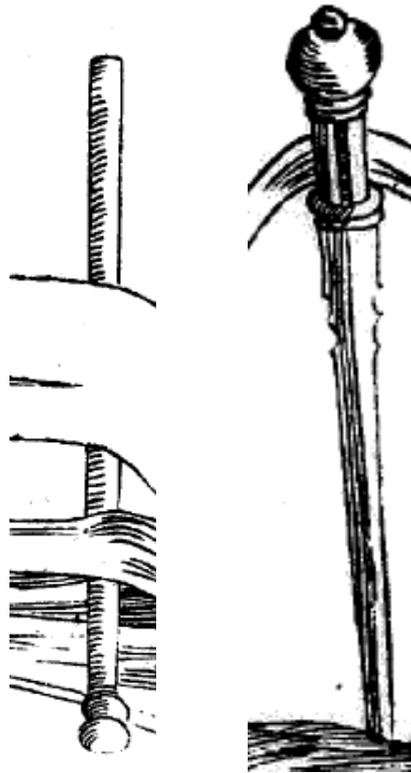
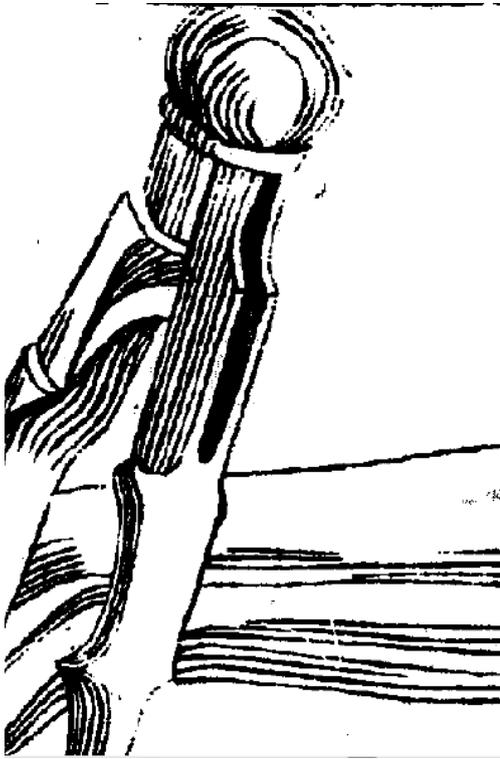
このような先行研究の結果からわかることは、伝来と時期は不明瞭であるが江戸には

『カウパー解体書』が存在し、それを蘭学の家桂川家が所有していたらしいことである。ただし『解体新書』の編纂時代にビドローの解剖書が存在していたことを示唆する文献資料は無い。このようなことから『解体新書』の挿図作成時に引用された本はビドローの『105 図の人体解剖学』かカウパーの『114 図の人体解剖学』か現在のところはっきりしない。しかし挿図の問題に限っていえば、『解体新書』の挿図に引用された図は、ビドローの解剖書から同一の原版をもって剽窃された(中原泉『ビドロー解剖学アトラス』)もののみであるから、本項では『105 図の人体解剖学』からの引用と記述することとする。

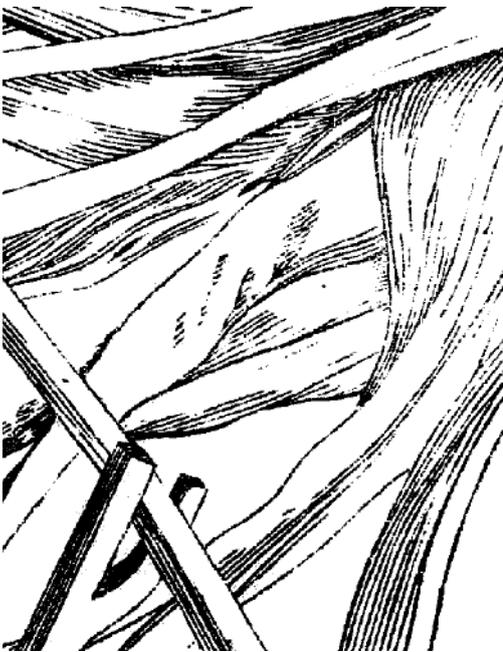
本図群は構図の問題や線描・点描といった描法が柔軟に使い分けられており、直武が『解体新書』の挿図でみせた技法の集大成といえる力作である。まずこれらの4図はすべての見開き2pにわたった大胆な構図で、画面全体に図が配置されている。このような構図は『解体新書』の挿図では5丁表裏の「支體全骨図(図版編1-7-1)」が同様の手法を用いているが、「支體全骨図」が表と裏にわたってしまい図の全像を一目で把握できないことに対し、『105 図の人体解剖学』からの引用図は見開きに図が来るように調整されている。次に直武の筆運びを追ってみると、これまでの挿図と同じように本図群でも、木版への翻刻を想定して、線を交差させることを意識的に避けているが、その表現は実に多様である。線の並びを並行、曲線、不規則に使いわけ、また線種も短線、長線、点描と幅をもたせることで、直武は図中の表皮、皮下脂肪、内膜、筋肉、筋、骨、布、ピン、板等様々な素材の質感の差異を描きわけるよう努めている。

このほかの解剖図では「原図に準ずる」という原則で模写してきた小田野直武であるが、本図群に限っては図像のアウトライン以外のほとんどが直武の創造性に委ねられているのである。

直線によるピン(金属)の表現



曲線の集合による筋繊維の表現



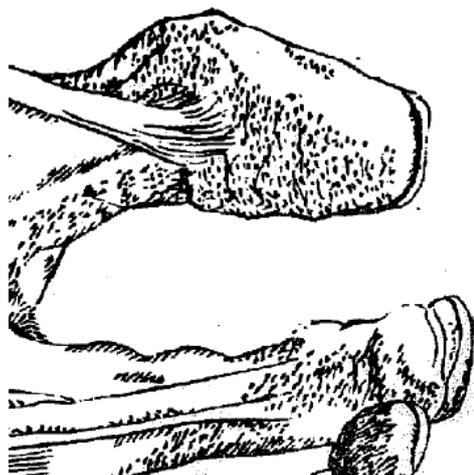
不規則な線の集合による筋組織の表現



線と点の複合による骨の質感の表現

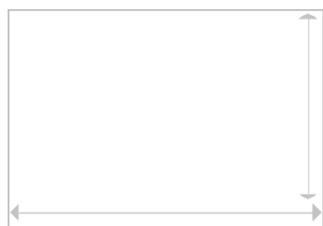


点の密度を変えての奥行き表現



『105 図の人体解剖学』からの引用部の初めは、『解体新書』附図の 17 丁裏と 18 丁表の「再示三図手背図」(図版編 1-30-1)であるが、この図を原図の『105 図の解剖学』図 70(図版編 1-30-2)と比較すると、直武は腱の部分には描画せずに白くのこしていることがわかる。これまで白抜きにしていた部分は、それ以外の部分を原図に倣った為、画面全体の統制がとれず陰影が不自然にであったが、本図では原図に倣ったのはアウトラインのみであり、直武が己の裁量で自由に原図を省略して描いており、原図とは大きく印象が異なるものの、見栄えのする秀作となっている。

次の『解体新書』附図 18 丁裏、19 丁表にあたる「再示二図手掌図」(図版編 1-31-1)は、原図の縦構図から横構図に変更されている。この図像の向きの変更も、『解体新書』の挿図にはなかったことである。これは原図が「53×37cm のフォリオ版(中原)」であったことで、これまでどおり全像を写し取ることが難しく、その中からうまれた工夫であったと考えられる。



『解体新書』見開き部分 25.5×36cm



『105 図』1 ページ 53×37cm

この巻末の『105 図の人体解剖学』からの引用図群は、すでにのべたようにアウトライン以外の原図との共通点がほとんど存在せず、ライレッセの描いた原図から直武が着想し創作した部分が大半を占める。この「再示二図手掌」の構図についても同様であり、無理に原図に追従しなかったことが逆に、直武に迫力のある図像を描かせた。

次の『解体新書』附図 19 丁裏、20 丁表にあたる「筋篇再示二図足背図(図版編 1-32-1)」の描画法はこれまで紹介してきた 2 図と同様であるが、右寄りの構図になっている。

『105 図の人体解剖学』からの引用図群の最後に当たる『解体新書』附図 21 丁裏、22 丁表の「筋篇再示三九図足底図」(図版編 1-33-1)の描画法もこれまでの 3 図と同様に主要な部位を、この図の場合であれば中央の足裏の筋に焦点をあてたものとなっている。画家ライレッセの描いた、図としてはやや演出過剰な、骨から切りはがした筋を花卉のようにひろげた図像を、直武はうまく切り抜き原図の絵画性を活かし構成した。

この項では『解体新書 附図』筋篇の『105 図の人体解剖学』からの引用図は、『解体新書』の原本である『ターヘル・アナトミア』や、『解体新書』文中に挙げられた 4 書の挿図は解剖部位の客観的な羅列に努めた図像であるが、ビドローが著しライレッセが描いた『105 図の人体解剖学』の挿図は実に絵画的である。その絵画世界はヴェサリウス著『ファブリカ』のような風刺的なものではなく、解剖の事実を抜き出し見る者に迫真的に伝える。前出の中原泉がその著書『ビドロー解剖学アトラス』にて『ファブリカ』と『105 図の人体解剖学』を比較しているから一部引用する。(大括弧内は著者によるもの。)

「『the Fabrica[ファブリカ]』の図は屍体に動的な所作を与えて、いわば“生きている屍体”という意外性を誇示したが『105 図[の人体解剖学]』は解剖台に横たわる死体の一部にスポットを当てて、徹底して即物的なスケッチを顕示した。」

「『the Fabrica[ファブリカ]』の図は、骸骨があたかも生きているかのようにポーズさせ、15 世紀末のヨーロッパに流行したメメント・モリ (memento mori, 死を想え) の寓意性を表現した。それに対し『105 図[の人体解剖学]』では、誇張した筆致ながら、生々しいが、感情移入のない乾いたリアリズムを迫真的実写した。」

「『105 図』では、針・ピンセット・木片・ロープ、ナイフ・本・布・板・台などのさまざまな小道具を用いて、失われた日常性を回復することを狙った。ときには、剖出した屍体 1 匹の蠅をとまらせて、究極ともいえるリアリティーを強調した(実際、夏などには、蠅は屍体に群がっていたことだろう)。

とまれ、『the Fabrica[ファブリカ]』はエコルシェ (écorché) の手法を駆使して、皮膚を剥がして筋肉の動きを鮮やかに再現した。その鮮麗で巧緻な全身像は、古今の人々を魅了してやまなかった(エコルシェとは本来、浅層の筋肉を見せるために皮膚を剥離した標本をいう)。

一方、『105 図[の人体解剖学]』は屍体の切り開いた部位を、そのまま精微に克明に忠実にスケッチした。その写実主義に徹した描写は、圧倒的な迫力をもって見る者を驚かせた。」

このように『105 図の人体解剖学』はヨーロッパの解剖学の古典であるガレノス説を覆し、近代解剖学の礎となった『ファブリカ』の図像とも異なる性質をもっていた。同時代人のワルエルダの解剖書が、多くの点で『ファブリカ』に追従した内容であったことに対し、ビドローはこの『105 図の人体解剖学』でヴェサリウスを超え、解剖学書の新機軸を打ち出したのである。また中原によると『105 図の人体解剖学』のなかでビドローは「人体を機械学で説明しながら、所詮、機械は人体に遠く及ばないことを解剖学

から教えられた」と説いたとあり、『ファブリカ』を越えようとしたこのビドローは科学への学識も深いことが伺える。また序文には「数学の審理が数と図形の証明によって発見されるのと同様に、解剖学の真理は(剖検による)検視(肉眼でみること)によってのみ発見される」(中原泉『ビドロー解剖学アトラス』 p6)とあり、「デカルトに代表される近代哲学の影響下にあった(中原)」ことが分かる。ビドローの学識と、「オランダのプッサン」(中原泉『ビドロー解剖学アトラス』 p4)と称されるライッセの画技が合わさったこの『105 図の人体解剖学』の挿図は、小田野直武に 17 世紀ネーデルランド絵画の真骨頂を見せつけたのである。

日本にもたらされた遠いヨーロッパ絵画の啓蒙の光は、文法的に江戸の絵師小田野直武に伝わることはなかった。しかし図像的な点に限れば直武を洋風画家としてより高い領域に引き上げたことはまちがいない。師平賀源内が直武にもたらしたのは、絵画技法に限れば陰影法のなかでも初歩の平面に陰影をほどこし立体的に見せるという、光と影の問題のみであった。直武はこの『105 図の人体解剖学』との出会いから、陰影法によって質感表現が可能であることにも気付いたのである。

第2部江戸時代解剖図の展開

1章『解体新書』付図

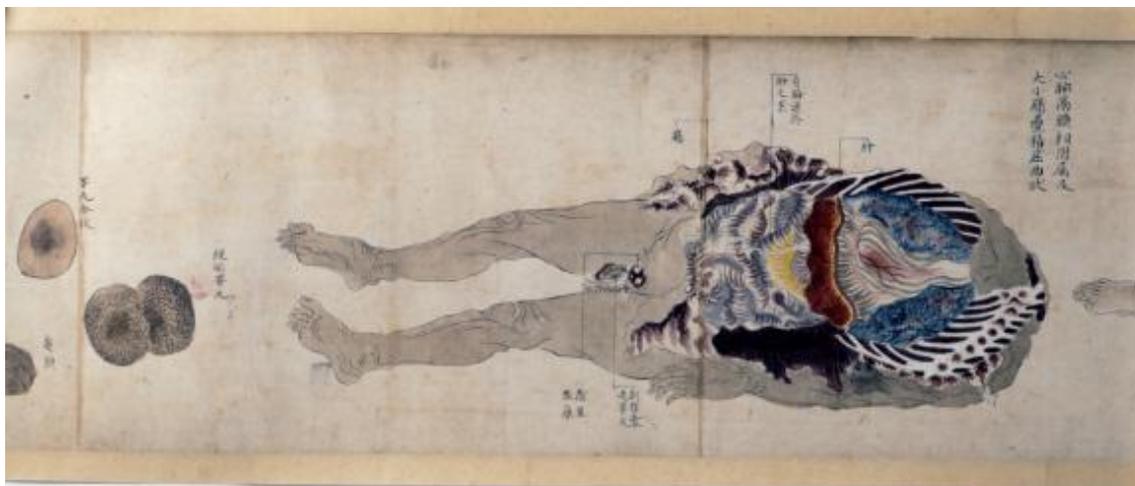
3節1章総論

『解体新書』はヨーロッパの解剖図像の再現を試みた解剖図であった。1部江戸時代解剖図前史でもふれたように、『解体新書』以前にもヨーロッパの解剖図像に触発され描かれた解剖図は存在していたが、当時の禁教政策の影響もあり完全な模倣に徹することができずにいた。『解体新書』が編纂された安永年間には田沼時代の自由な気風を反映して、ヨーロッパの珍奇な文物の規制が緩和され、ヨーロッパの解剖図像をそのまま写し取り世に広めることが可能となった。しかし『解体新書』編纂当時の絵画や版画の技法では再現できなかった、解剖図に表現技法も多くあり、それは江戸蘭方医家の解剖図制作における命題となる。具体的には『解体新書』では木版画で代用することとなったが、本来はヨーロッパの解剖図に使用されている腐食銅版画挿図の実現であった。また、それに付随する要素として線の交差による陰影表現「クロスハッチング」の純粋な再現と、それによって達成されるより高水準の陰影表現も求められる。

これら江戸蘭方医系解剖図の命題は『解体新書』刊行から34年後、『医範提綱内象銅板図』の編纂をもって一応の到達点をむかえるのである。

2 章『平次郎臓図』

1 節小石元俊の来歴—『平次郎臓図』刊行まで—



『平次郎臓図』(部分) 山形県蔵

『解体新書』の刊行を契機に、ヨーロッパの図像として成熟した解剖図は江戸時代の知識層によく知られるものとなった。ここでは、江戸の杉田流蘭方医と交友のあった京都の漢方医学古方派の医師小石元俊の編纂した解剖書『平次郎臓図』に焦点をあて論究する。

『平次郎臓図』は『解体新書』刊行から9年後の天明3年(1783)に、京都の漢方系古方派の医師小石元俊(寛保3年・1743～文化5年・1809)が行った解剖会の記録解剖図である。本文を著したのは会の主宰である小石元俊であり、写実的な画風を得意とした京都円山派の絵師吉村蘭州(元文4年(1739)～文化14(1817)が挿入された解剖図を描いた。また『解体新書』が和版本であることに対し、こちらは卷子本1巻から成る。また『解体新書』がヨーロッパの解剖図を念頭におき作成されたものであったことに対し、『平次郎臓図』は実際の解剖結果をもとに描かれたことが知られる重。詳しくは後述するが、挿図作成に際しては絵師も解剖の現場に同行させ、その写生下図をもとに本図は描かれたと『平次郎臓図』の文中に記述されている。

本図巻の著者である小石元俊は、江戸時代後期の蘭学者、漢方医。『蔵志』の著者 山脇東洋の孫弟子にあたり、関西にあける蘭医学の主唱者。元俊は通称で、名は国瑞。幼名は太吉。字は有素、号に大愚、碧霞山人。子は小石元瑞。門弟に斉藤方策、南部伯民、橋本宗吉。杉田玄白の『蘭学事始』にも名がみられ、玄白や大槻玄沢ら江戸の蘭学者とも交友する。元俊は山城国桂村(現 京都市西京区桂)に生まれる。父は先妻との間に男子があったため元俊は次男となる。父は若狭国小浜藩家老林野氏の出自で流浪中に小石性に改めた。寛政3年(1750)父に伴い大坂へうつり、そののち宝暦元年(1751)には山脇東洋門下の永富独嘯庵にもまなび、蘭方医学に接することとなる。永富塾では亀井南冥、

小田享叔とあわせ三傑とよばれた。独嘯庵に師事したときに元俊の得たもののうちで本論と関係の深いものをあげるならば、それは和蘭医学への傾倒である。師独嘯庵は長崎に共に留学した合田求吾の著書『紅毛医言』への序文にも「紅毛の政は解剖を禁せず、不治の病で死んだときは、これを解剖して原因を調べるから、病因が瞭然となる。中国医学の欠を補うものはこれである」とのべている。このような先鋭的考えをもつ師に学んだ元俊もまた、オランダの医学を精妙に感じ、これがのちの江戸での杉田流蘭方医学や江戸系蘭学との交流につながっていくのである。明和6年(1769)には大阪で私塾衛生館を開業した。その5年後の安永3年(1774)に『解体新書』が刊行されると、衝撃を受けた元俊は杉田玄白らと交友をふかめ、2年後の天明6年(1776)には江戸にでて遊学することとなる。安永6年(1777)同門亀井南冥の影響で皆川洪園の家塾に入門、陰陽五行節にもとづく伝統医学を批判した『元衍(げんえん)』の著述をはじめ。皆川塾では柴野栗山らと交友し、儒学者の頼春水から歴史をまなんだ。川上玉堂や木村兼葭堂ら著名な文人とも親交をふかめた。天明3年(1783)には鳥羽伏見で人体解剖をおこない、後に『平次郎臓図』としてこれをまとめた。

2章『平次郎臈図』

2節『平次郎臈図』の概要と表現

1項『平次郎臈図』の概要

『平次郎臈図』の本文は元俊の序からはじまり、吉村蘭州による図、橘春輝(しゅんぎ)の図跋、そして最後に元俊の「平次郎臈図記補遺並小引」からなっている。『平次郎臈図』の巻頭の序には、刊行にいたる経緯、また解屍の要請が小堀氏の侍医「吉田玄理・山本元順・盛本立宣及び京医橘東市(『小石元俊』p73)」らによって行われとこと、「天明癸卯夏六月廿五日(『小石元俊』p73)」に処刑者の屍を賜り、解屍にいたったこと、その関係者は解手に原田雄伯、中川周蔵、飯田道安、画工に吉村蘭州、村上大進、榎野周蔵。総指授は小石元俊、補佐に盛本音進、榎林祐意、榎林祐輔稲田友賢、山本令儀、と玄俊の子4人と合わせて16人におよんだことがわかる。

吉田玄理は「近州小室の人、世々藩の持医」(山本四郎『小石元俊』P82)であり、山本元順は「伏見の人、内科で法橋(ほつきょう)(同 山本)」の地位にあったが、「人身内景の説に疑いをもっていた(同 山本)」、また盛本玄宣も「伏見の人、鍼術・内科に長じ」ており「固有の経脈を明らかにするために参加した。」橘東一は「伊勢の人、大阪に客遊数年、元俊の友となり、伏見に寓居して公に厚遇され、大阪から京都へ移った。元俊も京都に移ったので、旧友として解剖を助け、事を主宰した。彼は少にして医に志し、一家言を立てようと(同 山本)」したという。

次に解手の原田雄伯は「長崎の人、南谿と交友があり、外科に巧みであった。京都に住み、かつて解屍を願い出ること三度、また舶載の解剖具をもち、解剖に長じ、解手として刀手を激励し、自らもメスを揮って妙技を発揮、解人を感服せしめた。(山本四郎『小石元俊』P83)」中川周蔵は「京都の人、元俊の友人のゆえに観者としたが、雄伯を助けて自らもメスをふるった。飯田道安は「岩国侯持医、京都に遊学中で、元俊と親しく、観者となったが道安同様裕伯を助けた。」

そして絵師の吉村蘭州(元文4年・1739～文化13年・1816)は名を彝徳、字は子秉といった。円山派の絵師であり、応門十哲のひとりである吉村孝敬(号を蘭陵、明和6年・1769- 天保7年・1836・『京都画壇の十九世紀』p229)の父である。蘭洲は現在の滋賀県野洲市で農業を営む西川権三郎の息子で幼少より寺院に仕えた。はじめ石田幽汀にまなび、のちに園山応挙に師事し西本願寺絵師となる。寛政2年(1790年)禁裏造營の際は、障壁画制作願書に名を連ねながらも不採用になっている。

山本四郎によると元俊の友人である絵師島士通に相談したところ、蘭州の性格が周密であり、その描画も着実であることから推薦されたという。村上大進は「京都の人、蘭州の知人で助手としてきた。(山本四郎『小石元俊』P83)」小石元俊家蔵の「「解体白描図」は大進の描くところ」である。榎野周蔵は「伏見の人」であることは分かっているが他詳細は現在のところ不詳である。このように解剖に関わったものを画工も含め詳細に記述した元俊の努力は、彼の学門を後世に伝え普及させる狙いがあったものと思わ

れる。関係者一同を記す傾向は『解体新書』以降の解剖図にはよくみられるが、これほど詳細に著されているものは少ない。

すでに述べたように、本図巻の解剖図を描いたのは円山派の絵師吉村蘭州である。『解体新書』附図がオランダ解剖図を模倣した無着色の和版本あったことに対し、こちらは実際の解剖に絵師が同行し写生したものを肉筆彩色の図として書き起こし、本の体裁も卷子本となっている。版本であることは新興の蘭方医学を一般に普及させる狙いがあり、逆に肉筆彩色の卷子本であることは、小石元俊が自身の解剖結果を、弟子や類縁など限られた人間にしか見せるつもりがなかったようにも感じられる。

この『平次郎臓図』はいくつか模写図が存在することが知られるが、山本四郎(『小石元俊』p71)による詳細な記述があるので以下に抜粋する。

「1武田製菓の杏雨書奥(ぎょううしょおく)、2小石家、3淡輪家、4東大解剖学教室、二巻、5呉氏旧蔵、の5種がある1は(題が)「平郎」とあり、普通の男といういみだともいう。題下に「天明□年、全文載于碧霞文集(現存せず)」とある。碧霞は元俊の号。1, 2は補遺小引が途中で切れている。3は全文がある旨宮下三郎氏教示をえた。5は解剖図の後半に一致する」

筆者が見ることができた模本は東京江戸博物館収蔵のマイクロ版である。また同様の図像の山形市佐々木氏旧蔵の『人体解剖図巻』も高解像度写真データを閲覧することができた。それらを比較したとき、図像の精度が圧倒的に山形市蔵のものが勝っており、山形市に伝えられるように、おそらくこちらが真本であろうと推察される。



江戸博物館蔵版



山形県蔵版

2章『平次郎臓図』

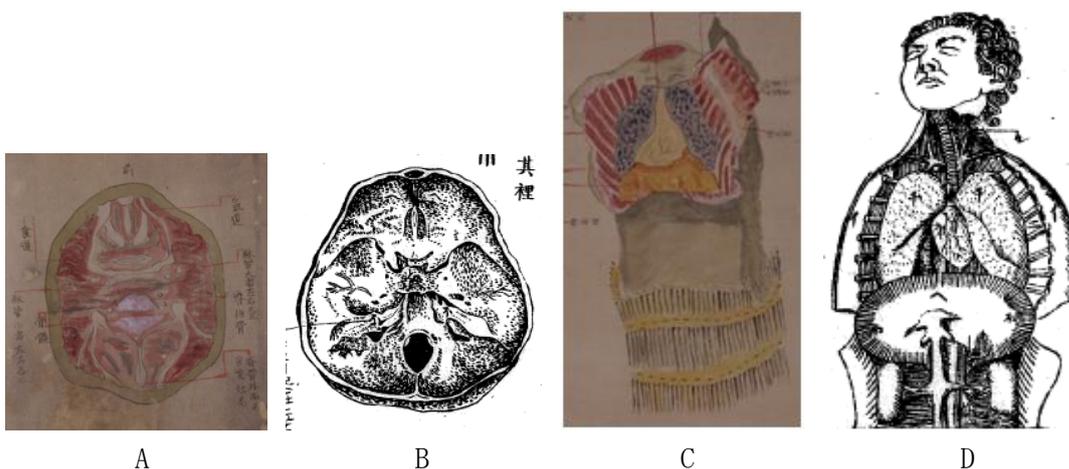
2節『平次郎臓図』の概要と表現

2項『平次郎臓図』の表現—『解体新書』と円山派の影響から—

江戸蘭方医と京都の小石流漢方医らの思想は、旧来の伝統医学への観念的人体観への懐疑から生まれた実証的精神がその根本にあるという点で共通項がある。しかし『解体新書』が、ヨーロッパの著名な解剖書の図像からの引用とその模倣精度向上に尽力するという、ヨーロッパ医学に倣う姿勢が強くみられたことに対し、京都古方医家の解剖書は実際の解剖記録であり、『解体新書』等のヨーロッパの医説を参考にしつつも実際の解剖結果と照らし合わせた反証が前に押し出されている。

この『平次郎臓図』の場合であれば「心臓諸官の通ずる所」、「『解体新書』にいわゆる門脈の起きる所」、「同じく奇縷(キリール)管の経る所」、「同じく動・血脈支別の蔓延する所」、「同じく神経の終始する所」、「諸筋の連屈する所」、「諸筋の総骨」(鍵括弧内すべて山本四郎『小石元俊』p79から引用)と『解体新書』と照らしながら、短時間の執刀、解屍ゆえの手抜きや取りこぼしを誠実に反証している。このような『平次郎臓図』の記述からわかるように、杉田流蘭方医家と小石流古方派漢方医の交流は浅からぬものであった。このような小石流と杉田流の医学交流を踏まえ、この項では小石元俊が確実に見た蘭学解剖書として『平次郎臓図』本文の記述から明らかな『解体新書』附図の『平次郎臓図』への影響を両図の比較から検討したい。

まず影響がよくわかるものとして『平次郎臓図』図3(図版編3-3)が挙げられる。本図は『解体新書』骨折篇頭骨中断見其裡(うら)図(下図B)。図6(図版編3-6)は『解体新書』隔膜篇開見其内図(下図D)の図示法を参考にしたものと考えられる。

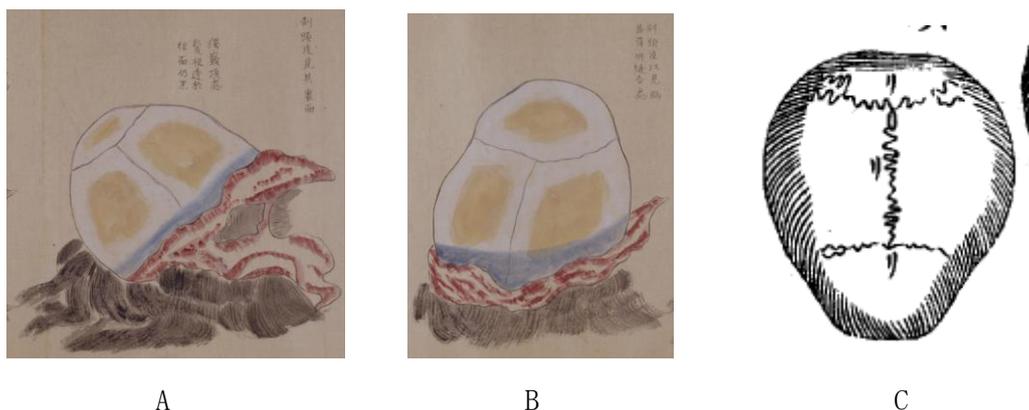


- A、『平次郎臓図』図3
- B、『解体新書』骨折篇頭骨中断見其裡(うら)図
- C、『平次郎臓図』図6
- D、『解体新書』隔膜篇開見其内図

図 16(図版編 3-16)、図 17(図版編 3-17)は肝臓を示したものであるが、その図示法には『解体新書』肝膽篇肝全形図(図版編 1-25-1 上・下部)を参考にしたものと推察される。しかし図像的には解剖の事実在即したものであり、蘭方医の解剖書挿図にくらべると画が図像として整理されておらず細部が不明瞭である。同じく肝臓を示した図 18(図版編 3-18)は肝臓を開き内部を示したものであるが、『解体新書』にはないものであり新規性がある。

図 34(図版編 3-34)、図 35(図版編 3-35)、図 36(図版編 3-36)、図 37(図版編 3-37)は『解体新書』附図の巻末に掲載された『105 図の解剖学』からの引用図に、その図示法を学んだものと推察できる。図 34 は『解体新書』筋篇図 2(図版編 1-30-1)から、図 36 は『解体新書』筋篇図 4(図版編 1-32-1)の図示法をそれぞれ参考に、元俊が執刀し蘭州が図として書き起こしたものと推察される。

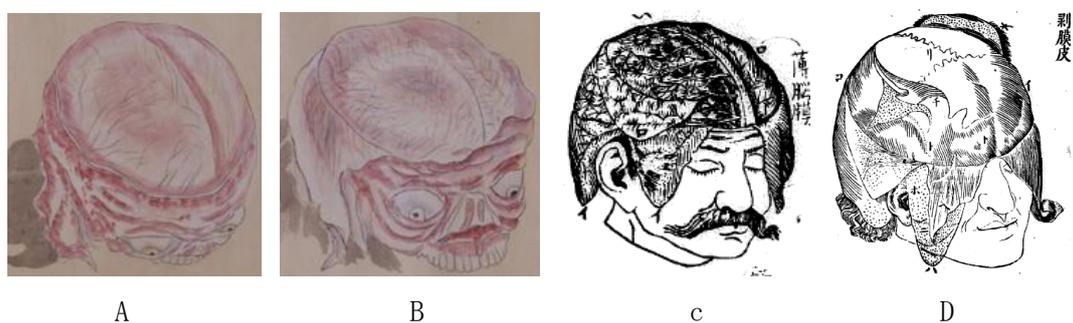
図 42(図版編 3-42)は頭皮を剥がしその裏面を示した図であり、つづく図 43(図版編 3-43)は同様の部位の角度を変え頭骨(脳蓋)の継ぎ目を示した図である。こちらは『解体新書』骨節文類篇示頭骨縫図(図版編 1-4-1 部分)図像を参考に、蘭州独自の図示法で示したと考えられるが、図 42 と図 43 の図像的差異はほとんどない。



- A、『平次郎臓図』図 42
- B、『平次郎臓図』図 43
- C、『解体新書』骨節文類篇示頭骨縫図部分

図 44(図版編 3-44)は頭骨の半分と脳を取り去り内部を示したものであるが、これも非常に見づらい図である。おそらく血でぬれた内部が写生しづらかったことに起因するものと思われるが、註釈を見ても頭部の顔面側がどこなのかも定かではない。奥行きも判然とせず解剖図としての体をなしていない図である。参考にしたのは『解体新書』神経篇開鎌管見脳疇図(図版編 1-10-1 部分)であると推察される。

図 46(図版編 3-46) は頭骨と脳の間にある脳膜を俯瞰した図であり、次の図 47(図版編 3-47)は脳膜を剥がしその下の大脳を示した図である。本図は『解体新書』神経篇剥皮膜見血道図(図版編 1-10-1 部分)、皮毛篇剥膜皮図(図版編 1-8-1 上部)の図示法に影響を受けたと考えられる。



- A、『平次郎臟図』 図 46
- B、『平次郎臟図』 図 47
- C、『解体新書』 神経篇剥皮膜見血道図
- D、『解体新書』 皮毛篇剥膜皮図

図 50(図版編 3-50)眼球全状図は、図に添付された註釈の記述から『解体新書』の挿図や本文の記述を参考に描かれたものと推察される。続く図 51(図版編 3-51)、図 52(図版編 3-52)は図像的には蘭州の写生図による新規なものであるが、『解体新書』の眼目篇の記述を参考に書き起こしたことが註釈の記述からわかる。

このように『平次郎臟図』には蘭方医学解剖図の図示法の影響が良く現れた図像が、筆者推定で 11 図存在する。次頁に『解体新書』附図の図示法の影響が顕著な図(A 群)、実際の解剖結果を重視した解剖図(B 群)を列举した。【 】内は『解体新書』の図版名。

その総数は 63/11 図で全体の約 1 割である。逆に残りの約 9 割の 63/52 図は『解体新書』附図の影響の少ない、解剖事実をもとに描かれたものであると推定することができる。

これらの検討結果から『平次郎臟図』の挿図への『解体新書』附図の影響が数値的に明らかとなった。数値化するとその影響は 1 割程度であり、本図を執筆した蘭州の絵師としての矜持もうかがえる。しかし自身の画図に『解体新書』の図示法を取り入れる柔軟性も持ち得ていたのである。

A群

- A-1、図3(図版編3-3)【『解体新書』骨折篇頭骨中断見其裡(うら)図(図版編1-5-1)】
- A-2、図6(図版編3-6)【『解体新書』隔膜篇開見其内図(図版編1-16-1)】
- A-3、図16(図版編3-16)【『解体新書』肝膽篇肝全形図(図版編1-25-1 上部)】
- A-4、図17(図版編3-17)【『解体新書』肝膽篇肝膽連続状剥膜見る血道兼示水道図(図版編1-25-1 下部)】
- A-5、図34(図版編3-34)【『解体新書』筋篇図2(図版編1-30-1)】
- A-6、図36(図版編3-36)【『解体新書』筋篇図4(図版編1-32-1)】
- A-7、図42(図版編3-42)【『解体新書』骨節文類篇示頭骨縫図(図版編1-4-1 部分)】
- A-8、図43(図版編3-43)【『解体新書』骨節文類篇示頭骨縫図(図版編1-4-1 部分)】
- A-9、図44(図版編3-44)【『解体新書』神經篇開鎌管見脳疇図(図版編1-10-1 部分)】
- A-10、図46(図版編3-46)【『解体新書』神經篇剥皮膜見血道図(図版編1-10-1 部分)、皮毛篇剥膜皮図(図版編1-8-1 上部)】
- A-11、図47(図版編3-47)【『解体新書』神經篇剥皮膜見血道図(図版編1-10-1 部分)、皮毛篇剥膜皮図(図版編1-8-1 上部)】

B群

- B-1、 図 1 (図版編 3-1)
- B-2、 図 2 (図版編 3-2)
- B-3、 図 4 (図版編 3-4)
- B-4、 図 5 (図版編 3-5)
- B-5、 図 7 (図版編 3-7)
- B-6、 図 8 (図版編 3-8)
- B-7、 図 9 (図版編 3-9)
- B-8、 図 10 (図版編 3-10)
- B-9、 図 11 (図版編 3-11)
- B-10、 図 12 (図版編 3-12)
- B-11、 図 13 (図版編 3-13)
- B-12、 図 14 (図版編 3-14)
- B-13、 図 15 (図版編 3-15)
- B-14、 図 18 (図版編 3-18)
- B-15、 図 19 (図版編 3-19)
- B-16、 図 20 (図版編 3-20)
- B-17、 図 21 (図版編 3-21)
- B-18、 図 22 (図版編 3-22)
- B-19、 図 23 (図版編 3-23)
- B-20、 図 24 (図版編 3-24)
- B-21、 図 25 (図版編 3-25)
- B-22、 図 26 (図版編 3-26)
- B-23、 図 27 (図版編 3-27)
- B-24、 図 28 (図版編 3-28)
- B-25、 図 29 (図版編 3-29)
- B-26、 図 30 (図版編 3-30)
- B-27、 図 31 (図版編 3-31)
- B-28、 図 32 (図版編 3-32)
- B-29、 図 33 (図版編 3-33)
- B-30、 図 35 (図版編 3-35)
- B-31、 図 37 (図版編 3-37)
- B-32、 図 38 (図版編 3-38)
- B-33、 図 39 (図版編 3-39)
- B-34、 図 40 (図版編 3-40)
- B-35、 図 41 (図版編 3-41)

- B-36、図 45 (図版編 3-45)
- B-37、図 48 (図版編 3-48)
- B-38、図 49 (図版編 3-49)
- B-39、図 50 (図版編 3-50)
- B-40、図 51 (図版編 3-51)
- B-41、図 52 (図版編 3-52)
- B-42、図 53 (図版編 3-53)
- B-43、図 54 (図版編 3-54)
- B-44、図 55 (図版編 3-55)
- B-45、図 56 (図版編 3-56)
- B-46、図 57 (図版編 3-57)
- B-47、図 58 (図版編 3-58)
- B-48、図 59 (図版編 3-59)
- B-49、図 60 (図版編 3-60)
- B-50、図 61 (図版編 3-61)
- B-51、図 62 (図版編 3-62)
- B-52、図 63 (図版編 3-63)

2章『平次郎臓図』

3節 2章総論

1部2章1節で示したように「内景図」や『蔵志』のような『解体新書』以前の人の内部を示した図像は、臓腑一つ一つの形態や位置関係が具体的ではなかった。つまり臓器を具体的に描き、またそれを分かりやすく見せるというノウハウが、当時の画工達には蓄積されていなかったのである。吉村蘭州も同様に人の臓腑を描くという行為自体初めての体験であったと推察され、そこで参考にされたのが『解体新書』の挿図であったと、筆者は2章での各解剖図の検討結果から判断した。

そもそも『平次郎臓図』は、ヨーロッパ的な整理方法による解剖書ではなく、小石元俊の解剖結果を記録した記録画であった。そのためヨーロッパの体系化され省略と洗練を重ねられてきた解剖書の挿図とは、大きくその表現形式や特性を異にすることとなった。解剖現場の現実を記録するため、小石元俊は写実的画法で名をはせた円山派の絵師を起用した。狩野派が主流であった時代に、新進の画派である円山派の絵師を起用したのは、『解体新書』の細密な洋風の図像が念頭にあったであろうことは想像に難くない。

また解剖の過程を時系列的に示した結果ヨーロッパの解剖図にはない、人の生首、地面に寝かされた解剖前の屍体、また体管から取り外され竹竿に吊るされた臓腑なども描かれ、当時の解剖の苛烈さを我々に伝えた。

このような解剖現場のリアルを追求した姿勢は、『105 図の人体解剖学』編纂時のビドローとライッセを彷彿とさせるものである。

吉村蘭州は持ち前の円山派の写実技法によって、モノクロの腐食銅版画を模倣した『解体新書』の挿図には無い、血肉に濡れた解屍体のリアリティを表現した。しかし己の専門絵師としての技量に固執するのではなく、各解剖図の臓腑を抜き出し分かりやすく図示する方法や、部分的に省略し図像化された医学図として描く方法は、柔軟に『解体新書』の挿図から吸収している。

3 章『施薬院解男体臓図』

1 節『施薬院解男体臓図』概要



『施薬院解男体臓図』 早稲田大学図書館蔵

『平次郎臓図』の編纂から16年後に小石元俊が解剖の総指揮をし、三雲環善によってまとめられた『施薬院解男体臓図』も『解体新書』の図示法を参考にしている。

『施薬院解男体臓図』は寛政11年(1799)に施薬院三雲勸善と山脇東海を主宰とし、大阪から京都にうつり隠居していた小石元俊指導のもとに寛政10年(1798)2月13日におこなわれた解剖をまとめたものである。(山本四郎『小石元俊』 p139~140) 筆者が参考にしたものは早稲田大学図書館収蔵のものであるが、山本四郎『小石元俊』 p148によればそれ以外にも、京都大学本(着色紙本、吉村蘭州画)、羽間平三郎本(淡彩または線の素描、小石元俊門人宮義鄰筆、吉村孝敬画)杏雨書屋本(着色紙本、木下応受模図)の3種の存在が確認されている。

挿図を描いたのは、『平次郎臓図』につづき吉村蘭洲、その息子吉村孝敬(明和6年・1769~天保7年・1836)、このほか応挙の次男である木下応受(安永6年・1777~文化12年・1815)が解剖の場に同席し描いたとされるが、当時蘭州が60歳、応受が22歳、康敬が30歳であったことから、技術的にも脂ののった康敬が中心に写生・作図したものと『京都画壇の一九世紀 第2巻 文化・文政期』では推察されている。また各図に付された臓器のオランダ語表記は小石元俊の弟子であり江戸の大槻玄沢から蘭学・蘭方医学を学んだ橋本宗吉がしたためた。(山本四郎『小石元俊』)

絵師吉村孝敬の来歴は源豊宗監修・佐々木丞平編『京都画壇の一九世紀 第2巻 文化・文政期』 p229に詳しい。ここではその記述を参考に吉村孝敬について概説していく。孝敬は字を無違、号は龍泉、蘭陵、通称は用三といった。前述の絵師 吉村蘭州の息子で円山応挙にまなびその技量は応門十哲に数えられるほどである。彼は応挙晩年の弟子であったが、応挙が寛政7年(1795)に没したとき康敬はまだ26歳であった。応挙

一門が参画して制作された天明7年(1787)と寛政7年の大乘寺壁画制作にはいまだ参加することがゆるされてされていない。また同様に寛政2年の禁裏造営の際も康敬の名は存在しない

康敬は、享和2年(1802)35歳のとき父とともに西本願寺の本如宗主から「茶道格」を仰せつかっている。現在のところ、この享和2年までの康敬のことについては、ほとんど何も知られていないが、前述したように父蘭州が寛政2年にはすでに応挙についており、しかも幼小より寺院に仕えていたというから、康敬も幼小から父にならい画と交わり、早くに応挙に師事していたと考えられている。解剖図以外の創作は、茶道格であった西本願寺に代表的な作品を多く遺している。大師堂の「雪松竹図」襖絵がそれにあたり、これら両図桃山的な大画面にみる大画面形式をふまえつつも、その雪景表現は応挙の表現にならったものであることが知られる。このように伝統的な画法や構図、また応挙の写生技法を消化して独自の写実的絵画世界を確立したその手腕は解剖図にも生かされている。小川鼎三は1975年に講談社より刊行された『解剖存真図』の複写本の解説p4にて本図を「この『施薬院解男体臓図』は『平次郎臓図』と同様に、講明社周辺の江戸蘭学の影響を濃厚に示すものであった。また観察の深さは『平次郎臓図』の都比べ格段の差があり、この差異は小石元俊の10数年の進歩しめすものである。」と評している。

序文は上田元長がしたためた。山本四郎『小石元俊』p140の現代語訳を以下に引用する。

三雲環善は少年時代より医に志あり、鼠や禽鳥の腸を解いていたので、自分が官に請うて人腸を解いてはどうかというと、大いに賛成した。そこで小石元俊に謀った。元俊は解体者である。かくて戌年の一月二十五日、京都所司代堀田正順に一書を呈し、二十八日許可、二月十三日屍体をもらって解剖した。けだし異例のことである。執刀者五人、皆元俊がこれを督した。画工は吉村蘭州とその門人2名、傍観者は六十余人、巳の刻(午前十時)にはじめ、酉の刻(午後六時)に終わった。図が出来たが、実に真景を見るがごとくである。環善は満足し、自分に序を託した。世には観臓を忍びずして解体せぬ者があり、観臓を以て解体者の名を求むるものがある。これともに非である。われわれはただ治療に益を求めたのであって、これなくしては鼠や禽鳥を解くに異ならぬ。環善の曾祖父宗真は自分の師であるが、施薬院は歴代観臓をしたことがなく、環善に至ってはじめてこの挙があった。解者・図者ともに至妙、観者は発明するところがあるろう。

つづいて小石元俊による「施薬院解男体臓図巻序」の現代語訳も同じく山本四郎『小石元俊』 p 141～144 から転載する。

夫れ医には悦論(しゅろん)有り方術有り、其源は人身五臓百骸之理致に出でざるは莫し。而して審かに之を究むるの本は解剖の業に在り。是の故に医の英質俊才遠大の志を抱く者は必ず思(い)を斯に覃(こ)む。余庸劣驚駘(ようれつどたい)固より遠大の志無しと雖ども、亦甚だこれを好む。然るに余解剖の業におけるや、これを武事に比す。特(ただ)旗を擧げ將を切る末將のみ。この故に必ず控御(こうぎょ)の首將を持ち、而して後後若くは先登りし若くは城を陥れ以て小功を建てつるを得ん。三雲環善先生及び山脇東海先生は我が觀臓の主將、いわゆるかの英質俊才遠大の志を抱く者なり。又主將は身將たりと雖も、其心寛仁ならず、自ら猛を負いて妬害するときは、「夫(か)の旗を擧(かか)ぐるの小能」なれば則ちその海内を席卷するの籌策安(ちゅうさくい)ずく)んぞ之を運(めぐ)らすを得んや。已に権を総(す)ぶると雖も、其の意豁如たらず、自ら好んで勇んで夫(か)の將を斬るのに賤技に娼疾すれば則ち其の天下を混一するの大勲安(いづく)んぞ之を成すを得ん。さきには山脇東海先生毎(つね)に此挙有らば必ず余を隊伍に抜き以て其事に当たらしむ。余恒に大いに喜び、臂を攘ち刀を磨き以て其の命ずる所を待つ。故に山脇家の觀臓、余与らざるもの莫し。

寛政十年春二月十三日、三雲環善先生男屍を解剖するの挙有り。其家山脇氏と通字たるを以て、亦余を廝役に挙げ以て、其事に任ずるを得ること、亦猶お山脇氏の例のごとくあらしむ。首より始め八髎骨(はちりょうこつ)に至って終わる。断割凡て五十九。画工吉村蘭州之が図を為(つく)る。其子康敬、其友木下応受之を助く。図又五十九なり。是れ未だ夫(か)の西洋解体図之精微に及ばずと雖も、亦以て夫の五臓百骸之梗概を觀察するに足らん。而して此挙与(あずか)り觀る者数十人、其姓名は別に之を後に載す。嗚呼環善先生博受之仁沢や深し。是より先一日環善先生余を其弟(てい)に召して謂(い)て曰く、我斯道に従事する者のために男女二屍を解剖し、以て細かに図し以て審らかに其五臓百体之理致(りち)を究めんと欲す。

竊(ひそ)かに聞く、子篤く此業を好むと。請う我令に従い臂力を吝かにする無かれと。余大いに喜び踊躍、僕爾として席を避けて対(こた)えて曰く、敬(うやうや)しく命を領(う)けん、敢て之を能くすと曰うに非ず、願わくば之を学ばんと。環善先生の志豈(あに)之を遠大と謂はざるべけんや(下略)

この2つの序文は、詳細に解剖の状況を今日に伝える。三雲環善の高弟である、上田元長の序文からは、環善が始め鼠や鳥の内腑から觀臓の基礎を身につけ、元長の提案を機にお上からの許可を得て人の解屍を行うこととなったことや、小石元俊を解剖を監督し、執刀者は5名、画工として前出の3名、また見学者として60余人が同席したこと。環善や元長は解屍ののちに完成した図に満足していたこと。また実際に執刀せず、觀臓

の経験のみで「解体者」を名のる者に苦言を呈し、医療の為の解剖であったことをのべている。

小石元俊の序には三雲勸善が解剖を行い、かつ自分自身で執刀も行ったことへの賞賛。次に解剖の手順とそれを山脇氏の解剖の手法に倣ったことをのべた。また人体を59に分割し、それらを前出の3人の画工が描いたことや、それらの図はいまだ西洋解剖図の精緻さには及ばないが、五臓百骸の概要を示すには足りるものであること。そして、最後に前出の三雲勸善の来歴と勸善の解剖の挙に対する賛辞と、小石元俊の今後の解剖に対する展望が著されている。

次の項目「観臓人員」には2つの序文では著されていない参加者の詳細な人名が記されている。ここではそのすべてを記さないが、前出の山本四郎『小石元俊』のp146に挙げられた人物だけでも三雲勸善の他、勸善の弟財満孝之助、山脇東洋の弟山脇玄智(はるとも)、三雲勸善の門弟・身内の者上田元長、青山玄泰、楢林宗博、小石元俊、息子元瑞、淡輪元潜の子(『小石元俊』p146)貞蔵、中神右内(琴溪)、柚木太淳(眼科医)、橘豊後目(春暉)、長州の人藤左冲(永富独嘯庵の姉の子)、但州の人真狩元策、大阪の中川元吉といった面々である。またこの項の最後にはやはり小石元俊による解剖の模様とその結論が述べられている。以下に山本四郎『小石元俊』のp147にある訳文を転載する。

解剖の模様

「凡そ解剖の場、恒(つね)に刀を以って難きと為す。故に其人剛ならざれば即ち之を為すこと能わず。(宮崎)元素奮励して先ず面皮を剥ぎ頭に及び、次に四人と互いに相い代わり之を為す。各發明する所あり。竜(元瑞)の若きは年僅かに童を成す。唯鉤を持ち刀を執り以って之を助くる耳(のみ)。以下席次詳(つまびらか)に前図に見ゆ。(p147)」

結論

「本邦此挙を為す者多からず非ず。率(おおむ)ね夫(か)の西洋解体家之神巧に及ぶ能わざる者、蓋亦其の之を為す時但日をトして夜をトさず、且つ大率二朝に嵩る能わず、一日にして五臓百骸を尽し、解者は既に陰を索め幽を探るを得ず、図者亦密模真写を得ざるが故なり。夫の精微を尽くすの如きは即ち余方(まさ)に英気を養い、手腕を休め、以て環善・東海ニ先生之天助を得、累日縦(ほしいまま)に之を観るの時を期(ま)つ也。今但記して□□□他日の遺志に備ふる已。」(□は破れによる遺稿)

これらの内容から解剖の執刀者は刃の扱いに長じていることが第一条件であり、それに加え「剛ならざれば」という表現を用いていることから体力も求められたことがわかる。彼ら執刀者には屍体を支える膂力だけでなく、当時の解剖の一日中に終えなければならぬという当時の解剖における制約によって、長時間に渡って正確な執刀を行う持久力も求められたのである。

3章『施薬院解男体臓図』

2節『施薬院解男体臓図』の参考解剖図の検討と比較

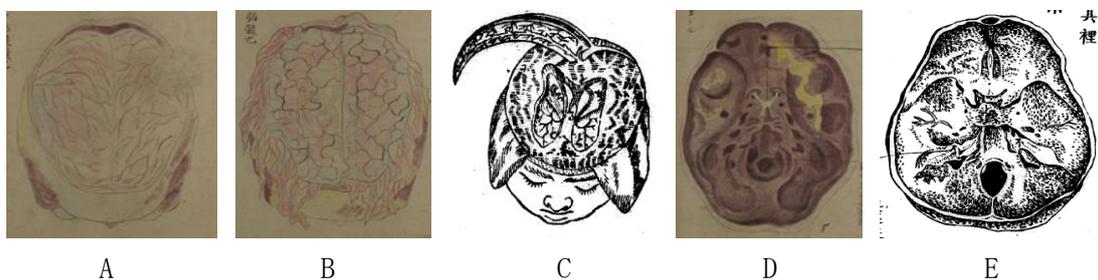
本書の挿図を描いたのは前出の『平次郎臓図』を描いた絵師と同じく円山派の絵師であるが、『平次郎臓図』が吉村蘭州1人による作図であったことに対し、本図は3人の絵師によるものである。源豊宗監修・佐々木丞平編『京都画壇の一九世紀 第2巻 文化・文政期』には「当時蘭州が60歳、応受が22歳、康敬が30歳であったことから、技術的にも脂ののった康敬が中心に写生・作図した」と推定されている。筆者も独自に検討を試みたが、参考にした早稲田大学図書館本と国立国会図書館本のものはどちらも写本であることが指摘されており、写本から作図の中心になった人物の筆跡を探ることは誤謬をくだしやすいためである。そのため本項では解剖図の図示法や図像的な比較に留める。

本図を概観したとき、『施薬院解男体臓図』の図像は大きく3つに分類される。ひとつは蘭方医学解剖図の図示法を参考にし、それらを改作した解剖図(A群)、もうひとつは『平次郎臓図』の図像を参考に改作した解剖図(B群)、最後に解剖写生の結果を重視し描かれた解剖図(C群)の3つである。

筆者分類のA群の図像は図6(図版編4-6)、図8(図版編4-8)、図11(図版編4-11)、図17(図版編4-17)、図18(図版編4-18)、図40(図版編4-40)、図45(図版編4-45)、図46(図版編4-46)、図51(図版編4-51)の以上9図である。

図6は鋸頭蓋骨上邊(辺)而除之視脳膜上面図(下図A)、図8は被裂脳膜觀大腦髓上面図(下図B)と、それぞれ『解体新書』神経篇開鎌管見脳罅図(下図C)の図示法を参考にしている。

図11 頭蓋除小脳髓而觀小脳髓下邊(邊)挺出者直下貫子其裏面深正中之竅(契)脊(漿)骨髓相接図(図版編4-11)は『解体新書』骨節篇頭骨中断見其裡図(図版編1-5-1部分)の図示法を参考に描かれたものと推察されるが、奥行き表現といい、細部まで細かに描き分けた手並みといい、『解体新書』の図像を上回るべきほどの非常に秀逸な図である。



A、『施薬院解男体臓図』図6

B、『施薬院解男体臓図』図8

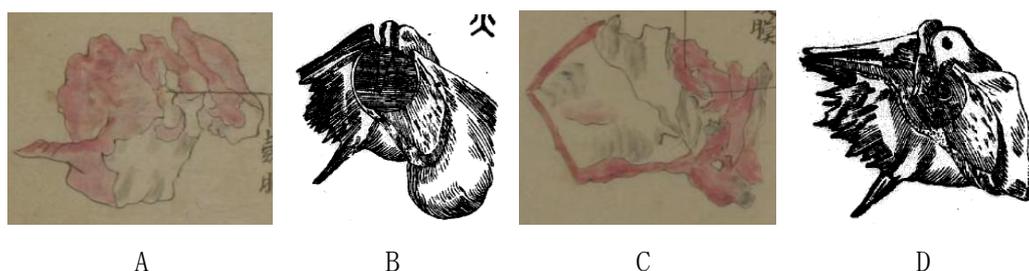
C、『解体新書』附図 神経篇開鎌管見脳罅図1

D、『施薬院解男体臓図』図11

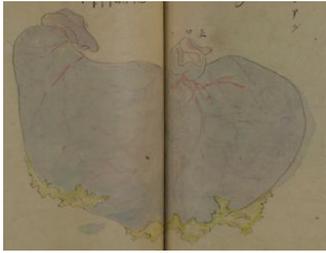
E、『解体新書』附図 骨節篇頭骨中断見其裡図

図 17 鋸耳骨視鼓膜図(下図 A)は『解体新書』耳篇聴骨隔膜懸図(下図 B)を、図 18 採聴骨於耳骨中図(下図 C)は同じく『解体新書』耳篇の聴骨膜後懸図(下図 D)の図示法を参考に描かれている。これら『解体新書』の挿図はブランカールト『新訂解剖学』からの引用図であり、小石元俊か周囲の医師が『新訂解剖学』を所有していた可能性も示唆している。

図 40 胃前面図(図版編 4-40)も『新訂解剖学』と『施薬院解男体臓図』の関係を示唆したものである。図 40 と同様の図示法で描かれた図はこれまで小石元俊や吉村蘭州が関わった解剖書に参考にされたと考えられる、『解体新書』の挿図の中にはみることができなかったが、『解体新書』の挿図に引用されたステファン・ブランカールトの『新訂解剖学』には同様の図示法で示された図が存在するのである。そのなかでも『新訂解剖学』の 1695、1696 年版の胃を示した図は同じ向きであり(1687 年版は逆位置)、おそらくこのどちらかの図を参考にしたものと推察される。『施薬院解男体臓図』には胃を示した図はあと 2 種存在するが(図 41 同(胃)後面図、図 42 割胃見内面図)それらも『新訂解剖学』の胃の図像からの影響がある。しかしこの 2 図に関しては、その表現そのものは解剖写生の結果を重視して描いているため A 群には含めなかった



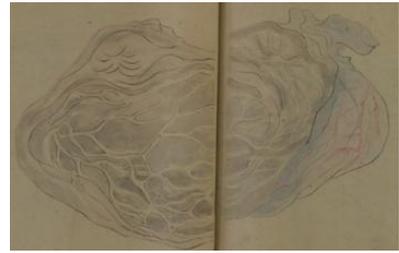
- A、『施薬院解男体臓図』図 17
- B、『解体新書』耳篇聴骨隔膜懸図
- C、『施薬院解男体臓図』図 18
- D、『解体新書』耳篇聴骨膜後懸図



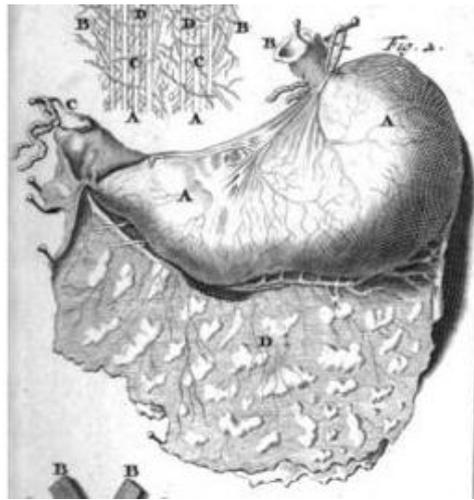
A



B



C

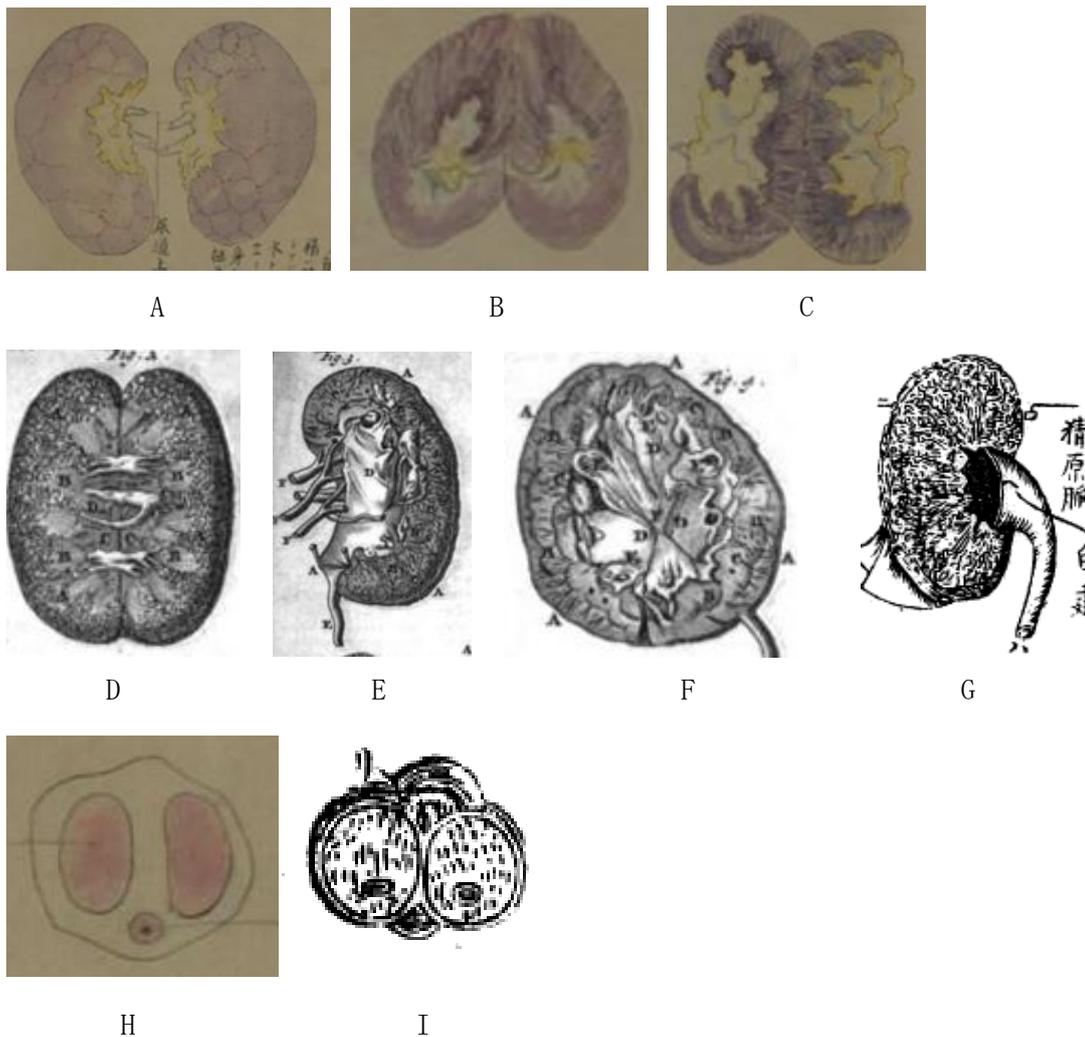


D

- A、『施薬院解男体臓図』図40 胃前面図
- B、『施薬院解男体臓図』図41 同(胃)後面図
- C、『施薬院解男体臓図』図42 割胃見内面図
- D、ブランカールト『新訂解剖学 1695』図45-2

図 45 左右腎前面図(図版編 4-45)や図 46 横断右腎・縦断左腎図(図版編 4-46)も『新訂解剖学』からの影響を示唆する図像である。『解体新書』にももの腎臓を示した図像は存在するが(下図 G)形態があまり似ていない。逆に『新訂解剖学』の図像(下図 D、E、F)は共通項が非常に多い。

図 51 陰茎及陰囊図の上部右(下図 A)の陰茎を横断ちにした図は、非常に簡素なものであるが、『解体新書』腎膀胱篇図(下図 B)の図示法を参考にしたものと推察される。



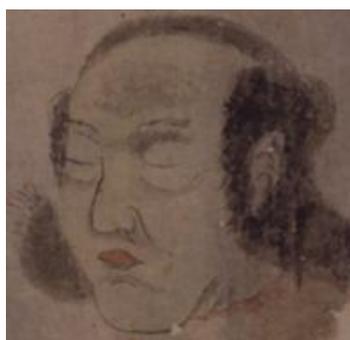
- A、『施薬院解男体臓図』図 45 左右腎前面図 B、『施薬院解男体臓図』図 46 横断右腎
 C、『施薬院解男体臓図』図 46 縦断左腎図 D、『新訂解剖学』図 53-2
 E、『新訂解剖学』図 53-3 F、『新訂解剖学』図 53-4
 G、『解体新書』図腎膀胱篇腎全形図
 H、『施薬院解男体臓図』図 51 陰茎及陰囊図上部右
 I、『解体新書』腎膀胱篇図部分

次にB群の図像は、図1(図版編4-1)、図3(図版編4-3)、図5(図版編4-5)、図7(図版編4-7)、図14(図版編4-14)、図19(図版編4-19)、図20(図版編4-20)、図21(図版編4-21)、図22(図版編4-1)、図23(図版編4-23)、図24(図版編4-24)、図26(図版編4-26)、図27(図版編4-27)、図33(図版編4-33)、図34(図版編4-34)、図53(図版編4-53)、図55(図版編4-55)、図56(図版編4-56)以上17図である。

図1は首全像図(下図A)である。このような医学解剖と関係のない図像はヨーロッパの解剖図を模倣し描かれた、『解体新書』の挿図には存在しない。本図が体系化された医学解剖書として編纂されたものではなく、解剖記録として、また解剖に立ち会えない人々にもなるべく解剖に立ち会った状況に近い視覚イメージを伝えることを目的としているように感じられる。現代でいえば、蘭方医の解剖書は解剖学の専門書であるが、元俊らの解剖書は医学解剖の状況を記録した、画像資料のような位置づけになるのであろう。これらは図像的には『平次郎臓図』の図2(下図B)や図39(下図C)の図像の改作・発展形であるといえる。



A



B



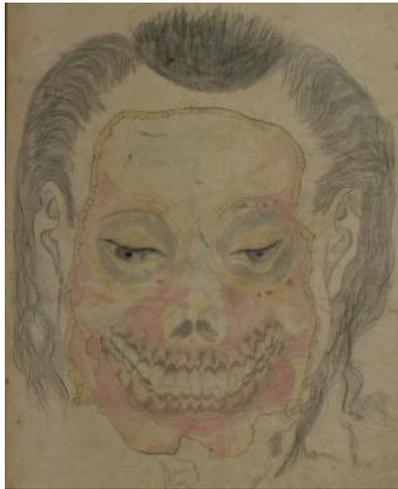
C

A、『施薬院解男体臓図』図1

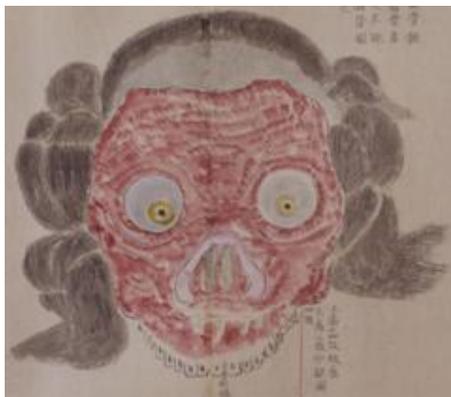
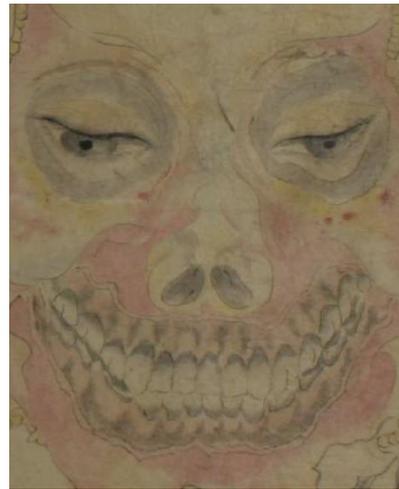
B、『平次郎臓図』図2

C、『平次郎臓図』図39

図3 副面皮此其下面図(下図 A) は『平次郎臓図』 図 41(下図 B)の図示法を継承したものであるが、『施薬院解男体臓図』 図 3 の画図はその繊細な筆致もさることながら、屍体の顔に安らかな表情がうまれている。逆に『平次郎臓図』の図 41 には無機的な肉としての屍体と蘭州の屍体に対する畏れである。蘭州は同じテーマの図像を描く中で、屍体に畏れ以上の何か神聖なものを読み取ったのではないか。



A



B



A、『施薬院解男体臓図』 図 3

B、『平次郎臓図』 図 41

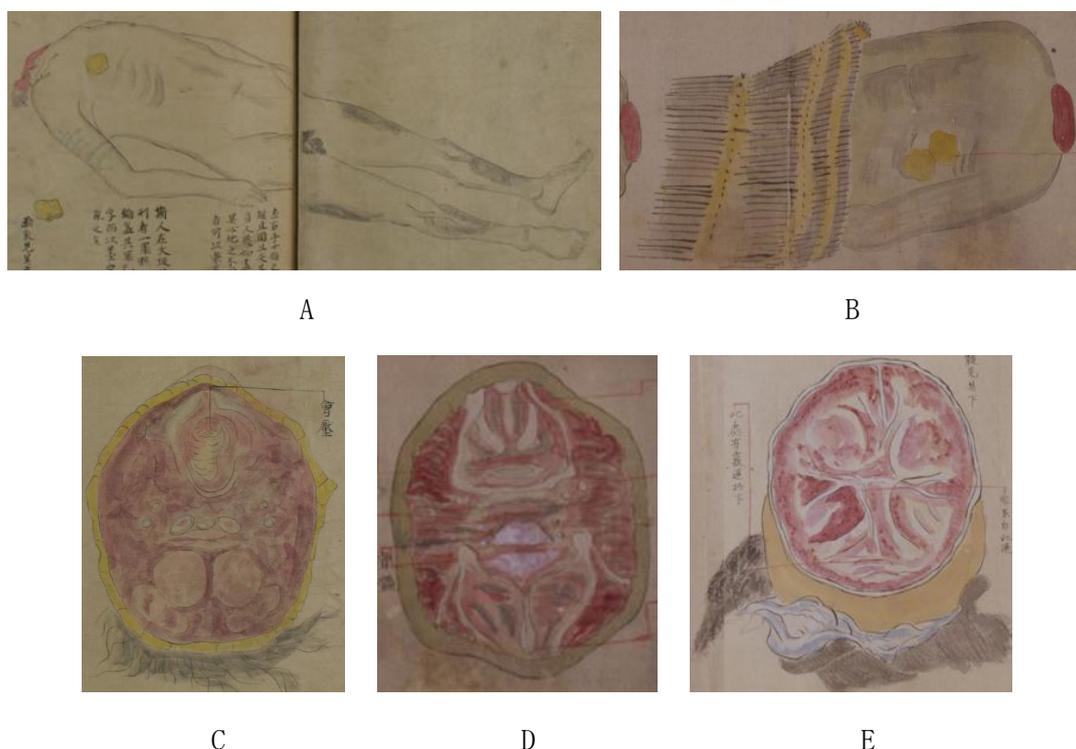
図5 副頭皮見頭蓋骨此其後面図(図版編4-5)は、『平次郎臓図』の図42、43(図版編3-42、3-43)からの改作である。『平次郎臓図』ではほとんど同じ内容の図を並べるような構成になってしまっていたが、本図では1つの図にまとめている。

図7 頭蓋骨上辺(邊)裏面図(図版編4-7)は『平次郎臓図』図45(図版編3-45)と同系統の図であるが、『施薬院解男体臓図』の方が少し浅く開いたようにみえる。

図14の舌全像図(図版編4-14)は『平次郎臓図』図53、54(図版編3-53、3-54)を参考に描かれたものと推察されるが、こちらの場合は『平次郎臓図』のものの方切り開いた肉の描写など総合的に出来がよく、逆に『施薬院解男体臓図』の方は全体的に淡泊で迫真性に欠ける。

図19 身全像図(下図A)は乳房を切り離した図を示している点が、『平次郎臓図』図4下図B)の図示法との共通項がある。描写の面では一見して体表の前後すら不明瞭な『平次郎臓図』の挿図に比べ、『施薬院解男体臓図』の挿図の方が体表に現れた胸骨や肋骨などの骨格に意識が払われており、力なく横たわる四肢や体管の運動感がよく表現できており、『平次郎臓図』からの大きな進歩を感じる出来栄となっている。

図20○断到首口(下図C)は、おそらく横断ちにした頭骨から脳を取り出し、気管内部を示した図であろうかと推察されるが、本図は『平次郎臓図』図3、44(下図D、E)の図示法を参考に頭骨内部をより詳細に描いている。



A、図19 身全像図

B、『平次郎臓図』図4

C、図20○断到首口

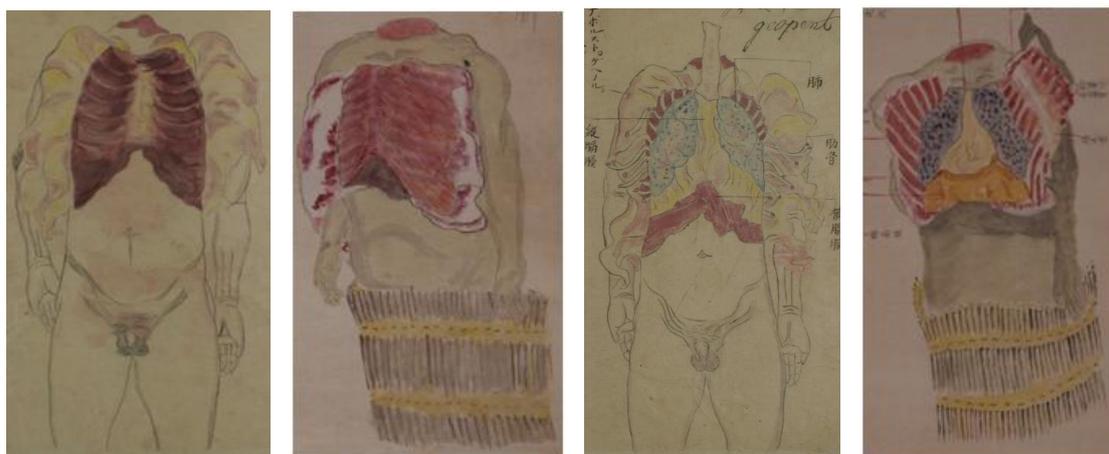
D、『平次郎臓図』図3

E、『平次郎臓図』図44

図 21 副胸皮見肋骨之上面図(下図 A) は『平次郎臓図』 図 5(下図 B)からの発展形であると推察されるが、本図も『平次郎臓図』からの進歩を感じる。

『平次郎臓図』では未発達な胸筋の下にある横隔膜や肋骨の認識が曖昧な印象を受ける図であったが、『施薬院解男体臓図』では胸骨や肋骨が露出され、滑らかな階調により主要部位の前後や凹凸も一見して分かる画となっている。

図 22 折〇〇〇骨排之於其左(右)以觀左右肺并膜及縦膜包心臓図(下図 C(〇は破れによる遺稿)) は『平次郎臓図』 図 6(下図 D)の改作である。『平次郎臓図』の場合は、胸の内部を見せるために本来横たわっている屍体が手前に起き上がっているように画かれ、写生図としても不自然であり、また短時間の写生の為か形態も不明瞭であった。本図ではおそらく横たわる屍体に足元から正面に向き合い写生したものを、『平次郎臓図』の図像と照らしながら図像として書き起こしたものであろうかと思われる。その為肋骨の描写や横隔膜の記述など『平次郎臓図』の場合よりも丁寧に描かれている。しかしながら筆の運びや色彩の濃淡、物体の距離感等他の図よりも幾分劣る仕上がりとなっている。筆者が参照した早稲田大学本は模写図であるから、細かな陰影や色彩の濃淡をうまく写し取れなかったのではないかと推察される。



A

B

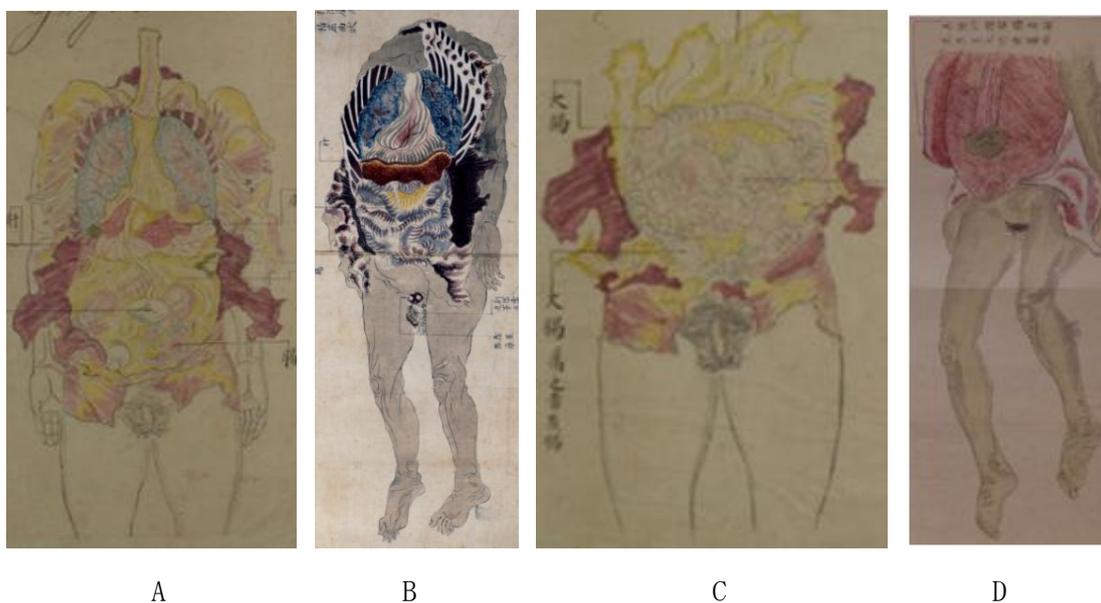
C

D

- A、『施薬院解男体臓図』 図 21
- B、『平次郎臓図』 図 5
- C、『施薬院解男体臓図』 図 22
- D、『平次郎臓図』 図 6

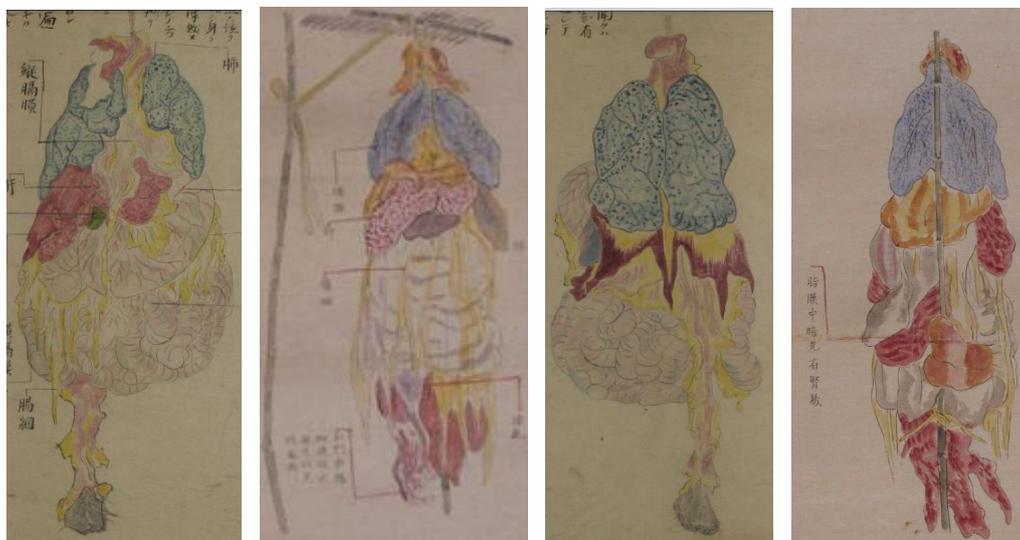
図 23 副腹皮観諸臓連続図(下図 A) は『平次郎臓図』図 8(下図 B)からの改作である。模図(図版編 2 項)との比較では大きな差異があるように思われるが、山形市蔵版ではそれほど大きな画法の変化を感じない。図示法的には『平次郎臓図』では横たわる屍体を写生的に描きながら、人の内部を見せようとしたために人体各部位のパスがくるってしまっているが、『施薬院解男体臓図』では正面からの図像に変更されたことにより図像としては安定している。

図 24 掲腸網見大小腸位列図(下図 C) は『平次郎臓図』図 7(下図 D)を参考に描かれたものと推察されるが、図の内容は腸網と大・小腸の並びを示すものに変更されている。『平次郎臓図』の方もそれほど出来のよい図ではなかったが、それを参考に描かれた本図も物体の形態や位置があいまいであり、腸が納められた腹腔の奥行きや量感が図示できておらず不出来である。



- A、『施薬院解男体臓図』図 23
 B、『平次郎臓図』図 8
 C、『施薬院解男体臓図』図
 D、『平次郎臓図』図 7

図 26 出諸臓附懸之于屋下以觀其連属之全像此其前面図(下図 A) と図 27 同(諸臓附其連属之全像)上後面図(下図 D)は同じ図像の前後を示したものであるが、これらは同様に同じ状況の前後を描いた『平次郎臓図』図 14(下図 B)と 図 15(下図 C)を参考に改作されたものであろうと推察される。



A

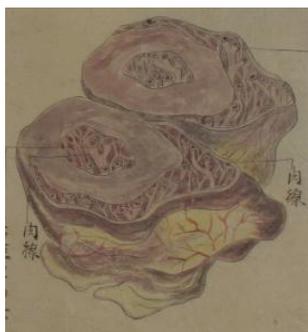
B

C

D

- A、『施薬院解男体臓図』図 26
- B、『平次郎臓図』図 14
- C、『施薬院解男体臓図』図 27
- D、『平次郎臓図』図 15

図 33 横断心臓之中體觀其左右室之厚薄小大深淺図(下図 A)と図 34 縦断心臓之上下體以其小肉腺之所攢簇図(下図 C、D)は、それぞれ心臓の内部を示した図である。図 33 は『平次郎臓図』図 21(下図 B)を、図 34 は『平次郎臓図』図 22、23(下図 D、F)を参考にしたことが推察される。『施薬院解男体臓図』には心臓の全形を示した図(図版編 4-31、4-32)も存在するが、『平次郎臓図』のものから大きく変更されており、『平次郎臓図』は参考にされなかったようである。



A



B



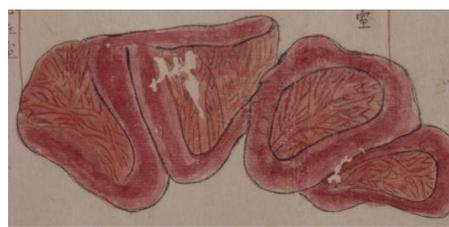
C



D



E



F

- A、『施薬院解男体臓図』図 33
- B、『平次郎臓図』図 21
- C、『施薬院解男体臓図』図 34 上部
- D、『平次郎臓図』図 22
- E、『施薬院解男体臓図』図 34 下部
- F、『平次郎臓図』図 23

図 53 軀體已除諸臟腑以觀脊梁骨之有一撓及八髖骨之灣曲図(下図 A)は『平次郎臟図』図 12、13(下図 B、C)の図示法を参考にした改作である。背骨の反りや皮と肉の間にある脂肪の描写に『平次郎臟図』からの進歩がみえる。

図 55 の副左手前後皮見其運用之諸筋図下の図(下図 D)は『平次郎臟図』図 34(下図 E)からの改作、また図 56 の副左右足前後皮見其運用之諸筋図下部の図(下図 B)は『平次郎臟図』図 37(下図 F)からの改作であると推察される。



A



B



C



D



E



F



G

A、『施薬院解男体臟図』図 53

B、『平次郎臟図』図 12

C、『平次郎臟図』図 13

D、『施薬院解男体臟図』図 55 下部

E、『平次郎臟図』図 34

F、『施薬院解男体臟図』図 56 下部

G、『平次郎臟図』図 37

最後のC群の図像は、図2(図版編4-2)、図4(図版編4-4)、図9(図版編4-9)、図10(図版編4-10)、図12(図版編4-12)、図13(図版編4-13)、図16(図版編4-16)、図25(図版編4-25)、図28(図版編4-28)、図29(図版編4-29)、図30(図版編4-30)、図31(図版編4-31)、図32(図版編4-32)、図35(図版編4-35)、図36(図版編4-36)、図37(図版編4-37)、図38(図版編4-38)、図39(図版編4-39)、図41(図版編4-41)、図42(図版編4-42)、図43(図版編4-43)、図44(図版編4-44)、図47(図版編4-47)、図48(図版編4-48)、図49(図版編4-49)、図50(図版編4-50)、図52(図版編4-52)、図54(図版編4-54)、図55(図版編4-55)、図57(図版編4-57)、図58(図版編4-58)、図59(図版編4-59)、全32図である。

図2 剝首断口図(図版編4-2)は一見頭部がどの方向を向いているのかも判然としない。図をよくみると左がわに眉と頬、耳が見え、それらの角度からこの図が延髄の付け根から下を切り剥がしそこに見える像を描いたものであることが分かる。絵師が見たままに描かれた本図は、ヨーロッパの解剖図やそれを基にした蘭方医の解剖図にはあまりみられない図像であり、それだけでも新規性がある。しかし切り裂かれた延髄から首の内部がどの程度の奥行きで、どのように骨と筋繊維が関わっているのか図を見ただけでは全くわからない。新規な図像に挑戦しそれを描いた円山派絵師らの技量には舌を巻くが、先行するものが無いゆえに情報が解剖図像としての情報が乏しく、解剖図としての課題をのこすものとなってしまった。

図4 面皮図4(図版編4-4)は図3(図版編4-3)と並べて見ると分かりやすいが、顔面の表皮を剥がしそれを孝敬ら絵師が描いたものである。鼻や目のくぼんだ部分は切り取りづらかったのか、意図的に残されたのかは不明だが、脛が図3に残った結果絶妙な表情が図3にうまれる結果となった。4図自体は特殊な画法も用いておらず、また構成も未熟である。仮に顔面の表皮を示す図であれば一部を裏返す等工夫し、その厚みや特徴をもう少し見る者に伝える絵画的な工夫が必要だったのではないか。

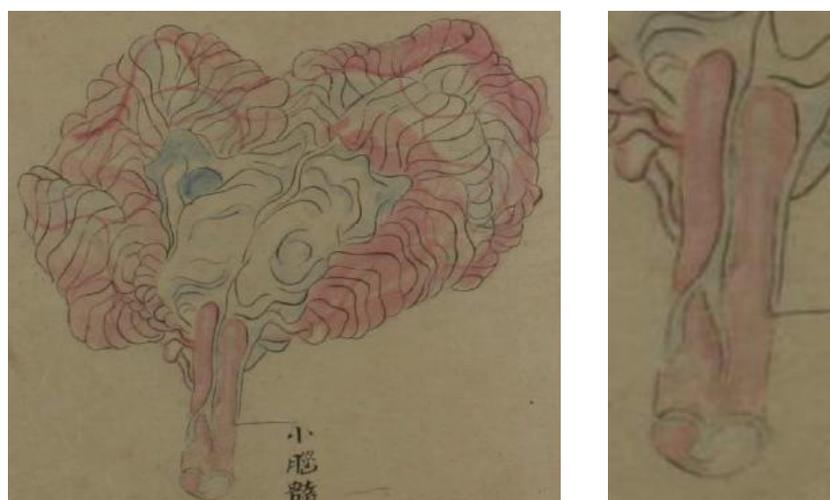
図9 大脳髓下面図(図版編4-9)は大脳の下の方を示した図である。同様に大脳を示した図は『解体新書』では神経篇脳下面図が、『平次郎臓図』では図48(図版編3-48)があるが、いずれとも図像が異なる。では『施薬院解男体臓図』がそれらの図像よりも確実な解剖結果を示しているかというところではない。むしろ柔らかな脳の形態を捉えきれなかったような形態の稚拙さが際立つものとなっている。しかしながら本図は解剖結果の記録が目的であり、良くも悪くも絵師が見えたままを記録することが目的であった。この施薬院の解剖会では図6(図版編4-10)や図2を剝首断口図(図版編4-2)や図10 除大脳髓視諸神経図(図版編6-10)みるに『平次郎臓図』とは違う手順で頭部の解剖をおこなったようであるから、取り出した脳の形態が若干異なっていたのであろう。それを以前の解剖結果に追従し図像化するのではなく、たとえ稚拙なものになろうともあくまで解剖結果を重視し図像化したことがこの図像から読み取れる。

図 10 除大脳髓視諸神経図(下図 A)は非常に高い技術で描かれた美図である。顔面の裏の形態や奥行き、構造を立体的に描き出している。しかし前述のように高い精度で描かれた部分があるかと思えば、小脳の描写は非常に稚拙でありこれは写し取った人物の技能によるものか、それとも原図もそうであったのか今後の研究が待たれる。

図 12 小脳髓全像図(下図 b)は一見稚拙に見えて脳髓の描写などは短時間の解剖で描かれたとは思えない緻密さである。模写した絵師は原図からアウトライン細密に写し取り淡彩をほどこしたのではないか。



A



B

A、『施薬院解男体臓図』図 10

B、『施薬院解男体臓図』図 12

図 13 上下顎裏面図(図版編 4-13)は図 10 の正面を写生し、本図を描く際に必要な部分のみを描いたのか、それとも写生の段階で顔面の上半分と、下顎に分解したものを描いたのか判然としない。いずれにせよ本図も蘭方医学系の解剖図には見られない新規の図像であり、口顎部周辺の構造をよく描写している。

図 16 剝出眼球以視其諸膜諸液図(図版編 4-16)図中の硝子様液図の等の細密な描写や記述に関しては短時間の解剖では判別不可能であろうと推察されることから、『平次郎臓図』と同様に『解体新書』の記述を参考にしたものと推察される。(下図)

しかしながら主要な図は蘭方医学系の解剖図には同様の図が存在しないため、本図はC群の図とした。

図 25 観大小腸所相連接震有蟲腸図(図版編 4-25)は図像的には、蘭州による新規なものであるが、その内容とくに蟲垂の記述は『解体新書』にはなく、弟子の橋本宗吉が江戸で得た蘭方医学の知識を元俊にもたらしたものと推察される。

肺の全像の前後を示した、図 28 肺前面図(図版編 4-28)、図 29 同(肺)後面図(図版編 4-29)また肺の内部を図示した図 30 横断肺図(図版編 4-30)は、『解体新書』の肺篇肺全象図(図版編 1-17-1)とは図像や図示法が異なり、解剖の結果を重視した図であることがわかる。その結果蘭方医学系の図像にくらべ、内腑の柔らかな量感を描きとることに成功している。しかし細部の記述には粗さが目立ち長い歴史を持たない小石流解剖学の限界も見える。

つぎの図 31 心前面図(図版編 4-31)と図 32 同(心)後面図(図版編 4-32)はそれぞれ心臓の前後を示したものである。同様の図示法は『解体新書』心篇図(図版編 1-18-1)や『玉函把而翁湮解剖図』図 19、20(図版編 4-1、4-2)にみられるが、『施薬院解男体臓図』のものとは大きく形態がことなるため、図示法は蘭方医学解剖図を参考にしつつ、図像の形態は施薬院の解剖結果を重視したことがわかる。



『施薬院解男体臓図』図 16 部分

図 35 肝前面図(図版編 4-35)、図 36 同(肝)後面觀其葉間與胆(膽)相連図(図版編 4-36)、図 37 肝除胆(膽)而橫斷之以見其裏面図(図版編 4-37)の 3 図はそれぞれ肝臓の前面、後面と胆嚢との連関、肝臓を横断ちにした内部をそれぞれ示している。同じ項目の図は『解体新書』では肝膽篇図(図版編 1-25-1)がそれにあたるが大きく形態が異なる。またどういう基準でそうしたのかは不明であるが、これらの図は前出の図肺臓の図と同様に見開きを利用した大きな図となっている。かといって臓附の凹凸まで細かに描いたわけではなく、また奥行きや物体の前後も曖昧であり、絵画的なインパクトは大きい解剖図としては稚拙である。

図 38 脾前面図(図版編 4-38)と図 39 同(脾)横断大小脾図(図版編 4-39)は脾臓を示したものであるが、同じ項目の図は『解体新書』では図 24 大機里爾・脾篇図(図版編 1-24-1)があるが本図は項目が同じというだけで、他は大きくその図示法も形態も異なる新規の図である。そのためか解剖図としては情報量の少ない図となっている。しかし実測的な写生の結果、写真的にみえるヨーロッパの解剖図が図像化されていることを知らしめたことは非常に意義深い。

胃を示した図 41 と 42 は A 群の項でふれたから割愛する。図 43 大機里爾全像図(図版編 4-43)と図 44 同(大機里)横断之図(図版編 4-44)は大機里爾つまり膵臓を示した図である。同様の項目は『解体新書』には、大機里爾・脾篇示大機里爾属諸部與膽管連入十二指腸図(図版編 1-24-1)に図示されているが、本図も大きく異なる図像で描かれている。本図も先の脾臓図と同様に図像化が進んだ解剖図と写生図との乖離に証左となっている。

図 47 膀胱前面図(図版編 4-47)、図 48 同(膀胱)後面觀尿道及精囊図(図版編 4-48)は膀胱を示した図である。同じ項目は『解体新書』腎・膀胱篇(図版編 4-26-1)の示膀胱陰莖直腸連続図であるが、やはり本図も大きくその形態を異にする。短時間の解剖で細かな尿道まで描写した点が特筆に値する。

図 49(図版編 4-49)は下隔膜、現代でいうところの腸間膜を示した図像である。同様の項目が『解体新書』に下隔膜篇図(図版編 1-23-1)としてある。『解体新書』のものは腸間膜自体を示すことよりも隔膜周囲の連関を示すことに主眼がおかれたものであるが、『施薬院解男体臓図』図像は絵画的に写生している、本図は模写図のためか細部の描写や陰影による奥行きの表現が弱い、しかし奥から手前に伸びるような形態で描かれた腸や総合的な構図は物体の量感がよく表されている。

図 50 は腸全像図(図版編 4-50)であるが、『解体新書』には腸の全像を示した図は存在しない。しかし『平次郎臓図』には図像は大きく異なるが、同じ項目(図版編 5-33-1)が存在するからこちらを参考にしたものと推察される。しかしながら図像的には大きく形態が異なるものであり、C 群の図とした。

図 52 左右睾丸図(図版編 4-52)は、同様の項目は『解体新書』陰器篇示膀胱睾丸陰莖連続図(図版編 1-27-1)にあるが、大きくその形態が異なるため C 群とした。

図 54 縦割脊内観神経所出図(図版編 4-54)は脊髄周辺の神経を露出させたものを記録した図である。神経についてふれた項目は『解体新書』にも存在するが、大きくその図示法が異なる為 C 群とした。

図 57 胛骨(肩甲骨)奥左臂骨頭相連図(図版編 4-57)と図 58 脱出胛骨(肩甲骨)頭於鍋骨内而見其凸凹相交合及其大〇度相連続図(図版編 4-58)は蘭方医学解剖書にはみられない図像である。そこで『平次郎臓図』をみると、図像的共通点はほとんどないが図 57 と『平次郎臓図』図 63(図版編 3-63)に、図 58 は『平次郎臓図』図 56(図版編 3-56)に同様部位を描いた図像がある。しかしながら図像的に大きな差異があり、『平次郎臓図』と同じ内容の項目を設定しつつ、施薬院の解剖の成果を活かし完全に新規に書き起こしたものである。

図 59 八髎骨後面図(図版編 4-59)は同じものを示した図は『解体新書』骨節篇髎骨図(図版編 1-6-1 部分)に存在するが、図像を比較した場合に吉村敬が写生結果から図像を書き起こす際にはほとんど参考にしていないことは明白である。『平次郎臓図』図 62(図版編 5-62-1)も同じ部位を示した図像であるが、やはり共通項は少ない。これらのことから本図は施薬院の解剖結果を重視し書き起こした図像であることがわかる。

これまでみてきたように A 群の図を作図の際に参考にしたと筆者が推察する解剖図は、『解体新書』以外ではステファン・ブランカールト著『新訂解剖学』である。『新訂解剖学』は『施薬院解男体臓図』刊行の 2 年後に、元俊の弟子の斎藤方策によってその純粋な翻訳本『蒲朗加兒都解剖図説』が成稿しているのである。(クレインス・フレデリック著『江戸時代における機械論的身体観の受容』p25)フレデリックによれば『蒲朗加兒都解剖図説』末尾に書きこまれた小石元俊の書評では、方策の訳は「解セザル事甚多シ(p 25)」というものであったというが、これによって『新訂解剖学』が小石元俊の周辺に存在していたことが明らかとなり、吉村蘭州も作図の際に参考にした可能性は高い。

3章『施薬院解男体臓図』

3節 3章総論

筆者が検討した結果、『施薬院解男体臓図』の挿図には、『解体新書』だけでなく、ヨーロッパの解剖書であるステファン・ブランカールト著『新訂解剖学』の図示法の影響もみられた。『新訂解剖学』が小石元俊の周辺にあったことは、江戸に蘭学・蘭方医学の留学経験がある、弟子の斎藤方策が『施薬院解男体臓図』刊行の2年後に翻訳本『蒲朗加兒都解剖図説(ぶらんかーと かいぼうずせつ)』を著したとされることから可能性が高いものであり、蘭州もなんらかの参考にしたものと推察される。しかし小石流の解剖図はあくまでそれらの解剖図の図示法を参考するに留まり、解剖結果から分かったこと以外は図示しなかった。

同じ絵師と同門の3名が関わった本図は、『平次郎臓図』と造形上の特徴は良く似ている。しかし『平次郎臓図』と同様の図像が存在した、図1、3、5、6、7、14、19、20、21、22、23、24、26、27、33、34、53、55、56、を比較検討した結果、図としての明快さや細部の描写に大きな進歩がみられた。これは複数の絵師が関わったことで、絵師の負担が軽減されたことと、最低でも一度解剖図の作成に関わった蘭州が、より解剖図向きの部位や構図を他の絵師らに指導できたことが、大きく影響したものと推察される。また実物のみの写生によって細密な図像を描くのは難しいが、『平次郎臓図』や『解体新書』といった先例と比較しながら写生結果から描くことは、比較的容易である。本図は円山派絵師による解剖図像の継承と発展の成果を示すものである。

4 章『医範提綱内象銅版図』

1 節『医範提綱』概説－著者宇田川玄真と百科事典『ショメール』－



『医範提綱内象銅版図』石川県立図書館

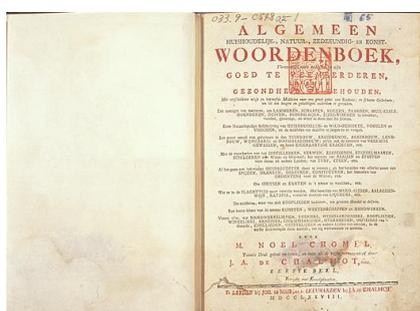
『施薬院解男体臓図』の刊行から 19 年後、『解体新書』刊行から 34 年後に杉田流の蘭方医宇田川玄真(うだがわ げんしん明和 6 年・1770～天保 5 年・1835)は、江戸蘭方医学者念願の腐食銅版画挿図を採用した翻訳解剖書『医範提綱内象銅版図』を刊行する。銅版画図の絵師には松平定信の御用絵師であり、名勝地の風景画図で有名な亜欧堂田善を採用した。

『医範提綱』は『解体新書』とは異なり本文と図譜が別に刊行され、それぞれ書題も異なる。本文にあたる『西説医範提綱積義』は、杉田玄白の高弟宇田川玄真が『解体新書』でも引用書としてあげられたステファン・ブランカールト著『新訂解剖学 (De Nieuw Hervormde Anatomia)』や、フィリップ・ヘルヘイン著『人体解剖学 (Coporis humani anatomie)』、ジャン・パルファン『外科用解剖学 (Heelkonstige ontleding van 's menschen lighaam)』等、複数の解剖書を翻訳し編集した『遠西医範』をもとに、その要約部分をまとめて文化 2 年(1805)に刊行された。本文『西説医範提綱積義』は 3 巻 3 冊からなり、神経・脳髓・心臓・呼吸器・消化器・生殖器・皮膜などの項目にわけて、それぞれにわかりやすく説明を加えている。本文「巻の一」には杉田勤による序、杉田豫による後序、門人藤井方亭(安永 7 年・1778～弘化 2 年・1845)による題言、目録、総括、上腔、中腔について「巻の二」は下腔について、「巻の三」は十器(身体の諸部位を 10 個に分類したもの。すなわち表被、皮、腺、水脈、脂膜、筋、靭帯、骨、膜、繊維)について記述されている。(クレインス・フレデリック著『江戸時代における機械論的身体観の受容』 p 239～243)

本論の論究対象となる図譜とその解説は、別冊として 3 年後の文化 5 年(1808)に『医範提綱内象銅版図』という書題で刊行された。造形的には『医範提綱内象銅版図』は日

本で初めて挿図に腐食銅版画を採用した点や、その絵師・銅版画家に当時の第一人者である司馬江漢ではなく、その実質的後継者にあたる重欧堂田善が採用された点が特筆できる。

本文『西説医範提綱釈義』とその図版編『医範提綱内象銅版図』の訳注を著した、訳者であり編著者の宇田川玄真(うだがわ げんしん明和6年・1770～天保5年・1835)は、本姓を安岡、名を璘(りん)、号を榛齋という。玄真は字である。江戸蘭方医学を牽引した杉田玄白、大槻玄沢に師事し、それぞれに後継者は居たものの、杉田玄白から「解体の事」(片桐一男『杉田玄白』p 326)を任せられ次代を担ったのはこの宇田川玄真である。玄真は伊勢国安岡家にうまれた。杉田玄白の私塾 天真楼、大槻玄沢の芝蘭堂で蘭方医学を学び、その中で頭角を現した玄真は芝蘭堂四天王(宇田川玄真、橋本宗吉、山村才助、稲村三泊)筆頭と称された。寛政9年(1798)に津山藩医で芝蘭堂(大槻玄沢の医塾)の高弟 宇田川玄随(宝暦5年・1755～寛政9年・1797)が没すると宇田川家の養子に入り、その家督を継ぐこととなる。また玄真はこの時期の優秀な蘭方医の常として、医学だけでなく蘭語学にも通じた。玄真はのちに「和蘭書籍和解御用」として幕府に招聘され、『ショメール』こと『家事百科辞典(Huishoudelyk Woordboek)』の翻訳にたずさわることとなる。この『ショメール』は日本の美術、特に『医範提綱内象銅版図』にも採用された、日本の腐食銅版画の成立に関係の深い書籍であるから以下に詳述したい。



ノエル・ショメール『ショメール』国立国会図書館

この『ショメール』については菅野陽『日本銅版画の研究』や『江戸の銅版画(新訂版)』に詳しく述べられており、主に菅野の論を参考に『ショメール』伝来の経緯と日本の腐食銅版画創成経緯、それらとの宇田川玄真との関係性を述べていきたい。

『ショメール』は原書名を『Huishoudelyk Woordenboek. (ホイスホルデリーク・ウオルデンプーク)』といい表題を現代風に訳せば『家庭用辞書*』や『家庭百科事典*』となる。フランス人ノエル・ショメール(M. Noel. Chomeel 1633～1712)の著作の蘭語訳版で、オランダ語の初版は1743年2冊本であった。そののち選者が変わり1777年に7冊本の改定増補版が刊行される。翌年1778年にはその表題と装丁を代えただけのものがやはり7冊本で刊行されている。その後さらに1786年～1793年までに、9冊本を7冊本の続編として刊行され、そののちに縮刷版の4冊本も刊行されている。口絵画家はヤン・プント(Jan PUNT・1711～1779頃)で、オランダの画家、彫刻家であることが知られる。2冊本と7冊本の両方に名前の記載があり、かつ一番多く絵描いている画家

は「F. de. BSKKER」彼は本文内の「sculp(彫版)」の記述から、翻刻も行った模様ことがわかる*その他の画家、彫版者として「B. PICART」「SPYK」の名前が挙げられている。(菅野陽『日本銅版画の研究』 p 138～142)

『ショメール』は日本に何冊か存在するが、その『ショメール』のなかでも、銅版画に関する記述の多い『ショメール7冊本』を所有していたのは、江戸の蘭学者コミュニティの元締めである桂川甫周であった。甫周が直接指導を受けた商館長イサーク・ティッチング(Issac Tisingh・1745～1812)から榎林重兵衛(寛延3年・1750～享和元年・1801)を介してもらったものである。菅野は出島の大通詞吉雄耕牛が安永5年以前には所有していた『ショメール2冊本』には銅版画に関する記述が「インク」と「彫刻法」に関するものだけであることに対し、『ショメール7冊本』は「エッチング」や「彫刻法」また「印刷法」そして「硝酸」についての記述まで存在していることから、この『ショメール7冊本』が日本の腐食銅版画創成に重要な役割を果たしたことを明らかにしている。(菅野陽『日本銅版画の研究』 p 138～142)

日本において腐食銅版画を創成したのは司馬江漢であるが、彼はこの『ショメール7冊本』の記述をもとに、腐食銅版画の創製をはたしたと細野は推察している。『解体新書』の項でものべたが、この当時の洋風画家は蘭語読解力をほとんど持たず、司馬江漢も手習いにアルファベットのローマ字読みをかじった程度である。ゆえにこの『ショメール7冊本』を訳した者がいるわけであるが、その人物は宇田川玄真の同門であり、のちに師事することにもなる芝蘭堂主大槻玄沢であるとされる。ごろの司馬江漢と大槻玄沢は友好深く、美術・博物関係の蘭書を玄沢が訳しては江漢に読み聞かせていたが、その後江漢との性格の不一致から疎遠となる。またそのころの、大槻玄沢は医学者の側面以上に桂川兄弟亡きあとの、江戸蘭語学の権威として幕府首脳との関わりが深く、当時の老中筆頭松平定信と司馬江漢の関係が悪かった為に、疎遠となった可能性も考えられる。その後『ショメール』は文化8年(1811)から30年かけた日本初の、幕府主導で行った蘭語書籍訳述計画の対象となる。それが『厚生新編』と題される訳述書である。翻訳に当たったのは馬場貞由、大槻玄沢を主として、宇田川玄真、大槻玄幹、宇田川榕庵、小関三英、湊長安の7人で、いずれも当時の一流の蘭学者であった。『厚生新編』は原本の全訳ではなく訳述者が項目を選んで訳し、総巻数は70巻に及んだ。稿本のままで保管されていたが、幾つかの遍歴をえて、昭和12年に静岡県立葵文庫より刊行された。(菅野陽『日本銅版画の研究』 p 131～132)

このように『解体新書』刊行後の杉田流蘭方医家(大槻玄沢、宇田川玄真)と、江戸の腐食銅版画との関係は深い。これは杉田流の医師が、蘭書の文章の翻訳に留まらず、その挿図すらも「翻訳」を目指したといえる証左となるのではないか。杉田流医家にとっての蘭語解剖書の翻訳は、挿図まで日本人の手によって再現することで、はじめて完成するものであったのであろう。

4 章『医範提綱内象銅版図』

2 節『医範提綱内象銅版図』と銅版画家重欧堂田善

1 項重欧堂田善の腐食銅版画技法習得経路

1 巻 1 冊の図譜『医範提綱内象銅版図』は、はじめに弟子の藤井芳亭による凡例 3 則、ブランカールト『新訂解剖学』の扉絵を参考に描かれた扉絵、そのあとに全 52 項目 65 種(筆者分類)の解剖図が続く。

扉絵は解体図を描いた重欧堂田善の弟子の新井令恭よるものと銅版画家中伊三郎によるものが存在するとされるが、筆者がみることができたものは令恭画のものだけである。解体図を描き銅版画として翻刻したのは、松平定信(まつだいら さだのぶ宝暦 8 年・1759～文政 12 年・1829)の御用絵師の腐食銅版画家重欧堂田善(あおうどう でんぜん寛延元年・1748～文政 8 年・1825)である。

田善は本名を永田善吉といい、岩代国須賀川(現・福島県須賀川市)に酒造業ののち染色業を営む 5 代目惣四郎の次男として生まれた。腐食銅版画を日本で「創製」した司馬江漢より一つ下の同世代である。田善は「異国染」と称した家業の染色の技術をみがくかたわら、画僧月僊(げっせん享保元年・1741～文化 6 年・1809)に画を学んだとされる(磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史— 下巻』 p 20～21)。生業をもちながら余技として画とかかわった田善であるが、寛政前半の田善はいまだ絵も描く紺屋の範疇をでてはいない。転機は白河藩藩主 松平定信に見出され御用絵師となってからである。その庇護下で谷文晁(たにぶんちょう宝暦 13 年・1763～天保 11 年・1840)に師事し画をみがいたとされる(磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史— 下巻』 p22～23)。

松平公に召抱えられた時期は磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史— 下巻』では寛政 7 年(1795)か 8 年(1796)に、菅野陽『江戸の銅版画(新改訂版)』には寛政 6 年(1794)に、白川城下会津町に移り住み御用絵師となったとされる。そして寛政 9～10 年(1797～98)には江戸にあり西洋画と腐食銅版画の技法を習得していたとされる(磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史— 下巻』 p34)。洋風画や腐食銅版画の技術については、はじめ腐食銅版画の第一人者である司馬江漢(しば こうかん)に指導をあおいだが、性格が合わず破門になったとされる。では田善の銅版画技法の修得は誰によってなされたのか。この場合は定信に仕えた蘭学者によって示唆を受けたものとするのがであるが磯崎や菅野といった先行研究者の論である。筆者も同じ主に仕えた、いわば「同僚」の蘭学者や洋風画家からの示唆が自然であると考えているが、先行研究においても決定的な資料が現在のところみつかっておらず、今後の研究が待たれる。

田善との関係がもっとも具体的にわかっている蘭学者は、この『医範提綱』を執筆した宇田川玄真である。玄信は文化 2 年(1805)に『医範提綱』を出版したが、このときは本文のみである。その附図はおくれて 3 年後の文化 5 年(1808)に刊行され、15 枚 52 図

の解剖図を田善が制作したのである。前述のように玄真はこれよりもずいぶん後に、江漢も腐食銅版画制作の助けにした『ショメール』の「エッツェン(エッチング)」の項目を翻訳しているので、田善に用具や技法の解説をすることも難しくはなかったとおもわれる。

このほかで銅版画技法を伝えることができたと考えられる人物に前出の桂川甫齋と森島中良がいる。これまでもたびたび名のあがる当時の蘭学者コミュニティの主宰であった桂川甫周の実弟である。中良は寛政4年(1792)から寛政9年(1797)まで、田善の仕えた老中筆頭松平定信に出仕している。またそれ以前の天明7年(1787)には著書『紅毛雑話』のなかで「銅版の法」について著し、『ショメール』の銅版用具を模写・転載しているのである。

中良と田善の関わりを伝える文献的資料は存在しないが、田善の主松平定信が『退閑雑記』に腐食銅版画制作の原理と技法を簡単ながら触れており、それらが森島中良によってもたらされたことは間違いないであろう。またそういった桂川家と定信の関わりに加え、司馬江漢に蘭語書籍を翻訳しオランダの知識をもたらした大槻玄沢も、『ショメール』の項でのべたように幕閣との関わりの深い学者であるから、田善がその知識を定信や桂川家から得ていた可能性もある。

このほか森島中良のほかにも松平定信の周囲には銅版画にくわしい人物がいる。それが備中松山藩士松原右仲である。松原右仲は前野良沢、長久保赤水、立原翠軒と親交をもち、大槻玄沢の芝蘭堂主宰の新元会にも参加している。松平定信は松原右仲に使いを出し、その結果背^メ漆(せしめうるし)を防触剤とした腐食銅版画の製法を知ったらしいことが、定信の著した『退閑雑記』にはある(磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史— 下巻』p41)。しかし、定信の『退閑雑記』の腐食銅版画に関する記述の通りに、製版しようとしても不可能な点がいくつかあり(菅野陽『江戸の銅版画』p105)、『退閑雑記』の記述によって右仲の技法が明らかにされたわけではないが、当時の腐食銅版画技術の普及を窺うことができる。

このように定信に仕えるまでは腐食銅版画に関しては素人であった亜欧堂田善であるが、幕府の有力なパイプとそこに蓄積されたオランダ美術の知識をもって、田善流ともいえる江漢とはまた質の異なる腐食銅版画をつくりあげていったことが推察される。

4章『医範提綱内象銅版図』

2節『医範提綱内象銅版図』と銅版画家亜欧堂田善

2項『医範提綱内象銅版図』の表現 1—原図との比較から—

『医範提綱内象銅版図』の挿図制作の際に田善が参考にしたヨーロッパの解剖書として、先行研究で明らかとなっているものが次の6冊である。ステファン・ブランカールト『新訂解剖学』、ジャン・パルファン(通称パルヘイン)『外科用解剖学(Heelkonstige ontleding van 's menschen lighaam)』、フィリップ・ヘルヘイン『人体解剖学(Coporis humani anatomie)』、ヨハン・アダム・クルムス『ターヘル・アナトミア』、ジョン・ブラウン『新筋図表(Myog-raphia Nova)』、ゴヴァルト・ビドロロー『105 図の人体解剖学』あるいはウィリアム・カウパーによる『105 図の人体解剖学』の剽窃本『114 図の人体解剖学(Anatomia coporum humanorum centum et quatuordecim tables)』(『解体新書』の挿図と同様の理由から、本章でも『105 図の人体解剖学』からの引用として扱う)。

これらはすべて腐食銅版画による挿図であったが、『医範提綱内象銅版図』では日本で初めて解剖書に採用している。杉田流の高弟であった宇田川玄真は、師玄白が成し得なかった銅版画挿図による翻訳解剖書の刊行を成し遂げたのである。『解体新書』と同様に『医範提綱』はヨーロッパの解剖書の翻訳本であるが、前者が原書の構成にならったことに対し、後者はヨーロッパの解剖書を原典としているものの、それらを翻訳し得た情報を宇田川玄真があらたに構成しなおしており、『解体新書』にくらべ編著者の医学思想が前に押し出されている。この点はクレインス・フレデリック著『江戸時代における機械論的身体観の受容』 p 282 において次のように評されている。

「『医範提綱』には二面性が存在する。つまり神経については内景医学的思想背景を基に捉え、また、神経以外の部分については西洋医学の諸説をそのまま受容している。内景医学的に理解されている神経思想が『医範提綱』の基調を成し、その神経思想とともに他の生理機能についての諸説が紹介されているという点が『医範提綱』の特色である。」

宇田川玄真の師杉田玄白らが編纂した『解体新書』では、原書『ターヘル・アナトミア』の翻訳に杉田玄白の注を挿入するという構成であったが、『医範提綱』は厳密な意味での翻訳の底本は存在せず、玄真が複数のヨーロッパ解剖書を翻訳し、そこから導き出された独自の医学体系をまとめた医学書であるといえるのである。

このような方針で編纂された『医範提綱』であったから、やはりその挿図にあたる『医範提綱銅板全図』もそのまま引用されたものはごく一部で、ほとんどが原図からなんらかの改作がされている。『医範提綱銅板全図』では全てで52項目の図が挿入されているが、そのなかで原図から一切の意図的な改作が行われていない解剖図は6図のみであり、図版編5-14-1の43図「単筋単繊維図」、44図「複筋複繊維図」、45図「重複繊維図」、

47 図「腓筋踵図」、図版編 5-15-1 の 48 図「全體諸筋図」、49 図「臑臂筋図」がそれにあたる。また全て左右反転されているが、原図からの大きな改変がみられないものとして、図版編 5-16-1 の 52-3 図「孕至二十五日之胎児図」、52-4 図「四十日之胎図」52-5 図「二月或 2 月除之男胎図」、52-6 図「三月之胎」の 4 図が挙げられる。これら以外の図はすべて原図から改変がなされているのである。改変をおこなっていないものとしてあげた挿図の中にも、原図と詳細に比較したときには微細な違いがみうけられるが、これは亜欧堂田善が敷き写しをせず、模倣したからであろうと推察される。直武とは違い亜欧堂田善は専門の絵師であり、それも松平定信の御用絵師でもあった田善には絵師たる矜持があったのであろうか。

また、『医範提綱内象銅版図』の挿図では、『解体新書』附図にみられたような、2p を使った大型の解剖図(図版編 1-7-1、1-30-1、1-31-1、1-32-1、1-33-1)は採用されていない。

以上の点をふまえ、田善の『医範提綱内象銅版図』における挿図の特徴を列挙すると以下のようなになる。

- 1、腐食銅版画の採用。
- 2、原図からの積極的な改作。
- 3、『解体新書』にはあった大型の解剖図の不採用。
- 4、複数のヨーロッパ原図を組み合わせての作図。

4章『医範提綱内象銅版図』

2節『医範提綱内象銅版図』と銅版画家亜欧堂田善

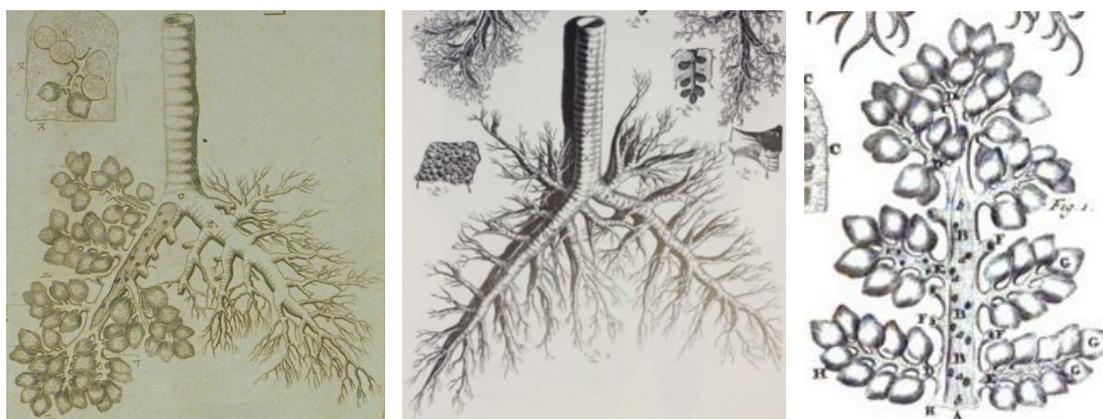
3項『医範提綱内象銅版図』の表現 2—亜欧堂田善による複合解剖図像—

2項で挙げた『医範提綱内象銅版図』の挿図の特徴1、2、3についてはすでに述べた通りであるから、4について本項では述べていく。

亜欧堂田善が解剖図作成の際に参考にしたとされるヨーロッパの解剖図6種、『新訂解剖学』、『外科用解剖学』、『人体解剖学』、『ターヘル・アナトミア』、『新筋図表』、『105図の人体解剖学』と、『医範提綱内象銅版図』の各解剖図を比較すると、『解体新書』とは異なり、複数の解剖図を組み合わせたものが存在することがわかる。

それがもっとも明瞭な挿図は『医範提綱内象銅版図』図9である。『新訂解剖学』の図15と『105図の人体解剖学』図25からの引用図である本図は、『105図の人体解剖学』を中心に、『新訂解剖学』の図像にみられる肺胞を描き足したものである。

『105図の人体解剖学』を原図にした部位は、気管の太さや形状が異なることから、原図を参考にした臨模であることが分かり、それにしては陰影表現も光源を意識した緻密なものである。また『解体新書』の挿図のように底面への映りこみの影は除外されている。



A

B

C

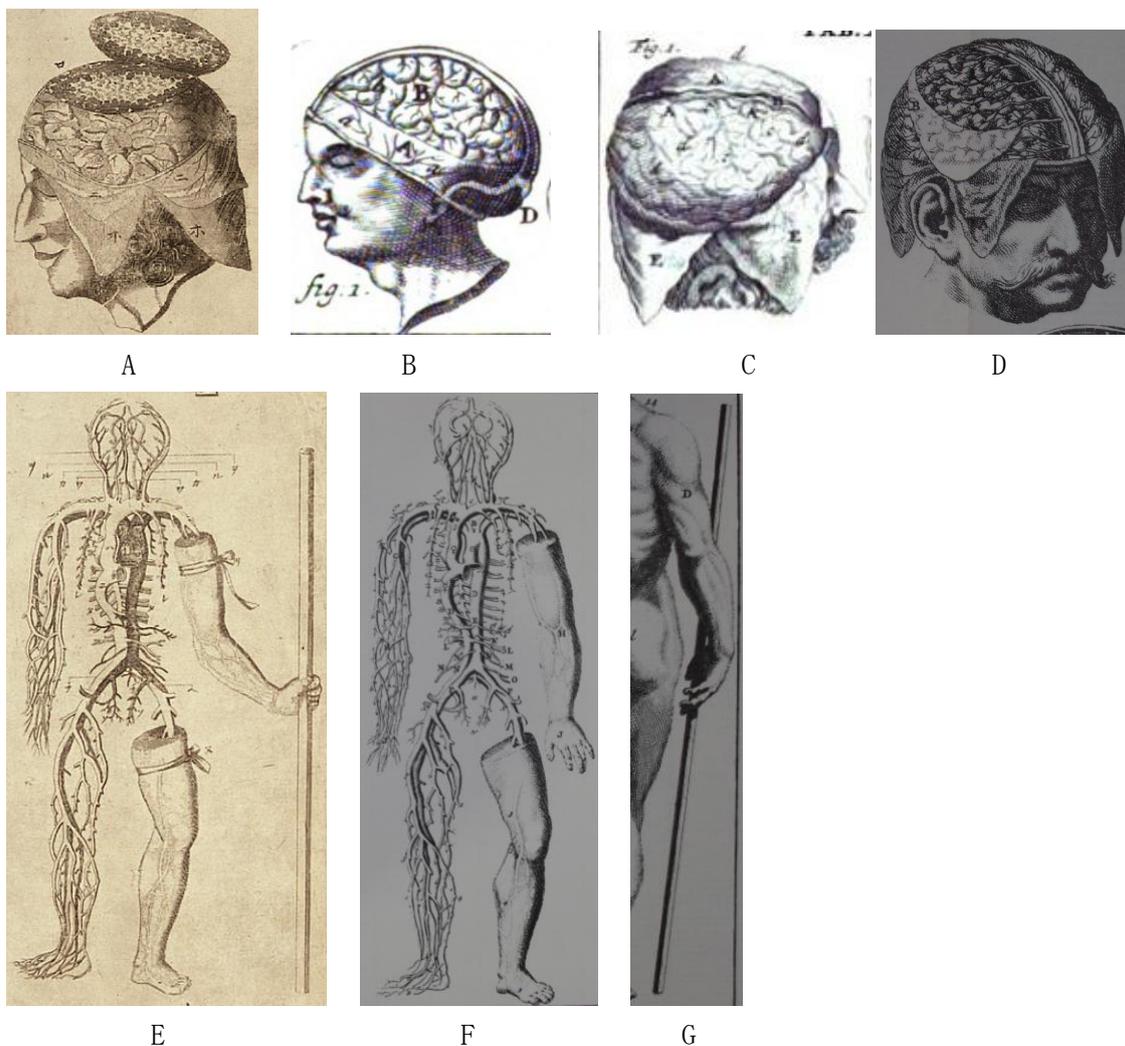
A、『医範提綱内象銅版図』図9

B、『105図の人体解剖学』図25部分（上下反転）

C、『新訂解剖学』図15

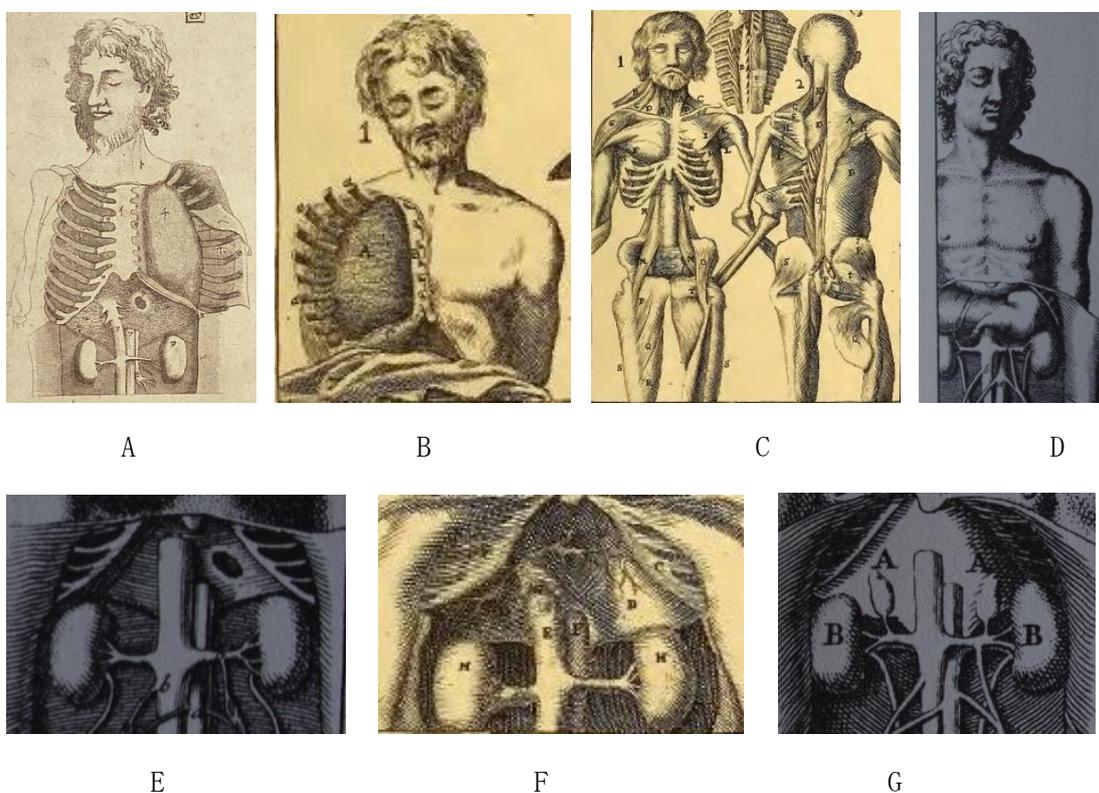
図2(図版編5-2-1)は『新訂解剖学』図22-1を基準に『新訂解剖学』図16-1や『ターヘル・アナトミア』図8の図像を複合して描かれたと考えられる。

図13(図録篇5-6-1)は『ターヘル・アナトミア』図16、17と図2の複合図であろうと推察される。本図像の改変は、解剖学的に必要な迫られたものではなく、田善流の絵画的演出であったと推察される。



- A、『医範提綱内象銅版図』図2
- B、『新訂解剖学』図22-1
- C、『新訂解剖学』図16-1
- D、『ターヘル・アナトミア』図8
- E、『医範提綱内象銅版図』図13
- F、『ターヘル・アナトミア』図16、17
- G、『ターヘル・アナトミア』図2部分

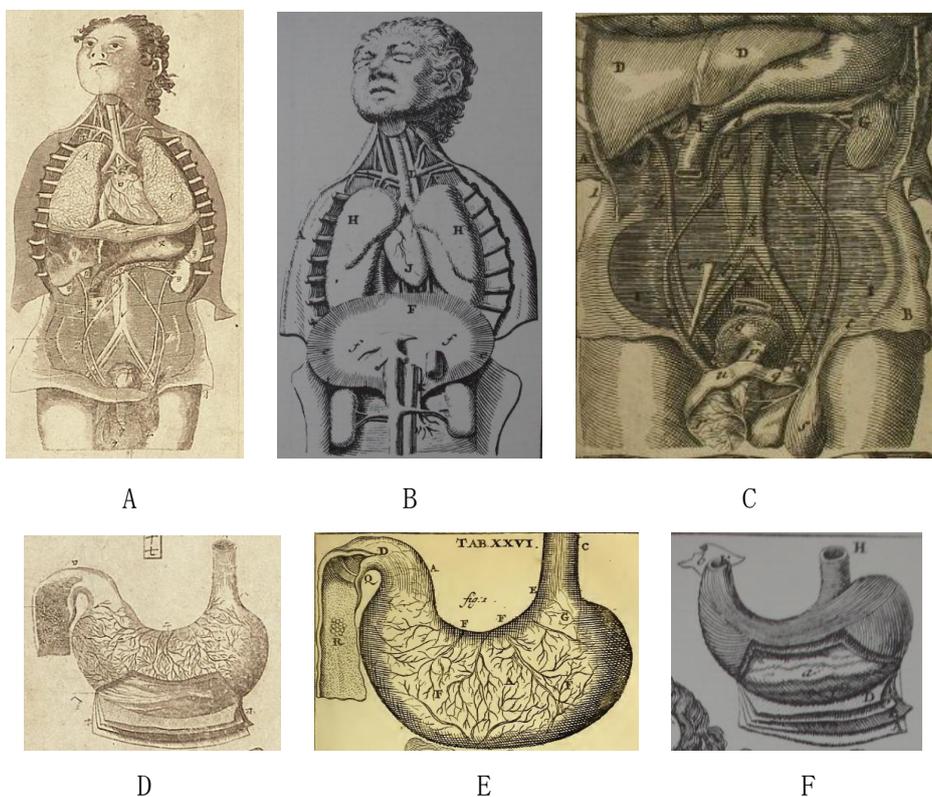
図 14(図録篇 5-6-1)も複合図である。まず頭部はクルムス『ターヘル・アナトミア』図 26 やヘルヘイン『人体解剖学』図 25-1 から着想したものであろうが、原図にはあまり似ていない。また向かって右胸の露出させた肺の図像はおそらくヘルヘイン『人体解剖学』の図 13-1 にみられる図示法を真似たものである。また横隔膜から下の部分はクルムス『ターヘル・アナトミア』図 26 の描写を転用し、この他の細部の描写はヘルヘイン『人体解剖学』図 12-1 を参考にしたものとおもわれる。しかしこの横隔膜周辺の図像の原図は、すべて女性の体内を示したものであるから、クルムス『ターヘル・アナトミア』図 25 の男性像にみえるような、男性に存在する内臓が割愛されるなど解剖学的に厳密でない部分も存在する。



- A、『医範提綱内象銅版図』図 14
- B、『人体解剖学』図 13-1
- C、『人体解剖学』図 25-1、2
- D、『ターヘル・アナトミア』図 26 右男性像
- E、『ターヘル・アナトミア』図 26 左女性像部分
- F、『人体解剖学』図 12-1
- G、『ターヘル・アナトミア』図 25 左中央男性像部分

このほか複合図であることが一見して明らかなものとして図 16(図版編 5-7-1)が挙げられる。本図はクルムス『ターヘル・アナトミア』図 13 の左側の男性像とジャン・パルファン『外科用人体解剖学』図 10-1 を複合したものである。『ターヘルアナトミア』挿図にくらべ、奥行きが階調が幅広い点は特筆すべきものではないか。またヘルヘイン『人体解剖学』や、パルファン『外科用人体解剖学』の臓附の表現を参考にしてか、肺や心臓にも細かな点描で質感表現が施されている。それにくらべ、人物の顔の陰影が火傷のようであり立体感が表現しきれていない。田善は人物の表情が不得手としたのであろうか。

次にあげるのは図 17 である。この図はブランカールト『新訂解剖学 1687』図 26-2 とクルムス『ターヘル・アナトミア』図 20 の複合図である。『新訂解剖学』にみられる胃の毛細血管を細密に模倣し、また『ターヘル・アナトミア』図の応用で胃の積層構造をよく図示した。



- A、『医範提綱内象銅版図』図 16
- B、『ターヘル・アナトミア』図 13 右
- C、『外科用人体解剖学』図 10-1
- D、『医範提綱内象銅版図』図 17
- E、『新訂解剖学 1687』図 26-2
- F、『ターヘル・アナトミア』図 20

図 18(図版編 5-7-1 部分)は、『ターヘル・アナトミア』図 20 を中心にヘルヘイン『人体解剖学』図 5-2 等の図像を参考に虫垂を書き加えた。

図 19(図版編 5-8-1)は『ターヘル・アナトミア』図 22 を中心に『人体解剖学』図 5-3 の盲腸の図や『新訂解剖学』図 48 等の記述を参考に複合している。

図 23(図版編 5-9-1)は『ターヘル・アナトミア』図 18 とパルファン『外科用人体解剖学』図 1 の図像を組み合わせたものである。

図 31(図版編 5-11-1)は『105 図の解剖学』図 44 を基準に、ヘルヘイン『人体解剖学』図 9 に見られるような方法で図像化している。田善は『105 図の解剖学』の図像を迫真的なままに引用せず、うまく図案化している。

図 38(図版編 5-12-1)は『外科用解剖学』図 17-3 と図 17-2 を合わせたものと思われる。

図 39(図録篇 5-13-1)は『105 図の解剖学』図 1 とヘルヘイン『人体解剖学』図 4 等を組み合わせたものである。『105 図の人体解剖学』の図 1 は図版編 5-13-2 に示したように人物の全身像であるが、ここでも田善は人物像の陰影をうまく表現できていない。アウトラインこそよく似せているが、肝心の陰影が稚拙である。ヘルヘイン『人体解剖学』からの引用部分は滑らかな陰影のグラデーションで再現した田善であるが、田善の解剖図は画図の出来栄が安定しない傾向にある。

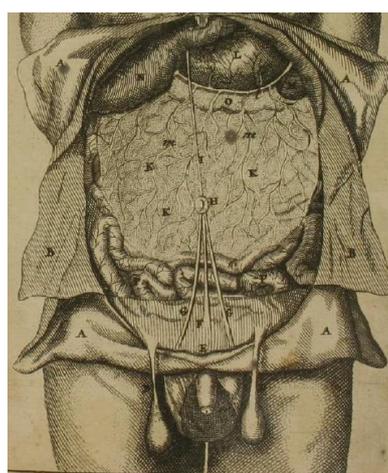
以上 12 図が『医範提綱内象銅版図』の挿図のうち、ヨーロッパ原図を参考に描かれたと目される解剖図である。ここに記載しなかったものでも、いくつかヨーロッパ原図を参考に描かれたと目される図もある。図 6(図版編 5-3-1)、図 8(図版編 5-4-1)、図 10、11(図版編 5-5-1)、がそれにあたるが原図と比較したときに図像の形態や陰影による色味に大きな差異がみられる為に、ここでは扱わなかった。



A



B



C

- A、『医範提綱内象銅版図』図 39
- B、『105 図の人体解剖学』図 1
- C、『人体解剖学』図 4

4章『医範提綱内象銅版図』

3節 4章総論

本章では『医範提綱内象銅版図』の挿図を、図像の参考にしたヨーロッパ解剖書の挿図や日本の洋風解剖図の嚆矢となった『解体新書』の挿図と比較し、『医範提綱内象銅版図』の図像的特色や、新奇な技法がもたらされた背景等について言及してきた。

『医範提綱内象銅版図』ではその表題が示すように、日本で初めて解剖書の図像に銅版画が採用された解剖書である。松平定信の御用絵師、腐食銅版画家として名を成していた重欧堂田善は、その技術を解剖図にもいかんなく発揮した。特にその階調の滑らかな美しい陰影表現は図像の各所に活かされている。しかしそれは、内臓や骨格の表現に対してのみであり、解剖図の中にときおり挿入される人物像には活かされなかった。この点は筆者にとって非常に不可解なものである。

田善は特定の型が存在する人物像であれば、その型の範囲内で巧みに描くが、写生的に描くときにはその画技の限界を露呈する結果となっている。そして田善はこの点を弱点であるとは考えていなかったのであろう。それゆえに『医範提綱内象銅版図』の人物像にも不必要な改作を加える結果となってしまっている。御用絵師重欧堂田善に求められたものは、今日での写真機やコピー機としての技能である。主の定信もそれを田善に求め、その為の技術を森島中良らの蘭学者を通して彼にあたえた。田善は与えられた技能を高め、彼の遺した日本の名勝地の風景画や、オランダ銅版画図の模写画はこんにちの目でみても卓越したものである。田善は洋風画表現の中でも「写真的に見える型」を学んだ絵師でありその範疇においては卓越した画技をみせたが、不慣れな型や未知の型に触れたときに、その限界を示すこととなった。田善もいまだヨーロッパの画法を体系的には習得していなかった過渡期の絵師であったのである。いみじくもこの解剖図制作はその試金石となったといえる。

5 章 『解剖存真図』

1 節 南小柿寧一の来歴と『解剖存真図』の概要



『解剖存真図(模本)』 東北大学附属図書館蔵

『医範提綱内象銅版図』刊行から 11 年後の文政 2 年(1819)には江戸の蘭方医家桂川の門人であり淀・稲葉藩医の南小柿寧一(みながき やすかず 天明 5 年・1785～文政 8 年・1825) (小川鼎三『解剖腎真図 解説』 p 5) が、小石流の解剖図に触発され『解剖存真図』という小石流の解剖書と、江戸蘭方医学の解剖書を折衷した解剖書を編纂した。

南小柿寧一が著述し作図もおこなった解剖図である本書は、文政 2 年(1819)に撰し、小石元俊の解剖図巻に触発された為か、江戸蘭方医家の解剖書では珍しく巻本形式の乾、坤巻の 2 部に分かれた彩色図巻である。筆者が研究対象とした『解剖存真図』早稲田大学版は写本である。

南小柿寧一は通称を甫祐、字は清人(せいじん)、西崖(せいがい)と号し、幕府の奥医師であり『解体新書』の編纂に関わった蘭学者であり蘭方医の桂川甫周に師事した。甫周からは医術だけでなく天文地理についても教えを受け画に秀でたとされ、小川鼎三によれば寧一の叔父に竹沢養溪という画人がいて、その教えも受けていたらしい(小川鼎三『解剖存真図 解説』 p 5)。また師甫周も洋風画も嗜んでいたことが知られるから、甫周やその周囲の蘭学者・洋風画家から洋風画のイロハも施されたことであろう。

これまで紹介してきたように、当時の解剖は一日のうちに刑場内で行わなければならない、解剖に適した環境に死体を運んでゆっくり観察することができなかった(小川鼎三『解剖存真図 解説』 p 4)。小川鼎三の『解剖存真図 解説』によると、この『解剖存真図』はこういった当時の解剖事情を踏まえ「不適な条件をある程度克服して寧一がおそらく独学で十数年以上をかけて(中略)成し遂げたもので、江戸時代の人体解剖図集として最も傑作に属するといえる(小川鼎三『解剖存真図 解説』 p 4)」ものであるとい

う。また『解剖存真図』は小石玄俊の解剖図に触発され著されたことが「乾巻」の序文によって知ることができるが、それによると玄俊のものは細部の粗さが目立ちそれを寧一は残念におもっていた。そこで(おそらくは)師の甫周の計らいで参加した40余体の解屍の経験と、「一屍に就て一臓一腑を見る」主義で「一屍毎に必ずその真を写し」とったという(小川鼎三『解剖存真図 解説』p5)。このように写生した解剖結果を、自身の解剖図に使用するという方式は、杉田玄白や師の桂川甫周の周辺の江戸系蘭方医のものではなく、小石流漢方医の様式に倣ったものと推察される。逆に説明文中の解剖学用語に関しては江戸系蘭方医の医学書を参考にした部分が「甚だ多い(小川鼎三『解剖存真図 解説』p6)」とされる。この点に関しては筆者自身によって本項内で検討していく。

『解剖存真図』は乾・坤巻の2巻構成であることはすでにのべた。まず乾巻の冒頭に桂川6代甫賢(国寧・くにやす)が序文を寄せる。甫賢は甫周の孫にあたり、甫周にも幼少よりその才をみとめられていた。序文には、京都の医師小石元俊(享保3年・1743～文化5年・1808)による解剖の成果の不十分な点を補うことを意図し、多くの西洋の解剖図も参照して編纂を行い、二巻の図にまとめあげたと書かれている(小川鼎三『解剖存真図 解説』p10～11)。

次に、寧一自身による文政2年(1819)10月の「附言」があり、これによって寧一が40余りもの解剖に参加し詳細に写生したことや、「諸臓器の色が死刑後すぐの解剖では生体と変わらないことを主張している(小川鼎三『解剖存真図 解説』p7-8)」。

二つの序文の余白には、この図を見たシーボルトが短い賛辞を書き込んでいる。その後「剥頭皮見脳蓋」から「支体全骨」まで、説明を付した43図の解剖図を収める。坤巻は、「身断首痕(みのだんしゅのあと)」から「胞衣臍帯連属(えなとさいたいのれんぞく)」までの40図を収める。その後には猿の解剖図四図を載せるが、これには文政5年(1822)の年記があり、全体が成立した後に蕨蘭堂主人がつけくわえたものである(小川鼎三『解剖存真図 解説』p7)から、本論では言及せず、図版編にも記載していない。坤巻末に諸家の跋文を載せる。まず大槻玄沢が漢文の跋をのべる。次いで宇田川玄真と杉田立卿(玄白の子)がそれぞれオランダ語で跋を寄せる。さらに大槻玄幹(玄沢の子、茂禎)と玄沢の弟子で一関藩の医師佐々木中澤がそれぞれ漢文の跋を加え、本図の制作優秀なことを表している。寧一はこのような解剖図作成の業績を認められ、玄沢が編纂した『重訂解体新書』の附図をのちに描いている。『重訂解体新書』の跋文には「桂川家では歴代、英才教育を行ってきたこと、そのひとりに寧一が選ばれた(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』p135)」とまで絶賛されている。

ここで寧一が『解剖存真図』の図の参考にした解剖図についてふれていきたい。寧一が参考にしたとされる解剖書で現在のところ参考にしたと目される解剖書は、小石流の漢方解剖書が2冊、ヨーロッパ解剖書が8冊、それに『解体新書』を加えた11冊であろうか。

『解剖存真図』序文に「京都の医師小石元俊による解剖の成果の不十分な点を補うことを意図」したとあることから、寧一は小石流の解剖書『平次郎臓図』と『施薬院解男体臓図』等を図の参考にしたと考えることができる。またこれまでの江戸系蘭方医の解剖書と同じく、『解剖存真図』には図の参考にしたヨーロッパ解剖書について詳しく記載されている。『解剖存真図 乾巻』の附言に記載された引用書が、クルムス『ターヘル・アナトミア』、ブランカールト『新訂解剖学』、トマス『改新解剖学』、パルフィン(パルヘイン)『外科用人体解剖学』、スメリー『解剖図譜および産科実地の説明と要約(Set of anatomical tables, with explanations, and an abridgment, of the practice of midwifery)』、5冊(附言に記載があるが先行研究でも著者書題不詳となっている『ハンゲイリア着色解剖図』と、解剖図の引用を明らかにできなかった『ヘイステル解体書』[ヘイスター著『外科指針』]は今回は除外した。)、附言に記載がないがこれまでの先行研究で引用が指摘されている解剖書として、アルビヌス『エウスタキウス解剖学解題』が1冊と、最後に『解体新書』を合わせて8冊の和漢蘭の解剖図を参考に作図されている。

ヨーロッパ解剖書のうち、クルムス『ターヘル・アナトミア』、ブランカールト『新訂解剖学』、トマス『改新解剖学』、パルヘイン『外科用人体解剖学』については、これまで論及してきた解剖図にも引用された定番的解剖書であるから本項では詳述を割愛。

ローレンツ・ハイステル(ハイスターとも。Lorenz Heister, 1683~1758)著『外科指針』は、杉田玄白が記録に残るものの中で、もっとも早くにみた西洋解剖学書であり、大槻玄沢と杉田玄白の共著である『瘍医新書』の原本でもあり、江戸の蘭方医家のなかでは著名な解剖書である。

ウィリアム・スメリー(William Smellie 1697~1763)著『解剖図譜および産科実地の説明と要約(Set of anatomical tables, with explanations, and an abridgment, of the practice of midwifery)』は、『解剖存真図』刊行よりも前の1799年に片倉元周(鶴陵)により翻訳され『産科發蒙』として刊行されている(森末新『将軍と町医—相州片倉鶴陵伝』 p 206)。

ベルナルド・ジークフリード・アルビヌス(Albinus Bernard Siegfried 1697~1777)著『エウスタキウス解剖学解題(Tabulae anatomicae clarissimi viri Bartholomaei Eustachii quas è tenebris tandem vindicates.)』はその書題の通り、オランダの医師アルビヌスがエウスタキウスの著書を解説し一部あらためたものであるが、成立の経緯については坂井建夫や坂井シヅが詳しく論じているから以下に要約し引用する。

バルトロメオ・エウスタキウス(Eustachius Bartolomeus *生没年については坂井建雄が『人体観の歴史』 p 80で「1500/10-1574」とし、酒井シヅが『大槻玄沢の研究』 p 150で「1513・20-74」としており生年には異説が存在する。)は、多くの著名な解剖学者が所属したパドヴァ大学で教鞭をふるった医師である。1551年に画家で親戚のピニの協力を得て、47枚の詳細な解剖図を製作し、そのうち8枚の解剖図を1564年に『解

解剖学小論 (Opuscula anatomica)』に挿入したが、残りの 39 図はエウスタキウスの生存中に出版されなかった。18 世紀になって、ピニの子孫が銅版画を保管していることがわかり、それを教皇クレメンス 11 世が購入して、侍医でローマの解剖学教授のランチシの手により、1714 年に刊行される (坂井建雄『人体観の歴史』 p 80)。

画家ピノによる解剖図は、エウスタキウスの解説が付されておらず、そのためランチシが解説をつけることとなるが、それには不十分な点が多かった。それを惜しんだオランダの解剖学者アルビヌスが、銅版画を複製させ、それにトレースした図を並べて、解説を加えた本を 1774 年にアムステルダムで刊行する。(酒井シヅ『大槻玄沢の研究』 p 150) それが『エウスタキウス解剖学解題』である (坂井建雄『人体観の歴史』 p 355)。エウスタキウスの解剖図では、図そのものには記号や引き出し線は入らず、各図版の縦・横の縁に地図のように目盛りが入りその番号で場所を示した。それでは細かい解説ができないため、アルビヌスはトレースした図に解説用の符号や引き出し線を付けたとされる。日本に舶載されたのは 1798 年刊のオランダ語版『A. Bonn: Ontleedkundige platen, met eene verklaring derzelve, 7bundels, in 47 platen, folio, Amsterdam, L. van Es』であり (酒井シヅ『大槻玄沢の研究』 p 150)、『解剖存真図』編纂時に参考にされたものもこのオランダ語版であろうと筆者は推察している。

このほか図の引用がみられる解剖書として『解体新書』があげられる。附言や序文には書名が挙げられていないが、図に「解体新書より引用」と注があげられているのである。

5章『解剖存真図』

2節『解剖存真図』の造形性—参考解剖図の検討と比較から—

すでにのべたように『解剖存真図』では解剖図項目の前に『解剖存真図』の各解剖図の目次が掲載されている。以下に乾・坤巻の次目を列挙する(小川鼎三『解剖存真図 解説』から引用)。

『解剖存真図 乾巻』次目

- 第一 頭皮を剥ぎて脳蓋を見る
- 第二 脳蓋を鋸切して裏面を見る
- 第三 脳蓋を除きて厚脳膜を見る
- 第四 厚脳膜を剥ぎて前脳を見る
- 第五 前脳を除きて鎌管を見る
- 第六 脳髓を開きて内質を見る
- 第七 前脳を除きて後脳を見る
- 第八 後脳の全形
- 第九 脳を翻して十対神経を見る
- 第十 脳髓を除きて神経下に通ずるを見る
- 第十一 神経
- 第十二 眼球
- 第十三 眼球の筋膜諸液
- 第十四 耳
- 第十五 舌
- 第十六 頭皮を剥ぎて諸筋を見る
- 第十七 同上、第二図
- 第十八 眼を囲む筋
- 第十九 頭面の諸筋、第三図
- 第二十 頷下の諸筋
- 第二十一 頭頸の諸筋
- 第二十二 咽喉の諸筋
- 第二十三 同上
- 第二十四 舌の筋
- 第二十五 胸腹の諸筋
- 第二十六 腰背の諸筋
- 第二十七 手の諸筋
- 第二十八 同上
- 第二十九 同上
- 第三十 足の諸筋

- 第三十一 同上、第二図
- 第三十二 同上、第三図 足の神経と動静血脈
- 第三十三 同上
- 第三十四 頭的全骨
- 第三十五 頭骨の仰面(=上に向けるの意)
- 第三十六 下顎骨
- 第三十七 手骨
- 第三十八 胸肋骨
- 第三十九 胛骨(肩甲骨)
- 第四十 脊椎の分図
- 第四十一 足の諸骨
- 第四十二 足の諸骨
- 第四十三 支体の全骨

『解剖存真図 坤卷』次目

- 第四十四 身、断首の痕
- 第四十五 腹皮を剥ぎ脂肪及び血絡を見る
- 第四十六 顕微鏡を以て表皮及び腺、毛髪を見る
- 第四十七 胸中の諸器、縦隔膜
- 第四十八 肺の葡萄状
- 第四十九 肺をして吹き張らましむ
- 第五十 肺の全形、気管の五軟骨
- 第五十一 肺を剖きて内質を見る
- 第五十二 心及び動静脈
- 第五十三 腹筋と腹膜
- 第五十四 腹膜を開きて諸臓の本位を見る
- 第五十五 腸網及び臍(へそ)
- 第五十六 腸網の全形
- 第五十七 肝の全形、前面、臍の靱帯
- 第五十八 肝の裏面
- 第五十九 肝の内質
- 第六十 胆
- 第六十一 門脈
- 第六十二 同上
- 第六十三 胃の全形と膈(即ち大機里爾)
- 第六十四 腸の全形、腸間膜

- 第六十五 腸の位置、拳肛筋
- 第六十七 同上
- 第六十八 脾の全形
- 第六十九 腎膀胱の連属
- 第七十 腎膀胱辜丸の連属
- 第七十一 膀胱の裏面及び精囊
- 第七十二 腎の内質
- 第七十三 辜丸
- 第七十四 腎の水脈
- 第七十五 婦人陰器、子宮
- 第七十六 腰骨の全形、前面
- 第七十七 腰骨の側面
- 第七十八 子宮の全形
- 第七十九 同上、側面
- 第八十一 妊娠二月胎
- 第八十二 同上、三月胎
- 第八十三 胞衣と臍帯の連属

すでにふれたように『解剖存真図』は11冊の解剖書が挿図作成の際にも活用されている。これらの解剖図表現はおおまかに3つの分類に分けることができる。まず原図を尊重しひとつの原図に大きな改変を加えない解剖図(A群)、ヨーロッパの解剖図や小石流医派の解剖図、また寧一自身の解剖写生等、複数の解剖図を複合した解剖図(B群)、また参考解剖図に影響を受けつつも、南小柿寧一が自分自身で行った解剖写生の結果を重視し描かれた解剖図(C群)である。そこでまずはそれぞれの解剖図がどのような特徴から各図像を分類にあたるのか解説していく。

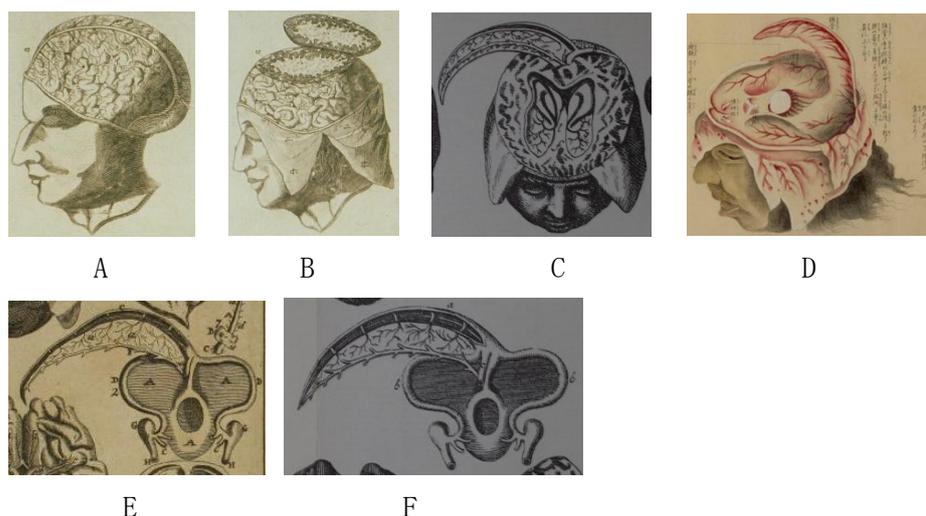
図1(図版編6-1-1)は頭部の皮を剥いで頭骨を露出させたものである。図の表情は『平次郎臓図』の図39からの影響がみられるが、その図示法は『解体新書』の皮毛篇図(図版編1-8-1)やその原書『ターヘル・アナトミア』の図6から大きな影響を受けたものである。よって本図はB群の図となる。

図2(図版編6-2-1)は『平次郎臓図』図45をほとんどそのままに転用した挿図である(A群)。毛細血管や頭骨の継ぎ目をより細密に改作している。

図3(図版編6-3-1)も同様にA群の挿図である。『平次郎臓図』図46を原図としているが、前者が目を開いた図であることに対し、本図は目を閉じた図に改作されている。

図4(図版編6-4-1)も同様にA群の図であり、『平次郎臓図』図47からの引用図である。本図はほとんど図像的な変更点はない。

図5(下図D)は顔面の表情や頭部の向きは『医範提綱内象銅版図』図1(下図A)、図2(下図B)を参考に、その細部は『解体新書』神経篇鎌管見脳疇図やその原図『ターヘル・アナトミア』図8(下図F)、このほかジャン・パルフィン(パルヘイン)『外科用解剖学』図24(下図E)にも同様の図像が存在するから、それらを相対的に参考に作図したものと考えられる。よって本図はB群の図である。



A、『医範提綱内象銅版図』図1

B、『医範提綱内象銅版図』図2

C、『ターヘル・アナトミア』図8

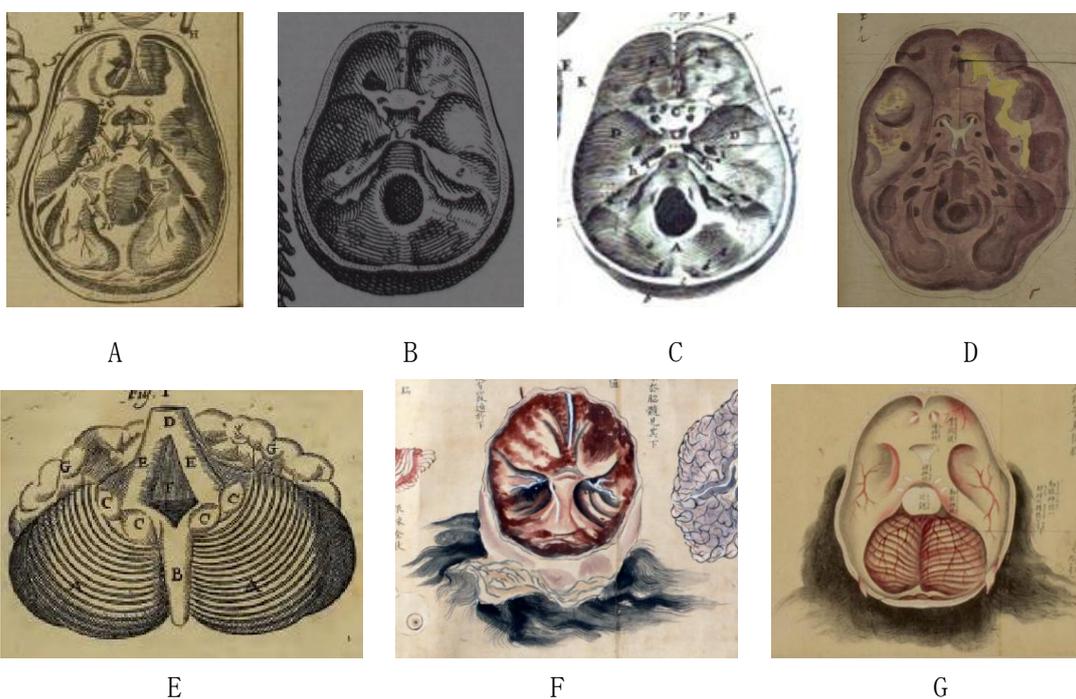
D、『解剖存真図』図5

E、『外科用解剖学』図24-2

F、『ターヘル・アナトミア』図8

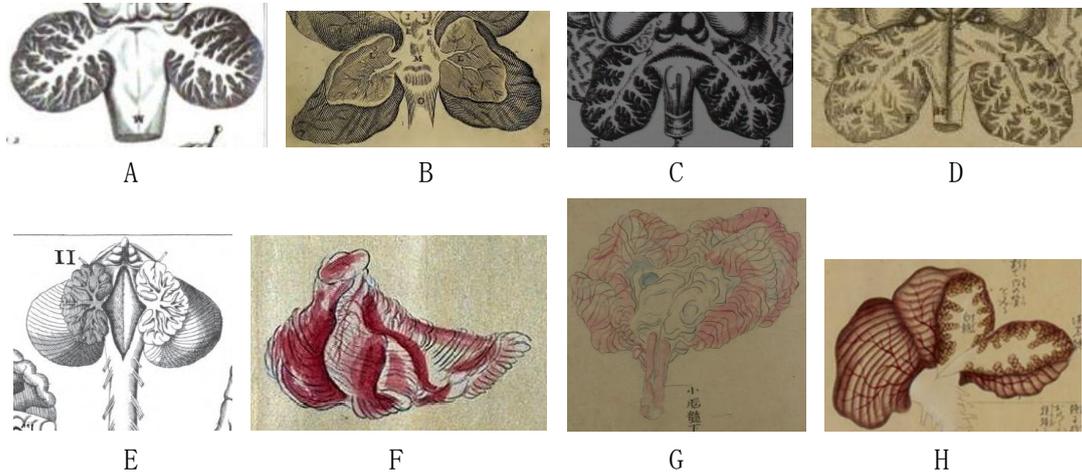
図6(図版編6-6-1)は『平次郎臓図』図48の図示法を参考にしつつ、細部を自身の解剖結果と蘭方医学の知識をもって新たに書き起こしている。その洗練された図像はヨーロッパの解剖図に比肩しうるものである。本図は『平次郎臓図』からの影響をうけつつも、その図像の形態は寧一の写生結果を図像化したものであるから、本図はC群の図であるといえる。

図7(下図G)は『平次郎臓図』図44(下図D)を基準に、ヨーロッパの解剖図によくみられる頭骨の底を示した図像(下図A~C)を相対的に引用しつつ、トマス・バルトリン『改新解剖学』図75-1の図像をかけあわせたものであると推察される。よって本図はB群の図となる。



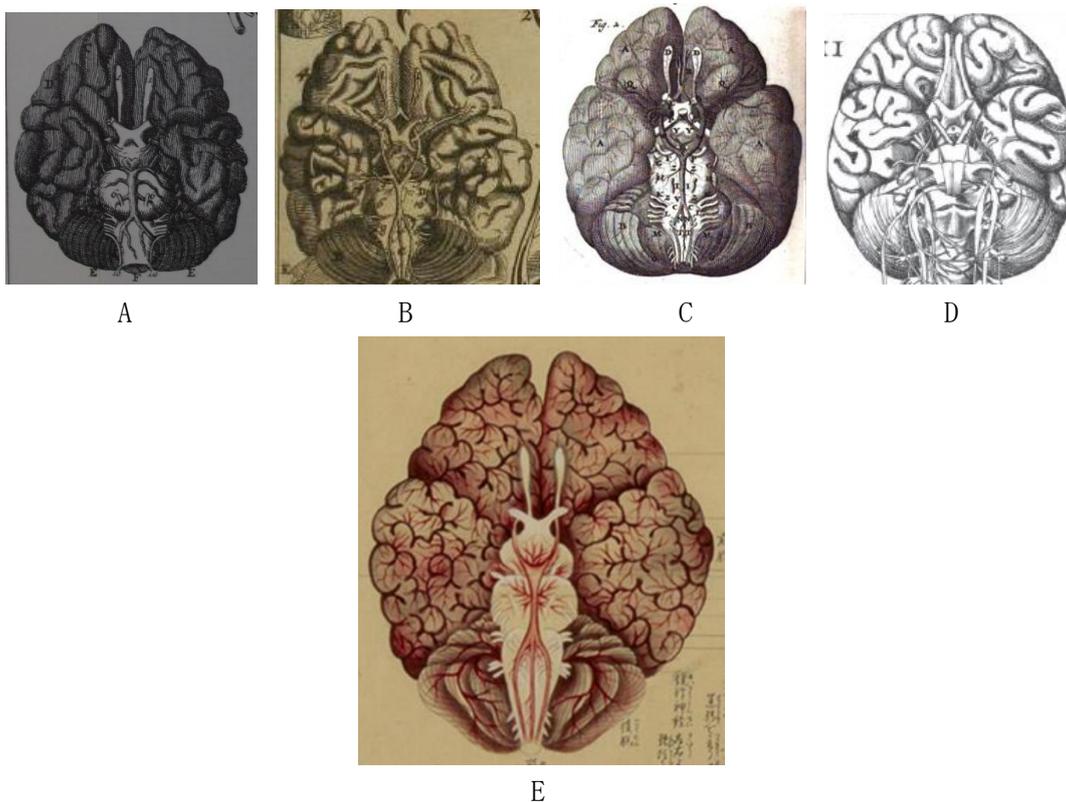
- A、『外科用解剖学』図24-5
- B、『ターヘル・アナトミア』図5
- C、『新訂解剖学』図80-5
- D、『施薬院解男体臓図』図11
- E、『改新解剖学』図75-1
- F、『平次郎臓図』図37
- G、『解剖存真図』図7

図8(図版編6-8-1)は『施薬院解男体臓図』図12の図示法を基準に、細部の描写をヨーロッパの解剖図(下図A~E)を参考に自身の解剖結果に照らしながら作図したものと考えられる。よって本図はB群の図となる。



- A、『新改訂解剖学』図18-1
- B、『改新解剖学』図7-3
- C、『ターヘル・アナトミア』図8
- D、『外科用解剖学』図25-2
- E、『エウスタキウス解剖学解題』図17-2
- F、『平次郎臓図』図42
- G、『施薬院解男体臓図』図12
- H、『解剖存真図』図8

図9(図版編6-9-1、下図E)は、いくつかのヨーロッパの解剖図像を参考に描かれたと推察されるB群の図である。しかしながら、ヨーロッパの解剖図の特徴を踏襲しつつも、南小柿寧一流の図像化がされているため、原図の特定は難しい。最も似た特徴を持つ図はブランカールの『新訂解剖学』であるが、本図の脳の皺は非常に淡白であり、底に疑問を感じた寧一によって、実際の観臓による写生やヨーロッパの解剖図の描写をもとに書き起こしたものと推察される。図像としては美しいものになったが、脳の皺を施す際の回り込みの意識が甘く平面的になってしまっている。施された陰影と併せて眺めると非常に違和感のある図である。



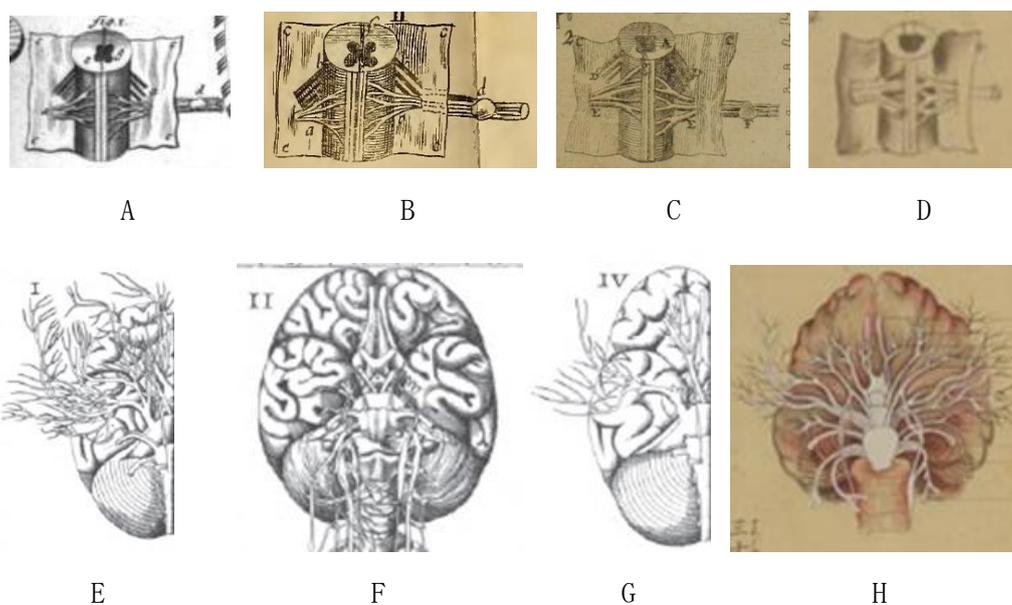
- A、『ターヘル・アナトミア』図8
- B、『外科用解剖学』図24-4
- C、『新訂解剖学』図16-2
- D、『エウスタキウス解剖学解題』図18
- E、『解剖存真図』図9

図 10(図版編 6-10-1)は図 7 から下脳を除いた図であるから、図 7 と同様に B 群の図である。

図 11(図版編 6-11-1)は 4 つの図像が配されているが、向かって右上の脳の図(図 11-1)と中央の人物像(図 11-2)、そして左側の脊椎骨の図(図 11-3)はアルビヌス著『エウスタキウス解剖学解題』図 18 からの引用である。

右下にある神経室の図(図 11-1、下図 D)は、『解剖存真図』に引用された解剖図の中では同様の図像が多くみられ、ブランカールト『新訂解剖学 1965』図 23(下図 A)、パルフィン『外科用解剖学』図 26(下図 B)、トマス『改新解剖学』図 108(下図 C)の 4 冊の解剖書に同様の図像が示されている。原図の特定は難しいが、それほど複雑な図像でないことから、いずれかの解剖図の模図と推察されるため A 群の図としたい。

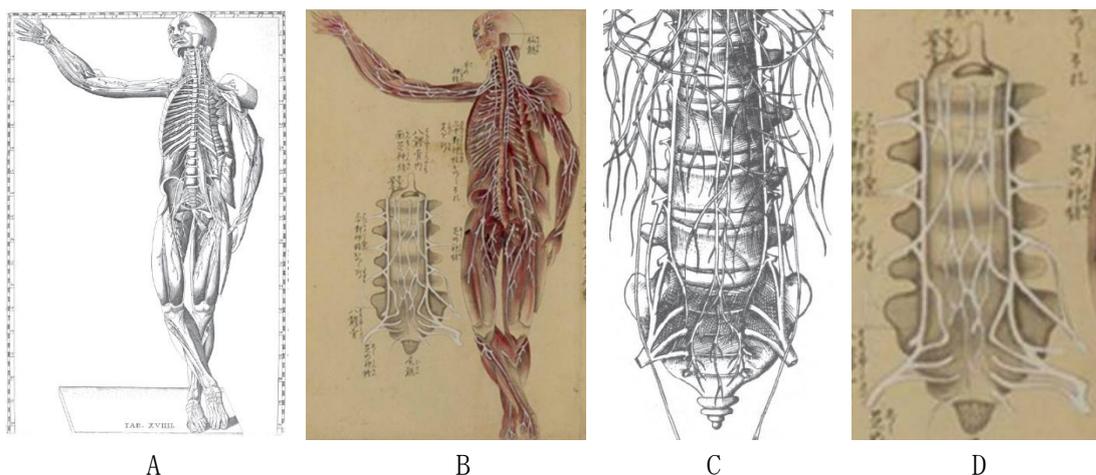
図 11-2(下図 H)は『エウスタキウス解剖学解題』図 18(図版編 7-11-2)から特に 1、2、4 図(下図 E、F、G)を選びそれらの特徴を掛け合わせた図像であるから、B 群の図となる。



- A、『新訂解剖学 1965』図 23-1
- B、『外科用解剖学』図 26
- C、『改新解剖学』図 108
- D、『解剖存真図』図 11-4
- E、『エウスタキウス解剖学解題』図 18-1
- F、『エウスタキウス解剖学解題』図 18-2
- G、『エウスタキウス解剖学解題』図 18-3
- H、『解剖存真図』図 11-1

図 11-3(下図 B)は『エウスタキウス解剖学解題』図 19(下図 A)を原図としている。着彩を施したこと以外はほとんど原図そのままであり A 群に属する図であることがわかる。

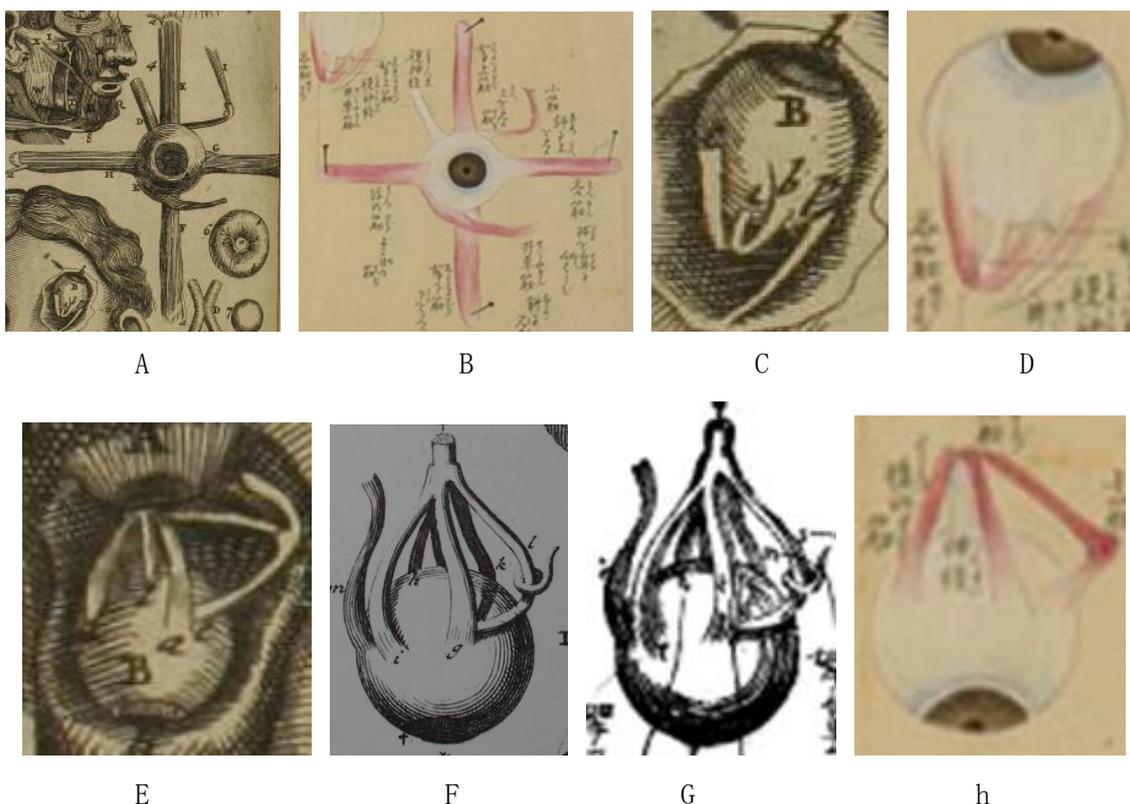
図 11-4(下図 D)は『エウスタキウス解剖学解題』図 18-2(下図 C)を原図としている。原図から細部の描写を模写しきれなかったような印象を受ける。これは本図が模写図であることに起因するのか、寧一の原本の段階でそのように描かれていたのかは現在のところ不明である。このような点をふまえつつも寧一が『エウスタキウス解剖学解題』を模倣して本描いたことは明らかであるから、本図は A 群の図である。



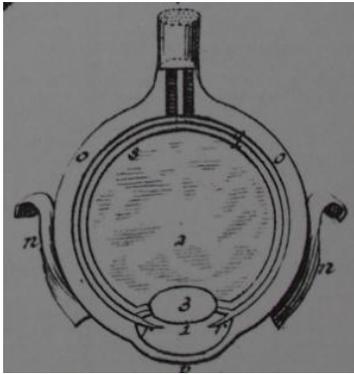
- A、『エウスタキウス解剖学解題』図 19
- B、『解剖存真図』図 11-2
- C、『エウスタキウス解剖学解題』図 18-2
- D、『解剖存真図』図 11-3

図 12(図版編 6-12-1)眼球とその内質を図示したものである。本図は『平次郎臓図』図 50、51、52 を参考に描かれたものであると推察されるが、原図からの大きな改変が無いため A 群の図である。

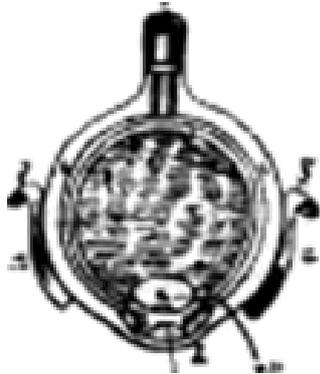
図 13(図版編 6-13-1)は、『外科用解剖学』図 27 や『解体新書』眼目篇図、またその原図である『ターヘル・アナトミア』図 9 を模倣したものであると推察される。着彩をほどこした点以外の原図の大きな変更も見られないため、本図も A 群の図とする。



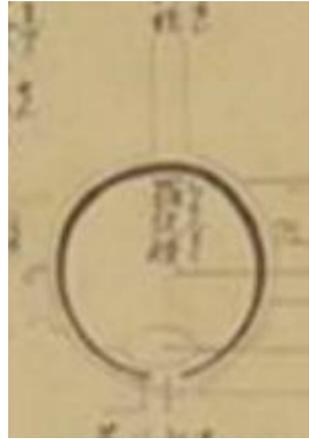
- A、『外科用解剖学』図 27-4
- B、『解剖存真図』図 13-1
- C、『外科用解剖学』図 27-2 左目
- D、『解剖存真図』図 13-2
- E、『外科用解剖学』図 27-2 右目
- F、『ターヘル・アナトミア』
- G、『解体新書』眼目篇眼球全形図
- H、『解剖存真図』図 13-3



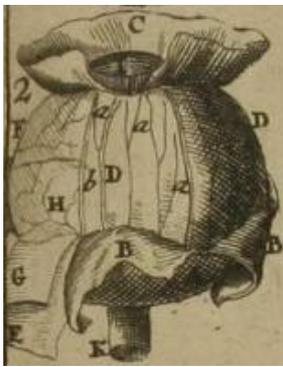
A



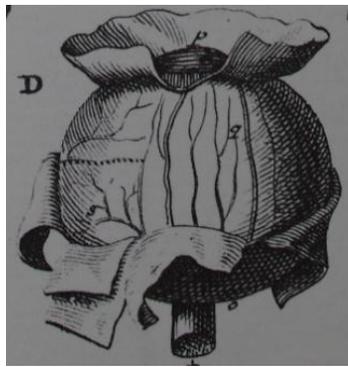
B



C



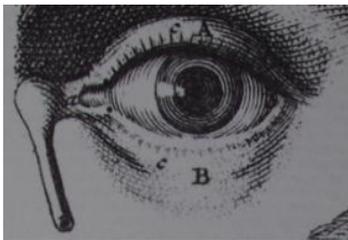
D



E



F



G



H

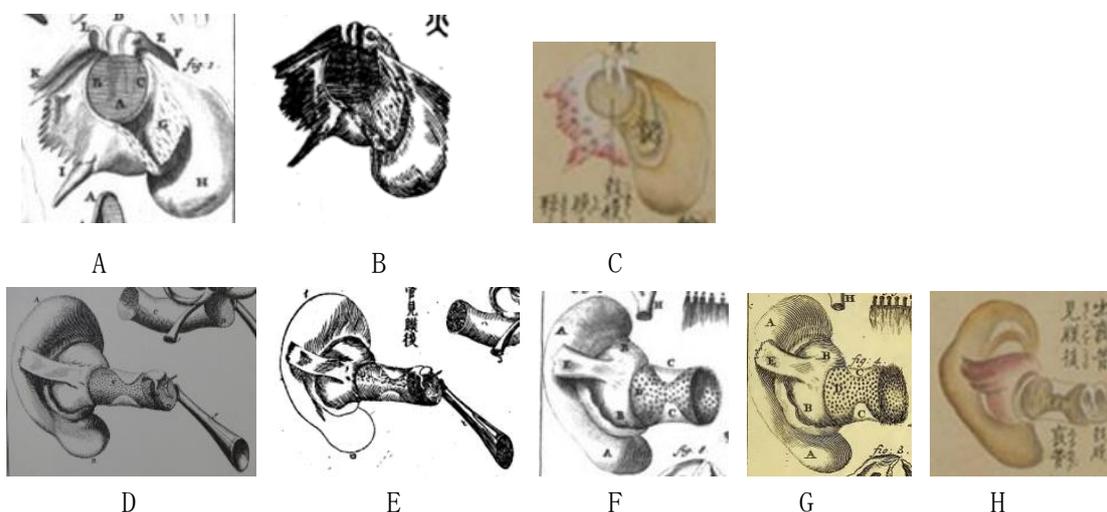


I

- A、『ターヘル・アナトミア』
- B、『解体新書』眼目篇剖眼見諸液図
- C、『解剖存真図』図 13-4
- D、『外科用解剖学』図 28-2
- E、『ターヘル・アナトミア』
- F、『解剖存真図 乾』図 13-5
- G、『ターヘル・アナトミア』
- H、『解体新書』眼目篇示涙管及機里爾図
- I、『解剖存真図 乾卷』図 13-6

図 14(図版編 6-14-1)は『解体新書』耳篇図、またはその原図であるブランカールト『新訂解剖学 1695』図 38 やクルムス『ターヘル・アナトミア』図 5、10 を参考に描かれている。本図は一見着色が施されたこと以外の大きな原図からの変更点が無いかのようであるが、寧ろ自身の解剖結果をもとに細かな改作もみられる。例えば下図 C は下図 A か B が原図かと思われるが、原図の方が鼓膜が他と異なった印象になるように描写に工夫がみられるが、下図 C の鼓膜については訳注を入れるのみで、描写そのものは非常に淡白である。

また下図 H は下図 D、E、F、G のいずれかか、全てを参考に描かれたものと推察されるが、原図 D、E、F、G ではおそらく耳の周囲の筋肉を図案化したものと思われる平らなひも状のものが、下図 H ではおそらく自分自身の解剖結果をもとに改作している。



A、『新訂解剖学 1695』図 38

B、『解体新書』耳篇聴骨隔膜懸図

C、『解剖存真図』図 14

D、『ターヘル・アナトミア』図 10

E、『解体新書』出竅管見膜後図

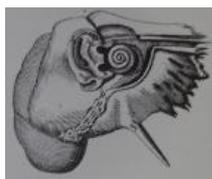
F、『新訂解剖学 1695』図 37

G、『外科用解剖学』図 20- 2

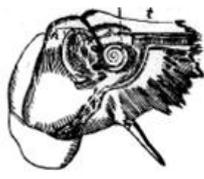
H、『解剖存真図』図 14

次の下図 C は下図 A、B を参考に描かれたものと推察されるが、原図と比較すると、陰影や凹凸の描写が淡白に、また細部の描写が微妙に異なる。次の下図 F は下図 D か E を原図にした図であると思われるが、やはり細かな形態は寧ろ自身の実測に基づくものではないかと推察される。

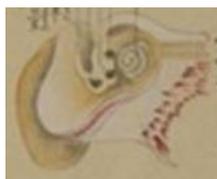
このような検討結果から図 14 は、図示法をヨーロッパのいずれかの解剖図を参考にしたことは間違いない、積極的に原図に似せようとする意図は感じられない。むしろ寧ろ一自身が行った解剖結果が細部に反映されていることから B 群の図としたい。



A



B



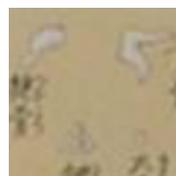
C



D



E



F

A、『ターヘル・アナトミア』図 10

B、『解体新書』耳篇竅底之全形図

C、『解剖存真図』図 14

D、『ターヘル・アナトミア』図 5

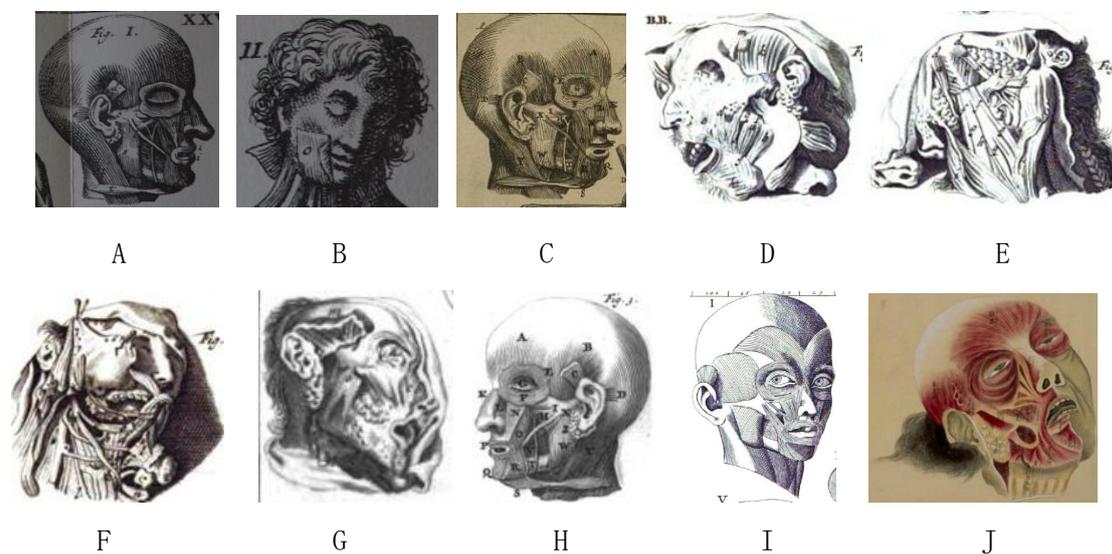
E、『外科用解剖学』図 20

F、『解剖存真図』図 14

図 15(図版編 6-15-1)は舌の全像を示した図である。本図は『平次郎臓図』53、54、55の図像をもとに改作したことが一見してわかるものであるから、B群の図としたい。

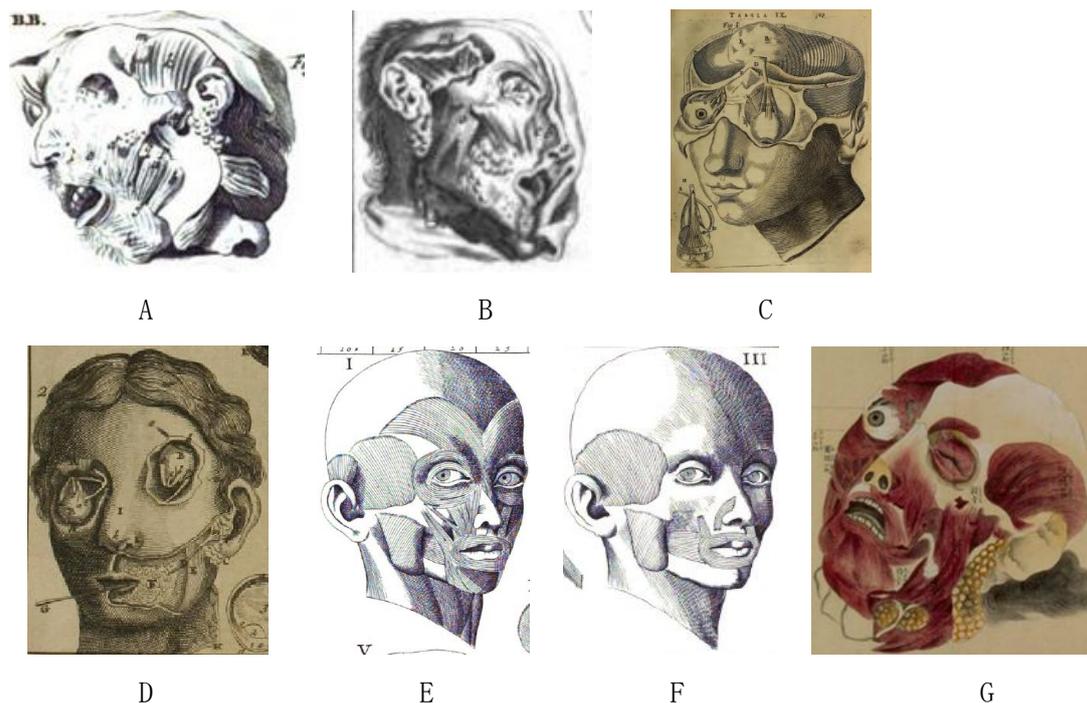
図 16(図版編 6-16-1)はヨーロッパの解剖図によくみられる、顔面の表皮を剥いだ図像であるが、一見するとどの解剖図からの着想であるのか不明瞭である。そこで本図の附言とこれまでの先行研究で引用が示唆された解剖図 6 冊(クルムス『ターヘル・アナトミア』、ブランカールト『新訂解剖学』、トマス『改新解剖学』、パルフィン(パルヘイン)『外科用人体解剖学』、スメリー『解剖図譜および産科実地の説明と要約』、アルビヌス『エウスタキウス解剖学解題』)の 6 冊、『外科指針』は解剖図が存在しないため、『解体新書』は同様の図像がヨーロッパ解剖図にあるため割愛)に同様の図像か、着想基になった図像がないか検討した。その結果顔面の筋肉を露出させた図像を、『ターヘル・アナトミア』からは 2 図(下図 A、B)、『外科用解剖学』からは 1 図(下図 C)、『新訂解剖学』からは 5 図(下図 D~H)、『エウスタキウス解剖学解題』からは 1 図選出した。他の解剖図には顔面の筋肉を露出させた図像はなかった。

これらの図像を比較すると全く同様の図像は存在しないことがわかる。おそらく下図 I や G の図像を参考に、南小柿寧一が実際に解剖を行い、それらの結果を複合し作成した図像であろうと推察される。図像的にもっとも影響をあたえたのは I 図の『エウスタキウス解剖学解題』図 41-1 であろうか。このような検討の結果から本図は B 群に属する図であることが判明した。



- | | |
|------------------------|----------------------|
| A、『ターヘル・アナトミア』図 28-1 | B、『ターヘル・アナトミア』図 28-2 |
| C、『外科用解剖学』図 27-1 | D、『新訂解剖学』図 67-1 |
| E、『新訂解剖学』図 67-2 | F、『新訂解剖学』図 67-3 |
| G、『新訂解剖学』図 75-1 | H、『新訂解剖学』図 75-3 |
| I、『エウスタキウス解剖学解題』図 41-1 | J、『解剖存真図』図 16 |

図17(図版編6-17-1)も16図と同様にヨーロッパの解剖図の図示法を参考に作成されたものと推察される。今回も前出のヨーロッパの解剖書6冊の中から検討したが、図17の着想元になりえる解剖図は以下の7種であった。顔面の4分の3筋肉を残し、左の眼の周囲のみ骨を露出させる図示法は下のA、B図あたりを参考にし、瞼を取り去った図像はCやD図からの引用ではないかと筆者は推察する。また全体的に整った輪郭のベースは寧ろ自身の写生結果だけでなくE、F図の影響も大きいものと推察される。このような検討結果から本図はB群の図であることがわかる。

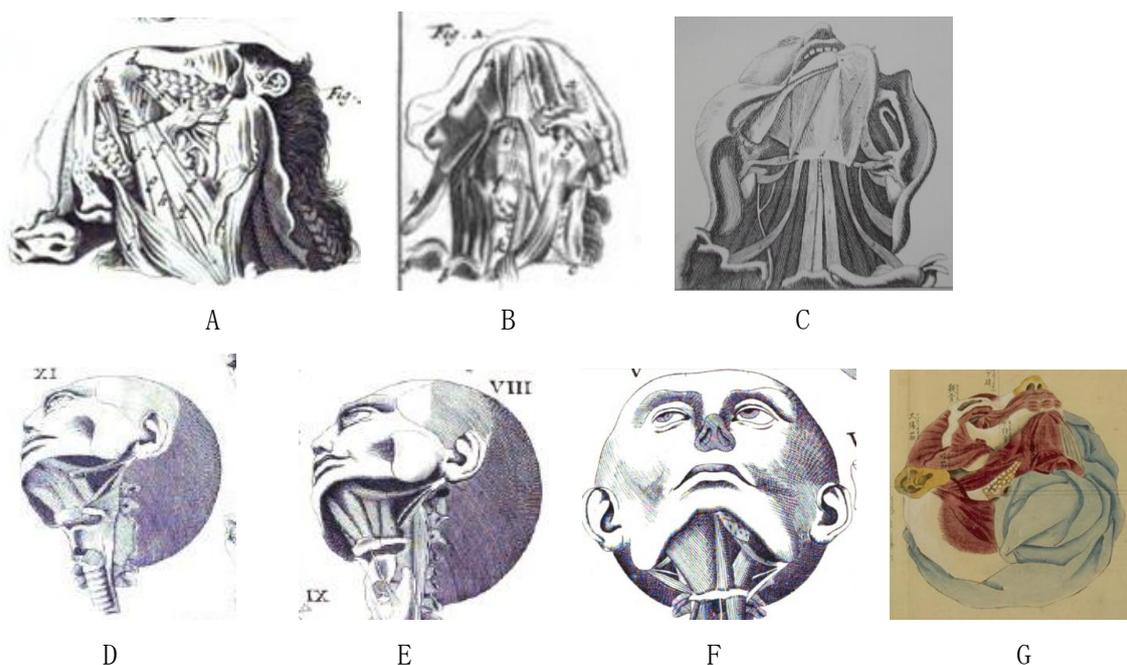


- A、『新訂解剖学』図67-1
- B、『新訂解剖学』図75-1
- C、『改新解剖学』図79
- D、『外科用解剖学』図27
- E、『エウスタキウス解剖学解題』図41-1
- F、『エウスタキウス解剖学解題』図41-3
- G、『解剖存真図』図17

図 18(図版編 6-18-1)は目の周辺の筋肉を図示したものである。前出の『エウスタキウス解剖学解題』図 41 のように、顔面の筋肉を露出させた図の中に目の筋肉は図示されているが、そのみを示した図は存在しない。よって本図は寧一の解剖結果から描き起こしたC群の図であるといえる。

図 19(図版編 6-19-1)は 17 図と同系統の図像である。図示した内容については目の周囲の筋肉についてふれたものであるが、図像的には 17 図と大きな差異は無い。よって参考にした図も『新訂解剖学』等ヨーロッパの解剖図からの改作であり、B群の図であるといえる。

図 20(図版編 6-20-1)も 17、19 図と同系統の頭部の筋骨を示した図像であり、これまでと同様にいくつかのヨーロッパの解剖図からの着想をもとに描かれている。図 16 と同様に全体のアウトラインは『エウスタキウス解剖学解題』特に図 39(下図 D、E、F)からの影響が大きく。目鼻の構図や顔面部の筋繊維のといった細部の描写は『新訂解剖学』図 39(A、B)や『ターヘル・アナトミア』図 7(下図 C)からの影響が大きい。よって本図も B群の図であると考えられる。



- A、『新改訂解剖学』図 67-3
- B、『新改訂解剖学』図 75-2
- C、『ターヘル・アナトミア』図 7
- D、『エウスタキウス解剖学解題』図 41-11
- E、『エウスタキウス解剖学解題』図 41-13
- F、『エウスタキウス解剖学解題』図 41-5
- G、『解剖存真図』図 20

図 21(図版編 6-21-1)は顎から喉にかけての筋骨の全像を図示したものである。本図は図 17、19、20 と同系統の図像であり、これまでと同様にヨーロッパの解剖図を参考に描かれたものと推察される B 群の図である。

図 16、17、19、20、21 のような『解剖存真図』の頭部の筋骨を示した図像への、『エウスタキウス解剖学解題』の貢献は大きい。『エウスタキウス解剖学解題』の解剖図(下図 F~J)は非常に図像として洗練されており、人体の頭部を球体として簡略的に見る方法を寧一に示唆したのである。『エウスタキウス解剖学解題』のように簡略化された図像は写真的な意味での真実ではないが、筋肉の連なりや構造を見る者に簡潔に伝える為には都合が良いものであった。『新訂解剖学』や『ターヘル・アナトミア』の解剖図は解剖学的に正しい形態で描かれているため、後頭部のふくらみが下の E 図のような構図の図像では立体的に書き起こすのが難しい。また小石元俊が関わった 2 部の解剖書にみられる図像では、絵師の印象が重視して画かれており、屍体のもつ一種の圧力を見る者に伝える。しかし印象を重視し解剖学的な知識を体系的に持たない絵師が画いた結果、特殊な構図になるとパースが崩れたり、絵師の立体感や奥行き認識の曖昧さがそのまま図像に反映される結果となった。これらのそれぞれの図像の特色を南小柿寧一がどれほど理解していたのかを物語る文献的資料を筆者は知らない。しかし寧一は柔軟にそれぞれの図像の特徴を使い分け、小石流の主観的な解剖記録の図像のもつ迫力や自身の解剖結果を、ヨーロッパの客観的な解剖図に組みこむことに成功したのである。

各解剖図の比較一覧



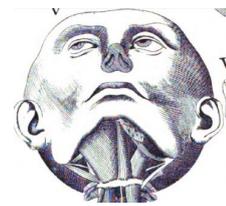
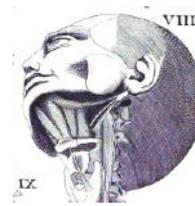
A

B

C

D

E



F

G

H

I

J



K

L

M

N

O



P

Q

R

S

T

A、『解剖存真図』 図 16

B、『解剖存真図』 図 17

C、『解剖存真図』 図 19

D、『解剖存真図』 図 20

E、『解剖存真図』 図 21

F、『エウスタキウス解剖学解題』 図 41-1

G、『エウスタキウス解剖学解題』 図 41-3

H、『エウスタキウス解剖学解題』 図 41-11

I、『エウスタキウス解剖学解題』 図 41-13

J、『エウスタキウス解剖学解題』 図 41-5

K、『ターヘル・アナトミア』 図 28-1

L、『ターヘル・アナトミア』 図 28-2

M、『新訂解剖学』 図 67-1

N、『改新解剖学』 図 79

O、『外科用解剖学』 図 27

P、『平次郎臓図』 図 39

Q、『平次郎臓図』 図 41

R、『施薬院解男体臓図』 図 1

S、『施薬院解男体臓図』 図 3

T、『施薬院解男体臓図』 図 2

図 22(図版編 6-22-1)の左側の後頭部の解剖図(下図 C)はブランカールト『新訂解剖学』図 40-1(下図 A)、40-2(下図 B)を参考に描かれた図である。『新訂解剖学』の 2 図の特徴を良く残す本図は B 群の図像であるといえる。また右下の喉の器官をとりだした図(下図 F)は、『エウスタキウス解剖学解題』図 41-11、14(下図 D、E)の複合図でありやはり B 群の図である。



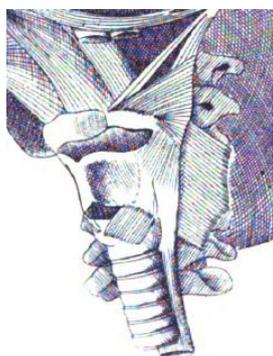
A



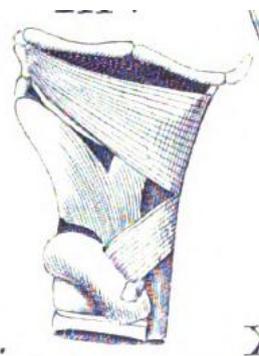
B



C



D



E



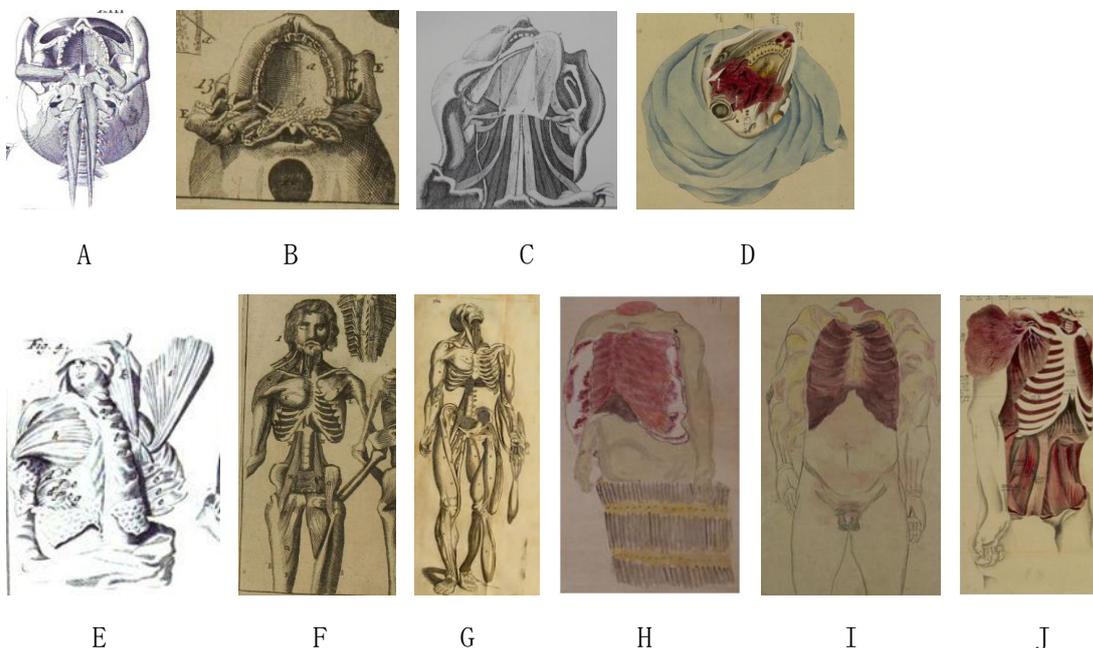
F

- A、『新訂解剖学』図 40-1
- B、『新訂解剖学』図 40-2
- C、図 22-1
- D、『エウスタキウス解剖学解題』図 41-11
- E、『エウスタキウス解剖学解題』図 41-14
- F、図 22-2

図 23(図版編 6-23-1)は 21、22 と同様に顎から喉の筋骨を示した図である。ヨーロッパの解剖図像(下図 A、B、C)を予備知識として本図を作成したものと思われるが、何らかの演出として巻かれた布のせいで、下顎のデッサンが崩れて見えるだけでなく、物体の前後も不明瞭である。描写そのものは挿図全体で見てもけして見劣りするものではないが、構成に失敗している。このような検討結果から本図は良くも悪くも、寧ろ自身の写生結果を重視し描き起こされた C 群の図であると考えられる。

図 24(図版編 6-24-1)は舌の筋を示した図であるが、良く似た傾向の図像は寧ろが参考にしたらしい解剖図には見当たらない。舌尖や周囲の筋肉の関係性から『外科用解剖学』図 29(図版編 6-24-2)に比較的同様の傾向がみられるが判然としないため、本図は C 群の図であると推定する。

図 25(図版編 6-25-1)は胸周辺の筋肉を示したものである。本図もヨーロッパの亜希望図の影響が散見される。大胸筋を花卉の様に広げる図像はすでに示した『新訂解剖学』図 68-4(下図 A)に良く似たものがあり、みぞおちから下の図像は『外科用解剖学』図 34-1(下図 B)と、やや硬直した腕や指先の運動感は『改新解剖学』図 88(下図 C)や『新改訂解剖学』図 45-1(下図 D)に良く似た特徴をもっている。胸周辺の開胸図は小石流の解剖図にも存在する(下図 E、F)がほとんど共通項が無い。よって本図はヨーロッパの解剖図の影響を強く受けた B 群の解剖図である。



A、『エウスタキウス解剖学解題』図 41-13

B、『外科用解剖学』図 29-13

C、『ターヘル・アナトミア』図 12

D、『解剖存真図』図 23

E、『新訂解剖学 1695』図 68-1

F、『外科用解剖学』図 34-1

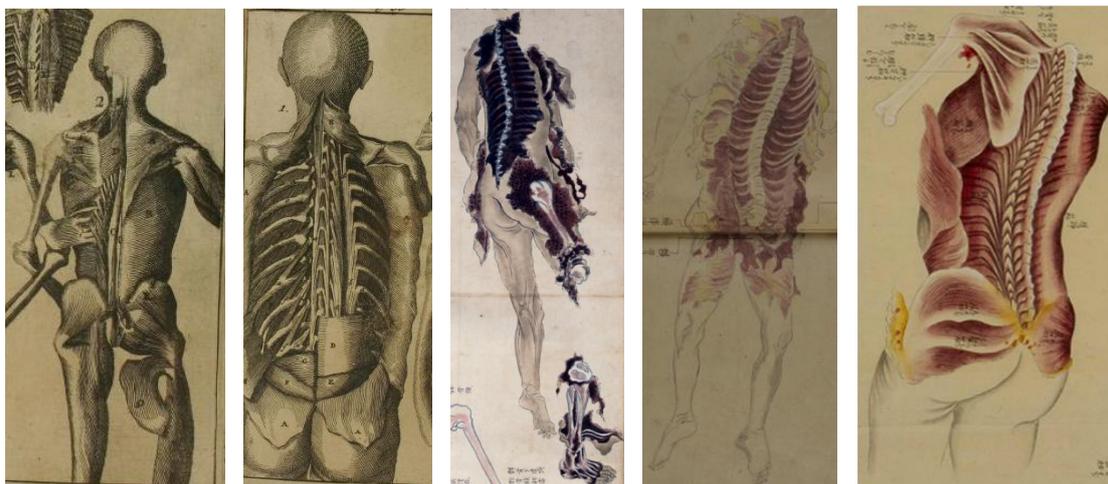
G、『改新解剖学』図 88

H、『平次郎臓図』図 5

I、『施薬院解男体臓図』図 21

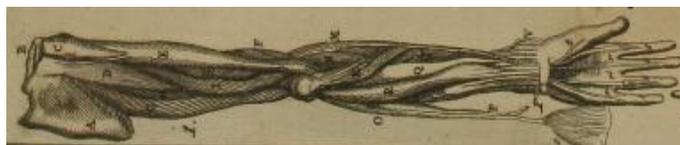
J、『解剖存真図』図 25

図 26 (図版編 6-26-1) は背面の筋肉を露出させた図であるが、本図には小石流の解剖図と江戸蘭方医学の両方の解剖図の影響がみえる。全体の構成を『平次郎臓図』図 13 (下図 C) にならい、細部の筋肉の描写や片方の骨を露出させた演出などは『外科用解剖学』図 34-2 (下図 A) や図 35-1 (下図 B) を参考に描いた図であろうと推察される。このような検討結果から本図は B 群の図であることがわかる。



- A、『外科用解剖学』図 34-2
- B、『外科用解剖学』図 35-1
- C、『平次郎臓図』図 13
- D、『施薬院解男体臓図』図 53
- E、『解剖存真図』図 26

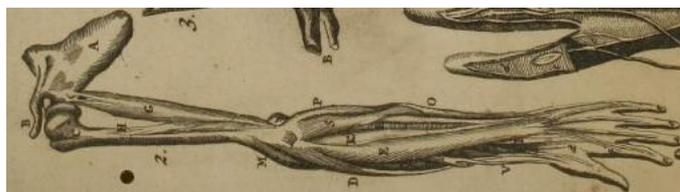
図 27(図版編 6-27-1)は腕の筋肉を示した図であるが、本図は『外科用解剖学』図 36-1(下図 A)と図 36-2(下図 B)の図像をほとんどそのまま引用した図像であり A 群の図像であるといえる。細部には実際の解剖にもとづいた加筆も見られ、寧一の原因への尊敬と医師としての真摯な姿勢を感じる美図である。



A



B



C



D



E



F

- A、『外科用解剖学』図 36-1
- C、『外科用解剖学』図 36-2
- E、『外科用解剖学』図 36-3

- B、『解剖存真図』図 27-1
- D、『解剖存真図』図 27-2
- F、『解剖存真図』図 27-3

図 28 (図版編 6-28-1) は手首から手の甲の筋肉を露出させた図像である。『平次郎臓図』 図 34 (下図 A)、 図 35 (下図 C) を模し細部の丁寧に書き起こすことを念頭に描かれた本図は、原図からの大きな改作はあえて避けたものと推察されるため A 群の図となる。『平次郎臓図』では省略された手首から先の部分は、本図では切り取られた様に見える。



A



B



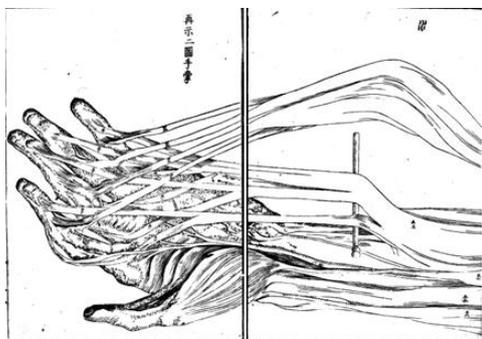
C



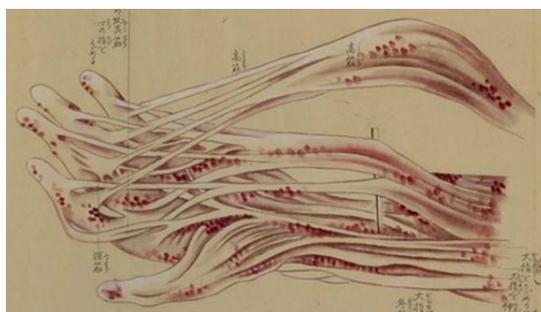
D

- A、『解剖存真図』 図 28-1
- B、『平次郎臓図』 図 34
- C、『解剖存真図』 図 28-2
- D、『平次郎臓図』 図 35

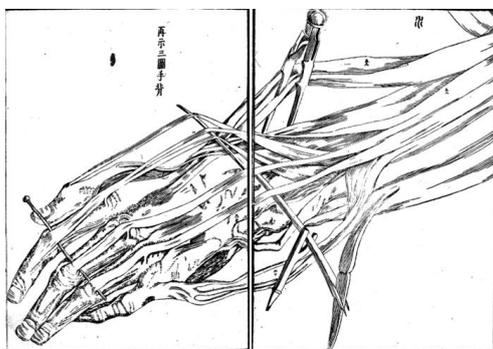
図 29 (図版編 6-29-1) は 28 図と同様に手首から先の筋肉を露出させた図像である。本図は『解体新書』の 105 図からの引用図である筋篇再示三図手背図(下図 A)と、筋篇再示二図手掌図(下図 B)の模図であるから A 群となる。



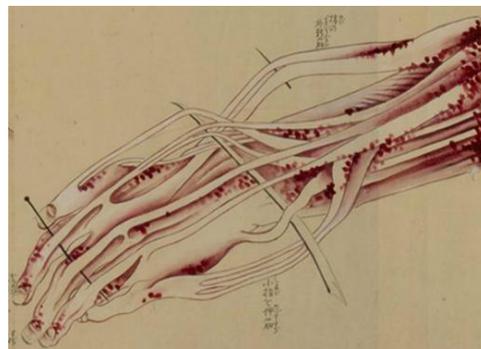
A



B



C



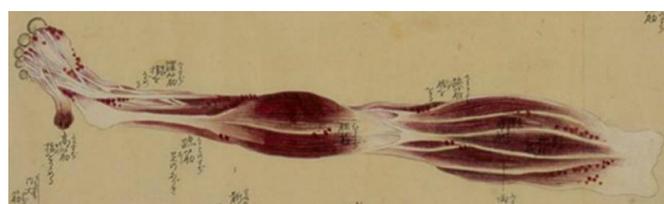
D

- A、『解体新書』筋篇再示三図手背図
- B、『解剖存真図』図 29-1
- C、『解体新書』筋篇再示二図手掌図
- D、『解剖存真図』図 29-2

図 30(図版編 6-30-1)は脚部の筋肉を露出させた図像であるが、本図は図 27 と同様に『外科用解剖学』の足の筋骨を図示した図 37-1(下図 A)、と図 37-2(下図 B)の模図である。図 27 と同様に細部の描写に若干の変更が見られるが大幅な改編はみられないため A 群の図である。



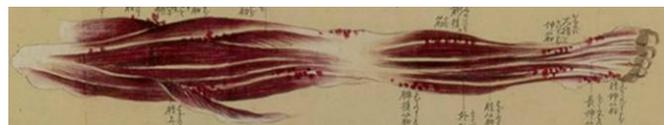
A



B



C



D

- A、『外科用解剖学』図 37-2
- B、『解剖存真図』図 30-1
- C、『外科用解剖学』図 37-1
- D、『解剖存真図』図 30-2

図 31(図版編 6-31-1)は足首から足の甲までの筋肉を露出させた図像であるが、本図は『平次郎臓図』図 36(下図 A)、図 37(下図 B)の模図であり A 群の図となる。



A



B



C



D

- A 『解剖存真図』 図 31-1
- B 『平次郎臓図』 図 36
- C 『解剖存真図』 図 31-2
- D 『平次郎臓図』 図 37

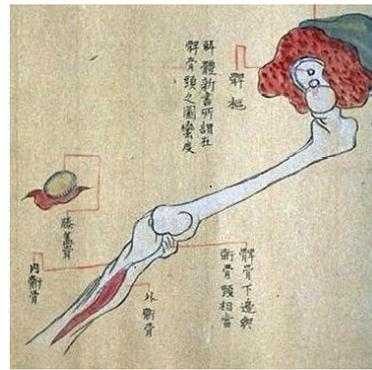
図 32(図版編 6-32-1)は腿の股関節の付け根から膝まで、それに膝蓋骨(いわゆる膝の皿)を図示したものである。本図は全体的には『新訂解剖学』図 72-1(下図 A)や図 72-2(下図 B)を参考に、腿の付け根の大動脈の記述など、細部は南小柿寧一の解剖結果に基づく図像を書き加えている。また膝蓋骨の図は『平次郎臓図』図 56(下図 C)の図像の影響が感じられる。このような検討結果から本図はB群の図であることがわかる。



A



B



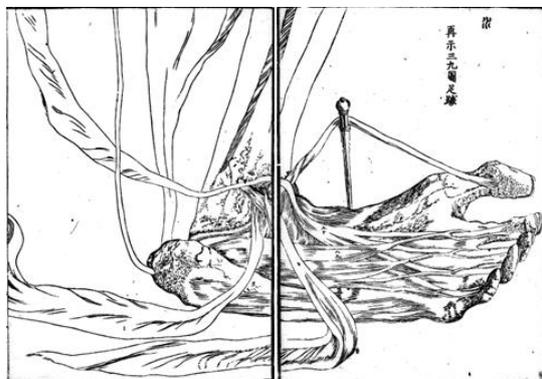
C



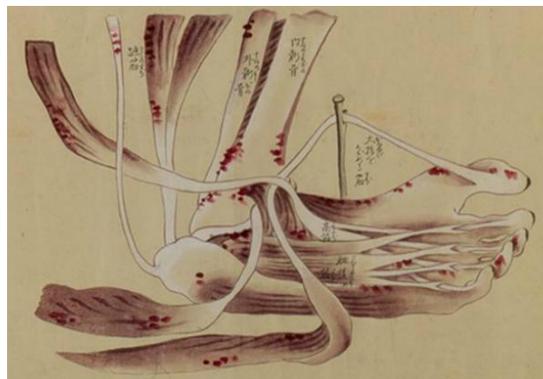
D

- A、『新改訂解剖学』図 72-1
- B、『新改訂解剖学』図 72-2
- C、『平次郎臓図』図 56
- D、『解剖存真図』図 32

図 33(図版編 6-33-1)は足首から先の筋肉を図示したものである。本図は『解体新書』巻末の筋篇再示二図足背図と筋篇再示三九図足底図の模図であるから A 群の図である。



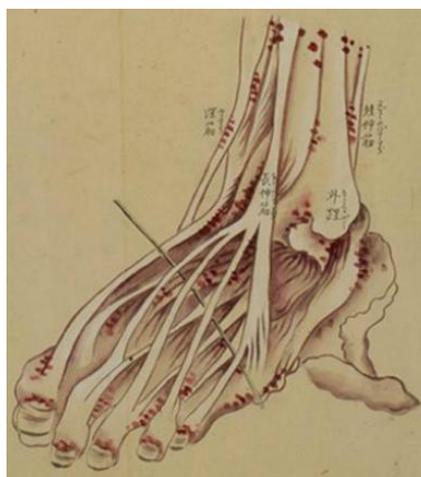
A



B



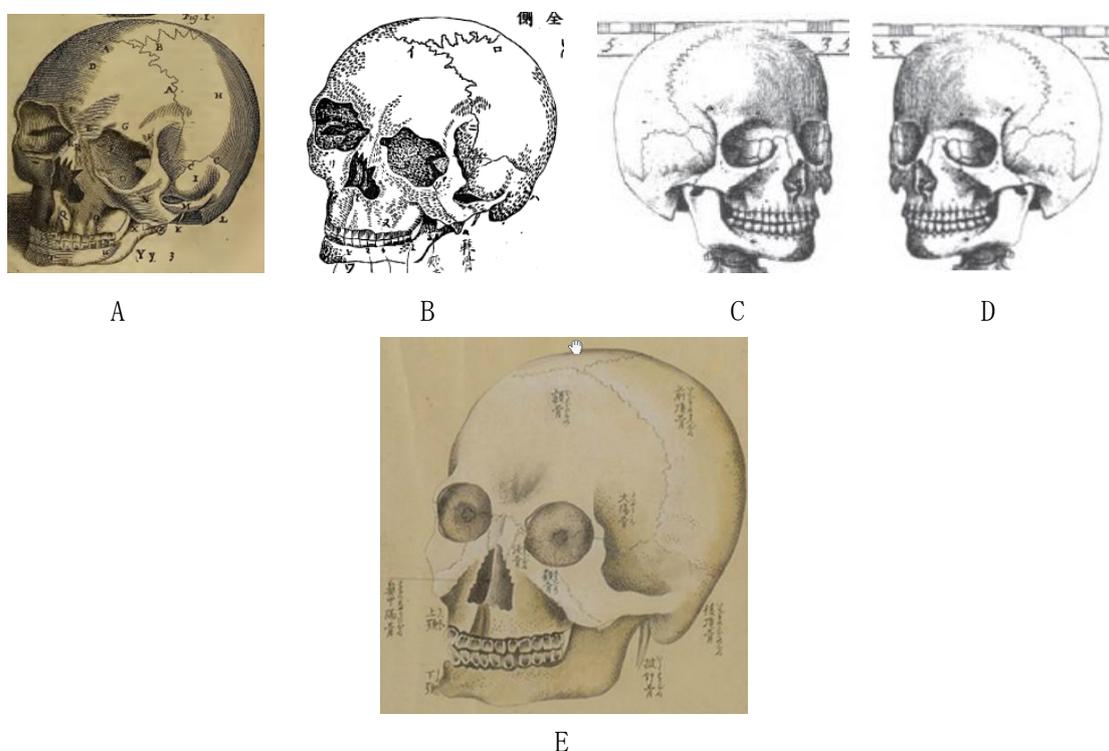
C



D

- A 『解体新書』筋篇再示二図足背図
- B 『解剖存真図』図 33-1
- C 『解体新書』筋篇再示三九図足底図
- D 『解剖存真図』図 33-2

図 34(図版編 6-34-1)は頭骨の全像を示した図であるが、南小柿寧一が行った実際の解剖の結果をもとに描かれたにしては目の部分が写生的ではない為、なんらかの参考図が存在するのではないかと仮定し、寧一が参考にした解剖図から引用元を探った。その結果、『ターヘル・アナトミア』、『新訂解剖学』、『外科用解剖学』、『解剖図譜および産科実地の説明と要約』には同様の角度の頭骨の図はなく、トマスの『人体解剖学』図 110(下図 A)とそれを原図にした『解体新書』骨節篇頭全骨側面図(下図 B)と『エウスタキウス解剖学解題』図 43(下図 C)の 3 図には同様の頭骨図が存在する。全体のシルエットは『エウスタキウス解剖学解題』からの影響が大きく、眉間や細かな描写には『人体解剖学』の影響も散見される、しかしながら寧一が眼底部に無意味な演出をした意味を解剖図から見出すことができない。このような検討結果から本図はいくつかの解剖図や寧一の写生結果を複合した B 群の図像であることが分かる。

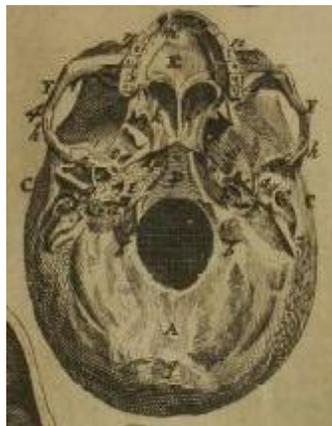


- A、『改新解剖学』図 110
- B、『解体新書』骨節篇頭全骨側面図
- C、『エウスタキウス解剖学解題』図 43-1
- D、『エウスタキウス解剖学解題』図 43-1 左右反転
- E、『解剖存真図』図 34

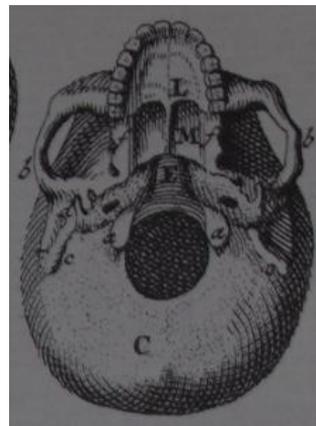
図 35 (図版編 6-35-1) は頭骨を真下から見た図像である。本図はヨーロッパの解剖書の骨格図によくみられる図像であり、南小柿寧一が参考にした解剖図の中では下図 A、B、C のように後頭部や大後頭孔が丸く全体的に細長いシルエットの図像と、下図 D のように後頭部の大きいシルエットが台形の図像が存在する。『改新解剖学』を原図にした『解体新書』骨節篇仰頭骨図 (下図 E) も同様の図像である。本図は全体のシルエットは下図 D、E に近いが、大後頭孔は A、B、C により近い、大後頭孔上のひだのような描写はどの解剖図にもみられない。このようなことから鑑みて本図の図示法はヨーロッパの解剖図を参考にしつつ、自身の写生結果も複合し図像化した B 群の図であることが推察される。



A



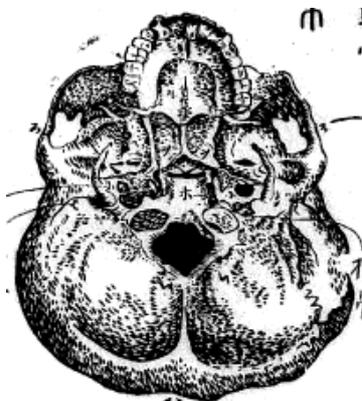
B



C



D



E

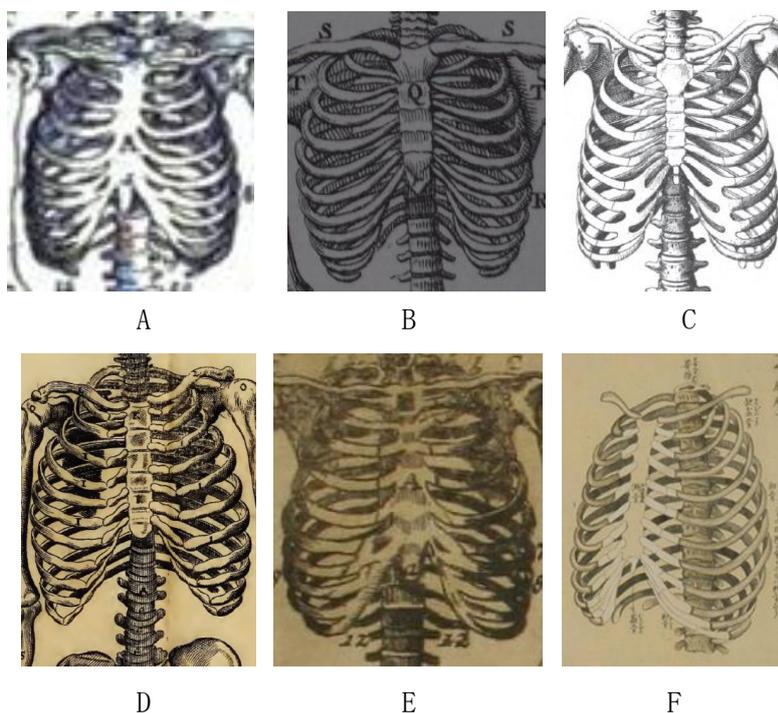


- A、『外科用解剖学』図 80-4
- B、『外科用解剖学』図 30
- C、『ターヘル・アナトミア』図 5
- D、『改新解剖学』図 114-2
- E、『解体新書』骨節篇仰頭骨図
- F、『解剖存真図』図 35

図 36 (図版編 6-36-1) は顎の骨を示した図像である。本図が『ターヘル・アナトミア』図 4 (図版編 6-36-2) から影響を受けたことは明らかであるが、細部には寧一自身による改変もなされており、複数の解剖図像から作図された B 群の図である。

図 37 (図版編 7-36-1) は腕部の骨を示した図であるが、手の部分は『解体新書』骨節篇掌指骨図からの影響が、また他の部位は『解体新書』骨節篇支体全骨図の腕部を参考にしたものと推察される。骨格の図は全体的に出来が良くない為、判断がつかないところではあるが総合的に『解体新書』の影響が多い図像ではある。このような検討結果から本図は複数の解剖図像の影響を受け作図された B 群の図であると推定される。

図 38 (図版編 6-38-1) は胸骨を図示したものであるが、『解剖存真図』の編纂に際し参考にしたと考えられる解剖図の中に同様の図像は無い。それにも関わらず本図は均整がとれた美図である。また肋骨の奥行きも陰影法で丁寧に描かれている。江戸の解剖図を描いた絵師の傾向として、絵師自身の写生をもとに描かれた図像は総じて図像としての均整を欠いていたり、形態が不鮮明であったり問題がある場合が多い。精度の高い図像はおおくの場合原本が存在するものである。このような点を鑑みたとき本図には下に列挙した解剖図 A~E 以外の原図が存在しているように思えてならない。よって本図の分類は保留とする



A、『新訂解剖学』図 81-1

C、『エウスタキウス解剖学解題』図 43

E、『外科用解剖学』図 32-1

B、『ターヘル・アナトミア』図 5

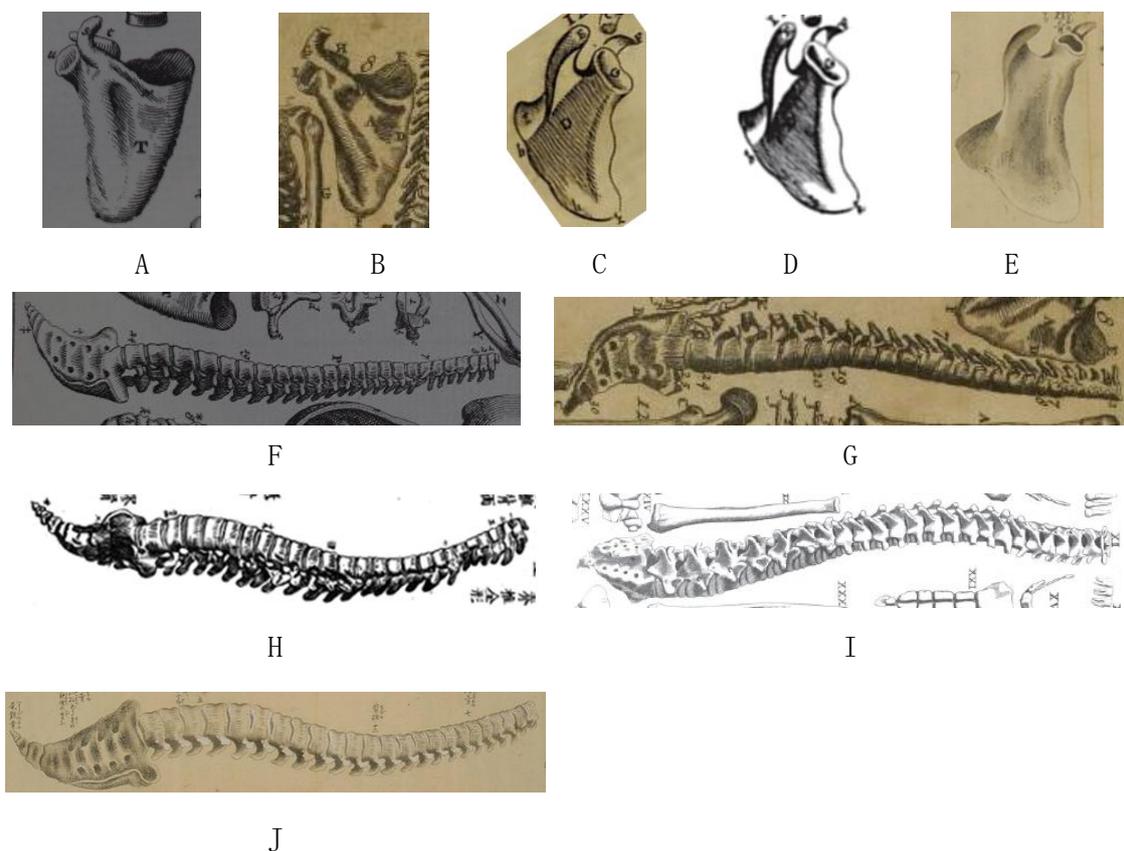
D、『改新解剖学』骨篇図 8

F、『解剖存真図』図 38

図 39(図版編 6-41-1)は肩甲骨を示した図である。本図は『解体新書』骨節篇肩骨図(下図 A)か、同様の図示法の『改新解剖学』図 115-8(下図 B)を参考に、寧一が同様の角度から写生したものをもとに描きこしたものと推察される。よって B 群の図である。

図 40(図版編 6-40-1)は脊椎を分割し図示したものであるが、このような図示法はヨーロッパの解剖図では定番の型であり、本図は『ターヘル・アナトミア』図 5(図版編 7-40-2)や同様の図示法を参考にしつつ寧一の写生結果も複合し描かれた b 群の図であるといえる。

図 41(図版編 6-41-1)は脊椎骨の全像を示したものであるが、本図もヨーロッパの解剖図の定番の型を借用している。ありふれた図像ではあるが寧一が参考にした解剖図の中で最も良く似た図像は『ターヘル・アナトミア』の図 5(下図 F)である。本図も原図を単に大きく複製したというよりは、同様の図示法で寧一の写生結果を図像化したものであり、複数の解剖図の影響を受けた B 群の図である。



A、『ターヘル・アナトミア』図 5

C、『改新解剖学』図 115-4 55 度傾け

E、『解剖存真図』図 39

G、『外科用解剖学』図 32

I、『エウスタキウス解剖学解題』図 47-9

B、『外科用解剖学』図 115-8

D、『解体新書』骨節篇肩骨図

F、『ターヘル・アナトミア』図 5

H、杉田玄白『解体新書』図

J、『解剖存真図』図 41

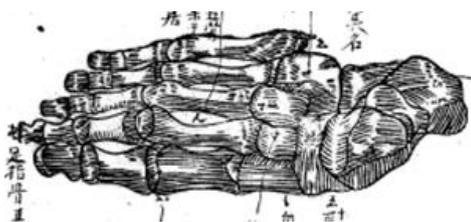
図 42(図版編 6-42-1)は脚部の骨格を示した図であるが、本図は『解体新書』骨節分類篇の示臑骨相挿図(下図 A)、剖骨見髓空図(下図 E)、骨節篇足跗及指骨図(下図 C)からの模図を中心に構成されているが、これまでの骨格の解剖図と同様に寧一自身の写生結果も図像に反映されている。この他の骨は無理にヨーロッパの解剖図と結び付けるよりも素直に寧一が写生したものから描き起こしたものと考えたい。このような検討結果から本図はB群の図であることがわかる。



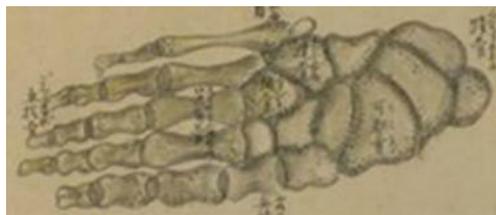
A



B



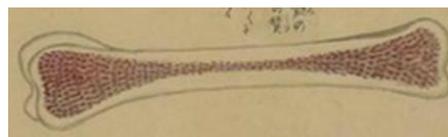
C



D



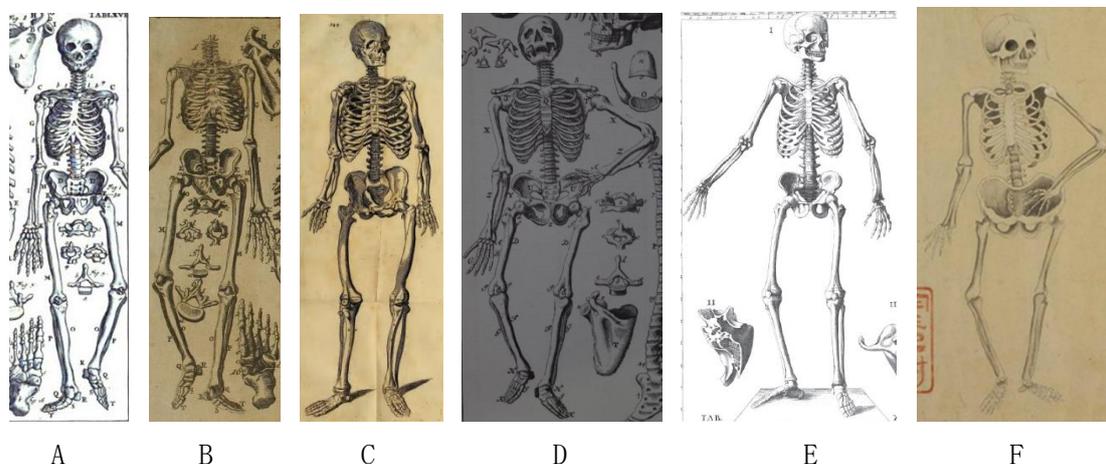
E



F

- A、『解体新書』骨節分類篇示臑骨相挿図
- B、『解剖存真図』図 42-1
- C、『解体新書』骨節篇足跗及指骨図
- D、『解剖存真図』図 42-2
- E、『解体新書』骨節分類篇剖骨見髓空図
- F、『解剖存真図』図 42-3

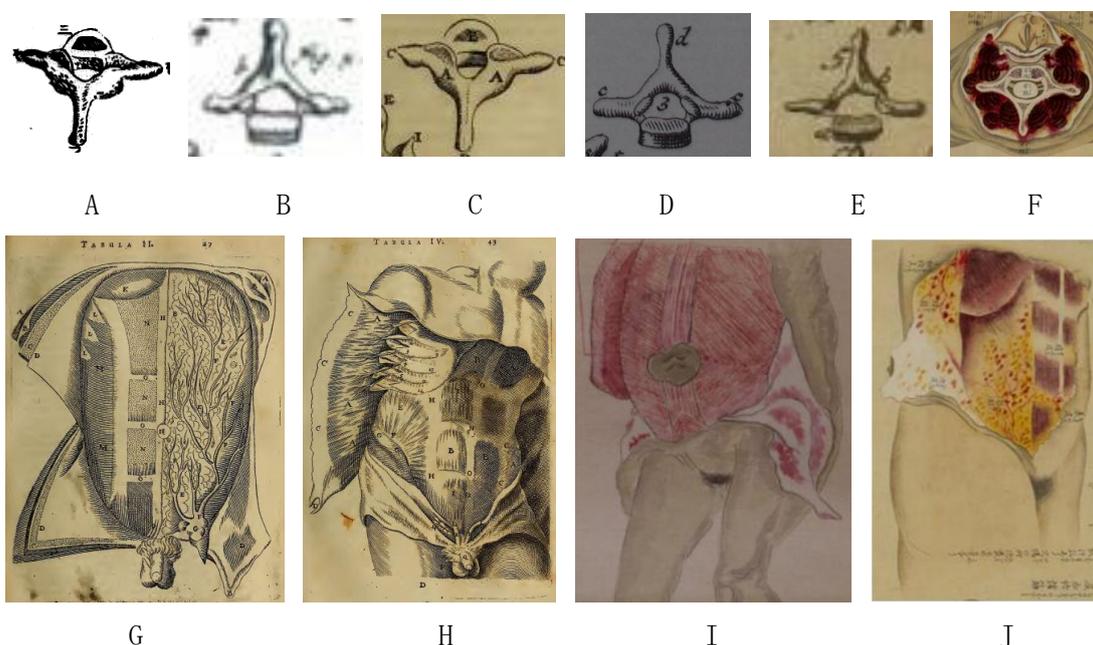
図 43(図版編 6-43-1)は全身の骨を図示したものである。本図のような図像はヴェサリウス以降、ヨーロッパの解剖図では定番的な図像であるが、『解剖存真図』に引用されたヨーロッパの解剖図では、『新訂解剖学』図 81(下図 A)、『外科用解剖学』図 32(下図 B)、『改新解剖学』図 116(下図 C)、『ターヘル・アナトミア』図 5(下図 D)、『エウスタキウス解剖学解題』図 43-1(下図 E)の 5 図が存在する。このなかで下の A、B、C 図は図像に共通項が少ないが、D 図は首から下の図像に共通点が多い。また首から上はおそらく E 図を図像の参考にしたものと推察され、このような点から B 群の図であろうと推察される。いずれにせよ大きすぎる骨盤や、頭骨の眼底部の描写などに粗が目立つ不出来な図像である。この点は寧ろ骨をこのような形態に組んで写生することはできなかったことを暗に証明するものであろう。よって本図は複数の解剖図の影響を受けた B 群の図である。



- A、『新訂解剖学』図 81(下図 A)
- B、『外科用解剖学』図 32(下図 B)
- C、『改新解剖学』図 116
- D、『ターヘル・アナトミア』図 5
- E、『エウスタキウス解剖学解題』図 43-1(
- F、『解剖存真図』図 43

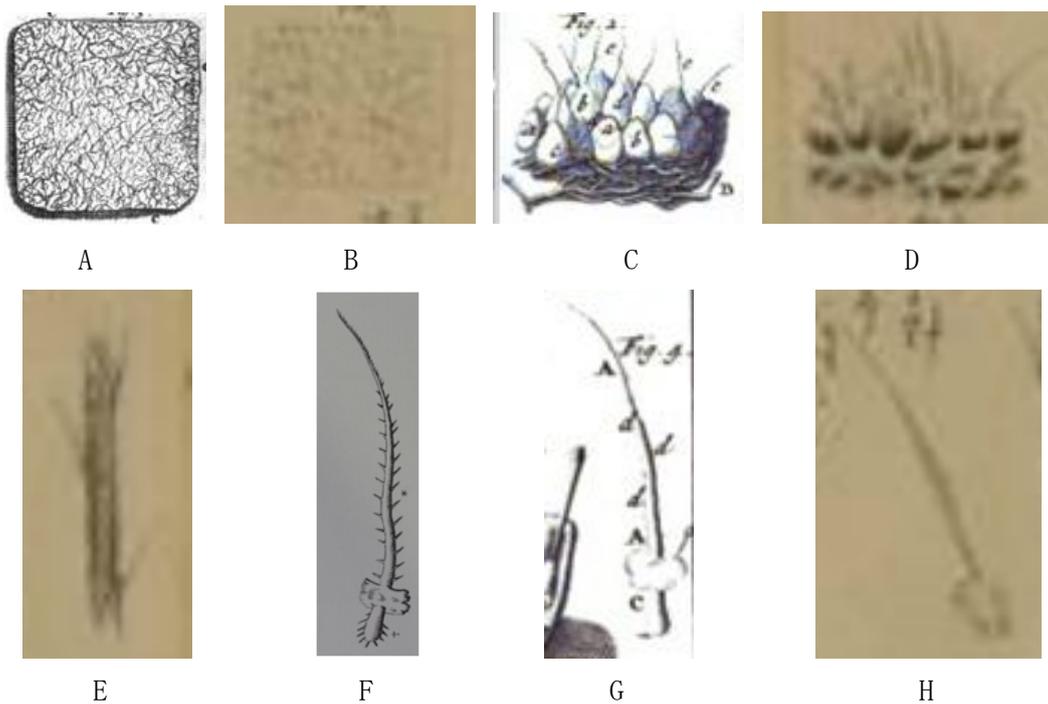
本図より後篇の坤篇の図像となる。坤篇の1番目の図像である図44(図版編7-44-1)は断首された切り口を正面に見た図像であるが、南小柿寧一が見た和蘭のいずれの解剖図にも同様の図像は存在しないため、寧一自身の写生によるC群の図であると推定される。脊椎骨の描写などには『解体新書』をはじめとしたヨーロッパの解剖図(下図A~E)の影響もみられる。

図45(図版編6-45-2)は腹部の表皮を剥ぎ脂肪や筋肉、血管を露出させた図である。本図は『平次郎臓図』図7(下図I)を着想元に、自身の解剖結果で補填し描かれたものであろうと推察される。構図や脂肪・筋肉の描写には『改新解剖学』図2、4(下図G、H)の影響がみられる。よって本図はB群の図である。



- A、『解体新書』骨節分類篇分推骨図
- B、『新訂解剖学』図81
- C、『改新解剖学』図115
- D、『ターヘル・アナトミア』図5
- E、『外科用解剖学』図32
- F、『解剖存真図』図44
- G、『人体解剖学』図2
- H、『人体解剖学』図4
- I、『平次郎臓図』図7
- J、『解剖存真図』図45

図 46 (図版編 6-46-1) は顕微鏡をつかって表皮や毛髪等の細部を図示したものである。図像的には下図 B は『新訂解剖学』の図 6-5 (下図 A) 等の図示法を、下図 D は『新訂解剖学』図 38-2 (下図 C) を、下図 H は『ターヘル・アナトミア』図 6 (下図 F) や『新訂解剖学』図 63-4 (下図 G) の図示法を着想元とし描かれたものと推察される。下図 E だけは同様の図が存在しないため、純粋な寧一の研究の成果であるが、他の図はその図像の形態や図示法に明らかなヨーロッパの解剖図の影響がみえるため、本図は B 群の図であることがわかる。

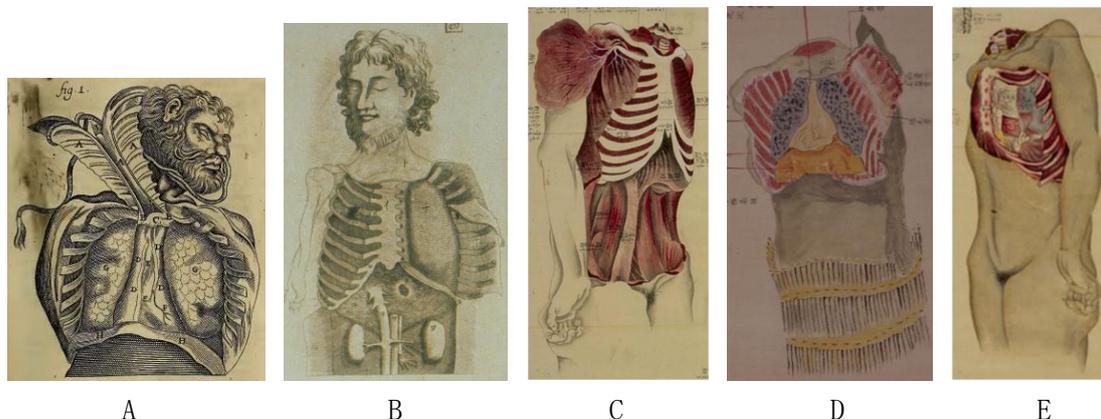


- A、『新訂解剖学』図 6-5
- B、『解剖存真図』図 46-1
- C、『新訂解剖学』図 38-2
- D、『解剖存真図』図 46-2
- E、『解剖存真図』46-3
- F、『ターヘル・アナトミア』図 6
- G、『新訂解剖学』図 63-4
- H、『解剖存真図』図 46-4

図 47(図版編 6-47-1)は胸の諸臓器を図示したものである。おそらくは『平次郎臓図』図 6(下図 C)の改作を目的として描かれたと考えられるが、それに加え前述の『解剖存真図』図 25(下図 C)との図像的関連性や整合性も意識して描かれたようである。C 図や B 図にならい下腹部まで描いたために相対的に胸の部分の図が小さく、分かりづらい印象を受ける。寧一も目にしたであろう『改新解剖学』図 57(下図 B)や『医範提綱内象銅版図』14(下図 B)のような構図を採用すればより寧一の意図に近い図像が描けたと筆者は考えるが、寧一は図像全体の整合性を重視したのであろうか。本図は複数の解剖図を参考に描かれた B 群の図像である。

図 48(図版編 6-48-1)は肺の肺胞を示した図像である。『解体新書』や『医範提綱』にも同系統の図像が採用され、蘭方医の間では珍重された図像である。本図では『新訂解剖学』図 15 かそれを原図とした『解体新書』張肺管篇葡萄状者図を参考に作図されたものと推察されるが、元図からの若干の改変もみられる。とはいえこの点は原図から描き起こす際にの誤差の範疇であり、本図は『新訂解剖学』の図像に追従した図像であるといえる。よって本図は A 群の図としたい。

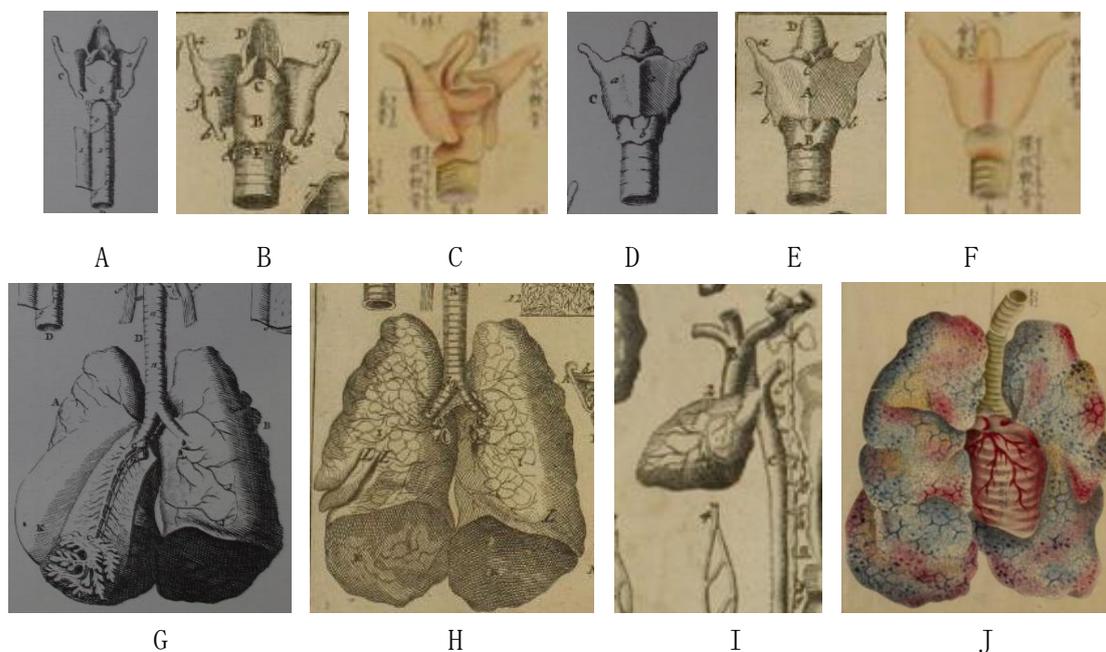
図 49(図版編 6-49-1)は屍体の肺に息を吹き込み肺臓の性質を図示したものである。寧一が参考にしたどの解剖図にも見られない項目であるが、若干の影響がみられるとすれば、『人体解剖学』図 57(下図 C)が肺の描写や図示法に類似がある。しかしこのような点を鑑みても、総合的に寧一の観察の結果をもとに描かれた C 群の図であるといえる。



- A、『改新解剖学』図 57
- B、『医範提綱内象銅版図』14
- C、『解剖存真図』図 25
- D、『平次郎臓図』図 6
- E、『解剖存真図』図 47

図 50(図版編 6-50-1)は肺の全形を示した図である。まず本図の右側にある気管の弁の構造を図示した図像(下図 C、F)は、『解体新書』肺篇気管側面図、気管前面図、気管背面図か、その原図である『ターヘル・アナトミア』図 14 上部(下図 A、D)や、『外科用解剖学』図 22-2、3(下図 B、E)の図像を参考にしたことは明白である。しかし左側の肺の全形図は、おそらく参考にしたと考えられる『解体新書』肺篇全形図やその原図である『ターヘル・アナトミア』図 14(下図 G)や、『外科用解剖学』図 22-1(下図 H)を参考に描いたものと推察されるが、角度や形態が変更されている。また G、H 図にはない心臓の図像は『外科用解剖学』図 8(下図 I)あたりを参考にしたものと推察される。

これらの点から本図はその図示法にヨーロッパの解剖図からの影響を大きく受けるものであるが参考図からの相違が大きく、また図像に描かれた気管中央部の紐によって本図が写生をもとに描かれたことを強調している。よって本図は C 群の図であるとしたい。

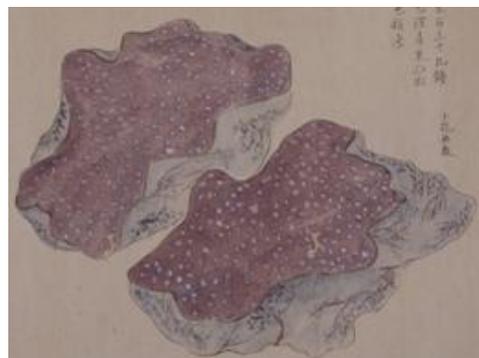


- A、『ターヘル・アナトミア』図 14 上部
- B、『外科用解剖学』図 22-2
- C、『解剖存真図』図 50-1
- D、『ターヘル・アナトミア』図 14 上部
- E、『外科用解剖学』図 22-3
- F、『解剖存真図』図 50-2
- G、『ターヘル・アナトミア』図 14
- H、『外科用解剖学』図 22-1
- I、『外科用解剖学』図 8
- J、『解剖存真図』図 50-3

図 51 (図版編 6-51-1) は図 50 と同様に寧一の写生結果を重視した C 群の図像であるが、内腑の重力に任せて横たわる様や、肺の内部の図像などには『平次郎臓図』図 27、28 (下図 A、B) や『施薬院解男体臓図』図 51 (下図 28) もみられる。



A



B



C

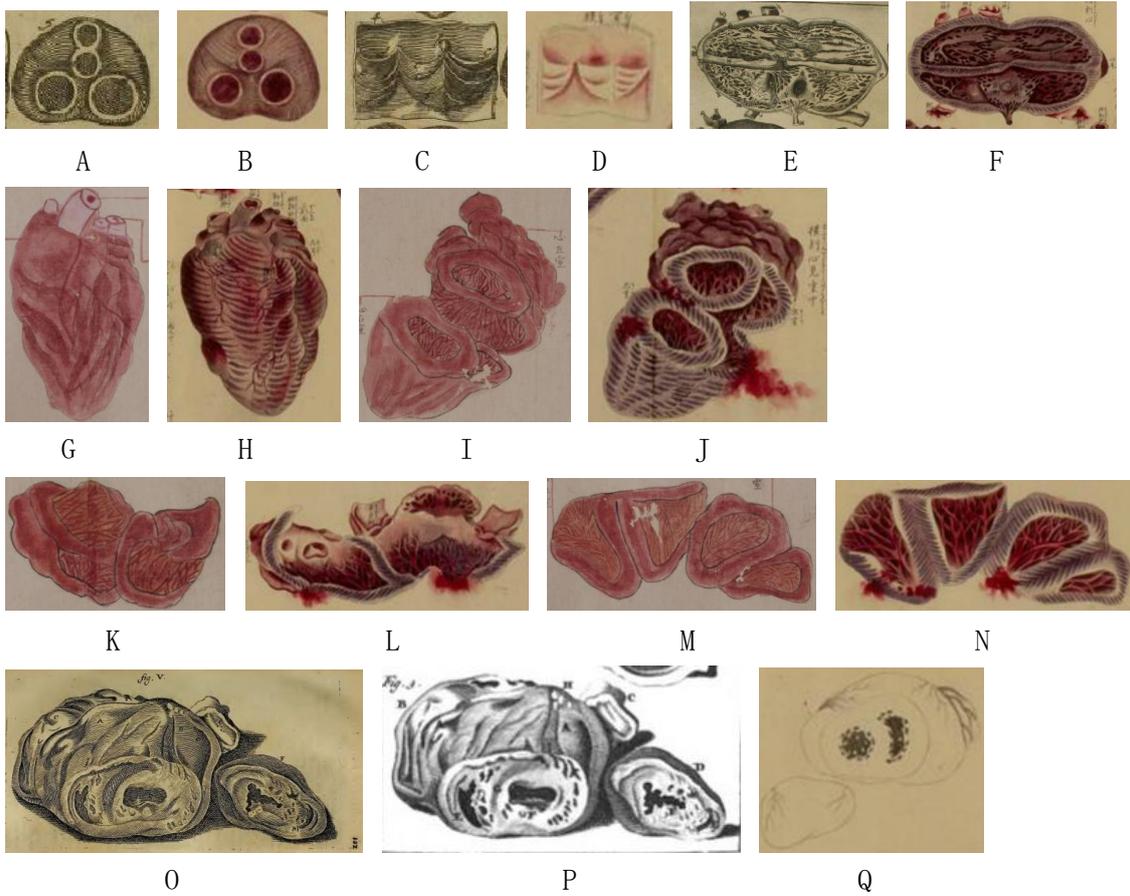


D

- A、『平次郎臓図』図 27
- B、『平次郎臓図』図 28
- C、『施薬院解男体臓図』図 28
- D、『解剖存真図』図 51

図 52(図版編 6-52-1)は心臓と全身の動脈、またそれらの細部を図示したものである。本図は9図に分かれているが、9図のうち8図は原図が存在した模図である。それらの図像の細部は寧一の解剖結果をもとに変更され新たに着彩を施されている。本図でひときわ目をひく全身の動脈を示した図は、『エウスタキウス解剖学解題』図 25(図版編 7-53-2)を参照の模図に着彩を施したものである。本図は元となった図が高い精度を持つためか図に大きな変更は加えられていない。次の心臓の脈管を示した図(次頁 B 図)は『外科用解剖学』図 20-5(次頁 A 図)から、その下の動脈を開き内部の弁を示した図(次頁 D 図)は『外科用解剖学』図 20-4(次頁 C 図)から、その左上の心臓を縦に割った図(次頁 F 図)は『外科用解剖学』の図 19-1 から、それぞれ模倣し着彩したものである。次の心臓の全形を示した図は『平次郎臓図』図 19(次頁 E 図)を、その左隣りの図心臓を横割きにした図(次頁 G 図)は『平次郎臓図』図 21 を、その左端心臓を4つに割った図(次頁 L、N 図)は『平次郎臓図』図 22、23(次頁 K、M 図)を、それぞれ参考に細部を寧一によって加筆されている。本項最後の心臓の下部末端を割り内部を示した図(次頁 Q 図)は原図がはっきりしないが、おそらく『改新解剖学』図 65(次頁 O 図)か『新訂解剖学』図 3(次頁 P 図)を参考に描かれたものと推察される。

このように本図は、『エウスタキウス解剖学解題』から1図、『外科用解剖学』から3図、『平次郎臓図』から4図を参考にした図像であるが、細部の描写は寧一の解剖写生をもとに改作されており単に原図を模倣し着彩を施した図像ではない。よって本図はB群の図である。



- A、『外科用解剖学』 図 20-5
 B、『解剖存真図』 図 52-1
 C、『外科用解剖学』 図 20-4
 D、『解剖存真図』 図 52-2
 E、『外科用解剖学』 図 19-1
 F、『解剖存真図』 図 52-3
 G、『平次郎臓図』 図 19
 H、『解剖存真図』 図 52-4
 I、『平次郎臓図』 図 21
 J、『解剖存真図』 図 52-5
 K、『平次郎臓図』 図 22
 L、『解剖存真図』 図 52-6
 M、『平次郎臓図』 図 23
 N、『解剖存真図』 図 52-7
 O、『改新解剖学』 図 65
 P、『新訂解剖学』 図 3
 Q、『解剖存真図』 図 52-8

図 53(図版編 6-53-1)は腹部の筋肉と腹膜を示した図である。本図は図 25、47 と同様の図示法を採用した挿図である。図 47 の項でも触れたがこの系統の図は、人物のデッサンが崩れていたり、表題の解剖部位がうまく図示できていない点等が目立ちあまり出来が良い図ではない。特に本図は図 25(下図 A)との整合性を図 47(下図 B)よりも重視した結果、脇から胸にかけての筋肉の描写が不自然である。坤巻は第 1 図にあたる図 44 で見せた人体の量感の表現が本図群に活かされないことが残念である。このような検討結果から本図は他の解剖図の影響の少ない寧一の写生結果から描き起こした点が多くみられる C 群の図像である。



A



B



C

A、『解剖存真図』図 25

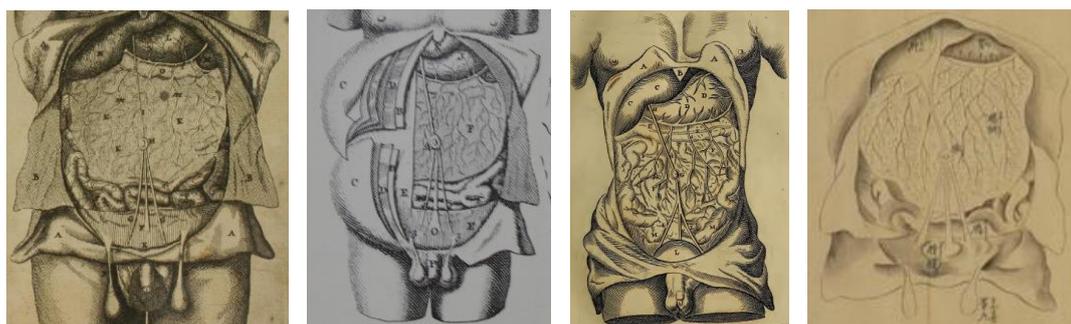
B、『解剖存真図』図 47

C、『解剖存真図』図 53

図 54(図版編 6-54-3)は『平次郎臓図』図 8(6-54-2)からの改作であることは両図を並べると明白である。寧一は自身の解剖結果を活かし、立体感や細部の描写など造形的に不明瞭であった心臓や肺、腸等の臓附を中心に改作している。本図は寧一による細部の描写の補正が見られるものの、それは原図に追従したものである。よって本図は A 群の図であるとしたい。

図 55(図版編 6-55-1)は腸膜(腸間膜)と臍の構造を示した無彩色の図である。同様の図像はヨーロッパの解剖図に良く見られるものであり、本図で引用された解剖書のなかでは『外科用解剖学』図 5(下図 A)、『ターヘル・アナトミア』図 19(下図 B)、『改新解剖学』図 7(下図 C)が同系統の図像である。その中でも図像の整合性が最も高い『外科用解剖学』を模倣し描いたものと思われる。その再現度合いは決して高いものではないが、参考図に追従して描いたことはが明らかな本図は A 群の図像としたい。

図 56(図版編 6-56-1)は腸網(腸間膜)の全形を示した図であるが、同様の図像は寧一が参考にした解剖図の中には存在しない。血管の描写や均整のとれ構図など図像全体の完成度が非常に高いことから、筆者は何らかの原図が存在するのではないかと推察している。よって本図は A~C 群の図には含めない判断保留の図としたい。



A

B

C

D

- A、『外科用解剖学』図 5
- B、『ターヘル・アナトミア』図 19
- C、『改新解剖学』図 8
- D、『解剖存真図 坤』図 55

図 57(図版編 6-57-1)は肝臓の前面、図 62(図版編 7-58-1)は肝臓の後面、図 59(図版編 6-59-1)は肝臓の内部を示した図である。本図は『平次郎臓図』図 16(図版編 6-57-2)、図 17(図版編 6-58-2)、図 18(図版編 6-59-2)をもとに、寧一の解剖写生をもって改作したことは明らかである。しかしながら『平次郎臓図』の原図は総じて不出来であり、色彩と前・後面、内部といった図示法以外はほとんど寧一によって新規に描き起こされている。よって本図はB群ではなく寧一によって新たに描き起こされたC群の図像としたい。

図 60(図版編 6-60-1)は胆嚢を図示したものである。向かって右側の図像は『ターヘル・アナトミア』図 24(下図 A)や『外科用解剖学』図 11(下図 B)には同じ部位を示した本図とよく似た図像が存在するが、A、B 図が縦割であることに対し本図は横に断った図である。このような点から右側の胆嚢図は寧一自身の写生結果をもとに描かれたC群の図であり、ヨーロッパの解剖図との形態の類似は胆嚢が単純な形態の臓附であることに起因するものであろう。

本図左側の胆嚢内部を示した図像(下図 F)は『外科用解剖学』図 11-6(下図 D)か、『医範提綱内象銅版図』図 27(下図 E)を参考に描かれたことは明らかであり、本図はいずれかの図像を模倣したA群の図であるといえる。



A

B

C



D



E



F

A、『ターヘル・アナトミア』図 24

B、『外科用解剖学』図 11

C、『解剖存真図』図 60-1

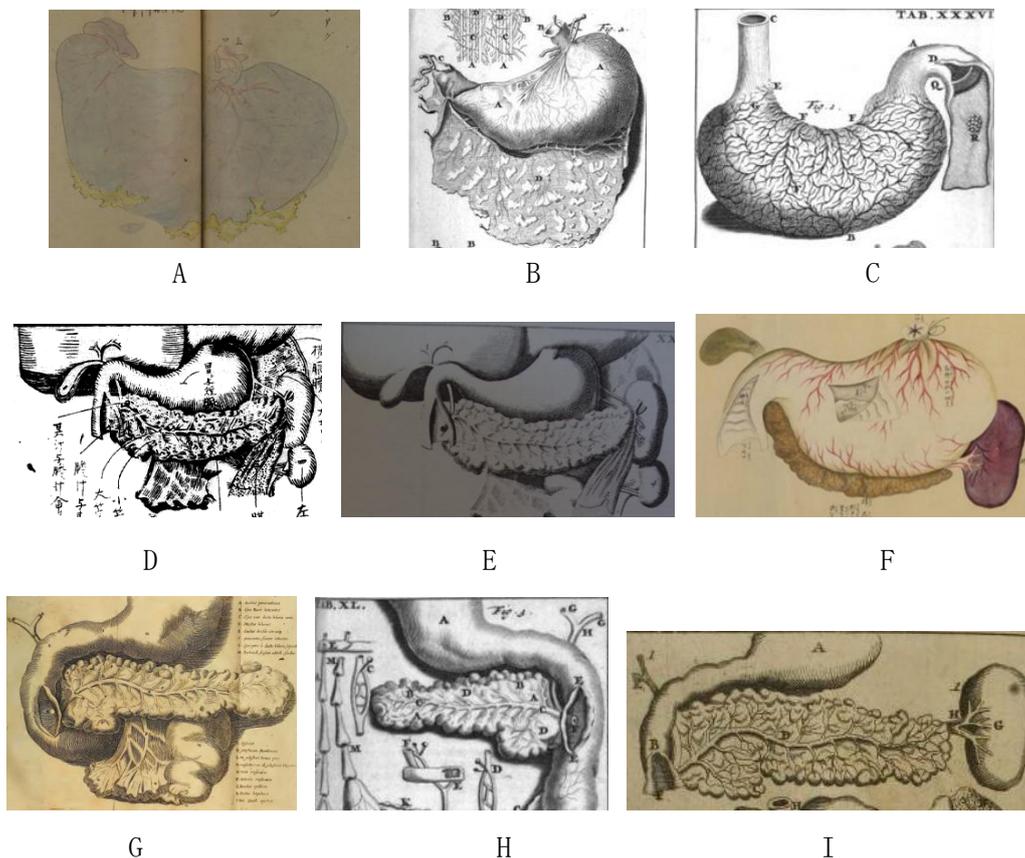
D、『外科用解剖学』図 11-6

E、『医範提綱内象銅版図』図 27

F、『解剖存真図』図 60-2

図 61(図版編 6-61-1)、図 62(図版編 6-62-1)はそれぞれ門脈を図示したものである。図 61 で寧一の写生図を示し次の図 62 でより図像化された図像を示している。図 62 はおそらく『ターヘル・アナトミア』図 18 をもとに寧一の解剖結果をもって描き起こしたものと推察される。このような検討結果から図 61 は C 群の、図 62 は B 群の図像であることがわかる。

図 63 は胃と膵臓、そのほか周囲の関連臓器の位置関係を図示したものである。胃の形態は『平次郎臓図』図 40(下図 A)や『新訂解剖学』図 45、46(下図 B、C)を元に描き、それに『解体新書』大機里爾・脾篇示大機里爾属諸部興膾菅連入十二指腸図(下図 D)か、その原図『ターヘル・アナトミア』図 22(下図 E)参考にした膵臓と周囲の臓器の図像を組み合わせたものと推察される。寧一が参考にした解剖図には『改新解剖学』図 19(下図 G)、『新訂解剖学』図 49(下図 H)、『外科用解剖学』図 11(下図 I)に膵臓が図示されているが特徴が近いのは前述の B、D、E 図であろう。このような検討結果から本図はいくつかの解剖図と寧一の解剖結果をもって描かれた B 群の図であると推察される。



A、『平次郎臓図』図 40

B、『新訂解剖学』図 45

C、『新訂解剖学』図 46

D、『解体新書』大機里爾・脾篇図

E、『ターヘル・アナトミア』図 22

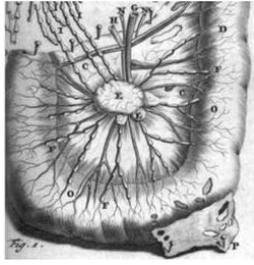
F、『解剖存真図』図 63

G、『改新解剖学』図 19

H、『新訂解剖学』図 49

I、『外科用解剖学』図 11

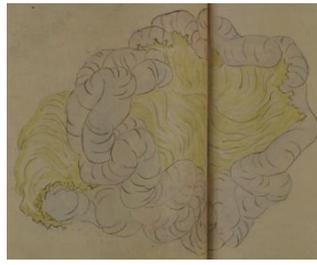
図 64(図版編 6-64-1)は腸の全像を図示したものである。本図も寧一の解剖写生をそのまま本図に書き起こしたものではなく、いくつかの解剖図からの着想をもとに作図されている。まず右側の十二指腸や腸間膜等が図示された部位(次頁 D 図)は、『新改訂解剖学』図 49(次頁 A 図)、『改新解剖学』図 95(次頁 B 図)、『平次郎臓図』図 49(次頁 C 図)、からの影響がみられる。D 図より左側の図像(次頁 F 図)は、寧一の写生によるものと考えられるが、作図の際には『平次郎臓図』図 33(次頁 E 図)や『人体解剖学』図 14-3(次頁 G 図)が参考にされたことであろう。腸の端の紐で結んだ図像(次頁 I、J 図)は、『改新解剖学』図 95(次頁 H 図)の図示本を参考にしたのであろうか。左端の独立した図は大腸と小腸の接合部を図示したもの(次頁 N 図)であるが、本図は『改新解剖学』13-1(次頁 K 図)、『改新解剖学』図 13-2(次頁 L 図)、『ターヘル・アナトミア』図 20(次頁 M 図)にも同様の図示法の図像があるためそれらを参考に作図されたものと推察される。これらの点を総合的に判断し、本図は寧一の写生結果のみにして描かれたものではないことが推察されるため、B 群の図としたい。



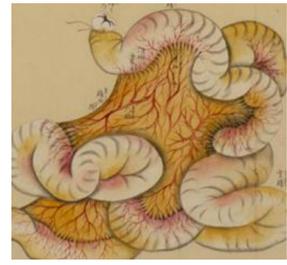
A



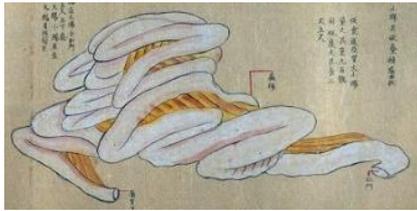
B



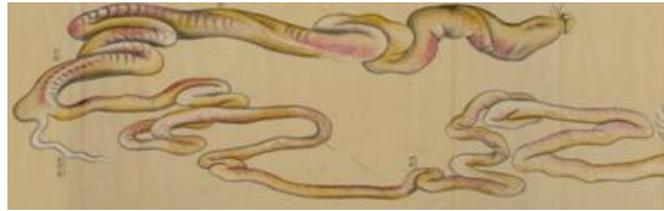
C



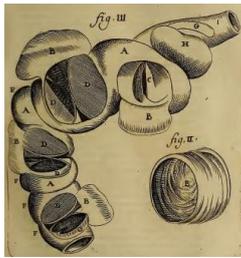
D



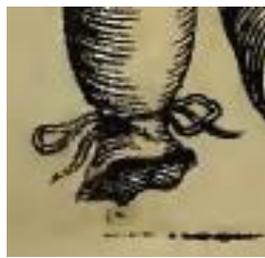
E



F



G



H



I



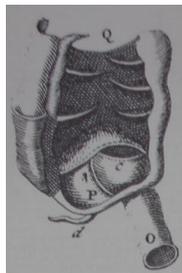
J



K



L



M



N

A、『新訂解剖学』図 49

C、『施薬院解男体臓図』図 49

E、『平次郎臓図』図 33

G、『改新解剖学』図 14-3

I、『解剖存真図』64 部分

K、『改新解剖学』図 13-1

M、『ターヘル・アナトミア』図 20

B、『改新解剖学』図 95

D、『解剖存真図』図 64 右部

F、『解剖存真図』図 64 腸全形図

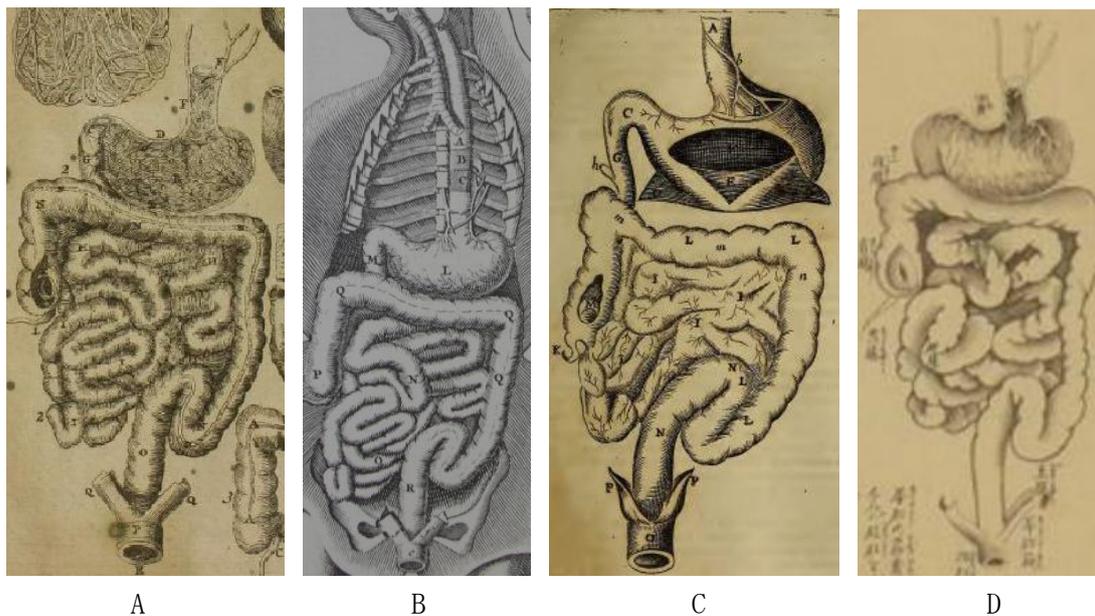
H、『改新解剖学』図 95 部分

J、『解剖存真図』図 64 部分

L、『改新解剖学』図 13-2

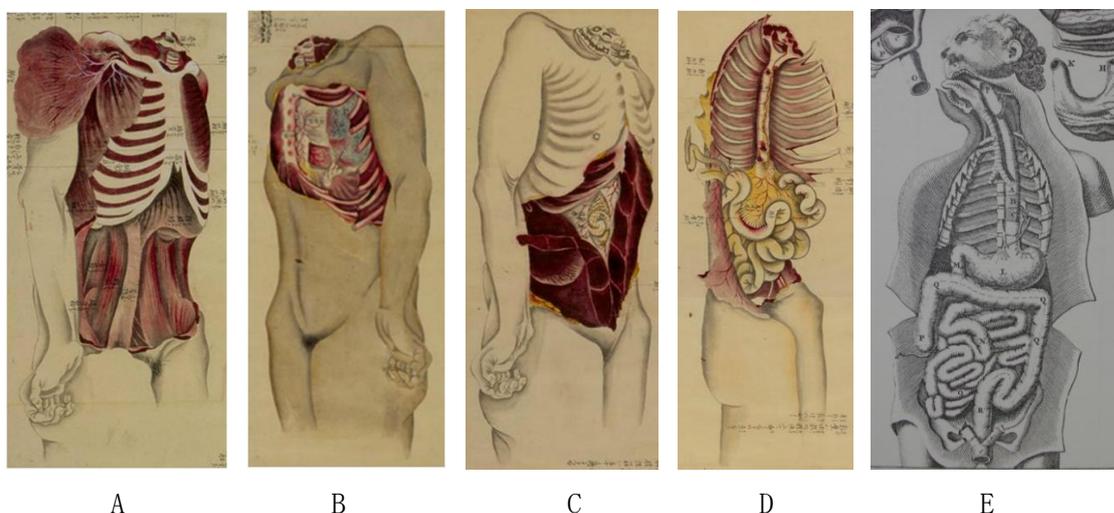
N、『解剖存真図』図 64 左部図

図 65(図版編 6-65-1)は腸と胃の位置関係を図示したものである。本図はヨーロッパの解剖図ではよくみられる図像であり寧一が参考にした解剖書では、『外科用解剖学』の図 6-2(下図 A)、『ターヘル・アナトミア』の図 20(下図 B)、『改新解剖学』図 11(下図 C)に良く似た図像が存在する。細部の描写などから参考にされた図像は『外科用解剖学』であろうかと筆者は推察している。このような検討結果から本図は B 群の図であることがわかる。



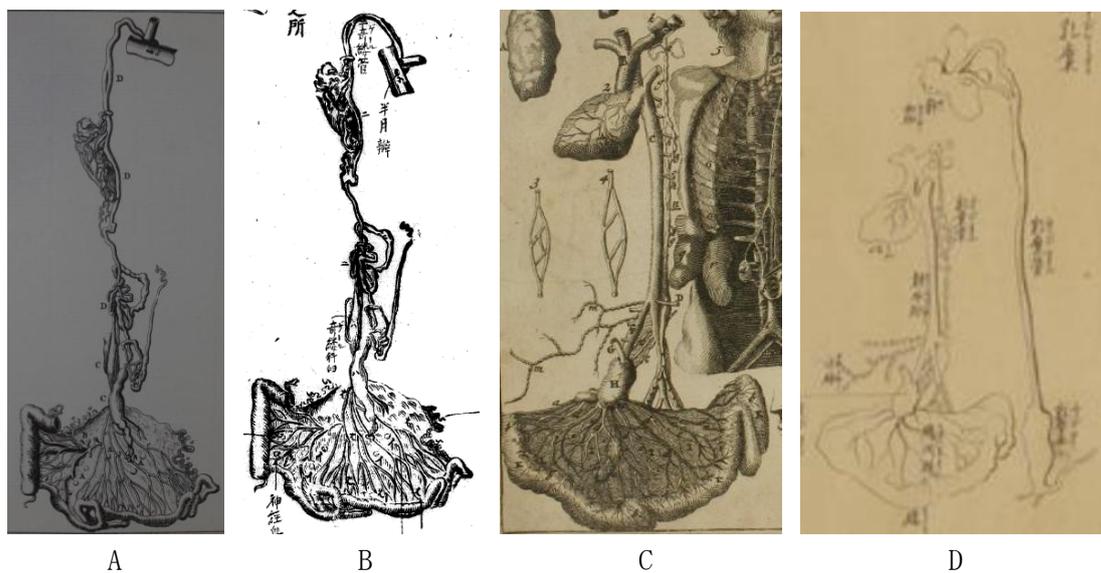
- A、『外科用解剖学』図 6-2
- B、『ターヘル・アナトミア』図 20
- C、『改新解剖学』図 11
- D、『解剖存真図』図 65

図 66 (図版編 6-66-1) は乳糜(現代医学では分泌された液そのものを示す語である。小川鼎三の『解剖存真図 解説』によると、本図では現代医学でいうところの乳糜管を乳糜膜、乳糜槽を乳糜囊、胸管を乳糜管、腹大動脈を動脈管と表しており、ここでは乳糜を分泌する関連諸器を表す語として乳糜という語がつかわれたものと推察される。)を示した図となっている。図像的には『解剖存真図』図 25(下図 A)、図 47(下図 B)、図 53(下図 C)、と連続した図像であることを意識して描かれたものと推察され、また腹腔内の構図や描写は『ターヘル・アナトミア』図 22 を参考にしつつも、図 64 の図像と整合性を持たせるように、腸の図像を図 64 と類似したものに置き換えている。このような検討結果から、ヨーロッパの解剖図像を参考にしつつも寧一によってほとんど新規に描かれた図像であることがわかる。よって本図は C 群の図である。



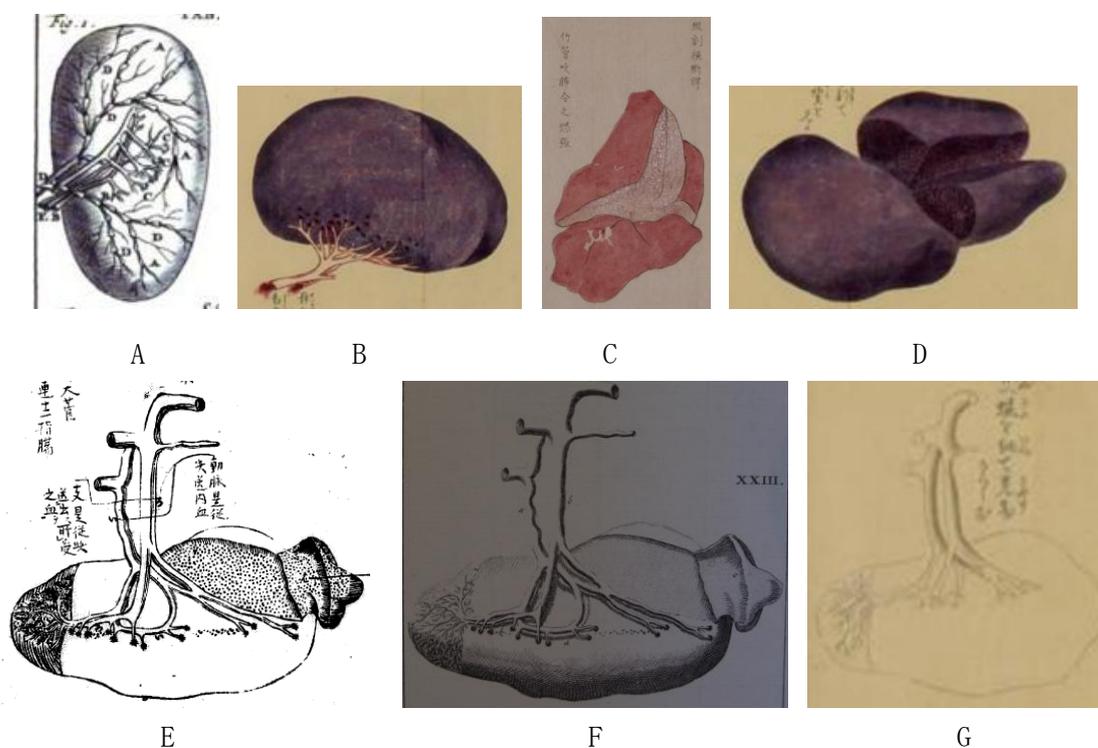
- A、『解剖存真図』図 25
- B、『解剖存真図』図 47
- C、『解剖存真図』図 53
- D、『解剖存真図』図 66
- E、『ターヘル・アナトミア』図 22

図 67(図版編 6-67-1)は図 66 に続いて乳糜について記述したものである。寧一が参考にした解剖図で同様の図像は『ターヘル・アナトミア』図 21(下図 A)、A 図を原図した『解体新書』下隔膜篇図(下図 B)、『外科用解剖学』図 8-1(下図 C)がある、心臓の描写や腸の形態から C 図が最も形態が近くこちらを参考にしたものと推察される。よって本図は B 群の図である。



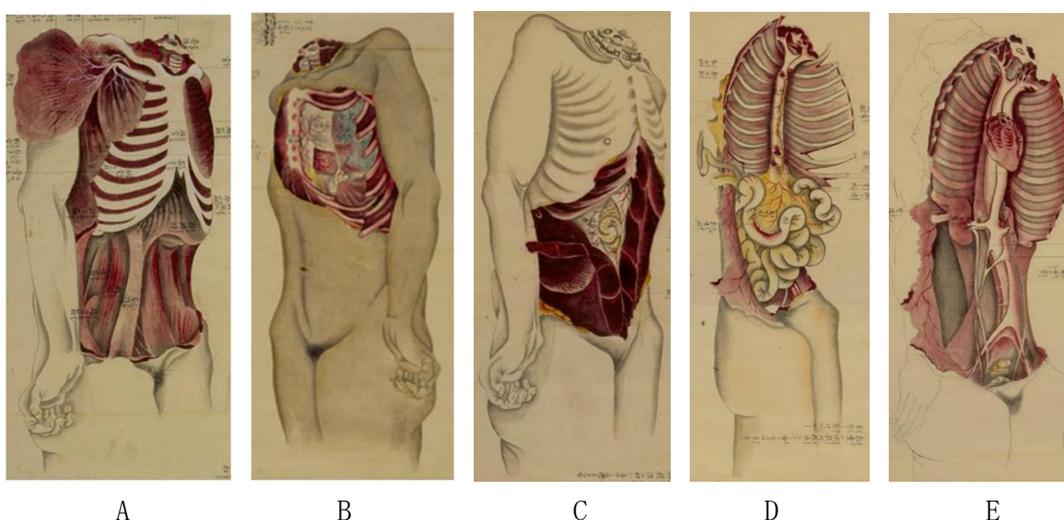
- A、『ターヘル・アナトミア』図 21
- B、『解体新書』下隔膜篇図
- C、『外科用解剖学』図 8-1
- D、『解剖存真図』図 67

図 68(図版編 6-68-1)は脾臓の全像と、内部、脈管の構造をそれぞれ図示したものである。全形を図示した下図 B や内部を図示した下図 D はおおよそ寧一の解剖写生から描き起こしたものであるかと考えられるが、B 図は『新訂解剖学』図 52(下図 A)を D 図は『平次郎臓図』図 26(下図 C)の図示法の影響が見られ、作図の際には参考にしたものと思われる。脈管の構造を図示した下図 G の訳注には、寧一が観臓の際に脈管に蠟を流し込み見やすくしたものであることが描かれている(小川鼎三『解剖存真図 解説』p 69)。G 図はそれらの観臓の結果をもとに、『解体新書』脾剥膜見血道図(下図 E)やその原図である『ターヘル・アナトミア』図 23(下図 F)の図像を参考に作図したものと推察される。これらの検討結果から B、D 図は寧一の解剖結果を重視した C 群の、G 図は寧一の解剖結果を反映しつつも図像的には明らかな E、F 図からの影響があるため B 群の図であると推察する。



- A、『新訂解剖学』図 52
- B、『解剖存真図』図 68-1
- C、『平次郎臓図』図 26
- D、『解剖存真図』図 68-2
- E、『解体新書』脾剥膜見血道図
- F、『ターヘル・アナトミア』図 23
- G、『解剖存真図』図 68-3

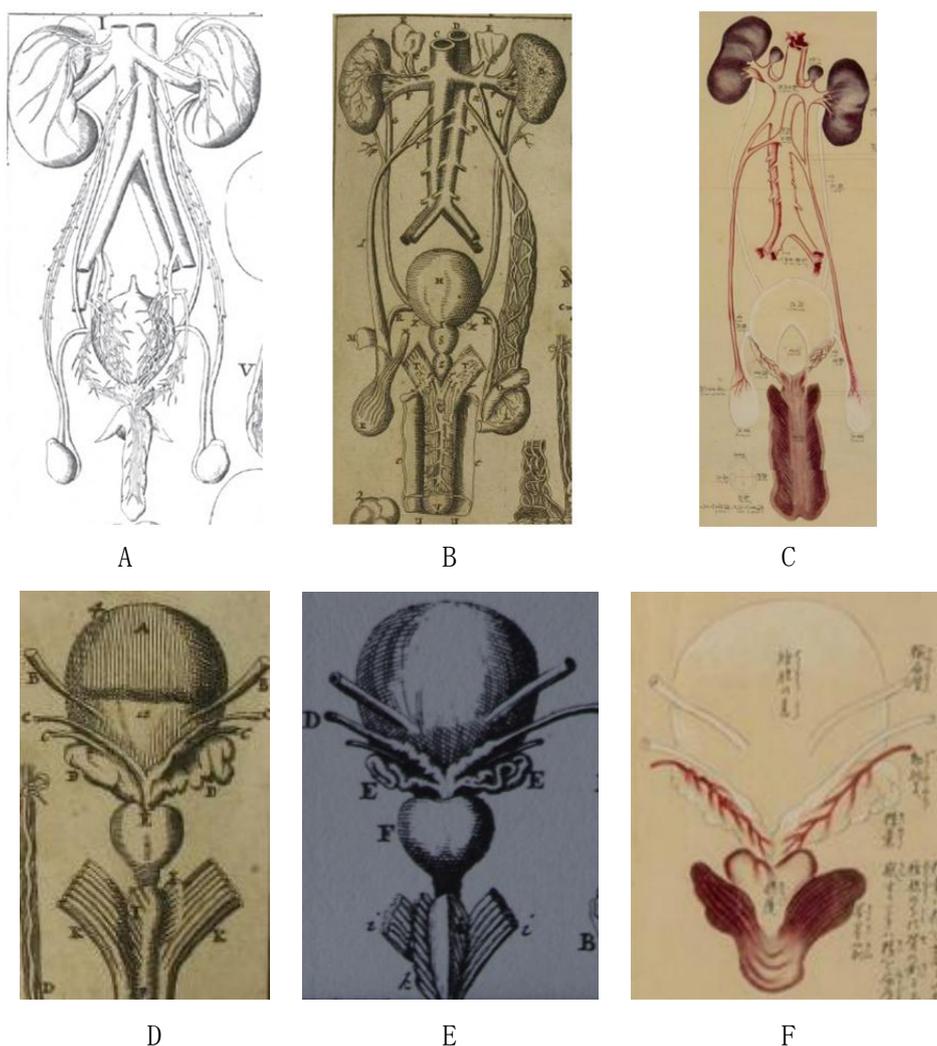
図 69(図版編 6-69-1)は腎臓と膀胱とその関連諸器を図示したものである。本図像は前出の『解剖存真図』図 25(下図 A)、図 47(下図 B)、図 53(下図 C)、図 66(下図 D)と連続した図像であり。これまでの図像を併せて下記のように並べたとき、それぞれの筋骨、臓器の全像を写生した事実を伝えることを重視した図像であることはすでに明らかである。寧一は各書臓器のはじめに各臓器・筋骨の位置関係を読者に示し、そののち解剖各部位の図示に移るという手法を用いたのである。また図示法はこれまでみてきた A 図等を描く際に参考にした『外科用解剖学』図 34-1 や『改新解剖学』図 88 の影響も引き継ぐものとなっている。このような検討結果から本図は寧一自身の解剖結果のみによっては成立しておらず B 群の図であるといえる。



- A、『解剖存真図』図 25
- B、『解剖存真図』図 47
- C、『解剖存真図』図 53
- D、『解剖存真図』図 66
- E、『解剖存真図』図 69

図 70(図版編 6-70-1)は腎臓、膀胱、睾丸の連なりを示した図である。本図像は『エウスタキウス解剖学解題』図 12-1(下図 A)か『外科用解剖学』図 12-1(下図 B)の図像を参考に描かれたものと推察される。もっとも臓附の細かな描写については寧一の解剖結果を重視したものであり本図はC群の図と判断できる。

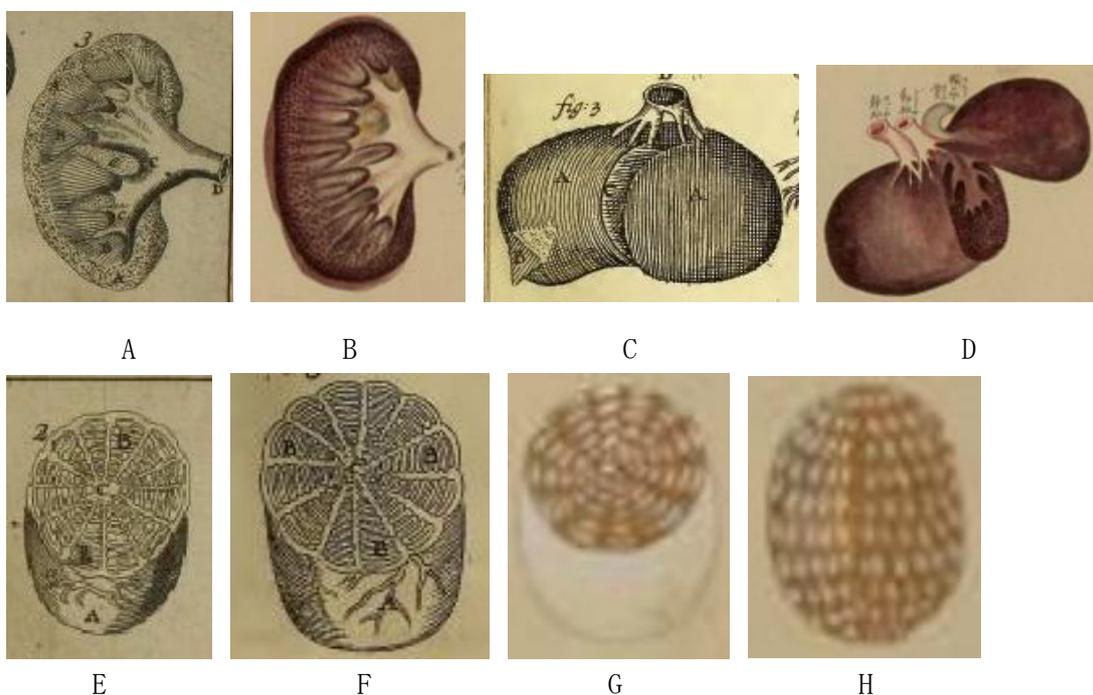
図 71(図版編 6-71-1)は膀胱の全形および精囊を示した図像である。本図の作成にあたっては『外科用解剖学』図 12-4 や『ターヘル・アナトミア』図 26 の図像を参考にしたものと考えられるが、図 70 と同様に細かな描写は改変されており、本図は複数の解剖図の影響から成立したB群の図像であることがわかる。



- A、『エウスタキウス解剖学解題』図 12-1
- B、『外科用解剖学』図 12-1
- C、『解剖存真図』図 70
- D、『外科用解剖学』図 12-4
- E、『ターヘル・アナトミア』図 26
- F、『解剖存真図』図 71

図 72(図版編 6-72-1)は腎臓の内部を示した図像である。向かって左側の腎臓を縦に割った図(下図 B)は『外科用解剖学』図 12-3(下図 A)から、横に割った図は『改新解剖学』図 23-1 からそれぞれ図像的な影響がみられる。しかしながら模倣と呼ぶには参考図からの共通項が少ないため、本図は寧一の解剖結果を重視して図示した C 群の図像であることがわかる。

図 73(図版編 6-73-1)は睾丸を示した図像である。向かって左の図像(下図 G)は『外科用解剖学』図 14-2(下図 E)や『改新解剖学』図 35-4(下図 F)を参考に描かれたことが分かるが、右の図(下図 H)に関しては該当の図像は寧一が参考にした解剖図の中には存在しない。このような検討結果から図 G はヨーロッパの解剖図を参考に描かれた B 群、図 H は寧一の解剖結果をもとに描かれた C 群の図像であることがわかる。



- A、『外科用解剖学』図 12-3
- B、『解剖存真図』図 72 部分
- C、『改新解剖学』図 23-1
- D、『解剖存真図』図 72 部分
- E、『外科用解剖学』図 14-2
- F、『改新解剖学』図 35-4
- G、『解剖存真図』図 73 部分
- H、『解剖存真図』図 73 部分

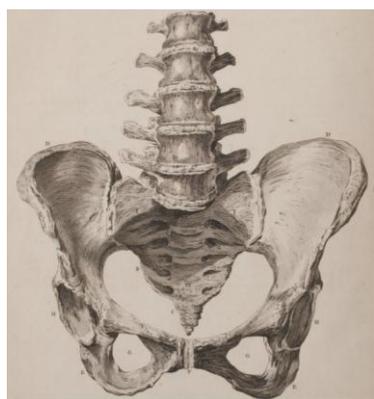
図 74(図版編 6-74-1)腎臓の水脈(小川鼎三によれば「リンパ管(『解剖存真図 解説』) p 73)」を示した図である。本図は図版編 7-74-1 の左上にあるように「Palfyn(パルフィン)」の『外科用解剖学』からの引用図であり、そこから筆者が検討したところ図 74 の模図であると推定された。本図を原図と比較したとき細かな描写もよくにているため A 群の図としたい。

図 75(図版編 6-75-1)は女性の陰器の全像を図示したものである。本図はヨーロッパの解剖図によく見られる図像であり、本図においても『新訂解剖学』図 58(下図 C)や、『外科用解剖学』図 15-1(下図 D)、16-1(下図 B)に同様の図像が存在する。本図では『外科用解剖学』の 2 図の特徴を掛け合わせた図像となっており、B 群の図であることがわかる。

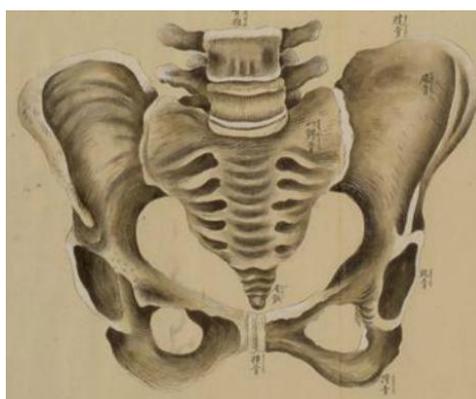


- A、『外科用解剖学』図 9-1
- B、『解剖存真図』図 74
- C、『新訂解剖学』図 58
- D、『外科用解剖学』図 15-1
- E、『外科用解剖学』図 16-1
- F、『解剖存真図』図 75

図 76 (図版編 6-76-1) は腰骨の全像を図示したものである。図 76 の右上に書き入れがあるように「Smelie(スメリー)」の解剖図であることがわかる。小川鼎三により正確なスメリーの名の綴りが明らかとなっていた為、筆者独自にスメリーの解剖書を調査することができた。寧一が参考にしたスメリーの解剖書は『解剖図譜および産科実地の説明と要約』であり図 76 は図 1 (下図 A) からの引用である。本図は、『平次郎臓図』図 59、図 61、図 62 の改作を目的に作図されたと推察されるが、参考にした『解剖図譜および産科実地の説明と要約』からの変更点が少ない本図は A 群の図であるといえる。



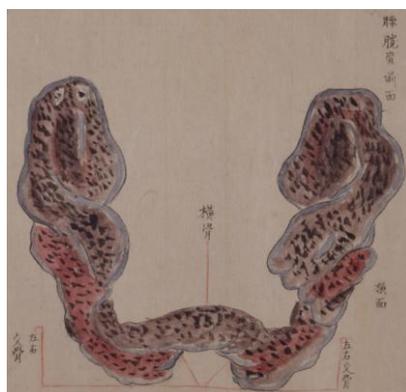
A



B



C



D

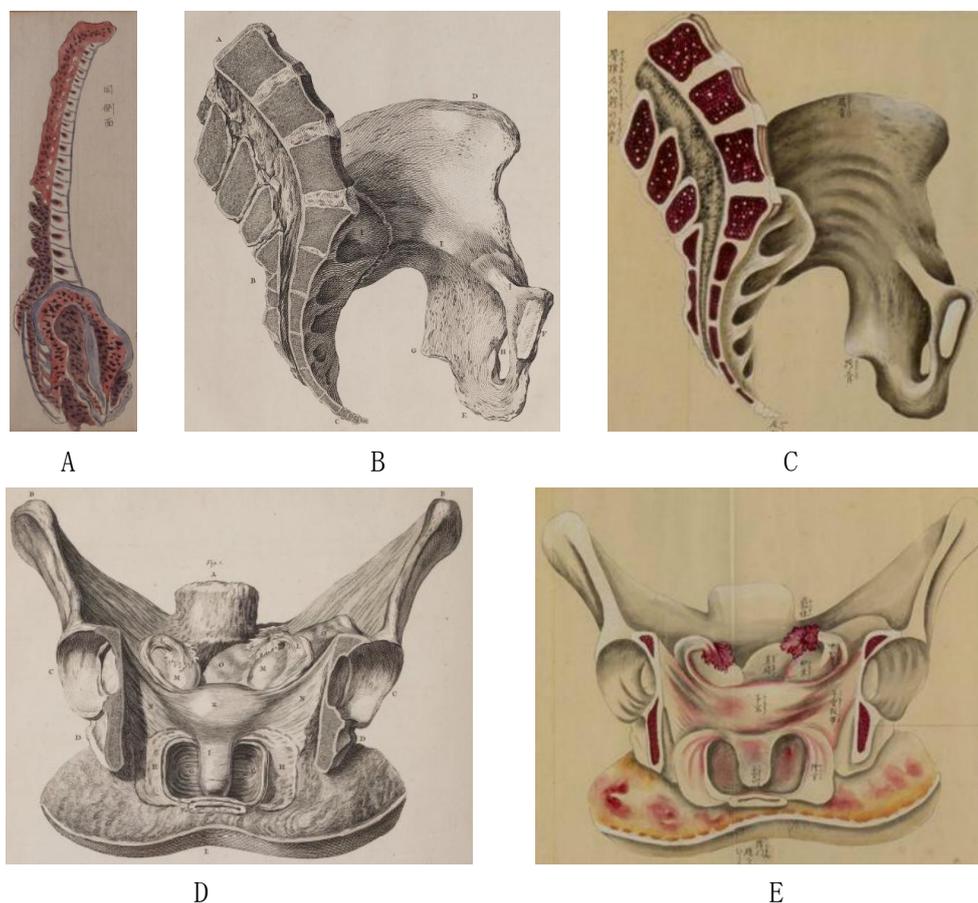


E

- A、『解剖図譜および産科実地の説明と要約』図 1
- B、『解剖存真図』図 76
- C、『平次郎臓図』図 59
- D、『平次郎臓図』図 61
- E、『平次郎臓図』図 62

図 77(図版編 6-77-1)は腰骨の側面を示した図像であるが、本図も図 76 と同様に『平次郎臓図』の腰骨の図像(下図 A)の改作に『解剖図譜および産科実地の説明と要約』の挿図を利用した図像である。本図で『解剖図譜および産科実地の説明と要約』から引用されたのは図 77(下図 B)であるが、原図では複雑なハッチングにより再現された骨の内質を、寧一は鮮やかな色彩に置き換えている。このようなことから本図も A 群の図であるといえる。

図 78(図版編 6-78-1)は骨盤を中央から脊椎に対して並行に断ち、子宮と骨盤の位置関係と構造を示した図像である。図 75 では分かりづらかった子宮の人体における位置を明瞭に図示している。本図も『解剖図譜および産科実地の説明と要約』を模倣し描かれた図像であり、『解剖図譜および産科実地の説明と要約』図 78 に必要に応じて着彩を施しているものである。このようなことから本図は原図に追従した A 群の図であるといえる。

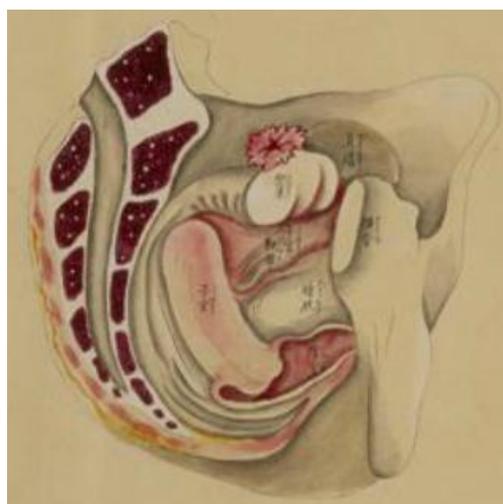


- A、『平次郎臓図』 図 58
- B、『解剖図譜および産科実地の説明と要約』 図 2
- C、『解剖存真図』 図 77
- D、『解剖図譜および産科実地の説明と要約』 5-1
- E、『解剖存真図』 図 78

図 79(図版編 6-79-2)は骨盤を脊椎に対して垂直に断ち、子宮と骨盤の位置関係を示した図像である。本図も『解剖図譜および産科実地の説明と要約』を模倣したものであり、図 79 から引用している。『解剖存真図』図 79 は原図と比較すると細部の描写が淡白であり、原図と比較すると描写技術は一段劣るといっていいが、その内容は原図に追従したものであり A 群の図像であるといえる。



A



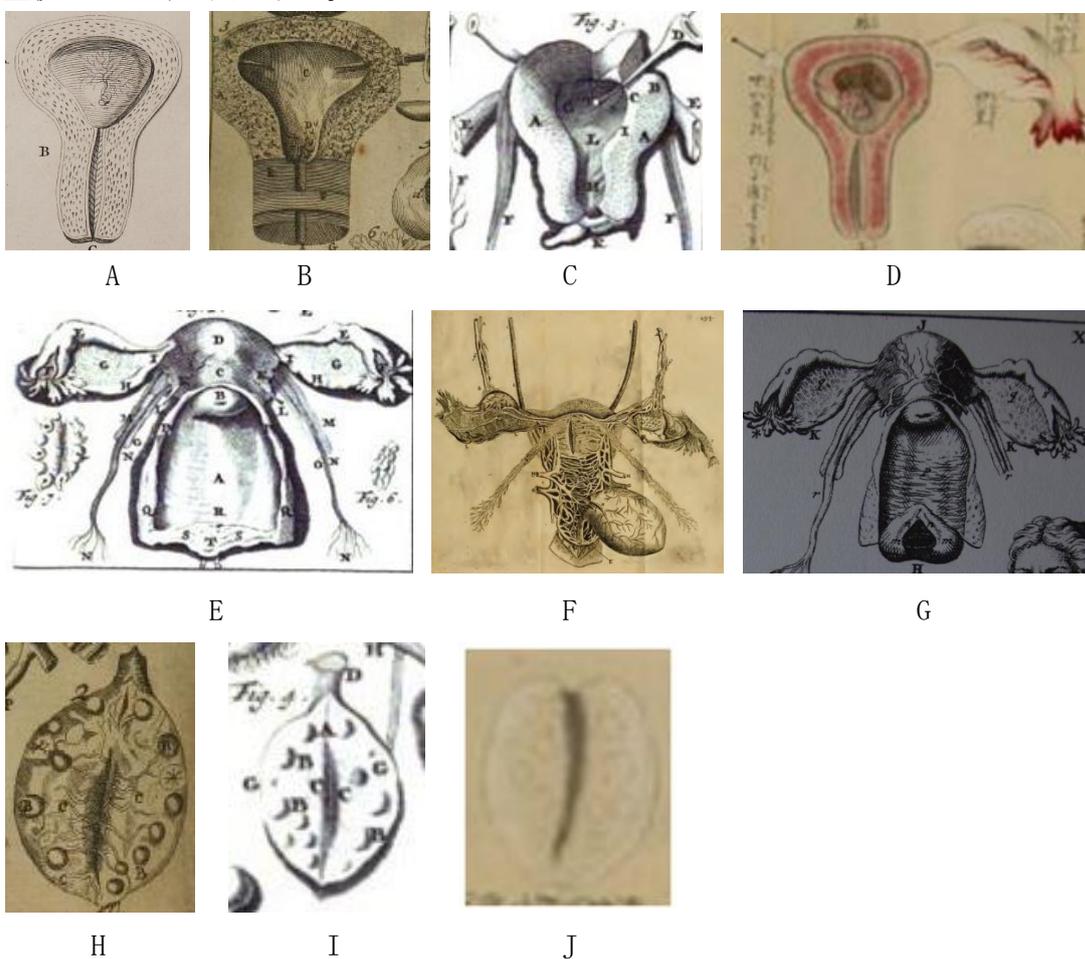
B

A、『解剖図譜および産科実地の説明と要約』図 5-2

B、『解剖存真図』図 79

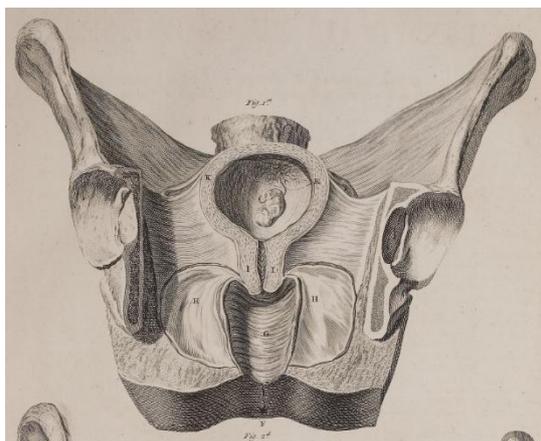
図 80(図版編 6-80-1)は子宮と卵巣を示した図像である。本図左側の図像(図版編 D)は『解剖図譜および産科実地の説明と要約』図 5-3(下図 A)の図像を基準に、『外科用解剖学』17-3(下図 B)や『新訂解剖学』図 59-3(下図 C)、59-2(下図 E)、『改新解剖学』図 49(下図 F)、『ターヘル・アナトミア』図 26(下図 G)の図像を組み合わせ作成されたものと推察される。よって D 図は複数の解剖図を組みあわせて作成された B 群の図であることがわかる。

右側の卵巣の内部を示した図(下図 J)は、寧一の解剖写生によるものか『外科用解剖学』図 16-2(下図 H)や『新訂解剖学』図 59-2(下図 I)を参考にしたものと推察される。本図は単純な形態にもかかわらず、図像的な共通項が少ないことから寧一の解剖結果を重視した C 群の図とする。

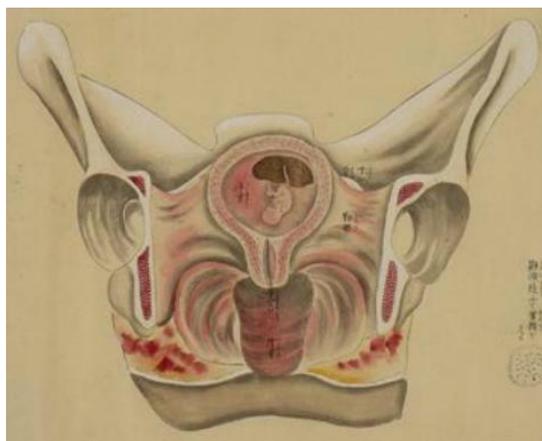


- | | |
|----------------------------|------------------|
| A、『解剖図譜および産科実地の説明と要約』図 5-3 | B、『外科用解剖学』17-3 |
| C、『新訂解剖学』図 59-3 | D、『解剖存真図』図 80-1 |
| E、『新訂解剖学』59-2 | F、『改新解剖学』図 49 |
| G、『ターヘル・アナトミア』図 26 | H、『外科用解剖学』図 16-2 |
| I、『新訂解剖学』図 59-2 | J、『解剖存真図』図 80-2 |

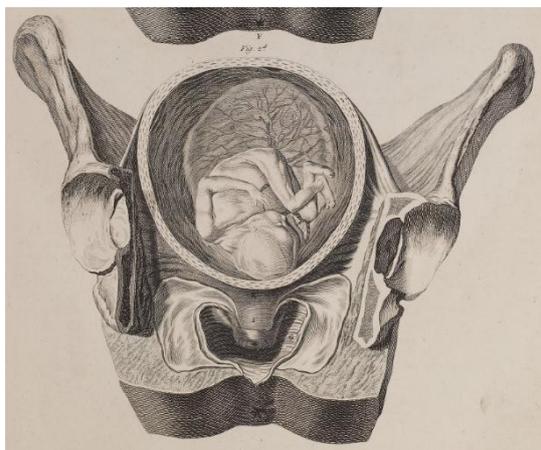
図 81(図版編 6-81-1)は妊娠 2 月目の胎内を、図 82(図版編 6-82-1)は妊娠 3 月目の胎内を図示したものである。本図は『解剖図譜および産科実地の説明と要約』図 6 を模倣したものであり、着色を施した点以外は原図からのおおきな変更は無いため A 群の図であることがわかる。また B 図の右下には寧一による顕微鏡でみた精液の図が描かれており、本図は寧一の写生図である C 群の図である。



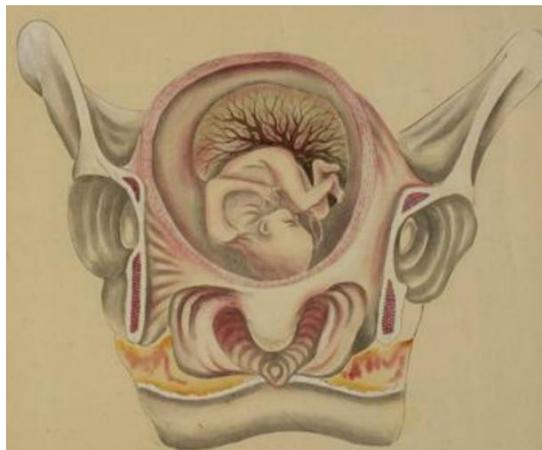
A



B



C

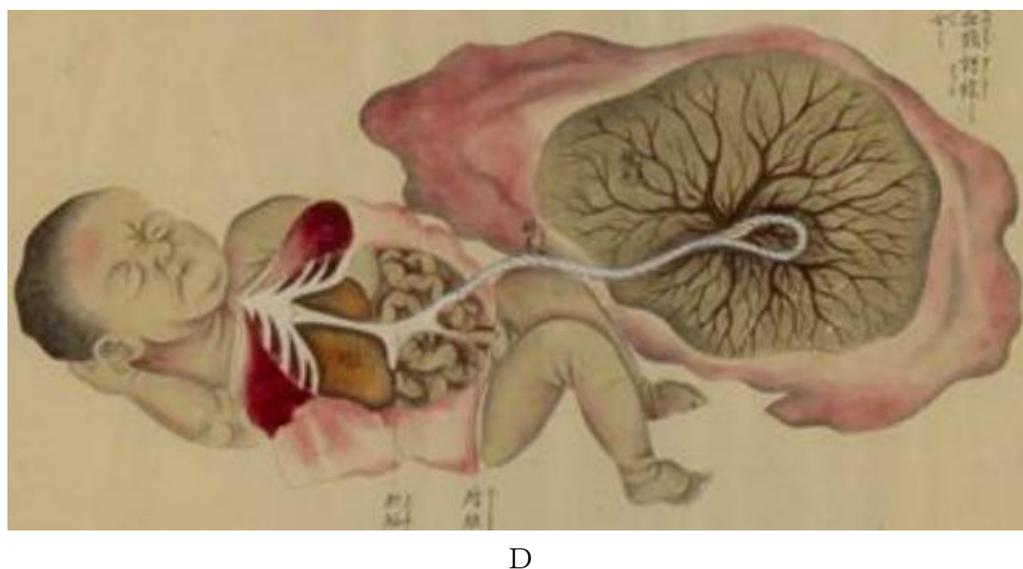
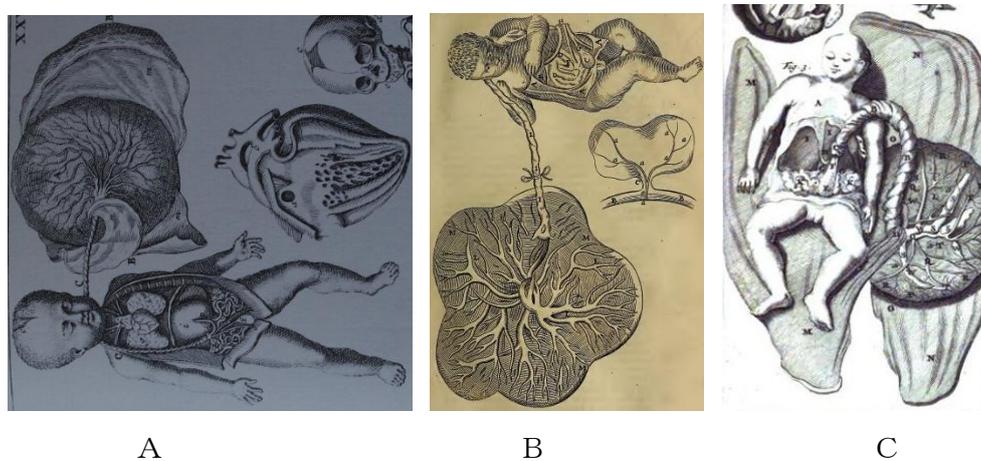


D

- A、『解剖図譜および産科実地の説明と要約』図 6-1
- B、『解剖存真図 坤』図 81
- C、『解剖図譜および産科実地の説明と要約』図 6-2
- D、『解剖存真図』図 82

図 83 (図版編 6-83-1) は胞衣(えなと読む。胎盤を差す語・小川鼎三『解剖存真図 解説』 p 78) や臍帯の胎児との連なりを示した図像である。

胎盤とへその緒、そして胎児を一つの画面で図示する方法は、ヨーロッパの解剖図ではよくみられる型である。寧一が参考にした解剖図の中では『ターヘル・アナトミア』 図 27 (下図 A)、『改新解剖学』 図 54 (下図 B)、『新訂解剖学』 図 61-3 (下図 C) がそれぞれ同様の図示法を用いたものであるが、最も特徴が近い図像は『新訂解剖学』の図像であろうか。とはいえ『解剖存真図』 図 83 の形態とは大きく差があることに加え、A、B、C 図ではわかりづらい臍静脈まで図示している点から本図は寧一による解剖写生から描き起こした C 群の図であることがわかる。



- A、『ターヘル・アナトミア』 図 27
- B、『改新解剖学』 図 54
- C、『改新解剖学』 図 61
- D、『解剖存真図』 図 83

5 章『解剖存真図』

3 節 5 章総論

本図巻は編纂の契機となった小石流の解剖書からの引用だけではなく、『解体新書』のほかヨーロッパの解剖図が 8 冊からの引用がみられる。また筆者が研究対象とした江戸蘭学の解剖図では唯一、絵師自身の解剖結果から描き起こした解剖図が挿入されている点も特筆すべきものである。

全 83 図に筆者区分の 7 図を加えた 87 図を小川鼎三や酒井シヅの医学史的先行研究も踏まえ A、B、C 群に分類分けした結果、A 群は 87/24 図、B 群は 87/42 図、C 群は 87/18 図、分類分けを保留にしたものが 87/3 図となり、これによって『解剖存真図』は約半数が複数の解剖図像を参考に描かれたことが分かる。また A 群の解剖図も含めれば約 8 割の図像が何らかの先行する解剖図像の影響を受けているのである。筆者検討の結果、『施薬院解男体臓図』の系統につらなる図像も存在することから、それらの解剖図を何らかの形で寧一が見ていた可能性は高いと筆者は推定するが、決定的な 1 次資料の存在を本研究においての調査では見出すことができなかった。

『解剖存真図』は小石流の解剖書を蘭方医学の解剖図や寧一自身が行った解剖の写生記録画をもって改作した解剖図と、ヨーロッパの解剖図に図像をほとんどそのままに写しとり着色をほどこした解剖図、そして最後に寧一自身の解剖写生を重視し描かれた解剖図 3 系統で構成されており、その多様性は江戸解剖図の円熟を感じさせるものである。

6章『玉函把而翁湮解剖図』

1節『玉函把而翁湮解剖図』の概要と表現



『玉函把而翁湮解剖図』扉絵 早稲田大学図書館蔵

『解剖存真図』の成立から3年後には江戸の蘭方医のもとに留学した経験をもつ、小石元俊の弟子らによって『把而翁湮解剖図譜(ばるへいん かいぼうずふ)』が編纂された。本書は斎藤方策と中環(なか たまき)がジャン・パルフアン通称パルヘイン(Johannes PalfynまたはJan PalfinまたはJean Palfyn 1650~1730)の著した『外科用解剖学(Heelkonstige ontleding van's menschen lighaam)』を共訳した解剖書である。上下2編2冊と付図2冊の計4冊で刊行されたとされるが、筆者が研究対象としたのは下編の図版編『玉函把而翁湮解剖図(よはん ばるへいん かいぼうず)』である。

本書の出版時期は、山本四郎『小石元俊』p127によれば、「上編が文政7年に下編が文政5年に共に2巻」構成で刊行されたとされ、山本の論に従えば上編が後から刊行されたことになる。菅野陽『日本銅版画の研究』の記述を参照するとp399には「文政壬午(五年=一八二二)」とあり、上編の刊行年についての記述がない。しかし本文中には「上下編譜図2冊」とあり、菅野が『把而翁湮解剖図譜』が計4冊構成の解剖書であることは把握しているものと推察される。筆者が研究対象とした、早稲田大学図書館所蔵の『把爾翁湮解剖図譜』のからの上編の刊行年代の検討を試みたが、早稲田大学総合

図書館所蔵の『把爾翁湮解剖図譜』は下編の本文編と図版編のみであり、上編は所蔵されておらず上編の刊行年の特定は筆者自身では行えなかった。下編は山本の記述の通り文政5年である(上図「表題」参照)から、ここでは山本の刊行年に従い記述することとする。

すでに述べたように筆者が研究対象とした早稲田大学版は下編しか所蔵されておらず、附図も筆者が原書『外科用解剖学』と比較したときに後半のみしか掲載されていないことが分かった。山本四郎『小石元俊』p127にある『把爾翁湮解剖図譜』の稿本とおもわれる、『巴爾靴員解体書 稿本』と題された(下図3)パルヘイン解剖書の第1図を模写したものと図が掲載されているが、筆者が比較した早稲田大学収蔵の『把爾翁湮解剖図譜』にはこの図は存在しない。このほかの先行研究をみると菅野陽『日本銅版画の研究』p400には『把爾翁湮解剖図譜』の第一版として、原図『パルヘイン解体書』とよく似た図が挙げられており、茅原源一郎収蔵の『把爾翁湮解剖図譜』には筆者が未見の図が存在することが想定される。



A



B



C

A、パルヘイン『Heelkonstige ontleding van's menschen lighaam(1718)』図1

B、橋本宗吉『巴爾靴員解体書』稿本

C、斎藤方策、中環『把爾翁湮解剖図譜』図1

訳者・編著者のひとりである、斎藤方策(さいとう ほうさく明和8年・1771～嘉永2年・1849)は字を素行、号を九和、半山、孤松軒(山本四郎『小石元俊』p124)といった。はじめ周防国佐波郡一本松の医師斎藤玄昌の子、郷里では漢方医能美由庵に師事し、19歳で大阪にでた(山本四郎『小石元俊』p124)。その勤厳さは高く評価されており文政年間大阪では第一の流行医であった(山本四郎『小石元俊』p125)とされる。

もう一人の訳者・編著者の中環(なか たまき天明3年・1783～天保6年・1835)は諱を融、号を天遊、はじめ耕助と通称し後に環をなほの。弟子に緒方洪庵がいる。

「本性は上田氏(山本四郎『小石元俊』)であり「京都に出てから中(仲)(山本四郎『小石元俊』)」姓をつかった。大槻玄沢の弟子であり、芝蘭堂の入門帳『戴書』の記録から「文化2年5月15日」に芝蘭堂に入門し、そののち文化3年(1805)の5月ごろには故郷の京都に戻っている。また日蘭辞書『江戸ハルマ』の作成に携わった大槻玄沢門下の芝蘭堂四天王のひとりである稲村三伯にも師事したことが知られる(『江戸時代蘭語

学の成立とその展開Ⅳ』 p 754)。こののち環は三泊の娘と結婚しており(『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅳ』 p 754)、当初は西宮(現在の兵庫県西宮市)に住んで、嫁の定(さだ)が女医として家計を支え、環は主に勉学に励んだという。文化14年(1817)35歳のときに大阪に出てそこで生涯をすごした。

江戸で稲村三泊や大槻玄沢に師事したことは環の医学思想に大きな影響を与え、人生のほとんどを関西で過ごしたにもかかわらず、関西の主流であった漢方系医学ではなく江戸蘭方医系の医学思想をその背骨としている。環の塾では『歴象新書』をテキストとして用い、究理学(物理学)や医学でも特に解剖学への関心が強かったようである(『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅳ』 p 754、755)。また山本四郎『小石元俊』 p126には「宗吉は元俊・重富のために反訳に従事した。元俊が大阪滞在間に宗吉に訳させた元俊珍藏のバルヘインの解体書がある(原文中の括弧は省略)」とある。「宗吉」は芝蘭堂四天王のひとりである橋本宗吉そのひとである。山本によれば、大阪の傘職人であった橋本宗吉を「大阪の町人出身の天文学者間重富と元俊がともに蘭文が読めないので、共同出資のうえ芝蘭堂に半年間遊学させ(『小石元俊』 p125)」しており、その間にオランダ語4万語を暗記したと、宗吉の著した『三方法典』のなかの元俊がしるした序文にある。このように『把爾翁湮解剖図譜』は先に宗吉の訳業があつて「後年小石玄端・斉藤方策・中環が共同出資し、中環の従弟中屋伊三郎という模刻の名手をえたので出版した(『小石元俊』 p 126)」のである。

バルヘイン『外科用解剖学』の挿図を写し銅版画に翻刻した中伊三郎(なか いさぶろう 生年不詳～万延元年・1860)は名を玄、字を端、といい伊三郎は通称であった。また生まれが商家であったため、姓と名の間に「屋」をいれた「中屋」という屋号を用いる場合もある。

伊三郎は本文を翻訳・著述した者の1人である中天遊の従兄にあたり、文政初年ごろより銅版を学んだと考えられている。その師はあきらかではないが、菅野陽『日本銅版画の研究』では「橋本宗吉あたりではないか」と、また杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅳ』では「天游(環)から銅版の模刻作成を教示され、生来の器用さからこれを習得した」と中環の交友関係(後述)からの推察がなされている。また従兄の中環より医学の手ほどきも受けており(『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅳ』 p 755)、銅版印刷と医学の両輪で生計を立てていたようである。

中伊三郎は、この『把爾翁湮解剖図譜』以前にも前出の宇田川玄真著『医範提綱銅版全図』の扉絵の改作と、後述する『解体新書』の改訂・増補版である『重訂解体新書』の附図の制作もおこなっている。

伊三郎は『医範提綱内象銅板図』と同様に、腐食銅版画を挿図に採用し、ヨーロッパの絵画技法であるクロスハッチングを模倣することに成功したが、田善の手法とは大きく異なる。田善が複数の解剖図を掛け合わせ図像を作成したことに対し、伊三郎は原図をなるべく改変しないように制作している。菅野は「扉や第一版のような人間の全体像

を表したものでは、デッサンが不自然な形象を示している(『日本銅版画の研究 p 400』)と指摘したが、原図『パルヘイン解体書』の人物像のデッサンもそれほど優れたものではないから、これによって伊三郎の洋風画技術の優劣を推し量ることは難しいと思われる。また菅野がのべるように「腐食技術はしっかりして(『日本銅版画の研究』 p 401)」おり、また「原図の翻刻にはその技術が発揮」されるなど、筆者が研究対象とした7冊の江戸時代の解剖図の中で、最も原図に近い解剖図が挿入されたのが、この『玉函把而翁湮解剖図』である。芸術、画に通じた者は、その作品に対する執着がでてしまうものである。それは小田野直武しかり、亜欧堂田善しかり、原図に似せようとしても出てしまうものがあり、それが小田野直武の場合であれば、ヨーロッパの画法を真似た際に用いられた日本在来の筆法であり、亜欧堂田善の場合であれば人の顔形が原図と大きく異なることが代表的な例であろう。その点、中伊三郎という絵師はそのような執着を捨て、ヨーロッパの解剖図を真似て写し取るという行為に徹することができた稀有な人材であるといえる。こののち大槻玄沢が『解体新書』の改訂を行う際に、挿図の翻刻師として採用したのは、与えられた役目に徹することができる伊三郎の資質を買ってのことであろう。

『玉函把而翁湮解剖図』を前出の解剖書挿図と比較したときの美術的特色は以下の2点である。

- 1、原書以外の解剖書からの引用図が無い。
- 2、原図からの意図的な改作が無い。

1はこの『玉函把而翁湮解剖図』の図像としての完成度を高める遠因となった。これにより、中伊三郎は図を写し取ることに専念でき、自身の能力の領分を超えることなく画工に徹することができたのである。図版編の7-1-1 から7-22-2 までをみてわかるように伊三郎の画技は、原図を写し取ることにのみ発揮された。この意味では田善よりも徹している。コピー機やスキャナーとしての技能を磨き、イメージを描くことにはそれほど熟達していなかったはずの田善が人物像には、その領分をこえ創造性を発揮してしまったことを筆者は「御用絵師としての驕り」と断じたが、その点伊三郎は己の領分に徹しており、筆者はその点を高く評価する。自身の持つ技能を客観的に認識しそれを使いこなした伊三郎はプロフェッショナルである。ヨーロッパの絵画技法を体系的に知り得なかったことからくる、技術的な不備はみられるが、本解剖図が伊三郎の持っていた技術を過分なく発揮したものであることは間違いない。

6章『玉函把而翁湮解剖図』

2節 6章総論

『玉函把而翁湮解剖図』は筆者が研究対象とした解剖図の中で、最も原図からの変更が少ない解剖図である。それは本書の本文が他の江戸蘭方医系の解剖図と異なり、1冊の解剖図のみからの純粋な翻訳解剖書であったことで、挿図もそれにならったことが大きな理由の一つであろう。しかし絵師である中伊三郎の資質による点も見逃せないものである。小田野直武しかり、亜欧堂田善しかり、原図に似せようとしても画家は無意識に自分自身の画風に近づいてしまうものであり、それが小田野直武の場合であれば、ヨーロッパの画法を真似た際に用いられた日本在来の筆法であり、亜欧堂田善の場合であれば人の顔形が原図と大きく異なるといった模倣を膜的とした解剖図では場外されるべき特徴にあらわれてしまった。その点、中伊三郎という絵師は画家としての癖や衝動を抑え、ヨーロッパの解剖図を真似て写し取るという行為に徹することができた稀有な人材であるといえる。この点が評価されたのか否かは定かではないが、中伊三郎はこのうち大槻玄沢が『解体新書』の改訂を行う際に、挿図の腐食銅版画家として採用されている。

7章『重訂解体新書銅版全図』

1節『重訂解体新書銅版全図』の概要と著者大槻玄沢について

1項『重訂解体新書銅版全図』の概要



『重訂解体新書銅版全図』 国立国会図書館蔵

『重訂解体新書』は、杉田玄白の高弟大槻玄沢(おおつき げんたく 宝暦7年・1757～文政10年・1827)が文政9年(1826)に刊行した『解体新書』の改訂・増補版である。序文、例言からなる第1冊と、本文4冊、名義解6冊、附録2冊、計13冊に加え銅版画面解剖図1冊からなる。本論の研究対象としたのはこの解剖図であるが、解剖図には特別に『重訂解体新書銅版全図』という書題があげられている。

本文は『解体新書』と同じく『ターヘル・アナトミア』を翻訳したものであるが旧版にくらべその翻訳の精度は数段まさるものである。また『解体新書』は『ターヘル・アナトミア』本文中の註釈を訳さなかったが、『重訂解体新書』では註釈も一部訳している。(『大槻玄沢の研究』 p154) 次の名義解は玄沢が解剖学上の医学用語を解説したものであり、これには『ターヘル・アナトミア』の脚注が翻訳・引用されているだけでなく、他のヨーロッパの解剖書の知識も活用されている。そういった意味でこの名義解は単なる翻訳書というだけでなく、玄沢の著作的側面がある。また附録2冊のうち下巻は、玄沢の医学論を著した随筆となっており、玄沢の医学観を我々につたえる。(『大槻玄沢の研究』 p128～131) このように『重訂解体新書』は単なる『ターヘル・アナトミア』の翻訳書ではなく、玄沢の著述的側面もふくまれているのである。

7章『重訂解体新書銅版全図』

2項大槻玄沢の来歴―『重訂解体新書』訳稿開始まで―

大槻玄沢(おおつき げんたく 宝暦7年・1757～文政10年・1827)は、諱を茂質(しげかた)、字を子煥、号を磐水といった(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』p3)。玄沢の父は、玄白と同じようにオランダ流外科をもって医家をたてた。玄沢が8歳の明和2年(1765)に父玄梁は仙台藩の支封一関藩田村侯に召し抱えられている。玄沢は13歳の明和6年(1769)に、父の同僚である建部清庵に師事する。杉田玄白へ師事する希望はすでに『解体約図』刊行の年、建部清庵と玄白の交友が始まったころには既にあったとされるが、はじめは清庵の許可がおりず、兄弟子建部亮策(由水)が先に天真楼で学んでいる。それが安永2年(1773)のことであり、その4年後安永6年(1777)に帰郷した亮策が清庵を説いて江戸留学の口添えをした結果、ついに2年間の留学の許可がおりる(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』p4)。当初2年の予定であった留学は、周囲の協力もあり1年、2年と延び通算4年間の留学をえて、天明2年(1782)5月26歳のときに帰郷する。帰郷すると妻をめとり、この年の7月には藩主より江戸詰めを命じられ、ふたたび江戸へのぼる。藩邸の長屋に住み、天明4年(1784)4月まで江戸にあった(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』p5)。この年は建部家と杉田家の縁はより深まった年でもある。玄沢を江戸留学に推薦した建部清庵の子であり兄弟子の由甫、のちの伯元を杉田家が養子に迎えたのである。(片桐一雄『杉田玄白』p233)

大槻玄沢が江戸にあった5年のあいだ、江戸に名高き天真楼塾にて玄白から蘭方医学を学ぶかたわら、あの前野良沢を語学の師とあおぎ蘭語学も身につけている(片桐一雄『杉田玄白』p235～236)。玄沢の才は『蘭学事始』において「和蘭窮理学には生まれ得たる才ある人也」と絶賛されている。良沢により伝授された蘭語能力は、玄白が『ターヘル・アナトミア』の翻訳ののち進めていたヘイステルの解剖書『外科学』の翻訳事業に大きく貢献した。そもそも前野良沢との師弟の縁は、大槻玄沢が杉田玄白の命で『外科学』の訳文の補正を請うたのがはじまりである。その後大槻玄沢は齢50に達した玄白からこの翻訳事業をまかされることとなる。そしてこの時期につちかった語学知識は、天明8年(1788)に『蘭学階梯』として刊行されるが、それ以前に『蘭学階梯』とほとんど同じ内容と目される書物を『蘭学階梯』が成稿したのと同じ年に玄沢は著しており書名を『和蘭鏡』といった(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』p7)。

『和蘭鏡』そのものは現物が存在していないが、早稲田大学洋学文庫収蔵の『畹港漫筆』に同書の序跋が載せられている(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』p6)。跋文の末尾に「天明癸卯秋九月、東都江漢司馬峻識」とあり、銅版面創製の司馬江漢が天明3年(1783)9月に跋文を著したことがわかる。この跋文によると、司馬江漢ははじめ漢画を学んでそれを生業としていたが、(おそらくは師の平賀源内により示され)オランダ舶来の銅版画図や機器を見て、その精妙さにおどろき、それらを自分の手で作りたいと考えた。しかしその法を学ぶためには蘭書にたよるしかない。そこで知人の大槻玄沢先生の

門を叩き、「塾についてこれを謀り、或ひは二三同好の士と日を刻して、先生を茅堂に請じ、その書を講じ、その説を議し、相誼り、相咨るもの、ここに年あり。研鑽の余、ほぼその一端を知る。」江漢はこのような玄沢との師弟とも似た関わりのなかで、腐食銅版画創製の参考書となる『ショメール』や『ボイス』の銅版画に関する記述を、玄沢により訳し、示されたのである。とはいえ銅版画の日本創製をうたい、またオランダ舶来の文物になみなみならぬ興味をしめしていた江漢のこと、自分の力で蘭書を読解したいという思いが強く、玄沢に蘭語学入門書の執筆を求めた。そして著されたのがこの『和蘭鏡』であると江漢は跋文にてのべている。

このような司馬江漢との関わりからもわかるように、江戸留学中、天真楼時代の玄沢は医学だけでなく様々な学問に知識の枝を広げる。かの平賀源内や師の前野良沢と異なるところは、その学究の成果のおおくを著作として今日に伝えたことであろう。博物学方面のものであれば『六物新志』、『薦録』、『底野迦真方』等が江戸留学時代の知識や見聞が活かされたものである(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 325～356)。

天明4年(1784)には父玄梁を通じて、藩当局に長崎遊学を願い出て、これが許可される。こののち“急病”により江戸に残ったが、6月に父危篤の報に応じて一関に帰郷、7月に父玄梁が没する。8月には家督を相続した。玄沢28歳。(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 8～9)

その後藩侯の参勤にしたがって江戸に上がり、藩邸内の長屋に滞在したが、またもや“急病”におかされ、玄白のすすめで天真楼塾にて静養することとなった。この前後の“急病”は江戸の滞在期間をのぼし天真楼にて研究をするための仮病であろうと考えられている。この2回目の“急病”による静養中に一関藩の本藩、仙台藩から玄沢へ内密に召し抱えの報があった。しかし、将来的には江戸詰めとなり、師を助ける希望をもっていた玄沢は、藩首脳に仙台藩の移籍は江戸詰めが絶対条件と願い出ている。この願いは、内々にではあるが認められることとなる(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 9～11)。

天明5年(1785)9月には長子陽乃助(玄幹)誕生。10月に長崎に向け江戸をたつ。このときの長崎遊学に同行したのは杉田玄白の子 伯元である。大阪を經由1月に長崎到着、本木良永(蘭臯)宅に奇寓し、吉雄耕牛とともに蘭語学の手ほどきをうける。本木良栄は『新天地二球用法記』をはじめ、多数の訳書を持ち、当時の通詞のなかでも、抜きんでて語学力のひいでた人物であった。しかし階級は小通詞でありその生業は多忙で、また婚礼も控えていたことから、玄沢らはなかなか本式に教授をうけることができなかったが、翌年から長崎をたつまでは良永に時間的ゆとりがうまれ、持参したヘイステル『外科指針』をテキストに語学をみがいた。良永からの指導以外でも玄沢は様々な蘭学者や通詞と関わった。吉雄耕牛はすでにのべたが、桂川家に『ショメール』をもたらしした榎林重兵衛、志筑忠雄、堀門十郎など、多数の通詞とかかわり、新知識を得つつ、種々の便宜を与えられている。特に良沢や玄白の長崎の蘭語学の師であり、蘭方外科としても

一家を成している大通詞吉雄耕牛には目をかけられたようで、有名なオランダ屋敷に通され、感嘆の思いをのこしている。また耕牛の弟子の合田求吾の『紅毛医述』によれば、かれは西洋解剖図を用いての指導もおこなったようであるから、玄沢もこのうわさを聞き、指導を仰いだのであろう。良永が忙しかったこともあり、毎日のように耕牛の元をたずねた。この関わりのなかで、耕牛の塾生らとともに、刑屍体の解剖に立ち会い見学している。またこの年の旧暦 12 月 17 日には吉雄塾一門の和蘭正月にまねかれ、のちに玄沢の私塾でもこれを習うことになる。

このほかでは本木良永や楢林重兵衛ら通詞のはからいで、出島の蘭館にしばしば出入りもしている。出島においては生きた語学をまなんだことは当然として、オランダ人の日常をながめることも出来たことは玄沢の蘭学者としての視野を深めるものとなった。またこの時期にあの大通詞 西善三郎ともかかわり、師の近況報告などで話がはずんだことであろう。このころ師杉田玄白は京都に入洛し小石元俊と問答している。

天明 6 年(1786)3 月 26 日には長崎をたち江戸に向かうが、このたびの留学費用を出資したのは師玄白ではなく、蘭癖大名 福知山藩主朽木昌綱であった。昌綱は個人的に蘭人と書簡のやりとりもおこなっており、今回の留学においては蘭館員デュールコープに格別の便宜を求めると、影に日向に多大な貢献をしている。玄白は師の目の届かぬ長崎では遊郭遊びをたしなむなど豪遊しており、昌綱はパトロンとして玄沢に相当な出資をおこなっていたようである。またこのことから『蘭学事始』にある学者気質の堅物とはちがった、当時の文化人の気性を繁栄した粹人的気質もみえてくるのである。玄沢は江戸への帰路に大阪、京都にたちより小石元俊の元も訪れている。山本四郎『小石元俊』によると師の入洛から 1 ヶ月後のことであり、元俊、玄白 3 者で、小石元俊の東遊の打ち合わせを行ったと推察している(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 11～17)。

天明 6 年(1786)5 月 8 日に江戸に到着し玄白宅に滞在する。そして 5 月 28 日付で仙台藩の並医師に召され、かねてからの嘆願どおり、仙台藩江戸定詰となるだけでなく、のちに藩外の江戸居住をも許可される。これにより玄沢の江戸における蘭学の学究と師命である『外科学』の翻訳の達成はほぼ保障されたといつてよい(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 11-21)。玄沢のこれまでの幕府要人との交渉の巧みさにはおどろかされる。これは玄沢自身の将来をみこした計画性もさることながら、周囲のとりなしや助言もみのがせない。先の天明 5 年の仙台藩の本藩とりたてや内々の交渉や、親類の契りをおこなっていた工藤平助がおこない、また度々の“急病”の後見人には奥医師に盟友がおり、幕僚にも顔がきく師の玄白が請け負う。このほか留学時には強力なパトロンをえていたことなどからも、彼は学問的な才能だけでなく、政治的な駆け引きにも秀でていたことがうかがえるのである。

さて仙台藩に移籍し定められた俸禄のうち 5 両を前借りし、玄沢は江戸京橋 1 丁目に居を構えた。そこを私塾「芝蘭堂(しらんどう)」とし、このときから玄沢は実質的に天真楼塾から独立して自身の一家を成したのである。この年には玄沢のパトロン、朽木侯

の医員 有馬文仲が芝蘭堂塾の門弟となっている(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 19、23)。またこの年には、かねてからの計画どおり小石元俊が江戸に東遊しており、江戸での住まいはこの大槻玄沢の新居であった。(山本四郎『小石玄俊』 p 90) また元俊の半年に及ぶ江戸滞在期間で、日夜ヨーロッパの医学についての討論が催され、その議論には師玄白はもとより、『解体新書』編纂社中の石川玄常等も加わっている(山本四郎『小石玄俊』 p 93)。

翌天明7年(1787)には帰郷し、母と妻子また舎弟の陽助(良達)といった故郷の家族を江戸に呼びよせ、新たな生活をはじめ(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 320)。またこの年の夏には師の代から交友のある桂川当主の弟、森島中良の『紅毛雑話』の序文を著している(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 327)。

天明8年(1788)1月には御番医師、4月には近衛医師に昇格。(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 320) 著作は『和蘭弁惑』が成稿する(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 327)。本書は前年に刊行された『紅毛雑話』と同様の性質のもので、蘭学の普及をはかり一般向けにオランダという国の人や事物について説明したものである。当時の日本人は中華思想を源にした夷狄観をもとにオランダ人をみており、蔑視すると同時にむやみに畏れていた。本書では「欧蘭巴地方の人は我亜細亜人とは(中略)、具有する者は何の変わりもなく、用をなす所にも、また少しも違ふ所なし」と開かれた視点で述べ、それを実証するためにオランダ人男女の裸体図を載せている。(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 24~25) 寛政11年(1788)に公刊された本書は、当時の日本人の観念や因習の蒙から脱却させる意図があったのである。またこの年には初期江戸留学時代の成果といえる『蘭学階梯』、『六物新志』がそれぞれ刊行された(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 328)。またこの年には新たに橋本宗吉が芝蘭堂に入門している(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 23)。このように類縁からの芝蘭堂塾への入門志願者があらわれるなか、寛政元年(1789)には芝蘭堂塾の盟規を作り正式に塾の運営にのりだした。これ以後文政9年(1826)までに門人帳に名を連ねたのは90人を超える。もともと山村才助や宇田川玄真のように署名・血判していないまでも実質に指導をあおいでいた者も数多く存在するから、芝蘭堂門人の総数は100名を超えたと考えられている。そういった人物のなかで著名なのは、江戸ハルマを完成させた稲村三泊、日本で初めて解剖図に銅版画を採用した『医範提綱』の著者宇田川玄真、やはり後述する京都古医方派の医師で解剖図巻本『解剖存真図』を著した小石元俊などがあげられる。(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p 24)

このように師玄白のあとにつづき江戸の蘭方医学後輩育成に尽力した玄沢は、それと並行し著作による啓蒙活動もおこなっている。その総数は嗣子玄幹のつたえるところによれば、刊行されたもので15部、45巻、草稿に属するもの121部、198巻、通計243巻あったというが、そのなかには蘭語学の啓蒙となる著述が少なくない。なかでも蘭学の発達と普及に大きく貢献したのは前述の『蘭学階梯』である。天明8年(1788)にこれ

が刊行されると多くの読者をえて、芝蘭堂の教科書としても活用された。しかし初学者には理解しがたいところが少なくなかったので、新たに『蘭学佩觿(らんがくはいけい)』を編纂し寛政7年(1795)に板刻した。これはもっぱらローマ字の書体と読法を説いたもので、これ以後蘭学を志すものは、まずこれによって語学を学んだという(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p24)。

寛政2年(1790)には師命をうけてのち玄沢のメインワークとなっていた、ハイステル『外科学』の序章「誘導編」の訳述及び、本文の抄訳が一応成稿する。このときには公刊せず後にその内容を幾つかの本に分割して発行されることとなった。

まず「手術編」の一部である「刺絡編」を、門人の佐々木中沢が玄沢の訳を増補し『八刺静要』として文政5年(1822)に公刊、つぎに文政7年(1824)に「尻臀手術篇」を玄沢の嫡男玄幹が、父の校閲のもとに抄訳して『要術知新』を刊行した。序章の「外科誘導」の部分は大槻玄沢が『瘍医新書』として文政8年(1825)に、その後玄幹が「包帯篇総論」を『外科収功』と題し文化11年(1814)に刊行するなど相次いで刊行したが、ついに全編が刊行されることはなかった。とはいえこれらはオランダ医学の大綱を明らかにしたものであり、この翻訳のなかで得られた知識は、新たな玄白からの師命において活かされる(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p21)。

すこし時間をさかのぼり寛政2年(1790)頃、新たな命が玄白よりつたえられる。彼の出世作であり、天真楼塾の宝典『解体新書』の改訂を命じられたのである。『瘍医新書』の訳稿が成ると同時にとりかかったとされる新たな玄沢のライフワークは、多忙な合間をぬって進められ、文化元年(1804)には訳稿が一応の完成をみた(洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』 p22)。しかしすでに概説で述べたように、『重訂解体新書』が刊行されるのは文政9年(1826)であり、そこからまだ22年の歳月を擁した。洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』の「『解体新書』と『重訂解体新書』」の項 p104~105 にはこれ以後の『重訂解体新書』刊行までのながれが概略されているから以下に引用する。

寛政2年(1790)頃 杉田玄白『解体新書』の改訂を大槻玄沢に命じる。

寛政10年(1797)春、大槻玄沢『重訂解体新書』の「附言」を書く。

夏、『重訂解体新書』の草稿を杉田玄白に提出。

同夏杉田玄白が「旧刻解体新書凡例」の最後に追記する。

文化元年(1804)冬、「付録」2巻が完成。

同冬『ターヘル・アナトミア』の「序列」を改訳。

文政4年(1822)『解体新書』の吉雄耕牛による「序」を『重訂解体新書』のために書き改める。

文政5年(1822)建部清庵が「序」を書く。

文政7年(1824)斎藤方策が「跋文」を書く。

文政9年(1826)『重訂解体新書』刊行。

寛政10年以後の大槻玄沢は多忙であり、幕命による『ショメール』の翻訳本『厚生新編』の訳述や、文化2年(1805)の仙台領ロシア漂流民に対する記聞を『環海異聞』としてまとめるなど、先立った蘭語学の大家桂川甫周や森島中良に成り替わり、幕府の外国語顧問のような役割をになっていた。そのような本業以外の公務や本業に忙殺されるなか、恩師の大著の改訂という大事業に万全を尽くした結果、これほどに刊行が遅れたのであろう。ともあれ大槻玄沢が没したのは文政10年(1827)であるから、『重訂解体新書』の編纂はまさに一生をかけた大事業となったのである。

7章『重訂解体新書銅版全図』

2節『重訂解体新書銅板全図』の表現

1項 松平体制における洋風画技術者の成熟

『重訂解体新書』の銅版画解剖図は『重訂解体新書』全体でも最も遅くに完成したこともあり、大槻玄沢のもつ江戸系蘭方医の人脈を最大限に活用したものとなっている。

これまで紹介してきた江戸時代の腐食銅版画挿図を採用した解剖図は、ヨーロッパの腐食銅版画と異なり、下図をえがく絵師と銅版画に翻刻する彫師とが同じであることがこれまで多かったが、この『重訂解体新書』の場合は下図をえがいた絵師とそれを銅版画として翻刻した彫師が異なる。下図を描いたのは『解剖存真図』を執筆し図も描いた南小柿寧一、それを翻刻したのは『把爾翁湮解剖図譜』の挿図制作を担当した中伊三郎である。両者に共通するところは『解体新書』の付図をえがいた小田野直武と異なり医学に通じたことである。『把爾翁湮解剖図譜』の項でも述べたが銅版画家中伊三郎はその才を、原図からの模写とそこから腐食銅版画への翻刻といった職人的な技術に強く示し、逆に南小柿寧一は『解剖存真図』のような肉筆彩色の解剖図を描くなど画に秀でた。

このような絵師と銅版画翻刻の分業がなされた背景には、田善やその師である谷文晁に代表されるような、松平体制下での洋風画技術者の人材育成が関わっている。初期の洋風画家はそれに携わる人口が少なく、また新進の分野であったため実験的な部分の多い制作であった。しかしこの時期の洋風画は技術の解明ののち、それらを日本の風土にあわせある程度の技術革新もなされたその結果『重訂解体新書』の附図が描かれるころには人的資源が充実してきていたのである。

解剖図に関わった絵師をみても、「銅版画技法に専修＝亜欧堂田善」、「医師でありながら画法に通じる＝南小柿寧一」、「医師でありながら腐食銅版画を修める＝中伊三郎」等と非常に多様であり、これによって各々の資質を考慮し適材適所に采配することができたのである。

7章『重訂解体新書銅版全図』

2節『重訂解体新書銅板全図』の表現

2項『重訂解体新書銅版全図』に引用された解剖図

『重訂解体新書』は図像的に江戸系蘭方医学解剖図の総決算と呼べるものとなっている。この『重訂解体新書銅版全図』に引用されたヨーロッパ解剖書は、筆者が参考にした先行研究で書名が明らかにされているもので10冊存在する。その内訳は『解体新書』から継続して採用された解剖図ではヨハン・アダム・クルムス『ターヘル・アナトミア(解剖学表)』、ステファン・ブランカールト『新訂解剖学』、『カスパル解体書』(筆者未見)、『コイテル解体書』(筆者未見)の4冊、このほか『解体新書』附図には引用されず『重訂解体新書銅版全図』には引用されたものとして、ベルナル・ジークフリード・アルビヌス『エウスタキウス解剖学解題』、フィリップ・ヘルヘイン『人体解剖学』、ウィリアム・カウパー『114図の人体解剖学』、ジャン・パルファン『外科用人体解剖学』、同じくジャン・パルファン『骨骸全書』(筆者未見)、ヘンドリック・ファン・デヘンター『Operationes chirurgicae novum humen exhibentes obstericantibus』の6冊が挙げられる。このほか先行研究では指摘されたことのない解剖図として『医範提綱内象銅板図』を筆者はあげるが詳しくは後述する。このような先行研究をふまえた検討結果から『重訂解体新書銅版全図』に引用された解剖書は11冊であると推定される。

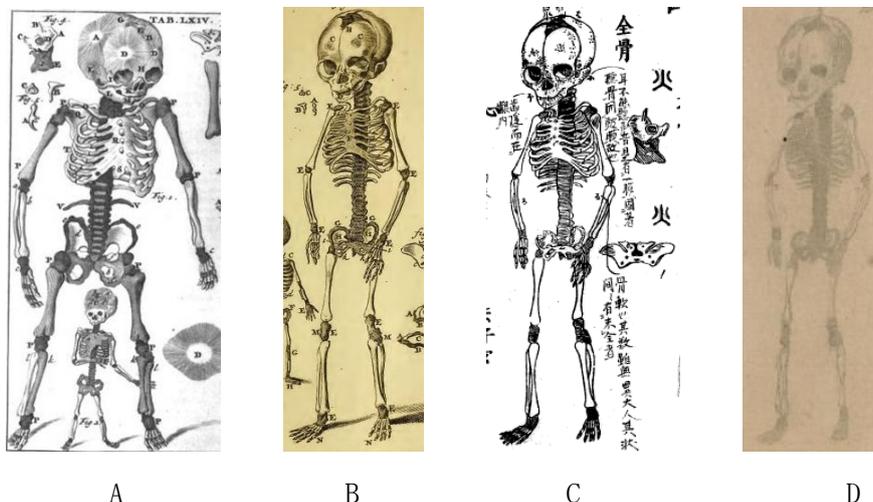
このように『重訂解体新書』では旧版以上に多くの解剖学書から図像が引用されており、『重訂解体新書』の付言には「旧木火等の符号の記す者は、いま一、二を省き、更に他の解剖書中についてその尤も精微なるものを拾い取り、以てこれを挿入す。図ごとに撰者の姓氏を記す。唯その上の頭の一音を取り、以て符と為す。欧、勃、歇、革、八、牒等の如きこれなり」とあり一部を除いて、原著者が推察できるように配慮されている。

記号(欧)にあたる欧斯答吉烏斯(エウスタキウス)解体書は、本書の下図を描いた南小柿寧一が『解剖存真図』においても引用した、アルビヌス著『エウスタキウス解剖学図譜』の再編書の『エウスタキウス解剖学解題』のオランダ語版『A. Bonn: Ontleedkundige platen, met eene verklaring derzelve, 7bundels, in 47 platen, folio, Amsterdam, L. van Es』である。

記号(勃)は先行研究では「勃郎蛤盧都(ブランカールツ)」つまり、これまでも江戸蘭方医の解剖図に多く引用されてきた、ステファン・ブランカールト(Steph, Blankaart)が著した『新訂解剖学』であると推定されていた(酒井シヅ『大槻玄沢の研究』p140)。しかし『新訂解剖学』からの引用図は『解体新書』から継続して(火)の符号があてられており、同じ本に異なった符号を充てたことは筆者にとって不可解なものであった。

『新訂解剖学』は菅野陽の小論『亜欧堂田善模刻の「内象銅版図」とその原図』により刊行された年代により図版が異なることが分かっている。筆者が実見できたのは1687、1695年版はすべてを、1696年版はクレインス・フレデリック『江戸時代における機械論的身体観の受容』の挿図から一部見比べることができた、その結果1695と1696年版

は図の内容に共通項が多いが、前者2書と1697年版とは図版の内容が大きく異なる。特に『解体新書』附図の妊娠篇全骨図と同様の図像は1695年版にはない。かわりに1695年版では別の形態の図像が挿入されているのである。

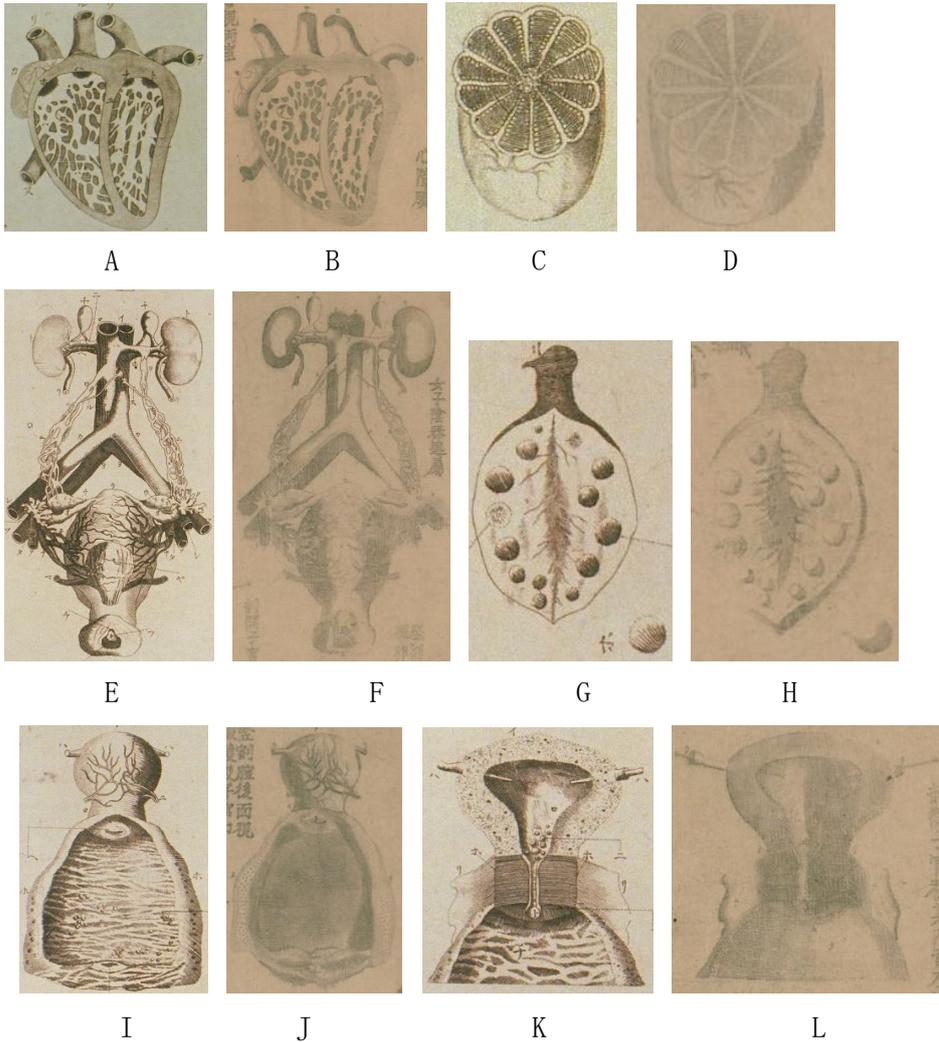


- A、『新訂解剖学 1695』図 79
- B、『新訂解剖学 1687』図 48
- C、『解体新書』附図 妊娠篇全骨図
- D、『重訂解体新書銅板全図』胎子篇胎児全骸図

このような状況から筆者は当初、大槻玄沢は旧版の『解体新書』に用いられた『新訂解剖学 1687』は(火)の符号を、『新訂解剖学 1695』と同系統の挿図が採用された類本には(勃)の符号を充てたものと仮定した。しかしそれでも『重訂解体新書銅板全図』に引用された解剖図とは図像的に一致しないのである。後述するように『重訂解体新書銅板全図』では『医範提綱内象銅版図』や『解剖存真図』と異なり、原図からの大きな改変は少なく、また若干の改変がされた図像であっても全く参考図の無い図像は存在しないのである。

次のページに列挙した図版A、C、E、G、I、Kは『重訂解体新書銅板全図』内の(勃)の符号が配された挿図であるが、どれもヨーロッパの解剖図に良く見られる図示法の図像である。本書の引用原書のなかではブランカールト『新訂解剖学』、パルフィン『外科用解剖学』、ヘルヘイン『人体解剖学』、クルムス『ターヘル・アナトミア』の4書には類似した図像が存在する。しかしそれは共通項があるというだけであり、仮にそれらのヨーロッパ解剖図を参考にしたとすれば細部などは、ほとんど新規に書き起こしていることになってしまう。それにしても図像としての精度が高く、大槻玄沢が(勃)の符号をあてた行為と矛盾する。そこで筆者は参考研究をひとまず考慮にいれず、今回研究対象とした日本の解剖図7冊、ヨーロッパの解剖図11冊をもういちどつぶさに検討した。その結果、該当の引用書が判明したのである。

『重訂解体新書銅版全図』記号(勃)の解剖図と引用書



- A、『医範提綱内象銅版図』図 12
- B、『重訂解体新書銅版全図』図24豎剖心視兩室図
- C、『医範提綱内象銅版図』図 34
- D、『重訂解体新書銅版全図』図 37 横断辜丸視細管疊為橙囊(原文は爪偏に囊)状図
- E、『医範提綱内象銅版図』図 35
- F、『重訂解体新書銅版全図』図 39 女子陰器連続図
- G、『医範提綱内象銅版図』図 36
- H、『重訂解体新書銅版全図』図3 豎卵巢視卵子図
- I、『医範提綱内象銅版図』図 37
- J、『重訂解体新書銅版全図』図 399 豎割膻後面視皺襞及子宮口図
- K、『医範提綱内象銅版図』図 38
- L、『重訂解体新書銅版全図』図 39 剖開子宮視其内宮及内口図

前掲載の A～L 図から分かるように、『重訂解体新書銅板全図』記号(勃)にあたる解剖書は『医範提綱内象銅板図』であった。『重訂解体新書』本文内では、記号(勃)を振ったとだけ記述され、「引用元は～である」といった記述はない。それが先行研究での混乱を呼ぶ原因となってしまった。本図を原図と比較したときには、細部に原図からの改作がなされているが、それについては後述する。

記号(歇)は『重訂解体新書』第一卷凡例 5 丁表に『歇盧恒(ヘルヘエン)』と記載された解体書であり、『医範提綱』にも引用されたフィリップ・ヘルヘインの『人体解剖学(Coporis humani anatomie)』から引用されたとされる(原書の和訳は磯崎康彦『医範提綱』と『医範提綱内象銅板図』『わが国最初の銅版画解剖図』 p 39～40 の記述に順ずる)。この図をここに入れた経緯を玄沢は「動静門の三脈の名義解分註補説はヘルヘイン解体書(師家所蔵)に所載するところにして、同社某氏嘗て訳草するところなり。その説頗る詳細、其の図ことに明備本篇と詳略互いに相發揮するに足るなり。故にその説を校訂し、その図を模写し、且つ符号を付け、以て参照に供す(酒井訳)」とのべた。ここに循環器系の全体像の説明が初めておこなわれ(酒井シヅ『大槻玄沢の研究』 p 151) 図示されたのである。

記号(革)は革烏百盧・机伊力乙鹿(コウペル・クイリイル)の解体書であると『重訂解体新書』巻 10 名義解 32 丁表に明記されている(酒井シヅ『大槻玄沢の研究』 p 151～152)。この「コウペル・クイリイル」はウィリアム・カウパーが編纂した『人体解剖(The Anatomy of Humane Bodies)』を指すというが、すでにのべたようにこの解剖書はゴヴァルト・ビドローが著した『105 図』を同時代人のカウパーが『105 図』の図版や本文のほとんどを剽窃し著したものである。この解剖書の図も引用ページは異なるが、『医範提綱』をはじめ多くの杉田流解剖図に引用されている。このカウパーの『人体解剖』は、当時の江戸では桂川甫賢が 1739 年ラテン語版を所有していたことが『好書故事』の内容から知ることができる(菅野陽『画科ヘラルト・ドゥ・ライレッセと解剖学者ビドローとカウパー』 p 68～73、洋学史研究会篇『大槻玄沢の研究』 p 152、国立国会図書館近代デジタルライブラリ『近藤正斎全集』第 3 p 258)。『解体新書』の附図に引用されたものは、ビドローの『105 図』であったのか、カウパーの剽窃本であったのかは現在のところ不明となっているが、『重訂解体新書』に引用されたものはカウパーの『114 図の人体解剖学(『好書故事』にあるところの『解屍図説』)』であることは、ほぼ間違いのないであろう。

次の記号(八)は『八盧歇應(パルヘイン)解体書』でありパルヘインことジャン・パルフアン(Johannes Palfyn または Jan Palfin または Jean Palfyn)の著した『外科用人体解剖学(Heelkonstige ontleeding van' s menschen lighaam)』のことを指している。この『八盧歇應(パルヘイン)解体書』は、前出の『把爾翁湮(パルヘイン)解剖図譜』の原書と同じものである。

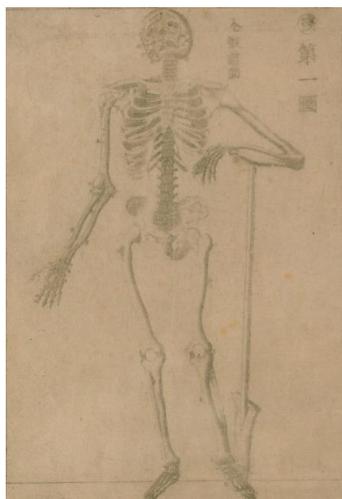
記号(牒)は『牒分的盧(デヘンテル)解体書』でありヘンドリック・ファン・デヘンタ

一(Deventer van Hendrik)の『Operationes chirurgicae novum humen exhibentes obstericantibus』から引用したとされている。幸い筆者も原書と思われる本の図像を見ることができ、原図と照らし合わせることができた。しかしこの医学者の来歴などの詳細は筆者が参考にした先行研究では、名前と書名を挙げられるのみでくわしく語られることが無く、今後の研究が待たれる。

記号(残)については「附言」に「茂質(玄沢)蔵するところ残編骨骸骨図三頁(酒井訳)」とあり、それが極めて精緻であるために、これを『解体新書 付図』でつけた図と入れ替えたという。(残)という符号は残片の「残」であり「唯その図ありて説なきことを恨む。何書に出ることを知らざるのみ。近頃骨骸全書を観れば、則ちこの図全く逸簡なり。よってその説と併せてこれを得たり。いま抄出補訳す(酒井訳)」と記述がある。酒井によるとこの『パルヘイン骨骸全書』は前出の記号(八)の『Heelkonstige ontleding van's menschen lighaam』とは異なる本であり、酒井は『大槻玄沢の研究』p149にて『Anatomica chiruruugicale・・・』と略称を挙げるのみであるが、つづくその本の概説をみても「「残」の符号のついた全面図、後面図、脊椎骨と同じ図が載る」と断言しており酒井は該当の解剖書を実見して比較したことがわかる(酒井シヅ『大槻玄沢の研究』 p149)。



A



B



C

- A、『重訂解体新書』後面図
- B、『重訂解体新書』前面図
- C、『重訂解体新書』脊椎骨図

筆者は『パルヘイン骨骸全書』を実見していないが、少なくとも図 A, B の原図である『パルヘイン骨骸全書』が、アンドレアス・ヴェサリウスの大著『De Humani Corporis Fabrica Libri Septem(人体の構造に関する7つの本)』通称『ファブリカ』を原図にしていることは一目瞭然である。ここで本論でもたびたび名の挙がるこのヴェサリウスと、

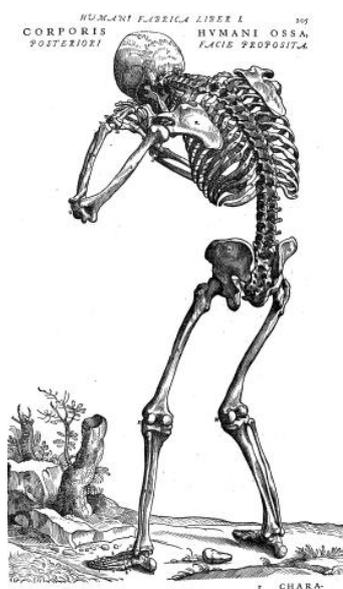
彼の著した『ファブリカ』について坂井建雄著『人体観の歴史』を参考に、ヴェサリウスがヨーロッパの解剖学に与えた影響について概説したい。

アンドレアス・ヴェサリウス(Andreas Vesalius 1514–1564)は、それまで長きに渡ってヨーロッパの解剖学の主流であったガレノス(Γαληνός 129年頃–200年頃)の説を覆し、解剖学の新機軸を打ち出した人物である。ガレノスの『ファブリカ』は、江戸の医学とおなじく旧来の説を妄信しガレノス説の権威に頼っていた当時の医師たちを、書物の情報に依らず、実際の解剖によって見える人体そのものに目を向けるように導いたのである。(坂井建雄『人体観の歴史』 p 63)ガレノスは、多くの臨床経験と解剖によって体系的な医学を確立した偉人であるが、しかし現在知られるガレノスの解剖は、大型のサルや、クマ、ブタ、肉食獣、牛等の角のある反芻類、また角のない奇蹄類に限られ、そのなかでもサル、特に人間に見た目のよく似たものを選ぶことを推奨している。つまりガレノスは人体を直接に解剖することはなかったとされるのである。(p 31)この点を、パドヴァ大学でガレノス式の医学を修めるなかで察したヴェサリウスは、ガレノスの説を検証し、踏襲しつつも自らの実地にもとづく解剖所見と組み合わせ『ファブリカ(1543)』を編纂したのであった。(p 71)

ヴェサリウスが「近代医学の祖」といわれるほど、『ファブリカ』が大きな影響を及ぼした要因は、その内容もさることながら、全編に散りばめられた造形的に美しく、また迫力のある解剖図によるところが大きい。(p 63)この点は杉田玄白がヨーロッパの解剖学書を見て、その美しい図像に衝撃を受け、それが『解体新書』編纂の契機になったことにも通ずるものである。坂井は「特に第一巻の骨格と、第二巻の筋の図が秀逸である(p 65)」というが、『重訂解体新書』の「前面図」と「後面図」は正にその「骨格図」に由来するものである。下図 A、B



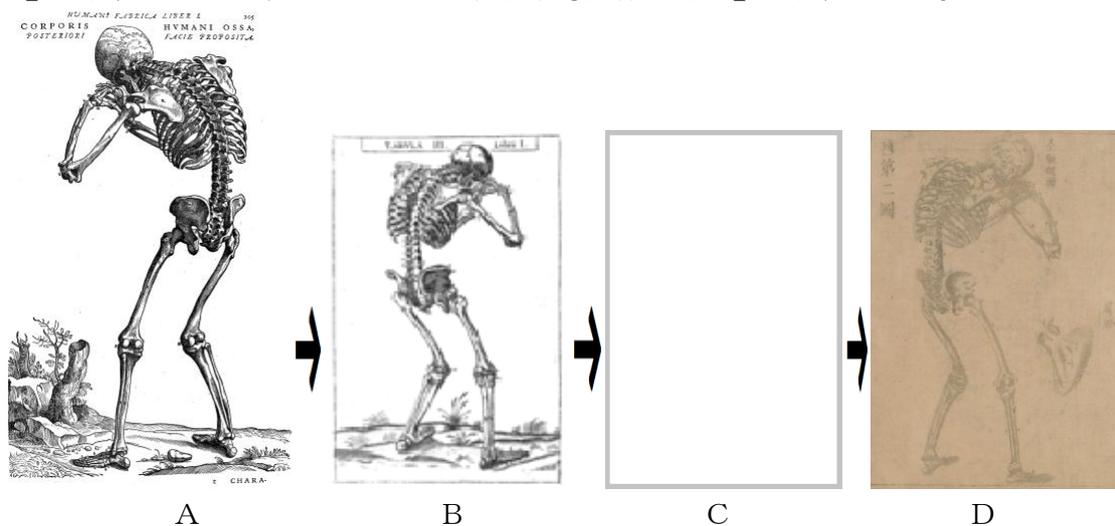
A



B

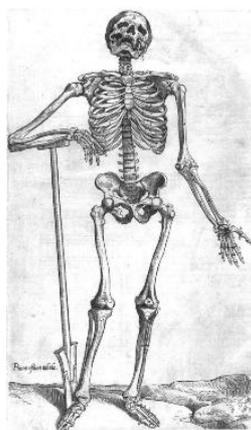
ヴェサリウスの『ファブリカ』は解剖学がまだ研鑽と発展の余地のある学問領域であることを示し、そこに多くの学者や識者が参入したことで、その後解剖学の出版が明らかに増加していると坂井はのべる。(坂井建雄『人体観の歴史』p72) そのなかには『ファブリカ』に影響を受けたという範囲にとどまらず、その剽窃本も次々に出版されている。『解体新書』の扉絵の原書となったワルエルダの『人体構造誌(1556)』もその一つであるし、このほかにはイギリスのトマス・ゲミニヌス(Thomas Geminus 1510-1562)の『解剖概要略(Compendiosa totius anatomie delineatio 1545)』や、それをさらに流用したドイツの外科医ジェイコブ・バウマン(Jacob Bauman)による『ドイツ解剖学(Anatomia Deudsch 1551)』などがある。(坂井建雄『人体観の歴史』p p73)

ここで改めて『重訂解体新書』の「全面図」、「後面図」を眺めてみると、それぞれの図像が左右に反転していることがわかる。この点は中原泉が小論『立証! 解体新書の元絵』にて「val-verde(ワルエルダ)は、大著の一部を抜書きし、版型を約 1/2 に縮小したのだ。図版も縮小されたうえに、模写した図の大半は原図と逆向きのポーズになっていた(p64、括弧内は筆者による)」と述べるように、ヴェサリウスによる『ファブリカ』の特徴ではなく、ワルエルダの剽窃本『人体構造誌』の特徴である。



- A ヴェサリウス『ファブリカ』
- B ワルエルダ『人体構造誌』
- C パルヘイン『骨骸全書』(筆者未見)
- D 大槻玄沢『重訂解体新書』

またゲミナスの剽窃本の骨格図を筆者が確認したところ、『ファブリカ』と同じ向きを向いている(下図)。この点からおそらくは、その「簡便さと低廉さ(中原)」によって「ヨーロッパ西南部に普遍した(中原)」というワルエルダの『人体構造誌』を参考に、パルヘインが自著に借用したと筆者は推察している。



ゲミナス『解剖概要略』

このような近世解剖学書の祖たる『ファブリカ』の流れをくむ図像と、大槻玄沢は「残篇」を入手するという非常にドラマチックな邂逅をとげたというが、実は玄沢はこれ以前にもこの『ファブリカ』の系譜の図像を見ている可能性もある。なぜならば『解体新書』の扉絵の元絵はワルエルダの『人体構造誌』だからである。しかし『解体新書』での引用は『人体構造誌』の扉絵のみであるから、その図像を今回の『重訂解体新書』の事例のように「断片」として入手したのか、それとも編纂社中のいずれかが『人体構造誌』の類品を所有していたのかは、現在のところはっきりしない。

7章『重訂解体新書銅版全図』

2節『重訂解体新書銅板全図』の表現

3項『重訂解体新書銅板全図』の表現—原図との比較から—

『解体新書』附図の図示法の流れをくむ本書の挿図は、技術が足りずに模倣できなかった場合を除き、積極的に原図からの改作はおこなわない方針がとられている。しかし一部意図的な改作がなされた解剖図も存在する。そこでまずは原図に準じた解剖図をA群と、改作された挿図B群とし分類していきたい。(括弧内は図版番号)

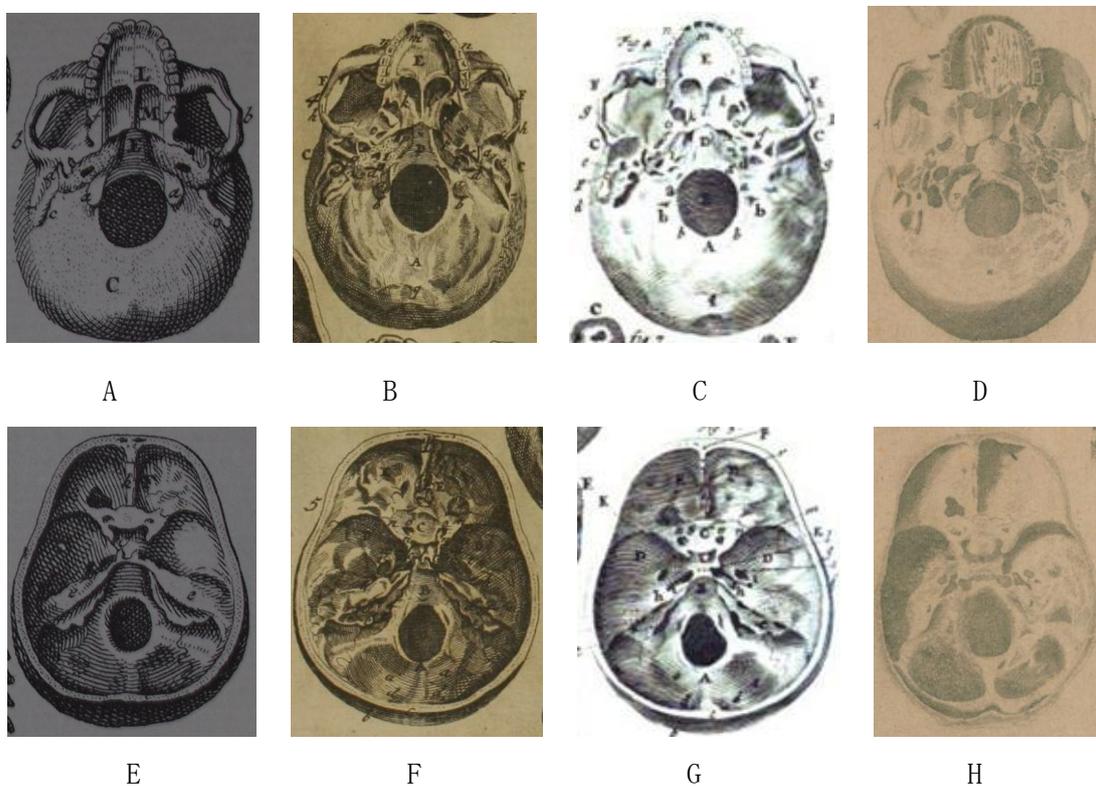
まずA群の図として図1、2(8-2-1) 図3(8-3-1) 図4(8-4-1)、図5(8-5-1)、図8(8-8-1)の脊椎全形図、図10(8-10-1)、図11下(8-11-1)、図12(8-12-1)、図13(8-13-1)、図14(8-14-1)、図16(8-16-1)、図17(8-17-1)、図18(8-18-1)、図19(8-19-1)、図20(8-20-1)、図21(8-21-1)、図22(8-22-1)、図23(8-23-1)、図24(8-24-1)全形図を除くすべて、図25(8-25-1)、図28(8-28-1)、図30(8-30-1)、図31(8-31-1)、図32(8-32-1)、図33(8-33-1)、図34(8-34-1)、図35(8-35-1)、図36(8-36-1)、図37(8-37-1)、図38(8-38-1)、図39(8-39-1) 豎割膈後面視皺襞及子宮口図を除くすべて、図40(8-40-1)、図41(8-41-1)、図42(8-42-1)、以上35図。

次にB群の図として図8(8-8-1)の仰頭骨図と頭骨中断図、図24(8-24-1)全形図、図26(8-26-1)、図27(8-27-1)、図29(8-29-1)、図39(8-39-1) 豎割膈後面視皺襞及子宮口図、図43(8-43-1)、図44(8-44-1)以上6図。

このほか筆者原図未見のため分類できなかった解剖図が、図6(8-6-1)、図7(8-7-1)、図9(8-9)、図11(8-11-1)のコイターの解剖書からの引用図、図15(8-15)の5図である。

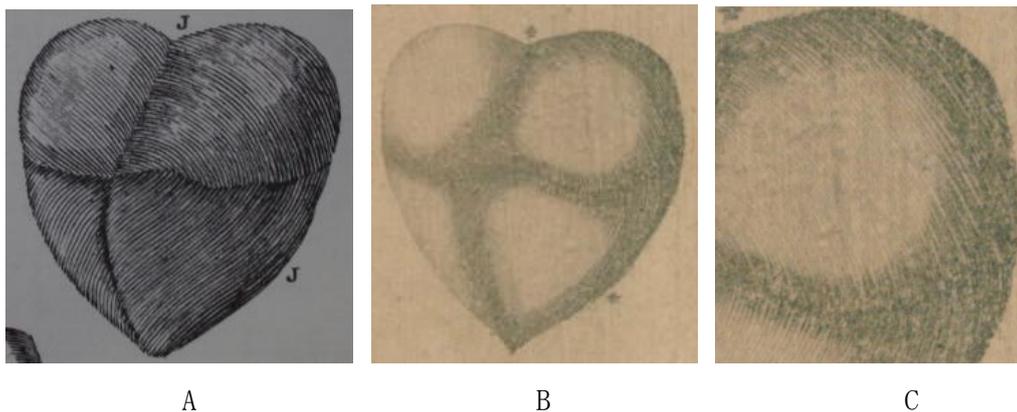
このような検討結果から、44 図中 35 図が原図からの意図的な改変なく模倣された図像であることが推定された。A 群の図像については図版編に示したとおりであり、『解体新書』の挿図とは原図との類似という意味では比較にならない出来栄である。本項では南小柿寧一が『重訂解体新書銅板全図』でみせた造形性を探ることが目的であるから、寧一の手が加わった B 群の図像を中心それらを検討することとする。

まず図 8 の仰頭骨図(下図 D)、頭骨中断図(下図 H)はヨーロッパの解剖図に良く見られる図示法であり、一見それらの解剖図をそのまま模倣して描いたように見える。しかし、寧一が参考にした原図と比較したとき細かな描写などが同じ図像は、寧一が『重訂解体新書銅板全図』で参考にしたとされる解剖図の中には存在しないのである。このような比較から本図は寧一が『解剖存真図』の挿図のように、ヨーロッパの解剖図を参考に寧一自身の写生結果を反映させ描かれた図像であろうと考えられる。



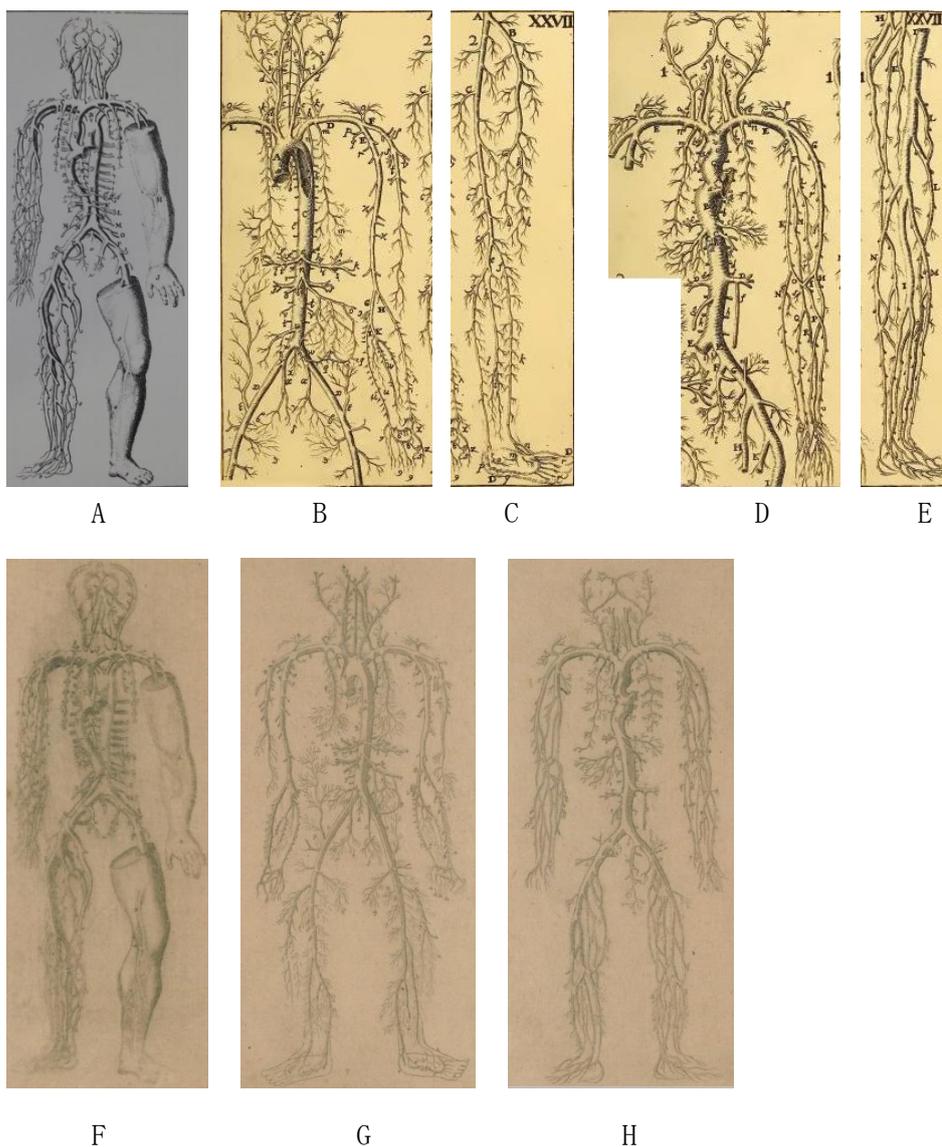
- A、『ターヘル・アナトミア』図 5
- B、『外科用解剖学』図 30-4
- C、『改新解剖学』図 80-4
- D、『重訂解体新書』図 8 仰頭骨図
- E、『ターヘル・アナトミア』図 5
- F、『外科用解剖学』図 3
- G、『改新解剖学』図 80-5
- H、『重訂解体新書』図 8 頭骨中断図

次の図 24 心篇全形図(下図 B)は『ターヘル・アナトミア』図 15(下図 A)の模図であるが、陰影が大きく変更されている。下図 C の部分図からもわかるように、本図は白抜きの部分にも細かな腺がほどこされており、技術的に原図を再現できなかったとは考えづらく、そこにはなんらかの意図があったと思われる。そもそも『重訂解体新書』では原書『ターヘル・アナトミア』の説明不足な図像はより正確な図像に差し替えられることもしばしばあり、実際に人の心臓を見て正確な形態を知っていた南小柿寧一が、抽象化された本図像をそのまま採用したことも不可解である。



- A、『ターヘル・アナトミア』図 15
- B、『重訂解体新書銅版全図』図 24
- C、『重訂解体新書銅版全図』図 24 部分

次の図 26 動血脈幹支全図(下図 G)、図 27 静血脈幹支全図(下図 H)は、それぞれヘルヘイン著『人体解剖学』からの引用図(下図 B、C、D、E)である。本図は『ターヘル・アナトミア』図 16、17(下図 A)の模図『重訂解体新書銅板全図』図 25 動血脈・静血脈篇図(下図 F)との図像的関連を意識してか、腿から上下に分かれていた図像を全身図になうよう改作している。これは動脈・静脈の両方、動脈のみ、静脈のみと、それぞれ図示した部位の異なる 3 つの図像の比較が容易なように工夫したのであろうと推察される。原図には存在しなかった右手足の図像や、左足の図像も違和感なく描かれた秀逸な図像であるといえる。



A、『ターヘル・アナトミア』図 16、17
 C、『人体解剖学』図 28-2
 E、『人体解剖学』図 29-1-2
 G、『重訂解体新書銅板全図』図 26

B、『人体解剖学』図 28-1
 D、『人体解剖学』図 29-1-1
 F、『重訂解体新書銅板全図』図 25
 H、『重訂解体新書銅板全図』図 27

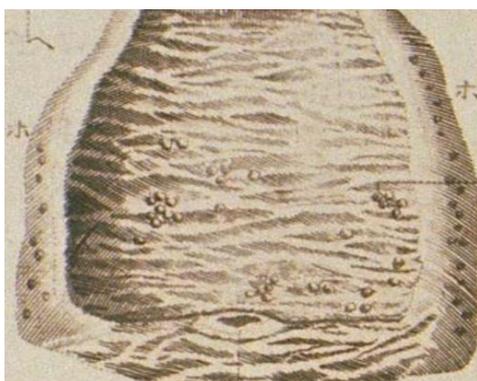
図 39 (8-39-1) の豎割膾後面視皺襞及子宮口図は『医範提綱内象銅版図』図 37 (下図 A) からの引用図である。図 39 の他の『医範提綱銅板全図』も模図には大きな改作がなされていないが、図 37 からの引用図のみ膾壁の皺がより細かに色味は暗く、そして子宮口の図像がより細かに描写 (下図 D) されている。しかし本図の参考にした『医範提綱銅板全図』の図像もポイントを押さえた細密な図像であり、特別改変が必要な図像とは思えず、粗を探すような改作である。御用絵師であり、一説には『解体新書』よりも世に普及したといわれる(*)『医範提綱』の挿図に、寧一は何を思ったのであろうか。



A



B



C

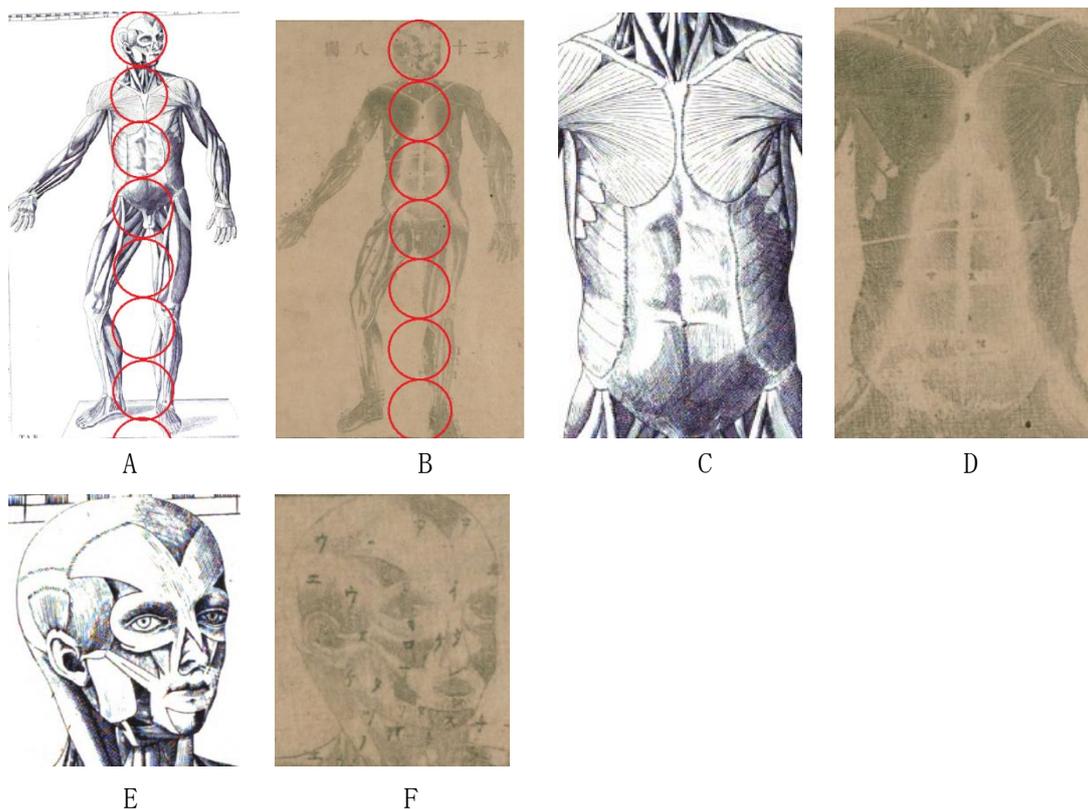


D

- A、『医範提綱銅板全図』図 37
- B、『重訂解体新書銅板全図』図 39
- C、『医範提綱銅板全図』図 37 部分
- D、『重訂解体新書銅板全図』図 39 部分

図 43(8-43-1)と図 44(8-44-1)は『エウスタキウス解剖学解題』を参考に描かれた挿図である。図 43 は『エウスタキウス解剖学解題』図 28 の、図 44 は『エウスタキウス解剖学解題』図 29 の模図であり一見原図からの改変は無いかのようである。しかし良く観察してみるといくつかの違いがあることがわかる。ひとつは手足、頭身といった人物像の総合的なプロポーションの違い、2つ目は図 43 の人物の表情の変更、最後に筋肉の色を意識した色の濃淡の加筆である。

1つ目のプロポーションの差異については図 43 が明瞭である。原図が 7.5 頭(下図 A)であることに対し、『重訂解体新書銅版全図』では 7 頭身弱(下図 B)である。また下腹部や腰から腿等が若干ふくよかになっている。(下図 C、D)2つ目の変更点は下図 E、F からも分かるように、原図が白人風の目鼻立ちのはっきりした顔であることに対し、『重訂解体新書』では幼顔の日本風の顔に変えられている。3つ目の筋肉への加筆は『解剖存真図』で屍体の色味について論じた寧一らしい着眼点であるといえる。また腱の色ではなく白筋と赤筋の描き分けがなされているあたりに、実際に解剖を行い写生した南小柿寧一の人体に対する造詣の深さがうかがえる。



- A、『エウスタキウス解剖学解題』図 28 頭身比較
 B、『重訂解体新書銅版全図』図 43 頭身比較
 C、『エウスタキウス解剖学解題』図 28 胴体部
 D、『重訂解体新書銅版全図』図 43 胴体部
 E、『エウスタキウス解剖学解題』図 28 頭部
 F、『重訂解体新書銅版全図』図 43 頭部

7 章『重訂解体新書銅版全図』

3 節 7 章総論

本図は『医範提綱内象銅版図』、『玉函把而翁湮解剖図』と同様に腐食銅版画挿図が採用されているが、筆者が研究対象とした解剖図では初めて、ヨーロッパの状況と同様に下図を描いた絵師と銅版面に翻刻した彫師の分業がなされた。

解剖図表現は『解体新書』の挿図作成の際の方法論を踏襲し、技術的に不可能な場合を除き基本的には原図に倣う傾向が強い。しかし『重訂解体新書銅版全図』から採用された解剖図、つまり大槻玄沢監修の解剖図に関しては必要に応じて原図からの改作もみられる。南小柿寧一という自身も解剖を行った絵師を起用したことにより、それらの改作は『医範提綱内象銅版図』の亜欧堂田善が画いた複合図にくらべ、解剖学的な反証がなされており加筆部位との解剖学的整合性が高く、図像的違和感が少ない。

これらのことから、『重訂解体新書銅版全図』は江戸蘭方医学解剖図の解剖図表現の特徴である、原図にならう（『解体新書』、『玉函把而翁湮解剖図』）、腐食銅版画の採用（『医範提綱内象銅版図』、『玉函把而翁湮解剖図』）、複数の解剖図を複合させた解剖図（『医範提綱内象銅版図』、『解剖存真図』）を踏襲し作成された解剖図である。同じ絵師の編纂した『解剖存真図』が南小柿寧一の解剖写生の成果を反映した解剖図であったことに対し、『重訂解体新書銅版全図』は絵師の解剖学的知識を反映しつつも、江戸蘭方医学に蓄積された医学知識や、解剖図像作成のノウハウが活かされた解剖図表現であったのである。

8章 2部 総論

『解体新書』刊行から『重訂解体新書』刊行までの解剖図表現を比較検討し、それによって『解体新書』から『重訂解体新書』までの解剖図表現の一側面を明らかにすることができた。その傾向性は大きく分けて3つあり、1つ目が原図からの複製を目的とした「複製解剖図」、2つ目がいくつかの解剖図の特徴を組み合わせた「複合解剖図」、最後に絵師が実際に解剖を見て写生した結果を反映した「実測解剖図」である。

「複製解剖図」はヨーロッパの解剖書の翻訳解剖書挿図に最も多く採用され、江戸時代の医師達はヨーロッパの医術だけでなく、その挿図も日本人の手により再現しようとしたことが伺える。

「複合解剖図」は『解体新書』と『玉函把而翁湮解剖図』以外の全ての解剖書に、少なからず採用されている。『平次郎臓図』では『解体新書』附図の図示法と、実際の解剖写生の結果を複合し描かれ、『施薬院解男体臓図』では『解体新書』附図と『平次郎臓図』、解剖写生の結果を必要に応じて組み合わせ複合した。また『医範提綱内象銅版図』の解剖図は、複数のヨーロッパの解剖書挿図の表現を組み合わせ描かれた。『解剖存真図』では、複数のヨーロッパの解剖書挿図と小石流の解剖書挿図の表現、そして絵師自身の解剖写生の結果を複合させた。『重訂解体新書銅版全図』では、ヨーロッパの解剖図に、絵師の解剖経験を複合させている。

「実測解剖図」は、本論の研究対象解剖書の中では、京都小石流の医師によって行われた解剖会の結果を反映し編纂された『平次郎臓図』がその嚆矢であり、この他では同様の方法論で編纂された『施薬院解男体臓図』や、小石流の解剖図に触発され編纂された『解剖存真図』がある。

次に本論の研究対象解剖図を編纂した2つの医派である、江戸蘭方医学派と京都小石流漢方医学派の解剖図表現の傾向をみると、小石流の解剖書挿図は絵師に円山派門弟を採用したことで、ヨーロッパの洗練された解剖図表現には劣るものの、日本人による独自の解剖図表現を生み出すことに成功している。一方、江戸蘭方医が編纂した解剖書挿図は、翻訳解剖書の挿図であることが多く、解剖図の作成においては、当然ながら原図からの模倣精度向上が第1条件であった。その為、翻訳解剖書を編纂した医師自身により、ヨーロッパの画法書や百科事典が翻訳され江戸の絵師にヨーロッパの絵画・腐食銅版画技法がもたらしている。これらの蘭方医の働きは一面的には幕末から明治にかけての洋画家育成の動きに先んじたものであるといえる。

このように一見絵師の個性が立ち入る余地のないかのような、医用の解剖図であっても、限られた範囲での美術性が存在することを、日本の解剖書7冊とヨーロッパの解剖書15冊の比較・検討により明らかに出来たことは本研究の成果である。

3 部 筆者の絵画制作との関連

3部 筆者の絵画制作との関係性

1章 美術造形との出会いと西洋古典美術への傾倒

筆者は人体を主題とした絵画をライフワークに創作活動を行う画家であり、本研究は、筆者の人体を主題とした絵画表現を深めることも目的のひとつであった。世の中にはさほど修練を重ねなくとも、人体を写生的に描くことに秀でた人々はいる。しかしながら、筆者はもともと写生的に描くことが得意ではなかった為、ただ漫然とデッサン等の描く練習を重ねるだけでは、私よりも巧みに人体を描く人々と肩を並べることは出来ないとあろうと考えた。そして美術理論による理論的な補強によって、生来の描写力の差を埋めようと考えたのである。

このような考えはすでに高校の2年時にはすでにあり、いくつかの絵画の入門書を流し読み、簡易な美術理論を学んだ。そういった入門書の中で、解剖と人体美術の関係について述べられた項目は特別目を引いた。当事私が設定していた絵画修練の到達点は、「モデルを必要とせず人物像を描くこと」であり、人の構造を深く知ることはその助けとなるように感じたのである。その直観は正しく(おそらくテレビか何かで記憶の片隅に示唆があったのであろう。)筋肉の起結や、体管の構造、また骨格の構造上ある程度限定される人体の比率や可動範囲などを知ることで、平面に「人の形」をそれらしく描くことが、それを知る以前に比べ容易になった。そして美術大学に入学した後は、人の骨格の形態そのものにも興味を持ち、下図「肋骨からの着想」と同系統の習作をいくつか制作した。



「肋骨からの着想」

50×45cm

新聞紙と針金を芯にセラミックスタックで肉付け
平成17年(2005) 未発表

3部 筆者の絵画制作との関係性

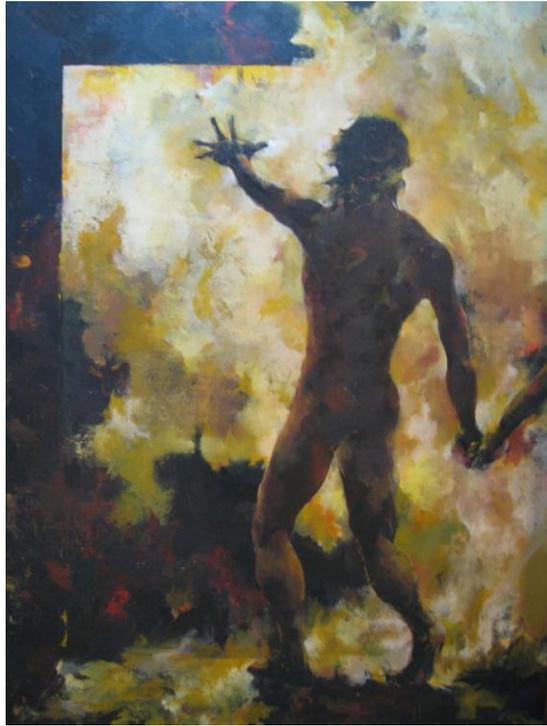
2章 中国武術の身体観からの着想

大学入学後も基本的なデッサンの習熟と並行して、絵画の入門書による理論をもって基礎力の向上を図った筆者であるが、技法書や美術理論を読み、人体の構造を知るだけでは躍動的な人体の描写は難しかった。また大学での人物デッサンだけでは、目的とした水準の人体に対する造形的理解を深めることが出来なかった為、大学入学後は実際に己の体を鍛え、さまざまな筋肉の形態を実見・知覚し創作行為の助けとした。

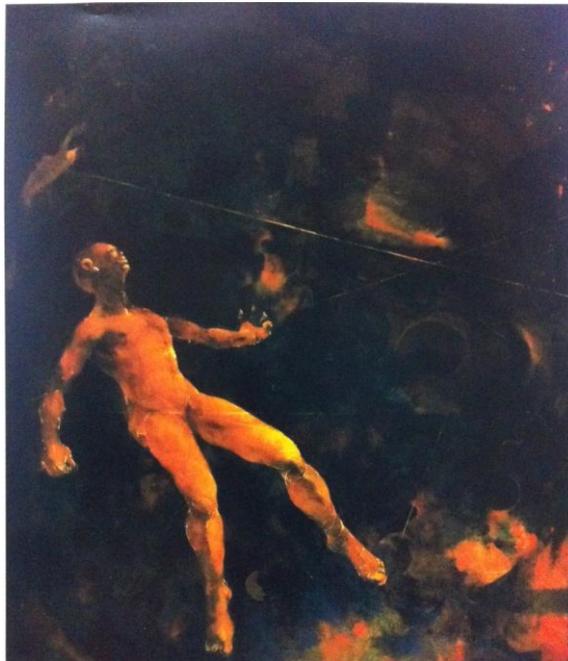
大学1年時より、中国武術サークルに入部し、鍛錬の過程でそれまで筆者の知らなかった、身体と精神の関わりを知った。例えば、力を出す為には力を抜く必要があること、実際の肉体の動きと私の感覚的な動きとは乖離があること、またその乖離は訓練によって是正することができること、見た目に表れた筋肉のパフォーマンスと実際の運動パフォーマンスは必ずしも一致しないこと等である。このいずれもが、実際に自分自身がアスリートに成りきって真剣に鍛錬しなければ得られなかったものであり、このような感覚を筆者の絵画における人体造形に反映させることが目標になった。また、中国武術における運動感覚と、高校までに保健体育や日常で触れた運動感覚の違いを絵画として表現にできれば、独創的絵画表現につながるものである。このような美術大学卒業までの期間に培った、人の体に関連した知識と絵画表現の集大成として「空気の中の二人」と「上昇思考」という絵画作品を制作した。

「空気の中の二人」は、筆者が初めて公募展に出品し入選した作品である。この作品の制作に際しては、頭にぼんやりと浮かぶ人体イメージを事前に素描し、それを画面の中で再構成し描いた。それらのイメージは、これまでヨーロッパの人体の理想美の象徴として私が傾倒した、ギリシャ・ローマの彫刻やイタリアルネサンスの美術作品群、また自分自身の人体感覚や運動知覚・体験を具象的に抽出したものであった。

「上昇思考」は「空気の中の二人」を描き終えた後に、その後の展望を模索しながら描いた絵である。中国武術の基本的鍛錬に組み込まれた、跳躍しながらの蹴り技の練習中に感じた、上昇したのちに落下する直前の、一瞬制止した感覚を回想し、それらに中国武術の「陰陽」、「五行」、「大極」といった概念を暗喩的に融合することを目的にした。描かれた人物の形態そのものは、ヨーロッパ的な人体の均整を基準にしており、それらに中国武術を通して得た身体観を融合させたものである。



A



B

A「空気の中の二人」 F150号油彩

平成18年(2006)第62回行動展(入選・東京都美術館)

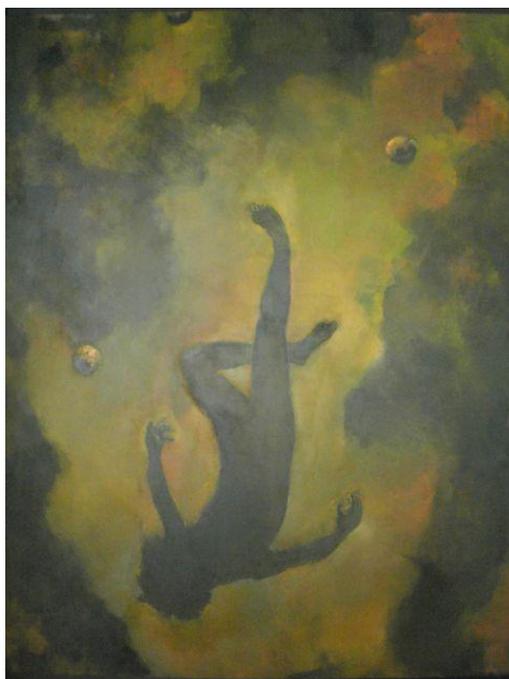
B「上昇思考」油彩 F130号変形

平成19年(2007)九州産業大学卒業制作展(買上賞・福岡アジア美術館)

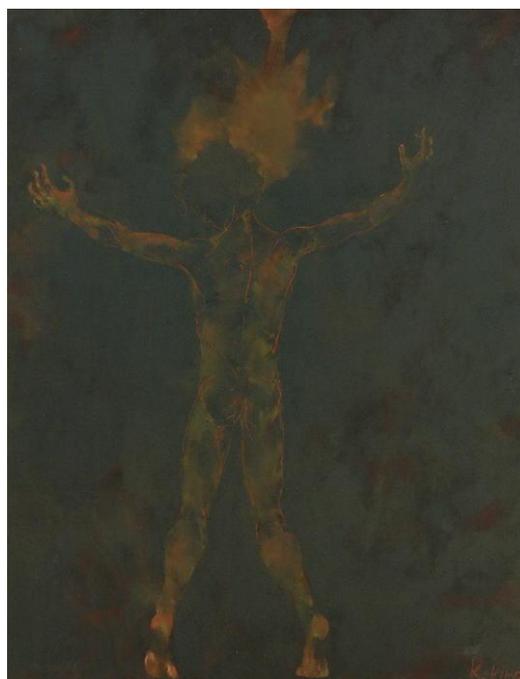
3 部 筆者の絵画制作との関係性

3 章 希薄になる中国武術的身体感覚と補填要素の検討

修士課程に進学後、創作と研究に専念する為に武術サークルを辞めた。その結果、美術や造形に関わる視野を広げることが出来たが、当然ながら中国武術で得た身体感覚は薄れていく。その薄れた感覚は明瞭に筆者の絵画作品にも表れることとなる。修士課程1年(2008年)時に制作した作品として「重力に囚われて」(下左図)がある。本作品は中国武術の練習中、宙返りに失敗し落下したときの感覚をもとに制作したものである。その瞬間に感じた肉体の重さ、不自由、落下後の鈍い衝撃が、画面の重苦しい表現として反映している。また、武術を辞め具体性が無くなりつつある運動感覚のビジョンをシルエットで表現した。次に修士課程2年(2009年)時に制作した「思考の底」は、薄れ鈍くなっていく身体感覚への恐れと、それでも確かに残る思考の底の記憶を、人の形で端的に示した作品である。



A



B

A 「重力に囚われて」油彩、F150号

平成20年(2008)第63回行動展(入選/東京国立新美術館, 福岡市美術館)

B 「思考の底」油彩、F150号

平成21年(2009)第64回行動展(入選/東京国立新美術館, 福岡市美術館)

これら2つの作品は、以下の図1、2、3と同様の手順で描いたが、希薄になりつつあった運動感覚と、具象的な図像を画面に描きたいという筆者の欲求が、不協和音となり、制作当初のイメージを大きく損ねている様に、今振り返って感じている。このような薄れゆく感覚をそのままに描き、追求することも一つの方向性であったが、そのようなイメージによって描かれた絵画は抽象的になりやすい。しかし私の造形上の嗜好は絵画に具象性を求めており、薄れていく中国武術の運動感覚を、絵を描き始めたころのようにもう一度知識と論理で補い、自身の絵画に具象性をもたらす絵画造形上の補填要素の研究をはじめた。



1



2



3

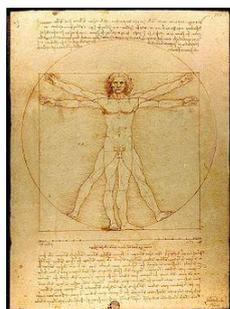
3部 筆者の絵画制作との関係性

4章 薄れた運動感覚の補填要素の探求—「内景図」からの着想—

すでに述べたように、筆者が体感した中国武術の運動感覚や技術は、それまで中高の教育で受けた保健体育的なものとは一線を画すものであり、その差異こそが筆者の創造性に刺激を与えたものである。このような中国武術の身体観が生みだされた背景には、中国の陰陽五行説や氣の概念がある。それらは概念的には、古くから漢字文化圏の美術と結び付いていたが、「概念」であるから当然ながら鑑賞の為に制作された美術作品には「具象的」に図像としては現れない。

そこで観賞用ではない美術作品、ここでは特に絵画作品にも検討の範囲を広げ、筆者の創造性に刺激を与えた、中国の身体観が描かれたものを調査した。その結果、中国武術を通して獲得した身体観に最も近い絵画表現として認識したものが、第1部2章1節で紹介した東洋医学の「内景図」であった。すでに述べたように「内景図」は中国大陸から日本に伝わり、日本の伝統医学でも盛んに用いられていた。中国の影響の大きい日本の伝統医学の概念を、ときに簡潔に、ときに複雑に図示した「内景図」の図像は、私の薄れゆく中国武術の身体観を補填し、新たな人物造形上のインスピレーションを与えた。しかし現代の美術では、こういった東洋医学の図像をそのまま美術作品に転用した例は少なくない。よってこの着想元自体に独創・新規性は無く、そこからの筆者なりの咀嚼や発展が求められるのである。

この「内景図」に触発された時期に制作した作品として「人の形」、「人体考察」、「思考の場」と題した3つの絵画作品が挙げられる。筆者が「内景図」から着想した要素は人の内的構造の図案化である。「人の形」(45×45 cm、平成23年・2011)は東洋医学の人の内部に対する眼差しと、ヨーロッパの理想美の融合を目指した。シンメトリックな構図と背景にぼんやりとみえる三角形は三位一体を、周囲のまだらな模様は中国武術の「氣」の概念をイメージした。図案化の際には、「内景図」よりは、ダビンチの描いた「ウィトルウィウスの人体図」が念頭にあったように思う。私の造形感覚は、未だ「内景図」の図像とは深く結びついていないのである。しかし「内景図」のイメージは私の感性を刺激し、「重力に囚われて」や「思考の底」と比較するとイメージの具体性を取り戻しつつある。



「ウィトルウィウスの人体図」

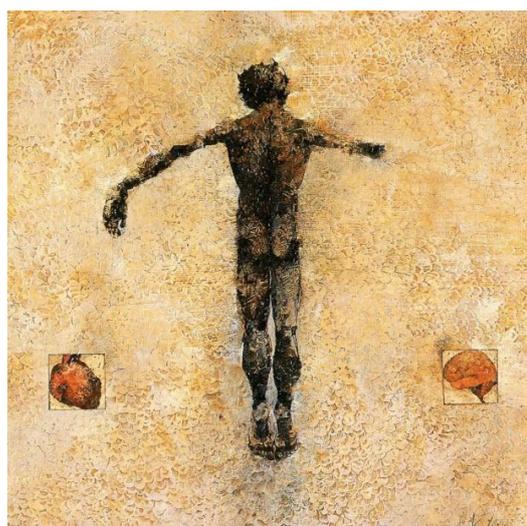


「人の形」

その後小作品(45×45 cm)の「人の形」を、S100号の大作に転用したのが「人体考察」である。人物の造形はヨーロッパ的理想美から離れることを意識した。「氣」の概念の演出は、アクリル樹脂の下地材である「ジェッソ」を盛り上げて乾燥させた、レリーフ状の樹脂に着色にして表現した。タイトルの通り、「内景図」、「人の形」による新たな着想をもとに、人の体・形について考察した成果を描いた。

「人の形」からの派生作品の3作目となった「思考の場」は、「人体考察」を下地に、本作品にリペイントした作品である。中国武術で得た「氣」の概念や「内景図」からの着想を絵画表現につなげる為の思索、そしてヨーロッパ的理想的人体美からの脱却。そういった制作上の意思が画面のなかで混在し並立している。

また「思考の場」では脳裏に浮かばなかったイメージはそのままに描いている。具体的には左手の指、右の臀部、左足の裏、右手首から先、背中の筋肉の隆起などである。この「思考の場」以降、ヨーロッパの理想美に無理にすり合わせず、自分自身のイメージに忠実に描いた。



A



B

- A 「人体考察」 S100号、ジェッソ、透明水彩、アラビアゴム、クリアラッカー
平成23年(2011)第20回記念 英展(推薦出品・福岡 田川市美術館)
- B 「思考の場」 S100号、ジェッソ、透明水彩、アラビアゴム、クリアラッカー
平成24年(2012)Gallery ArtdeMaA 個展リレー「木森圭一郎 展」(福岡 Gallery ArtdeMa)

3部 筆者の絵画制作との関係性

5章 「内景図」から『解体新書』へ

「内景図」の調査・研究の過程で、そこに図示された人物像の頭身が年代が降るにつれ徐々に伸びていることに気付いた。特に1800年代以降は顕著であり、1800年代前後に日本人の、特に医学に関わる人々の身体観が大きく変わる出来事があり、それがこのような医学の図像にも影響を与えたのではないかと推測した。もし、この推測が正しく、その図像の変化の過程を概観することができれば、「内景図」を私の絵画に取り入れる際の参考にすることができ、またその調査・研究から得られたものを論文としてまとめる目算でもあった。このように、当初筆者は「内景図」の美術的調査・研究を題材とした博士論文を執筆する予定であり、『解体新書』はその図像のターニングポイントとして補足的な役割で紹介する目算であった。

しかし、いくつかの医史学的資料を流し見ても「内景図」を描いた絵師の詳細は判然としなかった。逆に『解体新書』の絵師については美術史的に武埴林太郎や成瀬不二雄等による先行研究がなされており、医史学的にも小川鼎三や酒井シヅ、片桐一男らにより門外漢の私にも概観できる状況にあった。そこで史学的な研究が盛んであり、実証的な考察が行いやすい『解体新書』を中心に据え、美術的な観点から調査・研究を行う方針に切り替え、それらの研究成果をまとめたものが本論1～2章の内容である。

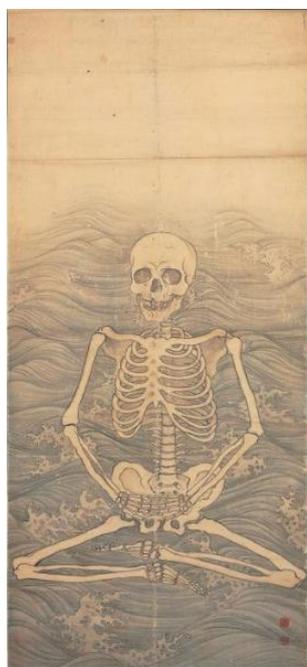
3部 筆者の絵画制作との関係性

6章 江戸の解剖図からの着想

2部の総論でも述べたように『解体新書』を起点に、その改訂版『重訂解体新書』が編纂されるまでに刊行された江戸時代の解剖書7冊の解剖図表現を比較・検討した結果、「複製解剖図」、「複合解剖図」、「実測解剖図」の3つの傾向性を明らかにした。これら3つの表現は、解剖学的知識をビジュアルイメージとして直接的に絵画として表現したものであるといえる。

解剖学的知識が直接的に表れた観賞用の絵画として、本論の研究対象解剖図を制作した絵師らと同時代に活躍した絵師、円山応挙が描いた「波上白骨坐禅図」（下図A）も同系統のものであるといえる。そこで、江戸時代の解剖図作成に携わった絵師が、それらから得た解剖学的知識を、観賞用の絵画に直接的に活用した例を調査・研究し、本研究を筆者の絵画制作と近づけようと試みたが、今回の調査では見つけ出すことが出来なかった。

そこで江戸時代の解剖図の原本が作成されたヨーロッパの美術に目を向けてみると、解剖学的な知識を直接的に描いた作品は観賞用の作品であっても比較的一般的にみられる。それはラテン語の警句「メメント・モリ」を視覚的に表す、寓意的な図像として用いられたことのほか、神性を持った理想的肉体美の対立概念として活用されたものと推察される。下に示した「死の舞踏」（下図B）はそれらの典型的な例である。



A

A、絵師円山応挙「波上白骨坐禅図」



B

B、ミヒャエル・ヴォルゲムート「死の舞踏」

このようなヨーロッパや日本でみられる、直接的な絵画表現だけでなく、解剖学的知識は間接的に美術作品に活用されることも多い。それは概念的な応用と言い換えることもできる。むしろ世界的にみても解剖学的知識、言い換えれば「人の構造」に関する知識は概念的に応用されることが多いように思う。「概念的応用」の例として一般的なものは、人の重心の位置や骨組みを抽象的に把握し美術造形に活かすことであろうか。過去を振り返れば、ダビンチやミケランジェロが修めた解剖学的素養も、直接的に絵画作品に表れることは少なく、体系的に整理して絵画に応用されており、この系統に属するものであると筆者は考える。またそこから抽象化の時代を経由した我々現代の美術家にとっても、こちらの手法の方が馴染みがあるものである。

筆者はこれらの検討結果をもとに、絵画制作に取り組み、解剖学的知識を直接的に描き構成した作品として「LAND MARK」を、概念的に応用した作品として「雨」を、「LAND MARK」や「雨」の造形性を再検討した作品として「花束」という3点の絵画を制作した。

「LAND MARK」は解剖学的知識をなるべく具体的に描き、それらを画面のなかに群像として描くこと、つまり「解剖学的知識の直接的引用による人物の群像表現」が主題である。中央右に下半身の骨格が露出した人物を配し、その左側に背を向けた人物像を配した。男性の左足は膝から下がなく、背景のリョクショウのような緑と同化させた。また左手は画面の奥に差し出されているのか、それとも無いのか、あえて不鮮明に表現した。



「LAND MARK」

F150号

透明水彩、グロスポリマーメディウム、モデリングペースト、クリアラッカー

平成24年(2012)Gallery ArtdeMaA 個展リレー「木森圭一郎 展」(福岡 Gallery ArtdeMaA)

これまでヨーロッパ的人体像から離れた人体表現を模索してきたが、この作品では、もう一度ヨーロッパの理想美も含め、人物表現の再検討している。また技法的にもこれまで筆者が体験してきた、様々な絵画技法を応用した作品でもある。描きはじめの段階から画面に像が浮かび上がるまでには、グリザイユ・カマイユ技法の方法論を応用し描画したが、この油彩技法は絵画の制作段階を素描、下図、着彩という工程を、3つに分けて行うことができることが利点である。しかし古典的描法では下図の層を保護するニスである「ダンマルワニス」が硬質化するほど乾燥させるまでに非常に時間を要するほか、保護材と描画の絵の具に同質の油性溶剤を用いるため、画家が技術的に未熟な場合、描画材が下の素描の層に浸食し絵が破綻してしまうことも少なくない。

そこで、筆者は下地の層を保護するニスに耐水性の画材(クリアラッカー)を採用し、描画材は水性の透明水彩絵具で描いた。これによって下図の層を侵食する心配はほとんど無くなった。また、透明水彩は湿気に弱く堅牢性の低い描画材であるから、筆者の任意の進捗段階ごとにクリアラッカーで保護しつつ画面に定着させた。

「LAND MARK」は、「解剖学的知識の直接的引用による人物の群像表現」が主題であるから、初めにおおよその構図を設定し(図1)、そこからイメージを具体化していく(図2、3、4)。イメージがおおよそ具体化した段階で、クリアラッカーで定着後、アラビアゴムで溶いたイエローオーカーを画面全体に塗布し陰影の諧調を整え全像を確認する(図5)、その後、透明水彩絵具の乾燥後に霧吹きで水を塗布し再度湿らせ、湿気を帯びた画面にキッチンペーパーをあて、表現の妨げとなるイエローオーカーを剥がし取るとる(図6)。その後これまで研究してきた江戸時代の解剖図や、それらに関連して調査研究した江戸時代の状況、洋風画家の勃興、2010年にイタリアに旅行に行き、現地で実際にタブロー、フレスコ、テンペラといった絵画の他、彫刻作や建築、このほか芸術に関わる全てを、断片的なビジョンとして画面の中にちりばめ完成したのがF150号作品「LAND MARK」(図7)である。

これらの図像を描く過程で得た感覚は、私の今後の絵画制作の指標となるものであり、タイトルに歴史上の顕著な事象や、地図上の目印を表す語である「LAND MARK」という語をあてた。



1



2



3



4



5



6



7

「雨」は「LAND MARK」の画面上に上に描画し改作を行った作品である。サイズ公募展への出展を想定し F150 号から 130 号に縮小した。

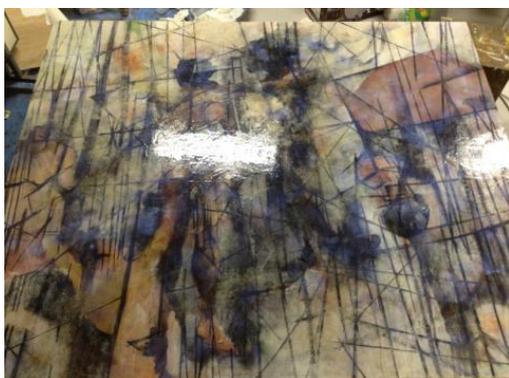


「雨」

F130 号

透明水彩、グロスポリマーメディウム、モデリングペースト、クリアラッカー
平成 24 年(2012)第 44 回行動美術 九州全西展(入選・福岡市美術館)

「LAND MARK」を公の場で展示し概観した後に、「LAND MARK」はあくまで筆者の人物造形観を断片的なビジョンとして羅列したものに過ぎないように感じた為、大きな改作を行った。まずキュビズム的な方法論で、「LAND MARK」の画面を再構成し(下図 1)、チタニウムホワイトをアラビアゴムで溶いた絵具を刷毛で塗布し一旦「LAND MARK」のイメージを視覚的に無くす。(下図 2)



1



2

その後乾燥した画面に水で霧吹きし、改めて画面を湿らせ、キッチンペーパーで少し筒顔料を剥がし取り、必要な部分のみ「LAND MARK」人体像を掘り起こす。これにより、キッチンペーパーの凹凸を利用した規則的なマチエールを作りつつ、「LAND MARK」で練り上げた人物像も踏襲することができる。乾燥後にクリアラッカーで定着させた画面に、バンダイキブラウンをベースに混色した絵具で加筆したものが「雨」である。

「LAND MARK」が、これまでの研究で得た人物像の断片的なビジョンを、様々な人物造形の視覚イメージの類型と刷り合わせ、具体性のある人物像を求めた絵画であったことに対し、「雨」はそういった類型的イメージの刷り合わせを控え、私の脳裏にある像をそのままに表現した、つまり本作品は「解剖学的知識の影響下に置ける、無意識の人物表現」を追及したものである。制作時期が6月の梅雨時期であり、バスの車窓から見た、豪雨に打たれる人々や町並みが、画面を構成するときに無意識に反映したように感じ、「雨」と題した。

「花束」は「雨」を展覧会発表後、「LAND MARK」と同様に改作を行った作品である。公の場で展示した後に、「LAND MARK」や「雨」の造形性を再検討し制作した。

「LAND MARK」では「解剖学的知識の直接的引用による人物の群像表現」が主題であったが、「雨」でそれを「解剖学的知識の影響下に置ける、無意識の人物表現」として再構成し、「花束」では解剖学的知識をモザイク状に抽象化して表し、それらから滲み、浮かび上がり、照らし出されるようなイメージで人物のシルエットを画面中央に配置した。つまり本作品は「抽象化された解剖学的知識に浮かぶ人影」を表現したものである。人影が差し出した手には黒い靄がかかっている。これを筆者は花束のように感じタイトルを「花束」とした。



「花束」

F130 号

平成 24 年(2012) 第 67 回行動展(入選・東京国立新美術館・福岡市美術館)

3部 筆者の絵画制作との関係性

8章 3部総論

日本の18世紀中期頃から19世紀初頭の解剖図に着目したことで、解剖図に現れたビジュアルイメージの過渡期の状況を知ることができたことは、筆者の造形上、非常に有意義なものとなった。絵画表現として、または解剖部位を示す図像としては過渡期にあった江戸の解剖図だからこそ、反証的なものも含めて私の人体造形感覚の死角を埋めるものとなったのである。

江戸時代の解剖図の3つの傾向性「複製解剖図」、「複合解剖図」、「実測解剖図」を筆者の絵画制作に活かそうと考えたとき、実際に人の内腑を見たことが無い筆者が現在活用できる表現は、「複製解剖図」と「複合解剖図」のみである。3部ではこのような「人の構造」に関する知識を、ビジュアルイメージとして描出する手段を求め、典型的に整理し筆者の絵画制作に活用した例を示した。これらは本研究におけるもう一つの成果であるといえる。それらは本論では仮に「直接的活用」と「概念的応用」として表したが、複雑な絵画表現に活用できるほどには体系的化されてはおらず、より高度にあるいは深遠に筆者の絵画表現とむすびついていくことが、今後の絵画表現上の課題である。

主要人物 全名・生没年引用書一覽

上田正昭、西澤潤一、平山郁夫、三浦朱門監修『講談社 日本人名大辞典』

- 杉田玄白(すぎた げんぱく 享保 18 年・1733～文化 14 年・1817)
前野良沢(まえの りょうたく 享保 8 年・1723～享和 3 年・1803)
中川淳庵(なかがわ じゅんあん 元文 8 年・1739～天明 6 年・1786)
桂川甫三(かつらがわ ほさん 享保 13 年・1728～天明 3 年・1783)
桂川甫周(かつらがわ ほしゅう 宝暦元年・1751～文化 6 年・1809)
平賀源内(ひらが げんない 享保 13 年・1728～安永 8 年・1780)
西善三郎(にし ぜんざぶろう 不明～明和 5 年・1768)
吉雄耕牛(よしお こうぎゅう 享保 9 年・1724～寛政 12 年・1800)
建部清庵 (たてべ せいあん・正徳 2 年・1712～天明 2 年・1782)
小田野直武(おだの なおたけ 寛延 2 年・1750～安永 9 年・1780)
佐竹曙山(さたけ しょざん 寛延元年・1748～天明 5 年・1785)
司馬江漢(しば こうかん 延享 4 年・1747～文政元年・1818)
小石元俊(こいし げんしゅん 寛保 3 年・1743～文化 5 年・1808)
吉村蘭州(よしむら らんしゅう 元文 4 年・1739～文化 13 年・1816)
三雲環善(みくも かんぜん 宝暦 12 年・1762～文化 2 年・1805)
吉村孝敬(よしむら こうけい 明和 6・1769～天保 7 年・1836)
木下応受(きのした おうじゅ 安永 6 年・1777～文化 12・1815)
宇田川玄真(うだがわ げんしん 明和 6 年・1770～天保 5 年・1835)
亜欧堂田善(あおうどう でんぜん 寛延元年・1748～文政 8 年・1825)
松平定信(まつだいら さだのぶ 宝暦 8 年・1759～文政 12 年・1829)
谷文晁(たにぶんちょう 宝暦 13 年・1763～天保 11 年・1840)
月僊(げっせん 享保元年・1741～文化 6 年・1809)
橋本宗吉(はしもと そうきち 宝暦 13 年・1763～天保 7 年・1836)
小石元瑞(こいし げんずい 天明 4 年・1784～嘉永 2 年・1849)
斎藤方策(さいとう ほうさく 明和 8 年・1771～嘉永 2 年・1849)
中環(なか たまき 天明 3 年・1783～天保 6 年・1835)
中伊三郎(なか いさぶろう 生年不詳～万延元年・1860)
南小柿寧一(みながき やすかず 天明 5 年・1785～文政 8 年・1825)
大槻玄沢(おおつき げんたく 宝暦 7 年・1757～文政 10 年・1827)
徳川吉宗(とくがわ よしむね 貞享元年・1684～寛延 4 年・1751)
青木昆陽(あおき こんよう 元禄 11 年・1698～明和 6 年・1769)
野呂元丈(のろ げんじょう 元禄 6 年・1694～宝暦 11 年・1761)
山脇東洋(やまわき とうよう 宝永 2 年・1706～宝暦 12 年・1762)
藤井方亭(ふじい ほうてい 安永 7 年・1778～弘化 2 年・1845)
大槻玄沢(おおつき げんたく 宝暦 7 年・1757～文政 10 年・1827)

坂井建雄著『人体観の歴史』

ヨハン・アダム・クルムス (Johan Adam Kulmus 1689～1745)
トマス・バルトリン (Bartholin Thomas 1616～1680)
ステファン・ブランカールト (Steven または Stephen Blankaart 1650～1702)
カスパル・バルトリン (Bartholin Caspar 1585～1629)
ヴォルヒャー・コイター (Coiter Volcher 1534～1576)
ファン・ワルエルダ・デ・アダムスコ (ファン・デ・ヴァルヴェルデとも Juan Valverde de Amusco または Hamusco 1520～1588)
ゴヴァルト・ビドロウ (Godefridi Bidloo 1649～1713)
ウィリアム・カウパー (Cowper William 1666～1709)
ウィリアム・スメリー (William Smellie 1697～1763)
*バルトロメオ・エウスタキウス (Eustachius Bartolomeus 1500・10～1574)
ベルナール・ジークフリード・アルビヌス (Albinus Bernard Siegfried 1697～1770)
梶原性善 (かじわら しょうぜん 文永 2 年・1265～延元 2 年・1337)
ヨハン・レメリン (Johann Remmelin 1583～1632)
ローレンツ・ハイステル (ハイスターとも。Lorenz Heister, 1683～1758)

クレインス・フレデリック著『江戸時代における機械論的身体観の受容』

ジャン・パルフアン (Palfijn Jan 1650～1730)
フィリップ・ヘルヘイン (Verheyen Philippe 1648～1710)
ジョン・ブラウン (John Browne 1642～1700)

洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』

*バルトロメオ・エウスタキウス (Eustachius Bartolomeus 1513・20～1574)
ヘンドリック・ファン・デヘンター (Deventer Hendrik van 生没年不詳)

片桐一男著『杉田玄白』

名古屋玄医 (なごや げんい 寛永 5 年・1628～元禄 9 年・1696)
後藤昆山 (ごとう こんざん 万治 2 年・1659～享保 18 年・1733)

原三信編酒井シヅ解説『日本で初めて翻訳した解剖書』

本木良意 (もとき りょうい 寛永 5 年・1628～元禄 10 年・1697)
テン・ライネ (Willen ten Rhijne・1647～1704)

成瀬不二雄著『江戸時代洋風画史』

鳥海玄柳 (宝暦 9 年・1759～天保 8 年・1837)

『江戸時代の蘭画と蘭書—近世日蘭比較美術史—上・下巻』

ヘラルト・ドゥ・ライレッセ (Gerard de Lairesse 1640～1711)

レンベルト・ドドエンス (Rembert Dodoens 1517～1585)

菅野陽著『日本銅版画の研究』

ノエル・ショメール (M. Noel. Chomel 1633～1712)

イサーク・ティッチング (Issac Tisingh・1745～1812)

榎林重兵衛 (ならばやし じゅうべえ 寛延3年・1750～享和元年・1801)

謝辞

本論文は筆者が九州産業大学大学院芸術研究科博士後期課程造形表現専攻における、研究成果を博士論文としてまとめたものです。これまで医学史的な研究が中心であった本論の執筆にあたり、本研究の美術史的、絵画史的な意義にご理解を頂き、ご指導ご鞭撻賜りました諸先生方に深謝を申し上げます。

主査の宇田川宣人九州産業大学大学院芸術研究科研究指導教授には、学部も含めれば約10年に渡り、研究室で美術の実技・理論と幅広くご指導いただきました。特に本論においては、各美術用語の細やかな添削から、画家として活躍されている先生の、制作者としての立場からのご助言、ご指導を頂きました。教授のご指導によって論文の精度が向上しただけでなく、これまで日ごろご自身の口から語られることの少なかった、宇田川教授の美術論の一端に触れることができたことは大きな喜びでした。

副査の錦織亮介福岡市美術館館長錦織亮介には、今後の論文の展望に最も悩み苦しんでいた大学院3年次より現在まで、九州産業大学大学院での指導を離れた後も、先生のご厚意によりご指導を頂きました。行き詰まっていた研究に、的確なご助言、ご指導を頂いただけでなく、先生の研究に同行させて頂き、学識を広げ深めることができたことは、筆者の大きな糧となっております。

同じく副査の渡邊雄二九州産業大学教授には同大学院研究生時から、様々な角度からのご指摘・ご指導を頂きました。狭視野になりがちな筆者に、渡邊教授の深い学識や洞察に裏付けられた自由な発想が、新たな閃きをもたらしました。また教授の学外調査にも快く同行させて頂き、フィールドワークによる直接観察の重要性を学ばせて頂きました。

更に同じく副査の九州産業大学大学院芸術研究科長松永洋子教授には、九州産業大学入学からこれまで、実技面での指導はもとより、論文の執筆においても画家の視点からのご指摘、ご指導賜りましたことは、大きな力となりました。

更に、下村耕史九州産業大学名誉教授、後小路雅弘九州大学教授、井手誠之輔九州大学教授には、研究初期の段階で様々なご指導を頂きましたこと深く御礼申し上げます。

また筆者に快く収蔵資料を提供・ご教示頂きました、はりきゅうミュージアム様、東京江戸博物館様、山形県教育庁文化財・生涯学習課酒井雄二様の他多くの研究機関・図書館様のご厚意、ご厚情に深謝申し上げます。

また更に、日々の学生生活において影なる支援を頂いた九州産業大学美術学科教職員の皆様に心より御礼申し上げます。特に中津留友子氏には大学院における諸先生方の架け橋となって、筆者の学習の機会を広げて頂きました。心より感謝申し上げます。

最後に修士・博士課程の進学にあたり多岐に渡ってのご助言、ご援助頂いた伯父の木森憲司氏、美術大学での11年に及ぶ勉学・研究に理解を示し、影に日向に支援し見守ってくれた両親や義兄、姉、弟に心からの感謝の意を表します。

平成26年3月 木森圭一郎